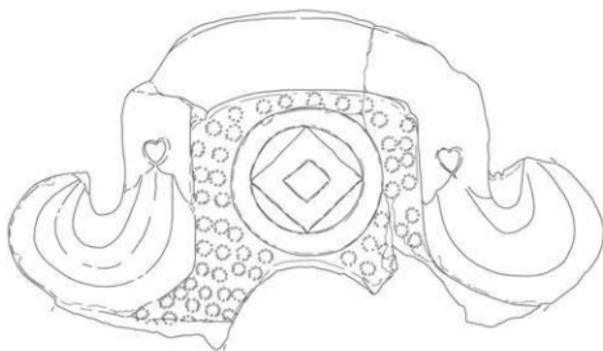


府内城・城下町跡 11

第29次調査

— 荷揚町小学校跡地利活用事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第1分冊(遺構本文編)



2021

大分市教育委員会

府内城・城下町跡 11

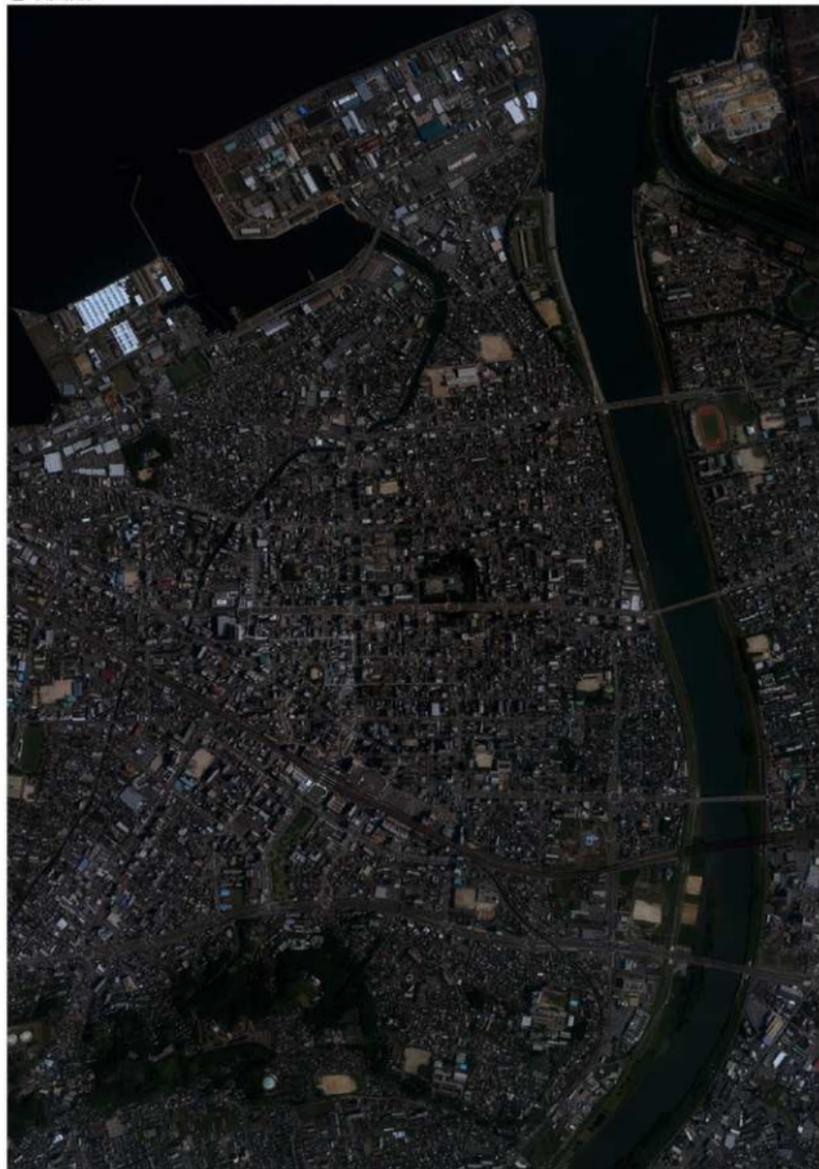
第 29 次調査

—荷揚町小学校跡地利活用事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第 1 分冊 (遺構本文編)

2021

大分市教育委員会



大分市垂直写真(調査地を中心に)(上が北)

巻頭図版 2



府内城・城下町跡全景(南方より)



第3調査区遠景(西方より)

序 文

本書は、荷揚町小学校跡地利活用事業に伴って実施しました府内城・城下町跡第29次発掘調査の報告書です。

府内城・城下町は、江戸時代府内藩の中心として、多くの武家屋敷や48の町屋を有する豊後国最大の城下町でした。江戸中期に府内を訪れた福岡藩の学者・貝原益軒が、「町も頗るひろし。万の売物備われり。」と称賛したように、府内の商人たちが長崎や大坂で広く商いを行ったことで、城下には七島筵をはじめとした豊後の特産品や、各地の産物が数多く集まっていました。

今回発掘調査を行った地点は、府内城三之丸の武家屋敷地にあたります。調査では府内城が築城されてから幕末までのおよそ250年間にわたる武士の生活痕跡が、夥しく重なり合い発見され、当時の武家屋敷の様子を解明する手がかりを得ることができました。

また、出土した陶磁器には、楽茶碗や志野・織部など桃山陶器の希少な茶器があり、長崎や博多、大坂などで流通したベトナム産陶器皿も県内で初めて確認されました。とりわけ、ベトナム産陶器の発見は、当時我が国で唯一海外につながる長崎との密接な関係を示すものであり、近世府内の流通について知る上で欠かせない発見と言っても過言ではないでしょう。

本書に収録されたこれらの資料が、学術研究のみならず、広く市民の皆様への文化財への理解を深める一助となり、郷土の歴史学習に幅広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にあたり、ご理解とご協力を賜りました関係機関及び関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

令和3年3月19日

大分市教育委員会

教育長 三浦 享二

例 言

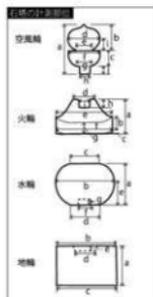
- 1 本書は、大分市荷揚町3番41・49号において荷揚町小学校跡地利活用事業に伴い、平成29年度から令和元年度に実施した府内城・城下町跡第29次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は大分市財務部管財課からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、平成29年8月31日～令和元年8月29日の期間で行い、資料整理及び報告書の作成を調査終了後から、令和2年3月19日の期間で行った。
- 4 発掘調査に伴う遺跡の掘削及び遺構の実測・写真撮影などの調査記録作成、埋戻、遺物整理については、大分市教育委員会〔調査記録〕監督員：松浦憲治、〔報告書〕監督員：河野史郎)の委託を受け、株式会社木崎工業(業務責任者：奥村義貴、監理技師：宮吉正明)が行った。
- 5 調査区の空中写真撮影及び航空写真撮影は、株式会社木崎工業の再委託を受けた株式会社ふじたが行った。
- 6 報告書に掲載した出土遺物の実測・製図作業、写真撮影は、株式会社木崎工業(業務責任者：奥村義貴、主任技術者：宮吉正明)大分市教育委員会の委託を受けて行った。
- 7 遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図・図版作成、遺物図版の作成、観察表の作成は、株式会社木崎工業(業務責任者：奥村義貴、主任技術者：宮吉正明)が大分市教育委員会の委託を受け行った。なお第272図1～4・8～14・18～23・26～33・35～37、第273図1～4・6～11・13・14・16～21、第274図2～10・12・14～18、第275図4、第276図1～8・10～17、第277図1・4・5・8～10、第278図1・3～5、第500図1～4・7に掲載される出土遺物の実測・製図作業及び第272～278図・第500図の図版、これに対応する遺物観察表の作成は塩地調一・河野史郎・高富豊・池遣千太郎(大分市教育委員会文化財課)が、第505図に掲載される出土遺物の実測・製図作業及び図版、これに対応する遺物観察表作成は松浦憲治・小野綾夏・奥津杏都美(大分市教育委員会文化財課)がそれぞれ行っている。
- 8 発掘調査で収集した土壌の花粉分析や、樹種同定といった自然科学分析については、株式会社木崎工業の再委託を受けた一般財団法人文化財科学研究センターが行った。
- 9 調査で出土した近世陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問 大橋康二氏にご指導・ご意見を頂き、報告書に反映させているが、誤謬があれば、それは担当者の責任である。
- 10 本書の執筆は、以下のとおりである。
 - 第1章 松浦憲治(大分市教育委員会文化財課)
 - 第2章 塩地調一(大分市教育委員会文化財課)、株式会社木崎工業(奥村義貴)
 - 第3章 松浦憲治・池遣千太郎(大分市教育委員会文化財課)
 - 第4章 松浦憲治・塩地調一・河野史郎(大分市教育委員会文化財課)、株式会社木崎工業(宮吉正明)
 - 第5章 松浦憲治・塩地調一・河野史郎(大分市教育委員会文化財課)、株式会社木崎工業(宮吉正明)
 - 第6章 第1節 一般財団法人文化財科学研究センター 第2節 松浦憲治(大分市教育委員会文化財課)
 - 第7章 第1～3節 松浦憲治(大分市教育委員会文化財課) 第4節 河野史郎(大分市教育委員会文化財課)
- 11 本書の編集は、大分市教育委員会の企画に基づき、編集作業を株式会社木崎工業(業務責任者：奥村義貴、主任技術者：宮吉正明)が行った。
- 12 本報告書巻末の写真図版に掲載できなかった空中・航空・遺構・遺物写真については付属のDVDに収容している。また、分析図版・火災処理遺物カウントも収容している。詳細はDVD内の「はじめにお読み下さい」を参照頂きたい。
- 13 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター(大分市大字原337番地の5)に収蔵・保管している。
- 14 報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』に基づき実施している。
- 15 発掘調査及び報告書作成に際して、下記の方々にご指導・ご助言を頂いた(肩書は調査当時のもの)。小野正敏(前人間文化研究機構理事)、玉井哲雄(元国立歴史民俗博物館教授)、伊藤正義(鶴見大学教授)、渋谷忠章(元大分県立博物館館長)、坂本嘉弘(大分県教育庁埋蔵文化財センター)、吉田寛(大分県教育庁埋蔵文化財センター)、大橋康二・山本文子(佐賀県立九州陶磁文化館)

凡例

- 本書で用いた遺構記号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
 - SB: 掘立柱建物跡、② SA: 柵状遺構 ③ SE: 井戸跡、④ SK: 火災処理土坑・廃棄土坑・土坑、⑤ SD: 溝跡、溝状遺構、⑥ SF: 道路状遺構、⑦ SP: ビット・小穴、⑧ SX: 埋裏遺構・粘土貼土坑・その他を表している。
- 本書に記載される遺構番号は、以下の要領で表記される。

「1区 SD 001」…1区(調査区名) SD(遺構記号) 001(遺構番号)
- 本書に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。座標は、世界測地系の平面直角座標2系(北緯33°0′、東経131°0′)のX・Y座標を基点として表記している。
- 本書に掲載した遺構配置図(遺構の新旧関係を記録した図面)の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル(m)で、遺物の法量はセンチメートル(cm)で表記している。また、遺物の掲載にあたっては、1/4の縮尺を原則としているが、銅銭1/1、金属製品1/2など、それ以外の縮尺の場合はその都度明記している
- 遺物の法量の内、器高と口径、底径と高台径は以下のとおり、石塔については下図のとおり計測している。

器高: 底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
 口径: 上記の状態で、口径端部外縁の最大径
 底径: 口径部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
 高台径: 高台端部外縁の最大径
- 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
 - 遺物断面が黒塗りのも…陶器・須恵器・須恵質土器
 - 遺物断面が灰色塗りのもの…瓦器・瓦類・瓦質土器
 - 遺物断面の内側が淡灰色塗りのもの…黒色土器
 - 遺物断面が斜線のもの…木製品・石製品・金属製品
 - 遺物平面の稜線と調整の変換点…実線
 - 調整が同じでその単位が分かるもの…長破線
 - 種と付着物、黒班等その範囲を示す必要があるもの…一点破線など
 - 漆器製品…赤漆部分淡灰色塗り・黒漆部分灰色塗り
- 本文中に挙げた文献は巻末の引用文献で明示している。
- 土器・陶磁器類の器種・形式分類・年代観については、「第三章 調査の方法 第2節 調査・整理の方法」において示している文献に基づいている。



第1分冊 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査組織	3
第2章	遺跡の立地と環境	5
第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	6
第3章	調査の方法	13
第1節	周辺調査の成果と課題	13
第2節	調査・整理の方法	15
第3節	調査の概要と基本層序	17
第4章	調査の成果(遺構編)	25
第1節	1・2区	25
第2節	3・4区	76

第1分冊 図版目次

第1図	周辺遺跡位置図及び地形図(1/40000)	5	第24図	2区SK157遺構実測図(1/40)	33
第2図	豊後府内城之絵図(正保城絵図・正保元年)全体及び部分	8	第25図	1区SK025遺構実測図(1/40)	33
第3図	府内城復元図及び調査地点位置図(1/8000)	9	第26図	1区SK052遺構実測図(1/40)	34
第4図	調査区周辺屋敷地別図(1/1500)	13	第27図	1区SK067遺構実測図(1/40)	35
第5図	調査区別図(1/1000)	14	第28図	1区SK069遺構実測図(1/40)	36
第6図	土層模式図	19	第29図	1区SK114遺構実測図(1/40)	36
第7図	1区調査区東壁土層図(1/80)	20	第30図	1区SK139遺構実測図(1/40)	36
第8図	1・2区調査区南壁土層図(1/80)	21	第31図	1区SK148遺構実測図(1/40)	36
第9図	3区調査区南・西壁土層図①(1/80)	22	第32図	1区SK083・SK158遺構実測図(1/40)	37
第10図	3区調査区南・西壁土層図②(土色)	23	第33図	2区SK015・2区SK030・2区SK035遺構実測図(1/40)	38
第11図	4区調査区西・北壁土層図(1/80)	24	第34図	2区SK082遺構実測図(1/40)	39
第12図	1・2区第1調査面遺構配置図(1/250)	25	第35図	2区SK122遺構実測図(1/40)	39
第13図	1・2区第1調査面全体遺構図(1/250)	26	第36図	1区SK072遺構実測図(1/30)	40
第14図	2区SE020遺構実測図(1/40)	27	第37図	1区SK093遺構実測図(1/30)	40
第15図	1区SK005遺構実測図(1/40)	28	第38図	1区SK211遺構実測図(1/30)	41
第16図	1区SK010遺構実測図(1/40)	29	第39図	2区SK118遺構実測図(1/30)	41
第17図	1区SK015遺構実測図(1/40)	30	第40図	1区SK040遺構実測図(1/30)	42
第18図	1区SK020遺構実測図(1/40)	30	第41図	2区SK050遺構実測図(1/30)	43
第19図	1区SK030遺構実測図(1/40)	31	第42図	2区SK055遺構実測図(1/30)	43
第20図	2区SK005遺構実測図(1/40)	31	第43図	1区SK045・1区SK055遺構実測図(1/40)	44
第21図	2区SK010遺構実測図(1/40)	32	第44図	1区SK060・1区SK065遺構実測図(1/40)	45
第22図	2区SK025遺構実測図(1/40)	32	第45図	1区SK079遺構実測図(1/40)	46
第23図	2区SK045遺構実測図(1/40)	33	第46図	1区SK087遺構実測図(1/40)	47

第 47 页	1·2 区第 2 调查面道構配置图 (1/250)	48	第 99 页	3 区 SK075 道構実測图 (1/40)	92
第 48 页	1·2 区第 2 调查面全体道構图 (1/250)	49	第 100 页	3 区 SK080 道構実測图 (1/40)	93
第 49 页	1 区 SE090・1 区 SE115 道構実測图① (1/30)	50	第 101 页	3 区 SK090 道構実測图 (1/40)	94
第 50 页	1 区 SE090・1 区 SE115 道構実測图② (1/30)	51	第 102 页	3 区 SK095 道構実測图 (1/40)	95
第 51 页	1 区 SE304 道構実測图 (1/40)	52	第 103 页	3 区 SK160 道構実測图 (1/40)	95
第 52 页	1 区 SK080 道構実測图 (1/40)	54	第 104 页	3 区 SK250 道構実測图 (1/40)	96
第 53 页	1 区 SK105 道構実測图 (1/40)	54	第 105 页	3 区 SK270 道構実測图 (1/40)	97
第 54 页	1 区 SK110 道構実測图 (1/40)	54	第 106 页	4 区 SK010 道構実測图 (1/40)	98
第 55 页	1 区 SK075 道構実測图 (1/40)	55	第 107 页	4 区 SK020 道構実測图 (1/40)	98
第 56 页	1 区 SK085 道構実測图 (1/40)	55	第 108 页	4 区 SK030 道構実測图 (1/40)	98
第 57 页	1 区 SK095 道構実測图 (1/40)	56	第 109 页	4 区 SK075 道構実測图 (1/40)	99
第 58 页	1 区 SK302 道構実測图 (1/40)	56	第 110 页	4 区 SK095 道構実測图 (1/40)	100
第 59 页	1 区 SK311 道構実測图 (1/40)	56	第 111 页	3 区 SK035 道構実測图 (1/40)	101
第 60 页	1 区 SK316 道構実測图 (1/40)	57	第 112 页	3 区 SK042 道構実測图 (1/40)	101
第 61 页	1 区 SK324 道構実測图 (1/40)	57	第 113 页	3 区 SK055 道構実測图 (1/40)	102
第 62 页	1 区 SK339 道構実測图 (1/40)	57	第 114 页	3 区 SK082 道構実測图 (1/40)	103
第 63 页	1 区 SK353 道構実測图 (1/40)	58	第 115 页	3 区 SK109 道構実測图 (1/40)	103
第 64 页	1 区 SK437 道構実測图 (1/40)	58	第 116 页	3 区 SK125 道構実測图 (1/40)	104
第 65 页	1 区 SP282 道構実測图 (1/40)	59	第 117 页	3 区 SK135 道構実測图 (1/40)	104
第 66 页	1 区 SX100 道構実測图 (1/30)	59	第 118 页	3 区 SK172 道構実測图 (1/80)	105
第 67 页	1·2 区第 3 调查面道構配置图 (1/250)	60	第 119 页	3 区 SK201 道構実測图 (1/60)	106
第 68 页	1·2 区第 3 调查面全体道構图 (1/250)	61	第 120 页	3 区 SK234 道構実測图 (1/30)	107
第 69 页	1 区 SB130 道構実測图 (1/80)	62	第 121 页	3 区 SK265 道構実測图 (1/40)	107
第 70 页	1 区 SA135 道構実測图 (1/60)	64	第 122 页	3 区 SK268 道構実測图 (1/40)	107
第 71 页	1 区 SA140 道構実測图 (1/60)	64	第 123 页	3 区 SK285 道構実測图 (1/40)	108
第 72 页	1 区 SA145 道構実測图 (1/60)	65	第 124 页	3 区 SK290 道構実測图 (1/40)	108
第 73 页	1 区 SA150 道構実測图 (1/60)	66	第 125 页	3 区 SK315 道構実測图 (1/40)	109
第 74 页	1 区 SA165 道構実測图 (1/60)	67	第 126 页	3 区 SK332 道構実測图 (1/40)	110
第 75 页	2 区 SA080 道構実測图 (1/60)	68	第 127 页	3 区 SK368 道構実測图 (1/40)	110
第 76 页	2 区 SA085 道構実測图 (1/60)	69	第 128 页	3 区 SK391 道構実測图 (1/40)	110
第 77 页	2 区 SA090 道構実測图 (1/60)	69	第 129 页	3 区 SK431 道構実測图 (1/40)	111
第 78 页	2 区 SB060 道構実測图 (1/30)	70	第 130 页	3 区 SK447 道構実測图 (1/40)	111
第 79 页	2 区 SB075 道構実測图 (1/30・1/15)	71	第 131 页	3 区 SK479 道構実測图 (1/40)	111
第 80 页	1 区 SK120 道構実測图 (1/40)	72	第 132 页	3 区 SK487 道構実測图 (1/40)	112
第 81 页	1 区 SK125 道構実測图 (1/40)	72	第 133 页	3 区 SK496 道構実測图 (1/80)	113
第 82 页	1 区 SD155 道構実測图 (1/150・1/40)	73	第 134 页	4 区 SK015 道構実測图 (1/40)	113
第 83 页	1 区 SD160 道構実測图 (1/60・1/40)	74	第 135 页	4 区 SK033 道構実測图 (1/40)	115
第 84 页	2 区 SD070 道構実測图 (1/40)	75	第 136 页	4 区 SK035 道構実測图 (1/40)	115
第 85 页	3・4 区第 1 调查面西側道構配置图 (1/300)	76	第 137 页	3 区 SK045 道構実測图 (1/30)	116
第 86 页	3・4 区第 1 调查面東側道構配置图 (1/300)	77	第 138 页	3 区 SX050 道構実測图 (1/30)	116
第 87 页	3・4 区第 1 调查面西側全体道構图 (1/300)	78	第 139 页	3 区 SX065 道構実測图 (1/30)	116
第 88 页	3・4 区第 1 调查面東側全体道構图 (1/300)	79	第 140 页	3 区 SX130 道構実測图 (1/30)	116
第 89 页	3 区 SA175 道構実測图 (1/80)	80	第 141 页	3 区 SX150 道構実測图 (1/30)	118
第 90 页	3 区 SB030 道構実測图 (1/30)	82	第 142 页	3 区 SX155 道構実測图 (1/30)	118
第 91 页	3 区 SB040 道構実測图 (1/40)	83	第 143 页	3 区 SX255 道構実測图 (1/30)	118
第 92 页	3 区 SB060 道構実測图 (1/30)	84	第 144 页	4 区 SX105 道構実測图 (1/30)	118
第 93 页	3 区 SE140 道構実測图 (1/30)	85	第 145 页	3 区 SX100 道構実測图 (1/30)	120
第 94 页	3 区 SE305 道構実測图 (1/40)	86	第 146 页	3 区 SX105 道構実測图 (1/30)	121
第 95 页	3 区 SE357 道構実測图 (1/30)	87	第 147 页	3 区 SX110 道構実測图 (1/30)	121
第 96 页	3 区 SE115 道構実測图 (1/30)	88	第 148 页	3 区 SX310 道構実測图 (1/30)	122
第 97 页	4 区 SB008 道構実測图 (1/30)	89	第 149 页	3 区 SX005 道構実測图 (1/30)	123
第 98 页	3 区 SK070 道構実測图 (1/40)	91	第 150 页	3 区 SX010 道構実測图 (1/30)	124

第 151 页	3 区 SK025 道桥实景图 (1/150)	125	第 203 页	3 区 SD495 道桥实景图 (1/60 • 1/40)	164
第 152 页	3 区 SK170 道桥实景图 (1/60)	126	第 204 页	3 区 SD500 道桥实景图 (1/40)	164
第 153 页	3 区 SK2061 西端) 道桥实景图 (1/30)	127	第 205 页	3 区 SD545 道桥实景图 (1/100 • 1/40)	165
第 154 页	3 区 SK295 道桥实景图 (1/30)	128	第 206 页	3 区 SD550 道桥实景图 (1/40)	166
第 155 页	4 区 SK007 道桥实景图 (1/30)	129	第 207 页	3 区 SD842 道桥实景图 (1/40)	167
第 156 页	3 区 SK120 道桥实景图 (1/30)	130	第 208 页	3 区 SK325 道桥实景图 (1/30)	168
第 157 页	3 区 SK300 道桥实景图 (1/30)	130	第 209 页	3 区 SK330 道桥实景图 (1/30)	168
第 158 页	3 区 SK320 道桥实景图 (1/40)	130	第 210 页	3 区 SK360 道桥实景图 (1/30)	169
第 159 页	3 区 SK478 道桥实景图 (1/30)	130	第 211 页	3 区 SK370 道桥实景图 (1/30)	169
第 160 页	3 区 SK484 道桥实景图 (1/30)	131	第 212 页	3 区 SK380 道桥实景图 (1/30)	170
第 161 页	3 • 4 区第 2 调查面西侧道桥实景图 (1/300)	132	第 213 页	3 区 SK425 道桥实景图 (1/30)	170
第 162 页	3 • 4 区第 2 调查面东侧道桥实景图 (1/300)	133	第 214 页	3 区 SK490 道桥实景图 (1/30)	170
第 163 页	3 • 4 区第 2 调查面西侧全体道桥图 (1/300)	134	第 215 页	4 区 SX100 道桥实景图 (1/30)	171
第 164 页	3 • 4 区第 2 调查面东侧全体道桥图 (1/300)	135	第 216 页	4 区 SX180 道桥实景图 (1/30)	171
第 165 页	3 区 SE355 道桥实景图 (1/30)	137	第 217 页	3 区 SX440 道桥实景图 (1/30)	172
第 166 页	3 区 SE385 道桥实景图 (1/30)	138	第 218 页	3 区 SX445 道桥实景图 (1/30)	173
第 167 页	3 区 SE460 道桥实景图 (1/40)	140	第 219 页	3 区 SX450 道桥实景图 (1/30)	173
第 168 页	3 区 SE465 道桥实景图 (1/40)	141	第 220 页	3 区 SX455 道桥实景图 (1/30)	174
第 169 页	4 区 SE190 道桥实景图 (1/40)	142	第 221 页	3 区 SX470 道桥实景图 (1/30)	174
第 170 页	4 区 SE210 道桥实景图 (1/30)	143	第 222 页	3 区 SX510 道桥实景图 (1/30)	174
第 171 页	3 区 SK435 道桥实景图 (1/60)	144	第 223 页	3 区 SK540 道桥实景图 (1/30)	175
第 172 页	3 区 SK525 道桥实景图 (1/40)	145	第 224 页	4 区 SX198 道桥实景图 (1/30)	176
第 173 页	3 区 SK530 道桥实景图 (1/40)	146	第 225 页	3 区 SX480 道桥实景图 (1/30)	178
第 174 页	3 区 SK335 道桥实景图 (1/40)	146	第 226 页	3 区 SK599 道桥实景图 (1/30)	178
第 175 页	3 区 SK340 道桥实景图 (1/40)	147	第 227 页	3 区 SX001 道桥实景图 (1/30)	178
第 176 页	3 区 SK345 道桥实景图 (1/40)	149	第 228 页	4 区 SX110 道桥实景图 (1/40)	179
第 177 页	3 区 SK350 道桥实景图 (1/40)	149	第 229 页	3 • 4 区第 3 调查面西侧道桥实景图 (1/300)	180
第 178 页	3 区 SK365 道桥实景图 (1/40)	149	第 230 页	3 • 4 区第 3 调查面东侧道桥实景图 (1/300)	181
第 179 页	3 区 SK375 道桥实景图 (1/40)	149	第 231 页	3 • 4 区第 3 调查面西侧全体道桥图 (1/300)	182
第 180 页	3 区 SK390 道桥实景图 (1/40)	150	第 232 页	3 • 4 区第 3 调查面东侧全体道桥图 (1/300)	183
第 181 页	3 区 SK475 道桥实景图 (1/40)	151	第 233 页	3 区 SA555 道桥实景图 (1/80)	184
第 182 页	3 区 SK505 道桥实景图 (1/40)	152	第 234 页	3 区 SA560 道桥实景图 (1/80)	185
第 183 页	3 区 SK543 道桥实景图 (1/40)	153	第 235 页	3 区 SA585 道桥实景图 (1/80)	186
第 184 页	3 区 SK563 道桥实景图 (1/40)	153	第 236 页	3 区 SA640 道桥实景图 (1/80)	187
第 185 页	3 区 SK747 道桥实景图 (1/40)	153	第 237 页	3 区 SE655 道桥实景图 (1/30)	188
第 186 页	3 区 SK759 道桥实景图 (1/60)	154	第 238 页	4 区 SE240 道桥实景图 (1/40)	189
第 187 页	3 区 SK787 道桥实景图 (1/40)	155	第 239 页	3 区 SK570 道桥实景图 (1/40)	190
第 188 页	3 区 SK822 道桥实景图 (1/40)	156	第 240 页	3 区 SK575 道桥实景图 (1/40)	190
第 189 页	3 区 SK897 道桥实景图 (1/40)	156	第 241 页	3 区 SK992 道桥实景图 (1/40)	191
第 190 页	4 区 SK132 道桥实景图 (1/40)	156	第 242 页	3 区 SK1006 道桥实景图 (1/40)	191
第 191 页	4 区 SK140 道桥实景图 (1/40)	156	第 243 页	3 区 SK1009 道桥实景图 (1/40)	191
第 192 页	4 区 SK150 道桥实景图 (1/40)	158	第 244 页	4 区 SK220 道桥实景图 (1/40)	192
第 193 页	4 区 SK170 道桥实景图 (1/40)	158	第 245 页	4 区 SK225 道桥实景图 (1/40)	192
第 194 页	4 区 SK197 道桥实景图 (1/40)	158	第 246 页	4 区 SK235 道桥实景图 (1/40)	193
第 195 页	4 区 SK185 道桥实景图 (1/30)	158	第 247 页	3 区 SK580 道桥实景图 (1/40)	194
第 196 页	3 区 SD039 道桥实景图 (1/40)	159	第 248 页	3 区 SK1127 道桥实景图 (1/30)	194
第 197 页	3 区 SD400 道桥实景图 (1/150 • 1/40)	160	第 249 页	3 区 SD595 道桥实景图 (1/60 • 1/40)	195
第 198 页	3 区 SD405 道桥实景图 (1/40)	161	第 250 页	3 区 SD615 道桥实景图 (1/100 • 1/40)	195
第 199 页	3 区 SD410 道桥实景图 (1/80 • 1/40)	161	第 251 页	3 区 SD620 道桥实景图 (1/60 • 1/40)	196
第 200 页	3 区 SD415 道桥实景图 (1/80 • 1/40)	161	第 252 页	3 区 SD625 道桥实景图 (1/60 • 1/40)	196
第 201 页	3 区 SD420 道桥实景图 (1/40)	162	第 253 页	3 区 SD630 道桥实景图 (1/150 • 1/40)	197
第 202 页	3 区 SD430 道桥实景图 (1/40)	162	第 254 页	3 区 SD635 道桥实景图 (1/150 • 1/40)	199

第 254 図	4 区 SD226 遺構実測図 (1/40)	200
第 256 図	4 区 SD227 遺構実測図 (1/40)	202
第 257 図	3 区 SFS35 遺構実測図 (1/200)	202

第 258 図	3 区 SFS35・3 区 SD605・3 区 SD610 遺構実測図 (1/80・1/40)	203
第 259 図	3 区 SX565 遺構実測図 (1/60)	204
第 260 図	3 区 SX590 遺構実測図 (1/30)	205

第 1 分冊 表目次

第 1 表	府内城・城下町跡調査一覧①	11
第 2 表	府内城・城下町跡調査一覧②	12

第 1 分冊 巻頭図版目次

巻頭図版 1	大分市垂直写真 (調査地を中心に) (上が北)
巻頭図版 2	府内城・城下町跡全景 (南方向より)
	第 3 調査区遠景 (西方向より)

第 1 分冊 写真図版目次

写真図版 1	調査地全景 (3 区第 1 面撮影時) 上が南 調査地全景 (4 区第 1 面撮影時) 南より
写真図版 2	1 区第 1 調査面全景 上が東 1 区第 2 調査面全景 上が東
写真図版 3	1 区第 3 調査面全景 上が東 2 区第 1 調査面全景 上が東
写真図版 4	2 区第 3 調査面全景 上が東 3 区第 1 調査面全景 上が南
写真図版 5	3 区第 2 調査面全景 上が南 3 区第 3 調査面全景 上が南
写真図版 6	4 区第 1 調査面全景 上が南 4 区第 3 調査面全景 上が南
写真図版 7	1 区 SK005 遺構検出状況 北より 1 区 SK005 土層断面 北より 1 区 SK005 完掘状況 北より 1 区 SK010 遺構検出状況 東より 1 区 SK010 土層断面 東より 1 区 SK010 完掘状況 東より 1 区 SK030 遺構検出状況 西より 1 区 SK030 土層断面 西より
写真図版 8	1 区 SK030 完掘状況 西より 1 区 SX093 遺構検出状況 西より 1 区 SX040 遺構検出状況 東より 1 区 SX040 粘土検出状況 西より 1 区 SX040 床面検出状況 西より 1 区 SX040 完掘状況 西より 1 区 SX045・SX055 瓦等検出状況 1 南より 1 区 SX045・SX055 瓦等検出状況 2 南より
写真図版 9	1 区 SX055 土層断面 北より 1 区 SX045・SX055 水路検出状況 南より 1 区 SX045・SX055 完掘状況 南より 1 区第 1 調査面全体遺構 北より 1 区 SE304 完掘状況 SE090・SE155 検出状況 北より 1 区 SE090 井戸検出状況 1 北より 1 区 SE090 井戸検出状況 2 東より 1 区 SE090 井筒内完掘状況 東より
写真図版 10	1 区 SE090 完掘状況 北より 1 区 SE115 井戸検出状況 南より 1 区 SE115 完掘状況 南より 1 区第 2 調査面全体遺構 北より 1 区 SB130 完掘状況 東より 1 区 SA145・SA150・SD155 完掘状況 南より 1 区 SD160 完掘状況 東より 1 区第 3 調査面完掘状況 北より
写真図版 11	2 区 SK010 遺構検出状況 西より 2 区 SK010 土層断面 南より 2 区 SK010 完掘状況 東より 2 区 SK025 遺構検出状況 東より 2 区 SK025 土層断面 南より 2 区 SK025 完掘状況 東より 2 区 SX055 遺構検出状況 北より 2 区 SX055 粘土検出状況 北より

写真図版 12	2 区 SX055 完掘状況 北より 2 区第 1 調査面完掘状況 北より 2 区 SD080 完掘状況 北より 2 区 SB090 完掘状況 西より 2 区 SE075 土層断面 東より 2 区 SE075 井筒内天骨格出土状況 東より 2 区 SE075 完掘状況 東より 2 区第 3 調査面完掘状況 北より
写真図版 13	3 区 SA175 遺構検出状況 北より 3 区 SA175 完掘状況 北より 3 区 SE030 井筒検出状況 南より 3 区 SE030 完掘状況 南より 3 区 SE515 石函検出状況 西より 3 区 SE515 完掘状況 南より 3 区 SK070 遺構検出状況 西より 3 区 SK070 土層断面 東より
写真図版 14	3 区 SK070 完掘状況 東より 3 区 SK075 遺構検出状況 東より 3 区 SK075 土層断面 東より 3 区 SK075 完掘状況 東より 3 区 SK080 遺構検出状況 北より 3 区 SK080 土層断面 北より 3 区 SK080 完掘状況 北より 3 区 SK090 遺構検出状況 北より
写真図版 15	3 区 SK090 土層断面 南より 3 区 SK090 完掘状況 南より 3 区 SK095 検出状況 北より 3 区 SK095 土層断面 北より 3 区 SK095 完掘状況 北より 3 区 SK250 遺構検出状況 南より 3 区 SK250 土層断面 北より 3 区 SK250 完掘状況 南より
写真図版 16	3 区 SK290 遺物出土状況 南より 3 区 SK290 完掘状況 南より 3 区 SX050 溝内土層断面 南より 3 区 SX050 糞検出状況 南より 3 区 SX130 溝内土層断面 東より 3 区 SX130 糞検出状況 西より 3 区 SX150 溝内土層断面 南より 3 区 SX150 糞検出状況 西より
写真図版 17	3 区 SX255 溝内土層断面 北より 3 区 SX255 糞検出状況 南より 3 区 SX100 粘土検出状況 西より 3 区 SX100 完掘状況 西より 3 区 SX105 粘土検出状況 東より 3 区 SX105 完掘状況 南より 3 区 SX005 遺物出土状況 東より 3 区 SX005 遺物出土状況近景 東より
写真図版 18	3 区 SX005 完掘状況 東より 3 区 SX025 遺構検出状況 東より 3 区 SX025 完掘状況 東より 3 区 SX170 遺構検出状況 北より 3 区 SX170 完掘状況 東より 3 区 SX206 遺構検出状況 西より 3 区 SX206 完掘状況 西より 3 区 SX120 遺構検出状況 南より

写真図版 19	3区 SX120 床面検出状況 南より	写真図版 25	4区 SE008 遺構検出状況 南より
	3区 SX300 遺物出土状況 西より		4区 SE008 井筒内完掘状況 南より
	3区 SX300・SX295 完掘状況 東より		4区 SK010 遺構検出状況 南より 4区 SK010 土層断面 南より
	3区第1調査面全体遺構 北東より		4区 SK010 完掘状況 南より 4区 SK030 遺構検出状況 南より
	3区 SE335 井筒検出状況 南より		4区 SK030 土層断面 西より 4区 SK030 完掘状況 西より
	3区 SE335 井筒完掘状況 南より 3区 SE335 完掘状況 南より	写真図版 26	4区 SK095 遺構検出状況 南より 4区 SK095 土層断面 西より
	3区 SE385 遺構検出状況 南より		4区 SK095 完掘状況 西より 4区 SK033 遺構出土状況 東より
写真図版 20	3区 SE385 井筒内完掘状況 東より		4区 SK033 完掘状況 東より 4区 SX007 石箱出土状況 北より
	3区 SE385 完掘状況 南より 3区 SE405 土層断面 北より	写真図版 27	4区 SX007 完掘状況 東より 4区第1調査面全体遺構 東より
	3区 SE465 完掘状況 北より 3区 SK435 遺構検出状況 南より		4区 SK185 遺物出土状況 東より
	3区 SK435 土層断面 北より 3区 SK435 完掘状況 南より		4区 SX180 遺構検出状況 北より
	3区 SK525 遺構検出状況 北より		4区 SX198 上面完掘状況 西より
写真図版 21	3区 SK525 土層断面 東より 3区 SK525 完掘状況 北より		4区 SX198 粘土検出状況 1 西より
	3区 SD400・SD410 完掘状況 南より		4区 SX198 粘土検出状況 2 西より
	3区 SD415・SD420 完掘状況 西より		4区 SX198 完掘状況 西より 4区第2調査面全体遺構 東より
	3区 SD430 完掘状況 南より		4区 SD227・SD226 完掘状況 南より
	3区 SD465・SD500 完掘状況 東より	写真図版 28	4区第3調査面全体遺構 東より 1区調査区東壁土層① 西より
	3区 SX330 溝内土層断面 北より		1区調査区東壁土層② 西より 1区調査区東壁土層③ 西より
	3区 SX330 遺構検出状況 北より		1区調査区南壁土層① 北より 1区調査区南壁土層② 北より
写真図版 22	3区 SX360 溝内土層断面 南より		2区調査区南壁土層① 北より 2区調査区南壁土層② 北より
	3区 SX360 遺構検出状況 南より	写真図版 29	3区調査区南壁土層① 北より 3区調査区南壁土層② 北より
	3区 SX440 粘土検出状況 南より 3区 SX440 完掘状況 南より		3区調査区南壁土層③ 北より 3区調査区南壁土層④ 北より
	3区 SX540 粘土検出状況 東より 3区 SX540 完掘状況 東より		3区調査区南壁土層⑤ 北より 3区調査区南壁土層⑥ 北より
	3区 SX480 石箱検出状況 北より 3区 SX480 完掘状況 北より	写真図版 30	3区調査区南壁土層⑦ 北より 3区調査区南壁土層⑧ 北より
写真図版 23	3区第2調査面全体遺構 北東より		3区調査区西壁土層① 東より 3区調査区西壁土層② 東より
	3区 SA555 完掘状況 北より 3区 SA540 完掘状況 西より		3区調査区西壁土層③ 東より 3区調査区西壁土層④ 東より
	3区 SA585 完掘状況 西より 3区 SA640 完掘状況 西より		4区調査区西壁土層① 東より 4区調査区西壁土層② 東より
	3区 SE655 完掘状況 西より 3区 SE655 土層断面 西より		4区調査区北壁土層① 南より 4区調査区北壁土層② 南より
	3区 SF535 遺構検出状況 北より		
写真図版 24	3区 SF535 完掘状況① 北より		
	3区 SF535 完掘状況② 北より		
	3区 SF535 完掘状況③ 北より		
	3区 SX565 遺物出土状況 北より 3区 SX565 完掘状況 北より		
	3区 SX590 遺物出土状況 北より 3区 SX590 完掘状況 北より		
	3区第3調査面全体遺構 北東より		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大分市荷揚町に位置する市立荷揚町小学校は、後述するように明治時代から当地に建つ学校であったが、校舎の老朽化及び児童数の減少により、平成26年に近隣の中島小学校、吉吉小学校との統合の方針が示され、平成27年には廃校が決定し、平成29年3月末日に閉校した。そのため、廃校後の用地の利活用についての庁内における検討が、平成27年から進められていたが、当地が周知の埋蔵文化財包蔵地である府内城・城下町跡の範囲内であることから、当時の担当課であった学校施設課と、文化財を主管する文化財課とで平成28年3月より協議を開始した。

平成28年度の段階で利活用の具体的な計画は決定していなかったが、荷揚町小学校屋内運動場を除いて、併設する旧大分幼稚園(平成12年廃園)を含む学校敷地全体に建物を建設する方針であったことから、埋蔵文化財の発掘調査についても、学校敷地全体を対象とした。ただ都市計画法上の建蔽率の関係から、実際に発掘調査を行うのは敷地の80%ととし、計画が具体化し、未発掘調査部分に建物が建設されることとなった際には、改めてその部分を発掘調査する方向で、協議を進めた。

さらに、スケジュールについて協議していく中で、平成22年度に行われた同敷地内の荷揚町小学校屋内運動場建設に伴う発掘調査(府内城・城下町跡第19次調査：以下、「府内城・城下町跡第〇次調査」を「府〇次調査」と呼称する)の結果から、グラウンドや校舎、併設する大分幼稚園舎などの下も遺跡の状況が良好であると想定されたため、調査面積が広いこともあり、発掘調査に係る期間が複数年に及ぶ可能性が高かった。しかし、当初、平成32年(令和2年)には工事開始を予定していたため、単年度毎に分割した調査では工事開始までに調査が終了しない可能性があった。そこで、債務負担による連続した複数年に及ぶ発掘調査を行う方向で協議を行い、小学校閉校後の平成29年度から工事開始前の平成31年度までを発掘調査期間とする方針が決定した。その後、平成29年5月には、新たに担当課となった管財課及び小学校校舎解体を担当する建築課と発掘調査着手及び終了までのスケジュールについて協議を行った。その結果、旧大分幼稚園舎及びプール部分の解体を先行して行い、平成29年8月までに終了させることとし、発掘調査は同年8月より解体の終了した園舎及びプール部分から開始することとした。本校舎の解体は、園舎部分の発掘調査と並行して行い、本校舎の解体後、グラウンド及び本校舎部分の発掘調査を行い、平成31年7月に発掘調査を終了する予定を確認した。また、発掘調査に先立ち平成29年6月に確認調査とプール解体に伴う立会調査を行い、より具体的な遺跡の状況の確認を行った結果、計3面の遺構面を確認できた。

平成29年8月9日に掘削・埋戻し及び報告書作成業務の受託業者が決定し、同月16日に契約締結の上、同月31日より調査を開始した。前述のとおり幼稚園舎及びプール部分の発掘調査から開始したが、解体作業ヤードを確保するために廃土の置き場が制限されたことから、園舎及びプール部分を1区と2区に分け、東側の1区から調査を開始した(第5図)。同年12月25日からは1区の埋戻しとともに、2区の機械掘削を開始した。同年12月末には本校舎の解体が終了したため、本校舎及びグラウンド部分を3区と4区に分け、平成30年2月9日の2区の調査が終了しプレハブ等の移転を行った後、同年2月19日より2区の埋戻しとともに3区の機械掘削を開始した。

3区調査中の平成30年7月21日には、一般市民向けの遺跡見学会を開催した。当日は約150名の見学者に参加いただき、それまでの調査成果を知ってもらえたほか、3区で見つかった礎石列、廃棄土坑、埋蔵などといった武士の生活痕跡である遺構や、陶磁器などといった武士が使用していた数多くの遺物を実際に見てもらえたことができた。さらに、頼田学園の依頼で、同年9月7日・18日に小学5・6年生の遺跡発掘体験が行われ、地域の身近な歴史を肌で体験していただくことができた。また、その年大分で行われた国民文化祭に合わせ、平成30年10月6日から11月25日の期間に、「府内城・城下町跡発掘調査速報展示」として、調査成果の展示と調査の公開を行った。

3区の調査は平成31年2月19日に終了し、3区の埋戻とともに4区の機械掘削を開始した。その後4区の調査を続け、令和元年8月29日に4区の調査終了及び埋戻完了をもって、現地でのすべての調査が終了した。遺物の整理作業については、調査中から順次進めていたが、調査終了後も引き続き、遺物洗浄・注記・接合・復元作業・遺物実測を進め、令和2年度も報告書刊行に向けた整理作業、編集作業を実施した。



遺跡見学会



遺跡発掘体験



遺跡調査速報展示



第2節 調査組織

発掘調査及び整理作業体制（平成29年度～令和2年度）

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 三浦 享二

事務局 大分市教育委員会 教育部 文化財課

平成29年度

文化財課

文化財課長 沖田 光宏

参事 坪根 伸也

参事 栗田 博之

歴史資料館長 武富 雅宣

管財課

管財課長 佐々木英治

【財産管理担当班】

参事補（グループリーダー） 佐藤 真弓

主査 石山 尚子

【管理庶務担当班】

参事補（グループリーダー） 首藤 敏行

主任 大島 輝

【埋蔵文化財担当班】

参事（グループリーダー） 池邊千太郎

主任 松浦 憲治（調査担当）

平成30年度

文化財課

文化財課長 沖田 光宏

政策監 坪根 伸也

参事 栗田 博之

歴史資料館長 武富 雅宣

管財課

管財課長 桑野 徹

【財産管理担当班】

参事補（グループリーダー） 佐藤 真弓

主査 石山 尚子

【管理庶務担当班】

参事補（グループリーダー） 首藤 敏行

主任 大島 輝

【文化財保護調整担当班】

参事（グループリーダー） 池邊千太郎

主任 松浦 憲治（調査担当）

平成 31 年度 (令和元年度)

文化財課

文化財課長 坪根 伸也

政策監 賀来 俊文

参事 栗田 博之

歴史資料館長 武富 雅宣

【管理庶務担当班】

参事補 (グループリーダー) 首藤 敏行

主任 大島 輝

【文化財保護調整担当班】

参事 (グループリーダー) 池邊千太郎

主査 松浦 憲治 (調査・整理担当)

管財課

管財課長 池永 浩二

【財産管理担当班】

参事補 (グループリーダー) 佐藤 真弓

主査 石山 尚子

令和 2 年度

文化財課

文化財課長 坪根 伸也

政策監 内田 昭浩

参事 栗田 博之

歴史資料館長 植木 和美

【管理庶務担当班】

参事補 (グループリーダー) 首藤 敏行

主任 大島 輝

【文化財保護調整担当班】

参事 (グループリーダー) 高畠 豊

主査 松浦 憲治 (整理担当)

管財課

管財課長 池永 浩二

【財産管理担当班】

参事補 (グループリーダー) 河野 玄

主査 石山 尚子

【学芸調査担当班】

参事 (グループリーダー) 塩地 潤一

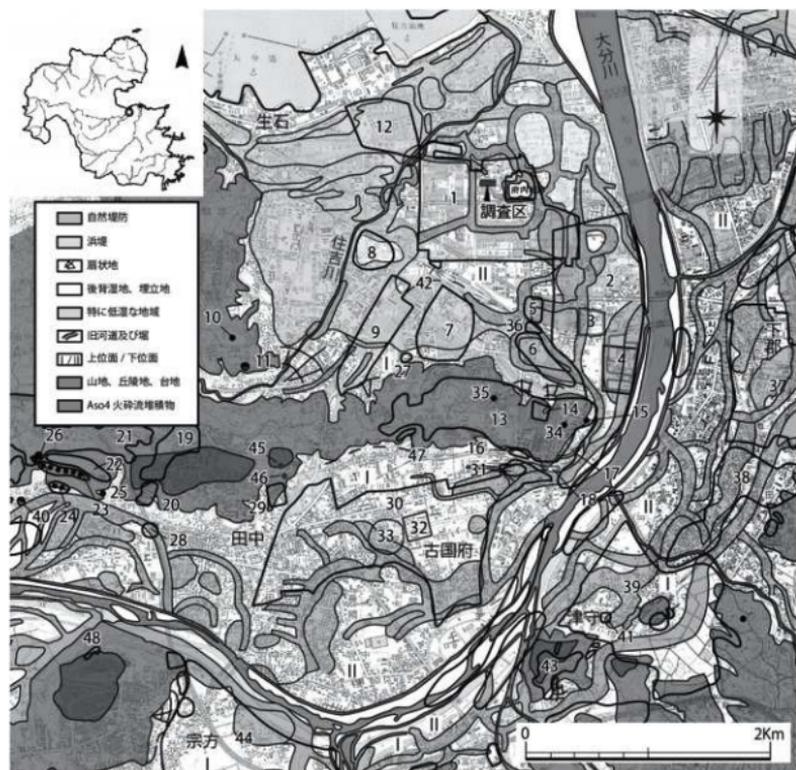
参事補 河野 史郎 (整理担当)

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置し、北側と東側は瀬戸内海西端の別府湾に面する。北部沿岸海域は水深が深く、東部沿岸は豊予海峡に面したリアス式海岸となっており、変化に富んだ海岸線を形成する。

その海岸線に沿って大分平野が広がり、平野の東側と西側に2つの河川が流れる。前者が県内最大河川の太



- | | | | |
|------------|-----------------|------------|-------------|
| 1 府内城・城下町跡 | 13 上野遺跡群 | 25 深河内古墳 | 37 下部遺跡群 |
| 2 中世大友府内町跡 | 14 上野大友館跡(上原館跡) | 26 蓬萊山古墳 | 38 羽田遺跡 |
| 3 大友氏館跡 | 15 大匠塚古墳 | 27 東大遺跡群 | 39 津守遺跡 |
| 4 旧万寿寺地区 | 16 岩屋寺横穴墓群 | 28 荻隅杉下遺跡 | 40 丑殿古墳 |
| 5 南金池遺跡 | 17 大分元町石仏 | 29 水興遺跡 | 41 松平忠直津守館跡 |
| 6 若宮八幡宮遺跡 | 18 岩屋寺石仏 | 30 古園府遺跡群 | 42 末広遺跡 |
| 7 大遺跡群 | 19 城南遺跡 | 31 岩屋寺遺跡 | 43 守岡遺跡 |
| 8 東田室遺跡 | 20 尼ヶ城遺跡 | 32 金剛宝戒寺跡 | 44 玉沢地区糸里跡 |
| 9 大遺業里跡 | 21 庄ノ原遺跡 | 33 羽屋・園遺跡 | 45 永興千人塚古墳 |
| 10 亀甲山古墳 | 22 田崎遺跡 | 34 上野竜王畑遺跡 | 46 弘法穴古墳 |
| 11 古宮古墳 | 23 田崎古墳群 | 35 上野庵寺 | 47 南太平寺横穴墓群 |
| 12 勢家遺跡 | 24 万寿山古墳群 | 36 上野町遺跡 | 48 小野鶴横穴墓群 |

第1図 周辺遺跡位置図及び地形図 (1/40000)

川で、祖母山東原を祖流とし、後者が由布岳東原を祖流とする大分川で大分平野の南側を東流した後大きく蛇行し、北流して別府湾に注ぐ。流域には、上野台地や鶴崎台地などの低位の河岸段丘が形成される。

それらの河口部には三角州が展開しており、自然堤防などの微高地、海岸に形成された浜堤、後輩湿地などの微地形で構成された沖積平野が一带に広がる。また、高度からみると上位面と下位面に二分され、上流側に上位面が広く分布し、下流側及び大分川本流沿いに下位面が認められる。平野の西側には国東半島の両子山から鶴見岳・由布岳・九重山・阿蘇山へ北東から南西方向に続く第四紀火山列がある。野生ニホンザルの生息地でもある高崎山もこれに含まれる。気候は瀬戸内海気候に属し温暖であり、市域の半分を森林が占める自然豊かな地域である。

今回調査を行った府内城・城下町跡は大分市の中心地に位置し、大分川左岸、河口部に形成された三角州上(標高3~5m・下位面)に展開している。現在の海岸線は埋め立てなどの要因で、北側に移動しているが、江戸時代は城のすぐ北側に海岸線が位置しており、海に面する城下町となっていた。現在の市街地は江戸時代の城下町が骨格となっており、市街地の多くの街路が城下町の道を踏襲している。

第2節 歴史的環境

大分市は、豊後国の府内と呼ばれ、奈良時代に国府がおかれて以来、大分県の政治・経済・文化の中心であり、歴史・文化の資源にめぐまれている。元禄7年(1694)、府内を訪れた儒学者貝原益軒は、城と町の大きさ、活気に満ちた町人たちのようすに感嘆して「府内の町は、すこぶる大きな構えで町もまたすこぶる広い。この町にはたくさんの商品が揃っており、ここ府内の地は豊後の府だ。」(豊国紀行)と記している。益軒が記したように、大分市中心部の特徴は、この「府」という言葉に代表される。

大分川の河口に近い左岸地域では、古くは縄文時代後期や弥生時代の遺跡が多く確認されているが、古墳時代後期から7世紀になると、上野台地の周辺には重要な遺跡が集中してみられるようになる。

上野台地の南方に位置する永興地区付近では、古墳時代の後半から7世紀にかけて巨石を用いた横穴式石室墳が、市内で唯一まとまって形成されている。そのひとつである弘法穴、当地を治めた大分国造に関わる古墳の可能性が高い。古国府遺跡群の西部では、近年の発掘調査より7世紀を中心とした地方官衙に關係する大型建物跡が確認されている。このように石室墳と官衙的な遺跡が集中する地域は市内の他にはみられず、当地が飛鳥時代における政治の中心地であったといえる。

奈良・平安時代になると、古代の国府推定地とされる上野台地の東端部に位置する上野遺跡群では、国府に付随した曹司とされる竜王畑や、基壇と礎石を有した古代寺院の跡である上野廃寺が建立されている。また台地の東斜面には平安時代後期に元町石仏が造営されるなど、上野台地の東端部は「高国府」と呼ばれ、古代における豊後国の中心地であった。さらに、北側の沖積下位面の自然堤防にも遺跡の分布が広がる。とくに、大分駅南の大道遺跡群では、運河とされる大溝、規格的な配置の掘立柱建物群、石帯に加え国府推定域と同様な組成の遺物群が発見されており、水運にかかる国府関連施設と考えられ、旧河道と住吉川が合流する河口に古代の港湾が想定される。また、大分川左岸の自然堤防では9世紀の掘立柱建物跡がみつかり、対岸の郡衙推定地(下部遺跡群)や海部路や日向道へ向かう渡河地点と考えられ、交通の要衝地であった。

このように、国府の中心、上野台地東端部を起点とする陸上・水上交通、それらに関連する諸施設などが点在し、国府の中枢城として機能していた。

中世になると大友氏の豊後国拝領にともない、徳治元年(1306)の万寿寺の創建が起点となって、大分川左岸の沖積土上、現在の元町から長浜にかけて都市的な景観が形成され、鎌倉~室町時代は「府中」と呼ばれた。14世紀後半頃に顕徳町付近に守護所(大友館)が設けられ大友氏の拠点となり、戦国時代の北部九州6国を支配した大友宗麟・義統の時世には「府内」(Funai)と称され、その名はとのおく西洋にまで知られ、国際貿易都市として繁栄を極めた。

安土桃山(織豊)時代の末になると大分川の河口に府内城の築城が始められ、江戸時代の初めの1602年頃に

は中府内町の諸寺院や町組を取り込み、新しい城と城下が完成するとその地名を「府内(藩)」と呼び、豊後最大の商都として繁栄した。現在の中心部は、近世城下町を踏襲したものである。

これらの歴史的特性は、「豊後の府」・「國中ノ咽喉」として的地域的特徴を継承し発展させ、「県都」さらには東九州の「雄都」として今の大大市の都市像につながっている。

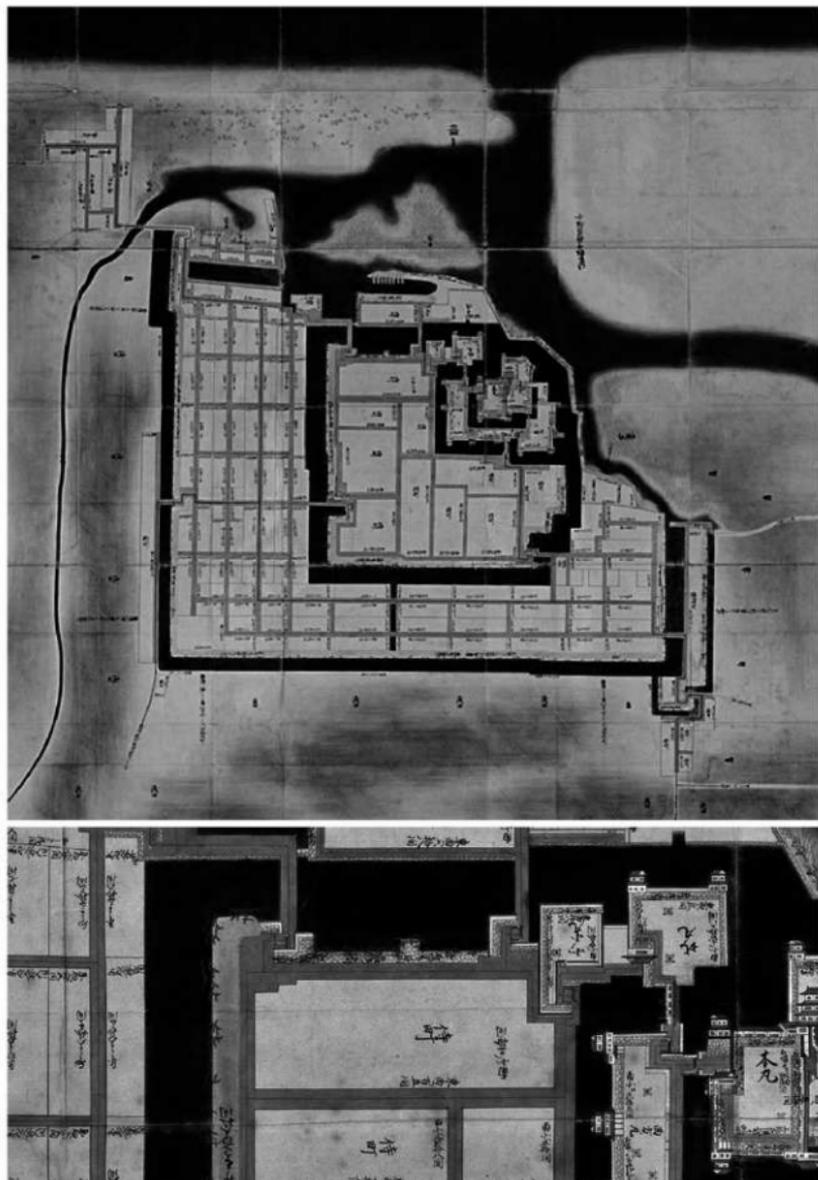
今回の調査地の位置する府内城・城下町には4つの堀が存在し、最も内側は本丸を囲む内々堀、2番目は二之丸(西ノ丸・東ノ丸)を囲む内堀、3番目は三之丸を囲む中堀で南北長256間(約512m)、幅22間(約40m)、東西長269間(約538m)、最大幅21間(約42m)、を測る。城下町全体を囲む外堀は「惣構堀」と呼ばれ、南北長8町19間(約946m)、幅19間(約38m)、東西長10町35間(約1,210m)、最大幅15間半(約42m)を測る。

府内城・城下町は、城を中心とし隣接地の三之丸に家臣の屋敷を集めた侍町を、周辺部に商工業者を集めた町人町を配した町割りが行われている。三之丸の外側、東西十町(約1,100m)、南北九町(約1,000m)、の範囲を短冊状に区画した町割りを行っており、門内47町、門外5町の合計52町を数える町屋部分の道幅は、一部を除き表通りが約6m、裏通りが約4mを測る。それに対し、防衛上の理由から三之丸部分の道路は東西・南北に走るが道幅は、最大幅20mから最少幅約2mと画一性が無く、遠見遮断のため丁字路・鍵型路・袋小路などになっている箇所も認められる。このような道路によって区画されている三之丸(侍町)の地割は、町人町によく見られる間口が狭く奥行の長い短冊状地割とは異なり、城の防御を主眼に、禄高に応じて屋敷の位置や規模が決まるため、不統一で複雑な配置をしている。三之丸には外部からの入口が「北ノ口」・「西ノ口」・「東ノ口」の3カ所あり、それぞれに多間櫓門・二重門・番所が設置されている。「西ノ口」の番所北隣には宝暦三年(1753)に時鐘楼が設置されている。三之丸内には武家屋敷の他に藩主大給松平家の祈禱所(菩提寺)である福寿院や藩の役所(下台所・御普請型役所・御勘定所・御用屋敷・御蔵・牢屋)なども置かれていた。

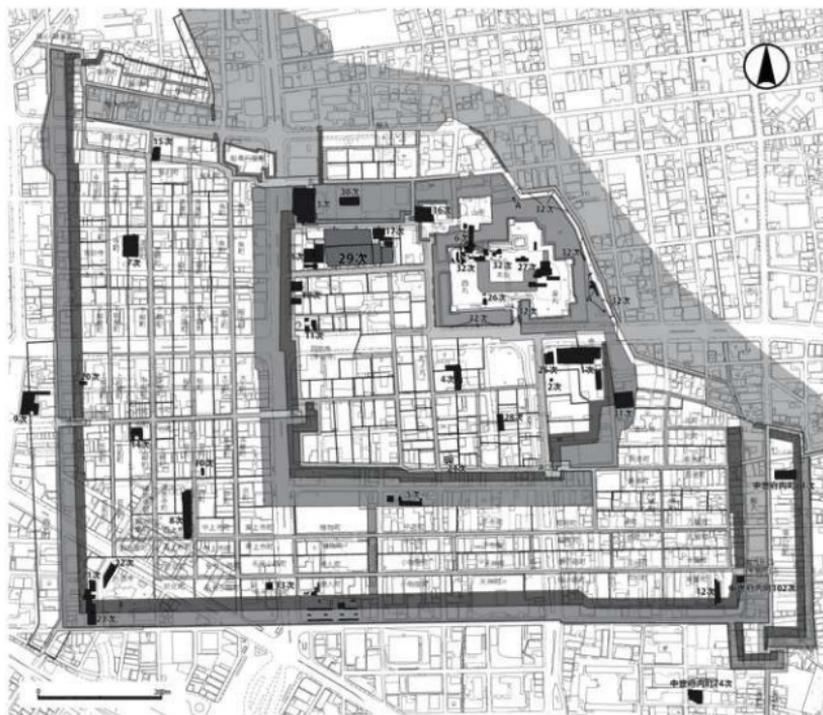
府内藩は小藩でありながら、福原直高が十二万石の石高にふさわしい規模の城郭として築城を開始し、大友氏時代の「中府内町」を移転させ、その経済的中枢機能を引き継いだことにより、豊後国最大の都市であった。また、城下町には5つの町組があり、城下町の運営を入り札で決められた代表者が務めるなど府内藩の自治組織が存在したことから、正式に江戸幕府が認めた豊後国唯一の城下町であった。

このような状況のなか、府内城下町では、寛保三年(1743)に天守閣をはじめとするほとんどの城郭施設及び城下町のほぼ全域におよぶ被害を出した寛保三年(1743)の大火をはじめとして(天守閣は以降再建されていない)、明和八年(1771)や文化七年(1810)の大火、宝永四年(1707)や明和六年(1769)、安政元年(1854)の大地震といった災害がたびたび起こっており、その被害の復興に大きな出費を強いられることが多かった。その結果、18世紀中ごろには財政の行きづまりがみられるようになる。宝暦四年(1754)、5代藩主松平近形によって初めての藩札の発行が行われる。文化五年(1808)、8代藩主松平近訓による借財整理など、財政立て直しのための改革がたびたび試みられるが、抜本的な解決には至らなかった。天保十三年(1842)最後の藩主となる10代藩主松平近説は家老岡本主米に命じ、日田の豪商廣瀬九兵衛とともに改革にあたらせた。主米と九兵衛は豊後を代表する特産品であった豊後表やロウを専売制にすることで、特産品の開発に伴う専売制の強化による藩の収入安定を図り、加えて徹底した儉約で支出を抑えることにより、藩財政の立て直しを行い、その安定を得ることが出来た。また藩主近説は、学業の振興にも力を注いでいる。日田に成宣園を開いた儒学者として知られる廣瀬淡窓をたびたび招聘しており、弘化二年(1845)には三之丸に新たな学問所を新設して開講記念とみられる講義が、淡窓によって行われている。学問所は、栗芹堂と命名されたが、安政元年(1854)の大地震により倒壊したため、安政四年(1857)に北之丸に新たに文武の学問所が新設され、遊馬館と命名され、慶応元年(1865)には、中島に移転する。

明治2年(1869)版籍奉還、明治4年(1871)7月(旧暦)の廃藩置県により府内藩は府内県となり、城内に役所が置かれる。同年11月には旧豊後国内に置かれていた、杵築県、日出県、府内県、白杵県、日田県、森県、



第2図 豊後府内城之絵図(正保城絵図・正保元年)全体及び部分



第3図 城下町復元図及び調査地点位置図(1/8000) [大分市史中巻付図より一部改変]

岡県、佐伯県の8県等を併合して大分県となり府内県(旧府内藩)は消滅した。翌年の明治5年(1872)1月(旧暦)には仮県庁が南勢家町(現在の大分市都町)に置かれた。同年、府内城は廃城となり、城内には大分県庁が置かれることとなる。明治8年(1875)には、城下町地域が大分町となった。明治9年(1876)には宇佐、下毛両郡(旧中津県・旧中津藩)が福岡県から編入され、ほぼ現在と同じ県域となる。後の明治29年(1896)に福岡県上毛郡の一部が編入され現在の県域となる。明治22年(1889)4月1日の町村制施行により大分町が発足する、明治44年(1911)4月1日には市制施行し大分町から大分市となる。昭和38年(1963)3月10日大分市・鶴崎市・大分町・大南町・大在村・坂ノ市町が合併し新たに大分市となる。平成17年(2005)1月1日北海道部佐賀岡町・大分郡野津原町を編入し現在の大分市となる。

府内城・城下町跡は、現在の大分市中心市街地の基盤となっている。府内城・城下町には4つの堀の一部を残し埋め立てが行われている。最も内側の本丸を囲む内々堀は大正10年(1921)の九州沖縄八県連合共進会開催のためすべて埋められ、現在は城址公園内に埋没しており府内城・城下町跡第27次調査において廊下橋の石垣と共に一部が確認されている。2番目は二之丸(西ノ丸・東ノ丸)を囲む内堀で明治6年(1873)に一部埋め立てを行ったものの現在も大部分が現存している。3番目は三之丸を囲む中堀で南北長256間(約512m)、幅22間(約40m)、東西長269間(約538m)、最大幅21間(約42m)、を測り、府内城・城下町跡第3・5次調査等で確認されている。城下町全体を囲む外堀は「惣構堀」と呼ばれ、南北長8町19間(約946m)、幅19

間(約38m)、東西長10町35間(約1,210m)、最大幅15間半(約42m)を測る。府内城・城下町跡第23次調査で確認されている、外堀に伴う土塁も府内城・城下町跡第12・21次で確認されている。現在は中堀・外堀及び府内城・城下町の北側に隣接し広がっていた海の一部も埋め立てられており、海岸線沿いに存在する水城でなく、都市部の中心に存在する様は景色になっている。

藩校があった遊馬館は、明治4年(1871)の大分県設置と共に、藩校遊馬館学校となる。明治5年(1872)には大分小校と名前を変えて続けられることとなる。翌明治6年(1873)には学制による小学校に改変される。(学校発足年)その後、府内学校や大分学校などと名称を変え、明治20年(1887)に今回の調査地に大分郡大分尋常小学校となり校舎が建設される。明治25年(1892)には付属幼稚園〈大分幼稚園(2000廃園)〉がつくられる。明治41年(1908)には女子校となり、大分郡大分女子尋常高等小学校となる。明治44年(1911)には市制が施行され、大分女子尋常高等小学校となる。大正13年(1924)には男女共学になり大分市荷揚町尋常高等小学校となる。昭和5年(1931)大分市荷揚町尋常小学校、昭和17年(1942)大分市立荷揚町国民学校となる。昭和20年(1945)大分市は太平洋戦争時の大分空襲による被災をうけるが、学校舎は被害を免れる。昭和22年(1947)より大分市立荷揚町小学校という名称となり、昭和30年(1955)に鉄筋コンクリート造の新校舎が完成する。平成29年(2017)3月閉校し143年の歴史に幕を閉じた。同年4月、中島小学校、住吉小学校及び碩田中学校と統合し大分県初の義務教育学校として、大分市碩田に大分市立碩田学園が開校した。

第1表 府内城・城下町跡調査一覧①

調査次数	調査主体	調査期間	幕末頃の推定地	調査内容	調査面積	調査原因	報告書名
第1次	県	19910401~ 19910630	三ノ丸武家別荘 (本町跡) およ び堀内	「本村」の焼煉文字が埋る陶磁器の出土から、家老本村家の屋敷地であることが分かった。その他、寛保の大火(寛保3年:1743年)に比定される火災処理一括資料が出土した。	2120㎡	県庁舎建設	府内城三ノ丸遺跡
第2次	県	19930719~ 19930803	三ノ丸武家別荘 (本町跡)	「□入第九郎権」の焼煉文字が埋る陶磁器の出土から、府内藩家老本村第九郎の屋敷跡であることが分かった。その他、15世紀初めの土坑を確認した。	45㎡	キョウモンド建設	府内城三ノ丸遺跡Ⅱ
第3次	県	19941011~ 19941227	三ノ丸北口・中 堀	三ノ丸北口土橋及び石堀、堀、北口櫓門の構台を出土。櫓門の状況から、近衛院にみられる景観から府内給炭(慶長十年付箋)の景観への変遷が確認された。	1900㎡	警庁舎建設	府内城三ノ丸北口跡
第4次	市	199304~ 199305	三ノ丸武家別荘 (本町跡)	調査地点は屋敷地として比定されており、屋敷地境に隣接する遺構が検出された。主な遺構は、17世紀初頭に遡る石組みの倉と考えられる施設である。	600㎡	民間開発	大分市埋蔵文化財調査年報5 平成5年度
第5次	市	199307	中堀	中堀は最大21間(42m)あり、調査地点は中堀のはば中心に位置する。調査では、堀の床面のみで石堀等は確認されなかった。近世の遺物は、下層の灰褐色色泥炭層から出土している。	500㎡	公園整備	大分市埋蔵文化財調査年報5 平成5年度
第6次	市	19950206~ 19960131	榎下堀及び西ノ丸周郭	山根丸(北ノ丸)曲輪西側の堀と石堀、階段状の石堀、冠石礎石、西ノ丸と本丸を結ぶ土堀の石堀と礎石状、本丸の西渡櫓石垣基礎、崖下橋基礎本杭などが確認された。	900㎡	公園整備	大分市埋蔵文化財調査年報Vol.7 1995年度
第7次	市	19950317~ 19950928	寺町・惣町	町屋に伴う多数の井戸や火災処理土坑、地下式土坑などが現つかつている。また、寺町と惣町町界と考えられる空地も検出している。下層からは、11世紀後半に遡る井戸などの遺構も確認された。	866㎡	民間開発	大分市埋蔵文化財調査年報Vol.7 1995年度
第8次	市	19961024~ 19970519	西町・西上町跡 遺跡	幅8mを測る道路状遺構と町屋に伴う多数の礎石土坑、井戸跡、地下倉及び火災処理土坑が検出されている。その他、城下町建設時の埋め遺構も確認された。	1101㎡	公園整備	大分市埋蔵文化財調査年報Vol.8 1996年度
第9次	県・市	19970207~ 19970930	西新町(城下町外)及びその隣接地	西新町の町屋に伴う多数の土坑、井戸跡などとともに西新町西側と考えられる溝状遺構を検出。「西新町」と書かれた焼煉文字が埋る陶磁器や明治時代初期のワインボトルが出土している。12~13世紀の瓦器も出土した。	1200㎡	民間開発	大分市埋蔵文化財調査年報Vol.9 1999年度
第10次	市	19971113~ 19971213	町屋跡	町屋内の礎石建物跡、井戸跡、火災処理土坑などを検出。16世紀末から17世紀初期の整地層が認められ、總長年間における城下町建設が推測された。	44㎡	民間開発	大分市埋蔵文化財調査年報Vol.9 1999年度
府内城 曲輪石垣 確認調査(A)	市	19980217~ 19980227	府内城曲輪	帯曲輪の石垣を検出した。一部で、府内城下段元寇(大分市史中巻付録)における帯曲輪の位置と検出した石垣の位置が異なることが判明した。	110㎡	公園整備	町屋跡Vol.9 1999年度
第11次	市	19980728~ 19981031	三ノ丸武家別荘 (森下家)及び 伊豆守	第1層で18世紀~19世紀や幕末頃の柱穴、土坑、井戸、礎石礎石や、石列等を、第2層で16・17世紀頃の柱穴、土坑、井戸、溝状遺構、礎石箱、土塼等を、第3層で12・13世紀頃の柱穴、土坑、溝状遺構等を確認した。	250㎡	民間開発	大分市埋蔵文化財調査年報Vol.10 1998年度
第12次	市	19990702~ 19990915	東堀町 土堀	府内城外曲輪土堀の基礎部を検出した。焼煉文字を有するものを多数含む土坑一括資料を確認し、光吉寺の焼煉文字を有する梵書御用品が出土した。府内城築城時の整地層より下から戦国時代の溝が検出された。	298㎡	民間開発	府内城・城下町跡第12次調査報告書
第13次	市	19991004~ 19991118	糸島小堀町	町屋内の井戸・土坑・火災処理土坑などを検出した。17世紀前半に比定される多量の瓦を伴う廃棄土坑が認められる。	84㎡	民間開発	府内城・城下町跡第13次調査報告書
第14次	市	20000807~ 20010309	竹町	寛保の大火をはじめ、18世紀後半から19世紀前半にかけての5回の火災に対応する火災処理一括資料を検出した。竹町と惣町の町界線も検出し、その変遷も把握された。	330㎡	民間開発	府内城・城下町跡3・大分市埋蔵文化財調査報告書第42巻
第15次	市	20021007~ 20030320	堀川町および堀 跡	幅4mと推定される道路遺構と礎石跡、土坑等が検出された。享保13年の別巻を有する礎を含む火災処理一括資料は享保19年の火災資料と推定され、多数の茶道具や中国青花を含む特筆すべき資料である。	216㎡	民間開発	府内城・城下町跡4・大分市埋蔵文化財調査報告書第50巻
第16次	市	20050801~ 20060311	北の丸および堀 跡	「府内給炭」に描かれた北の丸西側の石垣及び堀が検出され、さらにこれより古い府内城築城時に遡る石堀跡も検出されて初期の府内城の変遷が推定された。18世紀に限定される廃棄土坑群も確認された。	680㎡	保健福祉建設	府内城・城下町跡5・大分市埋蔵文化財調査報告書第78巻
第17次	市	20060511~ 20070329	三ノ丸武家別荘	近世段階の遺構として、後半期を中心とした3層の整地層を確認した。屋敷地の地割りに関する可能性のある東西溝や、区画性の可能性のある南北方向への柱列が確認される。	482㎡	公共駐車場建設	府内城・城下町跡6・大分市埋蔵文化財調査報告書第87巻

第2表 府内城・城下町跡調査一覧②

調査回数	調査主体	調査期間	調査地	調査内容	調査面積	調査原因	報告書名
第18次	市	2007/002～ 2007/003	三ノ丸武家屋敷・道路	第1面からは17世紀代～19世紀代の遺構が、築地層を除いた第2面(砂層)からは近世の独立柱建物、古代の井戸等が確認されている。	404㎡	民間調査	府内城・城下町跡三ノ丸山内城文化財発掘調査報告書第93巻
第19次	市	2011/108～ 2011/026	三ノ丸武家屋敷(土蔵家)	武家屋敷の礎石建物跡、地下蔵、井戸等が出土。「手廻り」「上原」の境線文字から文献資料による居住者と一致した。寛保、文化の火災処理土坑も検出したほか、築城以前の遺構も確認された。	728.3㎡	宇都宮体育館建設	府内城・城下町跡三ノ丸山内城文化財発掘調査報告書第115巻
第20次	市	2011/0721～ 2011/0722	外堀土塁	江戸時代の城下町の中に所在する上郷原町及び町の西側で南北に走る惣土土道路に該当するが、調査の結果、土塁は近世以降の陥没により取り壊された可能性が考えられる。近代の花畑が出土した。	20㎡	民間調査	大分市歴史資料館ニュー・ス101、108
第21次	市	2011/003～ 2012/024	外堀・元光寺	外堀土塁が検出され、その下位からは総門では知られていない16世紀代の土溝及び道路状遺構が検出された。元光寺境内側では庭園の池状遺構の一部が確認された。	1296㎡	道路建設	府内城・城下町跡三ノ丸山内城文化財発掘調査報告書第128巻
第22次	市	2012/011～ 2012/128	元光寺	寺院施設とみられる礎石建物のほか庭園遺構である池状遺構や水琴窟とみられる埋垂等も検出され、19世紀前半を中心とした築内景観とその変遷が判明した。	364.7㎡	道路建設	府内城・城下町跡三ノ丸山内城文化財発掘調査報告書第121巻
第23次	市	2012/121～ 2013/0112	外堀	府内城の外堀を確認するとともに、堀の中で総門が示されていない性格不明の石垣遺構を確認した。	192㎡	道路建設	府内城・城下町跡三ノ丸山内城文化財発掘調査報告書第128巻
第24次	市	2013/1216～ 2013/1224	三ノ丸武家屋敷	敷地層、火災処理土坑、柱穴などを検出した。	56㎡	公共施設建設	大分市埋蔵文化財調査報告書2015 平成26年度版
第25次	県	2015/0114～ 2015/0224	三ノ丸武家屋敷	寛保三年(1783)の大火に伴う火災処理土坑と多量の陶磁器類や瓦類などが出土した。	365.7㎡	電力変電施設建設	府内城・三ノ丸遺跡
第26次	市	2015/0728～ 2015/1115	府内城 宗門徳北園	宗門徳北の石垣基底部を検出した。築地層の出土建物から、築地が福原氏による築城当初のものであることが推定された。	57㎡	宗門徳北園	大分市埋蔵文化財調査報告書2017 平成28年度版
第27次	市	2017/0525～ 2017/0906	府内城 奉丸・東之丸	天守台第二層取付礎石及び礎石の根石と考えられる径1.0m程度の礎を確認した。また、内々屋や廊下橋の石垣を検出した。	730㎡	史跡公園整備	大分市埋蔵文化財調査報告書2018 平成29年度版
第28次	県	2017/0113～ 2017/0621	三ノ丸武家屋敷	近現代の造成土によって建物等は削平されていたが、寛保3年の大火に伴うと考えられる火災処理土坑や、屋敷区画と考えられる南北溝などを確認し、武家屋敷区画や土地利用の一端を知ることができた。	250㎡	県庁別館受電施設建設	府内城三ノ丸遺跡IV大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第5巻
第29次	市	2017/0831～ 2019/0629	三ノ丸武家屋敷(土庫・水戸・神田(前)・伴・河原・上原家)	武家屋敷7軒分を調査し、屋敷境を示す礎石列、溝跡のほか、産廃土坑、井戸といった屋敷内部の生活軌跡を確認した。また、棟瓦記号～17世紀初期に遡る独立柱建物跡や道路状遺構などを確認し、府内城築城前後の様相が判明した。	5407.7㎡	御前町小学校跡利用事業	本書
第30次	県	2018/0209～ 2018/0228	中堀	三ノ丸北口跡の東端を走る中堀、石垣等は検出されない。堀の基底面直上で近世期の遺物が出土し、その上層で明治期の遺物が出土していることから、近代以降に埋められたことが分かる。	370㎡	県知事公舎建設	府内城・城下町大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第8巻
第31次	県	2018/1029～ 2018/1120	三ノ丸東堀土塁	堀の堆積層及び石垣の裏込めにあたる築石層を確認し、堀の東側ラインが想定より西に位置することが判明した。また堀以外の部分は遺構が高層なため、唐巧寺の寺院内である可能性が示唆される。	529㎡	公園東堀駐車庫建設	府内城・城下町31次調査大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第14巻
第32次	市	2018/0518～ 2019/0205	府内城 西之丸堀子橋跡東門橋跡南堀 内堀	旧県庁舎など明治時代から平成までの建物が影響していない部分には、府内城完成時の石垣や遺構などが残っていることが判明した。	120.9㎡	公園整備	大分市埋蔵文化財調査報告書平成30年度調査版
府内城・城下町予備調査(B)	市	2018/0816～ 2018/0914	外堀土塁	明治時代以降の埋土が主であり、土塁部分は削平を受けていたが、土塁基底部下と思われる築地は残存していた。	297.1㎡	公園整備	大分市埋蔵文化財調査報告書平成30年度調査版

の道路跡が、府 18 次調査では三之丸内の道路跡が確認されるなど、「復原図」から推定された道路や堀、土塁の位置と、調査で確認されたそれらの位置は、概ね一致している。また、各調査において府内城の三之丸や町屋、寺城に関わる都市的遺構が確認され、町屋城や武家屋敷地、寺城内の様相が明らかになりつつあること、三之丸では出土した陶磁器の焼継文字と、「享和二年絵図」「文久三年絵図」などの絵図との照合から屋敷居住者の比定が進んでいること、三之丸や本丸の石垣などの城郭施設の遺替、改修の様相が確認されて、その変遷の推定が行われていること、府内藩記録に残る享保十九年(1734)や、寛保三年(1743)、文化七年(1810)などの相次ぐ大火がその付け跡として確認され、大火時点での遺物様相が明確になりつつあることなど、府内城・城下町における各所の様相が徐々に明らかとなっている。さらに、府 18 次調査では 9 世紀代の、府 7 次では 11 世紀後半の平安期まで遡る井戸が見つかり、府 11 次調査では 12 世紀末頃の鎌倉期に遡る溝が、中世後半期においても 16 世紀代の溝が府 12 次調査や府 21 次調査で見られるなど、古代や中世の遺構・遺物が各所で確認されており、府内城築城以前に関しても土地利用の実態が明らかとなりつつある。

今回の府 29 次調査は、「復原図」によれば、三之丸武家屋敷地の北西の区画に相当し、屋敷地 7 軒分の地割にのる位置にあたる(第 3 図)。近辺では、府 3 次・16 次・17 次・19 次調査が行われており、府 3 次調査と府 16 次調査では、三之丸北口と北の丸などの城郭施設の調査が行われ、府 17 次調査と府 19 次調査は今回と同じ三之丸武家屋敷区画の調査である。3 次では、三之丸北口跡の二重櫓台やそれに伴う石垣、三之丸と町屋城をつなぐ北口の通路(及びその石垣)が確認されており、その変遷では、初期(福原氏～日根野氏段階)は実戦的な機能をもっていたが、大給松平氏以降は城主の権威を象徴するシンボルとしての改修がなされていったことが明らかとなっている。16 次では、初期段階の北の丸の構築から、その後の拡張までの変遷を明らかにするとともに、3 次調査の結果を踏まえて北口から北の丸にかけての石垣ラインの復元を試みている。府 17 次調査では、武家屋敷地 3 軒分の地割にわたる地点であり、18 世紀代から 19 世紀前半の井戸や廃棄土坑といった生活様相がうかがえる遺構が多数確認され、その内部の様相を明らかになっている。また、屋敷境と考えられる東西溝を確認しているほか、屋敷境の可能性のある南北方向の柱穴列を確認しているものの、この柱穴列を超えて遺構間での接合状況が見られることから、南北方向の地割があった可能性は低いと考えられている。府 19 次調査では、武家屋敷 2 軒分の地割にわたる地点であり、19 世紀代の礎石建物跡や、寛保三年(1743)の大火及び文化七年(1810)の大火による可能性のある火災処理土坑が確認されたほか、17 世紀後半以降の廃棄土坑や井戸跡などが確認され、内部の様相が明らかになってきている。また、擾乱により屋敷境は確認できていないものの焼継文



第 5 図 調査区割図

字の出土状況から概ね屋敷境の位置を特定している。各調査と「復原図」とで地割の比較を行ってみると、府3次調査や府16次調査での東西方向の地割はほぼ「復原図」との一致が見られるのに対し、府3次調査、府16次調査、府17次調査、府19次調査での南北方向の地割は、府3次調査、府17次調査では「復原図」とズレが見られるが、府16次調査、府19次調査では概ね「復原図」と一致しており、地点によって異なっている状況である。

また、府10次調査や府11次調査、府12次調査などにおいて17世紀初頭の整地層が確認されており、府内城築城時と推定されているが、近接する府17次・19次調査では、掘乱や上位遺構の影響もあり、明確な築城時の整地は確認されていない。加えて、17世紀中頃・後半以降は確認される遺構が多くなるが、17世紀前半代に比定される遺構は、府17次調査で土坑が、府18次調査で掘立柱建物跡や石積み遺構が、そのほかの調査でも土坑などが確認されているが、後代に比して総じて少ない。つまり万治元年(1658)に大給平氏が入封して以後は、その様相が徐々に明らかになっていっているが、それ以前の竹中氏や日根野氏が治めていた時代の様相については、遺構が少ないためあまり明らかではない。

さらに、府内城築城以前に関しては、府17次調査では明確な遺構はあまり確認できていないが、府19次調査では16世紀後半から17世紀初頭の掘立柱建物跡や溝状遺構が確認され、府11次調査や府18次調査でも同時期の溝状遺構や土坑が確認されている。したがって、この周辺には府内城築城以前に遺構が展開していたと考えられるが、まだ全体的な様相としては明確ではない。

そのため、今回の調査では、①屋敷居住者の特定及び、屋敷内部の様相の確認、特に府19次調査で確認されている寛保三年や文化七年と推定される大火の痕跡による遺物様相の確認、②屋敷地7軒分に位置するため、屋敷地の検出及び「復原図」とのズレの確認、③府17次・19次調査で確認できていない府内城築城時の整地及び17世紀前半代の大給平氏入封以前の屋敷地の様相の確認、④築城前の土地利用状況の確認を主な目的として調査を行った。

第2節 調査・整理の方法

調査区の設定にあたっては、担当課との協議により調査対象範囲が敷地の80%であったことから、グラウンドを中心とした調査範囲を設定した。調査区全体としては一つのつながった調査区であるが、第1章で述べたとおり、校舎解体の作業ヤード確保及びスケジュールの関係上、調査区を分割する必要があった(第5図)。一番東側の囲舎跡地を1区と、その西側隣接地を2区と設定し、前校舎解体作業ヤード確保の関係上、2区部分を廃土置き場として1区の調査を行った。1区調査終了後は1区部分を廃土置き場として2区の調査を行った。校舎解体作業終了後、校舎及びグラウンド部分を廃土置き場確保の関係から、南側を3区と、北側を4区と設定し、4区及び1・2区部分を廃土置き場として3区の調査を行った。3区調査終了後、3区部分を廃土置き場として4区の調査を行った。

調査は、機械による表土除去を行ったのち、4mメッシュのグリッドを設定して行った。なおグリッドは九州の平面直角座標系(2系)の起点が大分市からみて南西方向にあることから、南西を起点としたアルファベット及び数字を使用して設定している。府内城・城下町跡は、遺跡が重層的に重なっている近世都市遺跡の性質上、遺構面が複数存在しており、各遺構面間には整地層が挟まれている。その整地層については、時間的な短縮と費用の削減のために、大部分は機械を使用して掘削したが、一部を人力による掘削とし、可能な限り時期の特定に努めた。また複数遺構面のために、遺構面間の層序関係の把握が難しいが、土層模式図を活用して、その把握に努めた。なお、後の基本層序の項で述べるが、整地層の大部分を機械によって掘削したことで整地層や遺構面をすべて把握することが困難になり、厳密な遺構面ごとの検出が行えなかったため、遺構面とは同一ではない任意的な調査面として第1調査面から第3調査面の3面に分けて調査を進めた。

検出においては、基本的に整地層に切り込む遺構であるため、一度での遺構認識が困難であることから、まずは極力大きめに捉えることとし、把握した遺構の切り合い関係図として、1/100縮尺の遺構配置図を作成した。

配置図作成後、一度5～10cm程の深さで掘削したのち、再度切り合い等の有無を確認し、切り合いが確認できた場合は、配置図に追加していった。その際の配置図作成にあたっては、最初に大きくとらえた範囲を実線で、再度その下位で確認したものは破線で描いている。遺構検出後は、作成した配置図に遺構番号としてのS番号を付与して遺物の取り上げ等を行っていくが、大きくとらえた範囲の下位で切り合いを確認した場合は遺構番号を別にして混入等が起らないように注意して作業を進めた。また、切り合い等がない場合も一度5～10cm程の深さで掘削してから、順次段階的に掘削を行っており、最初に掘削した深さ5～10cm程の部分については、「S〇一段下げ」などと下位の部分と区別できるようにした遺物の取り上げを行い、上位からの混入などが起らないように注意して作業を進めた。

なお、遺構番号の付与に際し、遺構検出の段階で調査における成果の主体となると判断した遺構については、「大分市発掘調査指針」に基づき、主要遺構として5の倍数の番号を付与し、1/20や1/10縮尺の個別遺構実測図・土層断面図等の作成、個別遺構写真撮影など、報告書掲載を見越した記録作成を行った。検出段階では主要遺構と判断できなかったものについては、基本的に個別図の作成等は行っていないが、遺構番号に対応した遺構番号台帳を作成して、各遺構に関する所見を記入していくこととしている。ただし当初主要遺構と判断できなかったものについても掘削途中で主要遺構の可能性が判断できたものについては、記録作成を行っている。各遺構の性格付けに関しては、現場段階ではそのままとし、調査終了後の整理段階で、遺構の個別の性格に関した表記を付与した(例<現場段階:S1⇒整理段階:SK001>)。

遺構掘削後は、1/20縮尺の全体遺構図を作成し、隣接する立体駐車場を利用した全体写真、ドローンによる空中写真撮影や、航空機による広域の空中写真も随時行った。なお、調査面が複数あることから、下位の調査面についても、同様の手順で進めた。

都市遺跡を広範囲に調査した結果、膨大な量の遺構と遺物が確認されたため、報告書には紙幅の関係から、すべてを掲載することはできない。そこで整理作業にあたっては、調査成果の整理や遺物の整理と並行して、報告書掲載遺構決定のために検討を行い、遺構の性格と遺物の様相を加味して最終的な掲載遺構の決定を行った。また遺物については、下記の参考文献に基づいた分類と可能な限りの記号化を行った上で掲載遺物の選別を行い、実測可能なもの内、遺構の時期を示すもの、多様な種別・器種を示すもの、その調査において遺物の組成を示すもの、遺跡又は調査区全体で希少なものを優先して掲載することとした。なお、遺物の年代観については、以下の参考文献を用いて報告を行う。

[肥前系陶磁器類]

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

[その他陶磁器類]

(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの一生産と流通一』

京都府埋蔵文化財研究所 2004『平安京左京北辺四坊』

乗岡実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』

[瓦・焙烙]

吉田寛 1993『府内城三ノ丸遺跡一大分県共同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』

[中世陶磁器類]

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊XV-陶磁器分類編一』

小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2(染付は青花に読み替える)

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2

乗岡実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』

藤原良祐 2005「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年』

資料集]

中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

森田稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

長直信 2016「第Ⅲ章第3節 出土遺物の分類と編年」『大友府内22』大分市教育委員会

[その他全般]

江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸時代考古学研究辞典』

第3節 調査の概要と基本層序

今回の調査地は、「復原図」によれば、先述のとおり三之丸武家屋敷地の屋敷地7軒分の地割にのる位置にあたり、調査地の北側と南側を通る現在の東西道路は、江戸時代当時の道路を踏襲している。また調査区の西側を南北に通る現在の中央通りは、当時の中堀及び三ノ丸を区画する城郭とその内側に位置する三ノ丸西端の南北道路の名残であり、アートプラザの東側を南北に通る道路は、当時の内堀沿いに位置する南北道路の名残である。調査地内に推定される武家屋敷7軒は、文久三年絵図によると「太田氏」「神谷(神屋)氏」「岡本氏」「上原氏」「木戸氏」「伴氏」「阿部氏」で、1区が「太田氏」、2区が「太田氏」「神谷(神屋)氏」、3区が「神谷(神屋)氏」「岡本氏」「上原氏」「木戸氏」「伴氏」、4区が「木戸氏」「伴氏」「阿部氏」に該当すると推定される。

1. 基本層序

基本層序は、現地表面の表土及びグラウンド造成土の下位で、明治時代以降の学校建設時の整地層と考えられる固くしめる暗褐色砂質土が存在し、その直下に幕末頃の整地層と考えられる淡茶褐色砂質土が存在する。そのさらに下位で18世紀中頃の整地層と考えられる暗灰褐色砂質土、さらに下位で17世紀中頃の整地層と考えられる明茶灰色砂質土が存在し、現地表面から概ね1.0m～1.3m程で自然堆積層である明黄灰色砂に至る。したがって、淡茶褐色砂質土の上面が幕末の遺構面、暗灰褐色砂質土の上面が18世紀中頃から19世紀中頃の遺構面、明茶灰色砂質土の上面が17世紀前半から18世紀中頃の遺構面、自然堆積層明黄灰色砂の上面が中世から府内城築城前までの遺構面と考えられる。

また、調査区西端においては、17世紀中頃の整地層と考えられる明茶灰色砂質土と自然堆積層である明黄灰色砂の間に府19次調査で確認された中世包含層と同一の淡灰褐色砂質土を確認した。今回の調査区では大半が確認できず、西端でのみ確認しているため、中世包含層は調査区西端から以西に広がっているものと考えられる。

なお、自然堆積層である明黄灰色砂の上面の標高は地点によって異なっており、3区西半分は標高約2.0mで、1区は標高約1.6mとやや低いが、2区から3区東半分にかけは標高約1.3mと最も低くなっている。この自然堆積層が最も低くなっている地点での土層観察において、17世紀前半から中頃の整地層である明茶灰色砂質土の下位で淡灰色砂質土の整地層を確認し、さらにその上面から切り込む遺構も確認した。淡灰色砂質土の整地層は、17世紀中頃の整地層と考えられる明茶灰色砂質土の下位にあたるため17世紀前半以前、府内城築城時の整地の可能性が考えられるが、明茶灰色砂質土と似ていたため機械による整地層掘削の際に認識できず、土層観察によってのみ確認したため面的な広がりには確認できていない。

調査は、これらの各遺構面での検出を基本としたが、前述のとおり整地層の大部分を機械掘削したことにより厳密な同一時期の遺構面(生活面)としての検出はできなかったため、遺構面とは同一ではない任意の調査面として第1調査面から第3調査面の3面に分けて調査を進めた(第6図)。第1調査面は18世紀中頃から19世紀中頃の遺構面での検出を基本とするが、校舎基礎の石列や、建物基礎の礎石や石列が残存していた部分は明治時代の整地(暗褐色砂質土)や幕末の整地(淡茶褐色砂質土)を残している。また、機械掘削時に明治時代の整地や幕末の整地と認識できていなかった箇所はそれぞれの整地が残り、プール基礎などの大型攪乱によって大き

く削平されている箇所については、17世紀中頃の整地(明茶褐色砂質土)の途中まで削平されていたため、17世紀代から幕末までの遺構を検出している。

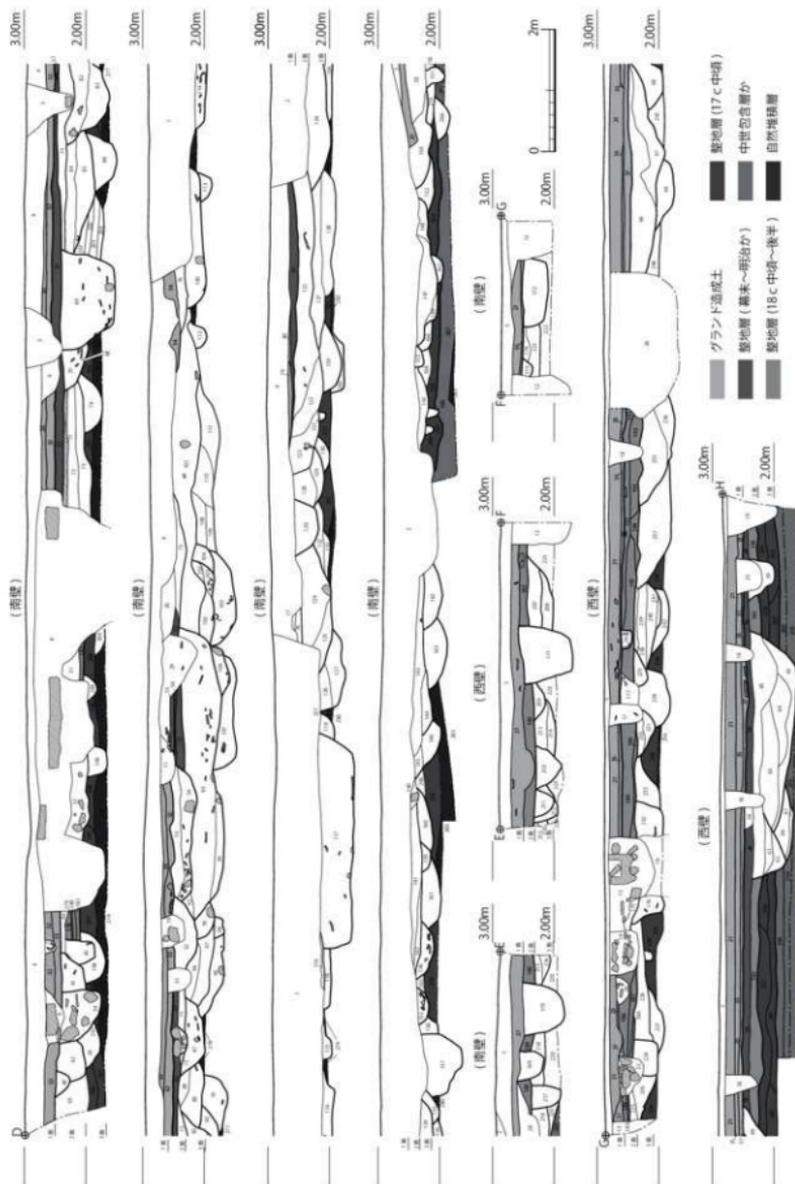
第2調査面は17世紀中頃から18世紀中頃の遺構面での検出を基本とし、第3調査面は自然堆積層明黄灰色砂の上面での検出を基本とするが、第2・3調査面においても、上位面で認識できなかった遺構を検出するなど、厳密な時期別遺構面ごとの調査ができていない。そのため報告に際しては時期別遺構面ごとの報告ではなく、第1～3調査面でそれぞれ検出した遺構を、検出した調査面ごとに報告することとする。つまり、攪乱の削平によって第1調査面で検出した17世紀代の遺構や、上位で認識できず第3調査面で検出した19世紀代の遺構なども検出した調査面の項で報告することとなるため、各調査面の報告では様々な時期の遺構が混在していることをあらかじめ断っておく。

2. 調査の概要

今回の調査では、上記のように3つの調査面で調査を行った結果、主に中世後半から近代にかけての遺構、遺物を確認している。近代の遺構では、明治時代以降学校施設に関連する遺構を多く確認している。近代以降の遺構であるため本文ではあまり触れていないが、石列として検出した3区S046や3区S009にはコンクリート製T字状基礎が伴っており、昭和10年頃に行われた耐震補強のツツバリが伴う大正時代からの校舎基礎と想定される。また、昭和23年に3区S046を基礎と想定する校舎が全焼しているが、その後建てられたコンクリート製の建物の基礎と考えられる石列3区S020や、その火事の際の片付けと思われる焼けた瓦が大量に含まれる3区S001～004なども確認している。さらに石列3区S073・180・195・200・230・235・240などは切り合い関係上、明治時代中頃以降の建物基礎と思われるが、コンクリート製T字状基礎が伴わないため、明治28年頃の増築に関連する校舎基礎が想定される。

近世において、明治時代初期の学校建設前までの武家屋敷地として利用されていた時代を含む17世紀から19世紀代では、屋敷境と想定される礎石列や石列、溝状遺構などを確認し、「文久三年絵図」で「岡本氏」や「神屋氏」の屋敷地と推定される範囲内で蔵などの建物基礎と想定される口の字状の石列を確認しているほか、同じく「太田氏」の推定屋敷地の1区では排水などに関わりと推定される桶状及び桶状遺構を確認している。各時代ともに井戸跡、廃棄土坑、火災処理土坑、埋喪遺構、粘土貼土坑などがあり、礎石建物跡は確認できていないが、各屋敷想定範囲の中で奥側や片側に一定程度井戸跡や廃棄土坑、粘土貼土坑などが偏る傾向は見て取れ、一部屋敷境では時代の変遷とともに位置が変わっている地点もある。遺物では、肥前系陶磁器を中心に、瀬戸美濃産陶磁器、関西系陶磁器、備前焼、萩焼、中国産陶磁器、ベトナム産陶器、在地系土師質・瓦質土器などが多量に出土しており、火災処理土坑では肥前系陶磁器や中国産磁器の組み物も多く出土している。そのほかにも、鍋島焼の輪繫ぎ文皿の破片が出土したほか、絵唐津や志野焼、織部焼といった桃山陶器が一定程度出土している。

府内城築城以前では、大半は16世紀後半から17世紀初頭のもので、道路状遺構や、掘立柱建物跡、欄状遺構、溝状遺構などが確認でき、京都系土師器や、備前焼播鉢、絵唐津、中国産白磁や龍泉窯系青磁、景德鎮窯青花などが出土しているが、道路状遺構と掘立柱建物跡・欄状遺構・溝状遺構の方位が異なっている。また、白色研磨土器や土師質土器鍋、瓦器、中国産白磁が出土する12世紀後半から13世紀前半の土坑や、井戸なども確認しており、今回の調査区で最も古い遺構となっている。



第9図 3区調査区南・西壁土層図①(1/80)

第IV章 調査の成果(遺構編)

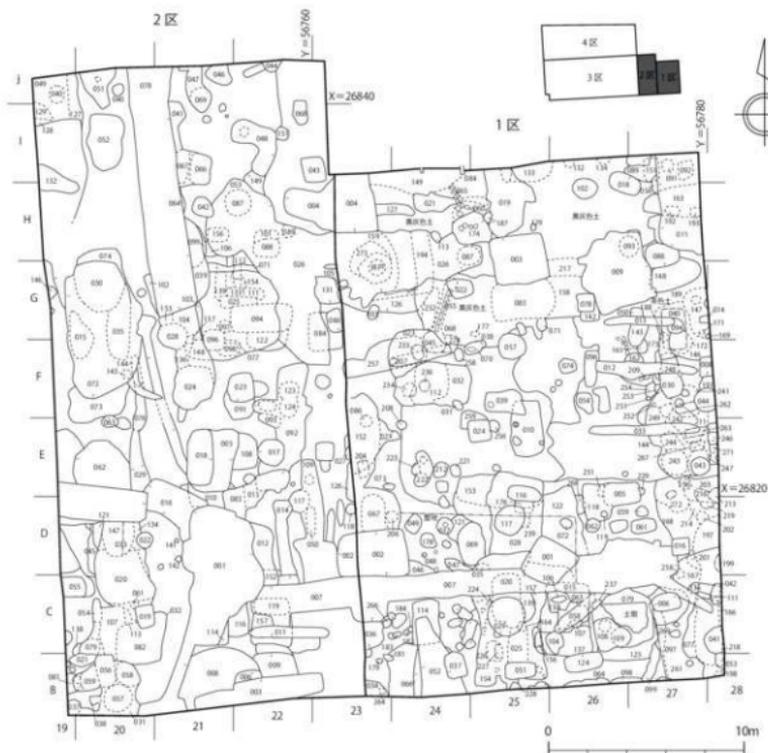
第1節 1・2区

(1) 第1調査面

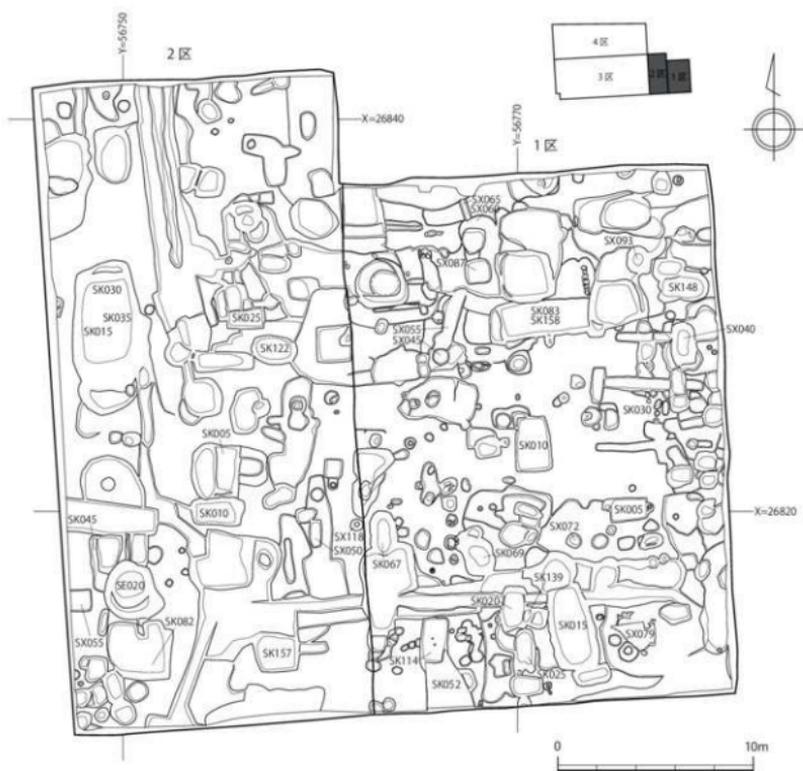
調査の概要

1・2区は調査区全体のうちの東側部分にあたり、北側には隣接して第17次調査区が位置する。幕末頃の屋敷地割の復元では、「太田氏」「神原氏」の屋敷地の一角にあたり、両者の屋敷境に相当する地点である。第III章で述べたように、校舎解体ヤードの確保の関係上、1区の調査終了後、反転して2区の調査を行った。また、第III章第3節の基本順序で述べたとおり、学校建設前後のものと思われる明治期の整地層の下位面を第1調査面として調査を行っているが、1区北側については、コバルト軸の染付皿(第334図1)を含む黒灰色土とした整地層が広がっており、明治期の整地層がやや深く堆積していたものと判断される。なお、2区では学校プールによって1区の第2調査面に相当する高さまで削平を受けていたため、1区の第1・第2調査面に相当する遺構群を2区の第1調査面として同時に調査を行っている。

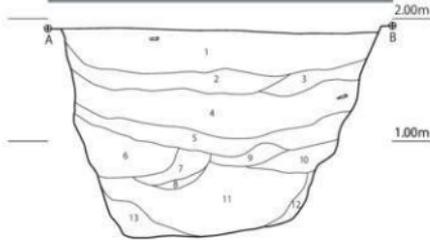
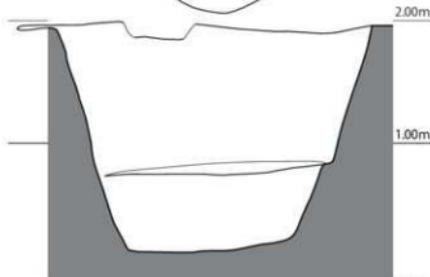
第1調査面の主な遺構は、井戸跡、火災処理土坑、廃棄土坑、埋裏遺構、粘土貼土坑、桶のような木製品を



第12図 1・2区第1調査面遺構配置図(1/250)



第 13 図 1・2 区第 1 調査面全体遺構図 (1/250)



1. 淡茶褐色砂質土 焼土ブロック・炭化物多く含む 固くしまる
2. 暗灰黄色砂質土 1層より炭化物多い
3. 暗黄灰色砂質土 2層よりやや明るい
4. 淡黄灰色砂質土 黄色土ブロック(大)まばらに含む 炭化物・1cm大の礫全体に含む
5. 明灰黄色砂質土 細砂 やや粘性強い
6. 淡灰黄色砂質土 黄色土ブロック(小)少量含む やや粘性あり
7. 明黄灰色砂質土 粗砂 しまりなし
8. 明黄茶色砂質土 7層に灰色砂混じる
9. 明灰黄色砂質土 焼土ブロック含む 粗砂メイン
10. 淡灰黄色砂質土 鉄分含む やや粘性あり
11. 暗灰黄色砂質土 細砂 遺物少量含む
12. 明灰黄色砂質土 細砂
13. 明黄茶色砂質土 粗砂



第 14 図 2 区 SE020 遺構実測図 (1/40)

埋設したとみられる遺構や桶状の遺構、そして土間状の遺構や用途不明土坑であり、主な遺構の埋没時期は、18 世紀前半～19 世紀中頃である。

井戸跡
2 区 SE020(第 14 図、第 261 図)

2 区南西の C 20 グリッドで検出された井戸跡である。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈し、南壁面の深さ 1.1 m 程の箇所にテラス状の段が付く。掘方の規模は、長さ 3.0 m、短径 2.6 m、検出面から底面までの深さは 1.8 m を測る。埋土は人為的な埋め戻し土で、大きく 2 分される。上位は焼土ブロックや炭化物を多く含む砂質土で、下位は掘り返し後に水成堆積したものと判断されるものである。また、底面で湧水を確認できたこともあり、埋土下位の堆積と符合することから本遺構は井戸跡と考えられる。遺物は、焼継文字のある肥前系染付の端反碗や蓋のほか、肥前系二彩手の鉢や中国産の可能性のある青磁動物型香などが(第 261 図)が出土している。遺構の廃絶時期は、出土遺物の帰属年代から、19 世紀前半以降と考えられる。なお、焼継文字で「岡本氏」と朱書きされた染付蓋(第 261 図 1)が神屋氏の屋敷推定地の遺構から出土したり、3 区中央付近の岡本氏の屋敷推定地に相当する場所から検出された遺構(3 区 S789、3 区 S841)の出土遺物と神屋氏の屋敷推定地の出土遺物である端反碗(第 261 図 13)が接合するなど、武家屋敷廃絶後に屋敷地を超えて遺物が廃棄されたものとみられる。

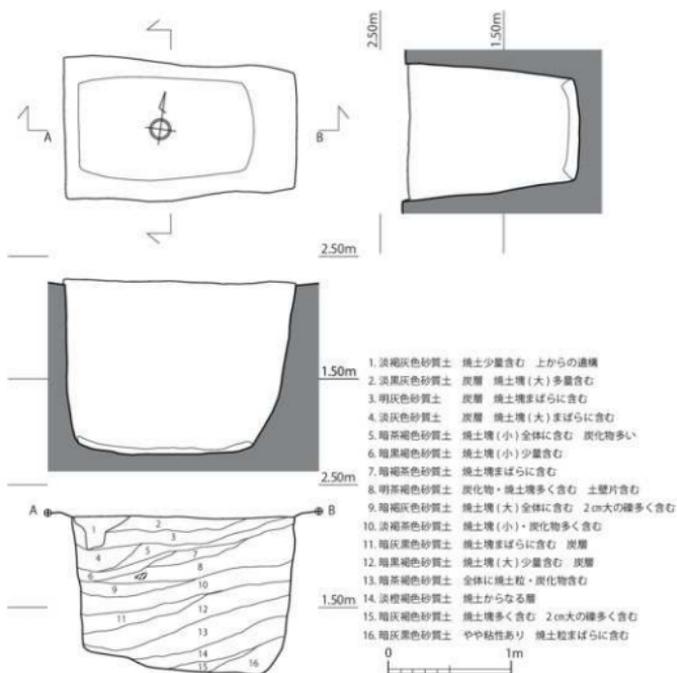
土坑(火災処理土坑)
1 区 SK005(第 15 図、第 262 図)

1 区中央東寄りの E26 グリッドで検出された土坑である。1 区 S118 に切られ、1 区 S229、1 区 S231 を切る。平面形状は長方形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長軸 1.9 m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは 1.4 m を測る。埋土は砂質土で、炭化物、焼土塊を多量に含んでいる。第 1 層を除き、炭化物・焼土塊の多寡で 15 層分層しているが、東側から人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。な

お、第1層は別の遺構埋土であり、その平面形状を確認するための遺構検出はできていない。遺物は肥前系染付碗、陶胎染付碗、壁土(第262図)などが出土し、大半に被熱の痕跡が認められる。遺構の埋土に炭化物・焼土塊を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災後に災害廃棄物を片付けた火災処理土坑と考えられる。遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から18世紀中頃と考えられる。

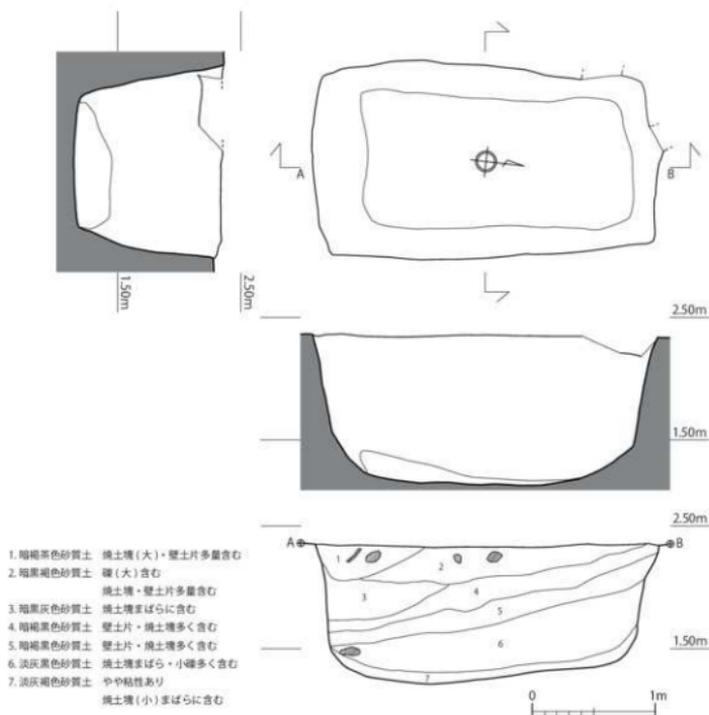
1区SK010(第16図、第263図)

1区中央のE25グリッドで検出された土坑である。1区S039とピットに切られる。平面形状は長方形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長軸2.9m、短軸1.6m、検出面からの深さは1.2mを測る。埋土は砂質土で、炭化物、焼土塊を多量に含んでいる。炭化物・焼土塊の多寡で7層に分層しており、第1層や第3層に不整合な堆積が認められるものの、北側から人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。遺物は肥前系染付碗・色絵碗の他に、備前系掛花入、壁土、銅製簪など(第263図)が出土し、陶磁器類の多くに被熱の痕跡が認められる。また、肥前系・波佐見の青磁瓶(第263図20)が後述する1区SK015から出土した破片と接合している。遺構の埋土に炭化物・焼土塊を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。遺構の埋没時期は、波佐見の青磁瓶の帰属年代から18世紀後半頃と判断されるが、出土遺物の主体が18世紀前半頃であることを踏まえれば、その年代は18世紀第2四半期の終わり頃～第3四半期の初め頃と考えられる。



1区 SK015(第17図・第264図・第265図・第266図1～7)

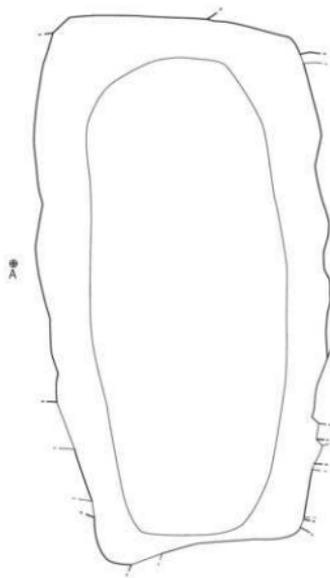
1区南側中央のC26グリッドで検出された土坑である。1区S063、1区S137、1区S138に切られる。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長軸4.3m、短軸2.4m、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は砂質土で、4層に区分される。各層に炭化物や焼土塊が多量に含まれ、その多寡で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土とみられるものである。肥前系の染付碗・皿・鉢や肥前系の陶器碗・鉢・油壺、関西系の陶器碗、備前焼油受皿をはじめ、土師質土器小皿や壁土など(第264図・第265図・第266図1～7)が出土しており、この中で特筆される物に柿右衛門様式の唾壺(第264図15)がある。また、出土遺物に17世紀末～18世紀前半頃のもの、18世紀中頃～後半頃のものがあるのも特徴である。この他にマツ属の炭化材も認められたことから理化学分析を行い、第VI章にて報告している。磁器類の多くには被熱の痕跡があり、1区SK005、1区SK020の出土遺物との接合関係が認められる。遺構の埋土に炭化物・焼土塊を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。本遺構の埋没年代は出土遺物の所属年代から18世紀中頃～後半頃と判断されるが、17世紀末～18世紀前半頃の陶磁器が多く出土し、土師質土器小皿の年代が18世紀前半頃に比定されることから、この時期に遺構はすでに廃絶していた可能性がある。



第16図 1区SK010 遺構実測図(1/40)

1区SK020(第18図、第266図8～13・第267図1～8)

1区南側中央のC25グリッドで検出された土坑である。1区S007、1区S029、1区SK139に切られる。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈し、北壁面にテラスをもつ。掘方の規模は、長軸2.5m、短軸1.2+a m、検出面からの深さは0.5 mを測る。埋土は砂質土で、7層に区別される。各層に炭化物や焼土塊が多量に含まれ、その多寡で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。遺物は肥前系の染付碗・灰落とし、肥前系陶器甕、瀬戸・美濃産陶器壺、関西系の土瓶のほか、京焼の火入れ及び蓋(第267図5・4)や口径が約7 cmに小型化した土師質土器小皿などが出土しており、陶磁器類の多くには被熱の痕跡が認められる。遺構の埋土に炭化物・焼土塊を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀末～19世紀初頭頃と考えられる。



2.50m



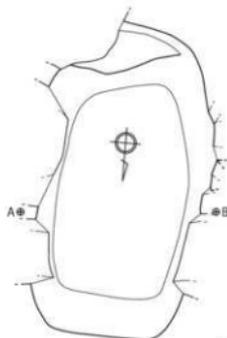
1. 淡黒褐色砂質土 焼土ブロック(大)土壁)多量含む
2. 暗黒褐色砂質土 焼土ブロック(大)土壁)多量含む
3. 暗褐色砂質土 焼土塊・瓦等多量含む
4. 淡褐色砂質土 焼土塊・遺物少量含む



第17図 1区SK015 遺構実測図(1/40)

1区SK030(第19図、第267図9～13)

1区中央東寄りF27グリッドで検出された土坑である。1区S012、1区S173に切られ、1区S241、1区S243、1区S253を切る。平面形状は長楕円形、断面形状は底面に凹凸を有する逆台形を呈す。掘方の規模は、長軸2.3 m、短軸0.9 m、検出面からの深さは0.5 mを測る。埋土は砂質土で、3層に区別される。各層に焼土塊を含み、土色の違いと焼土の多寡で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。遺



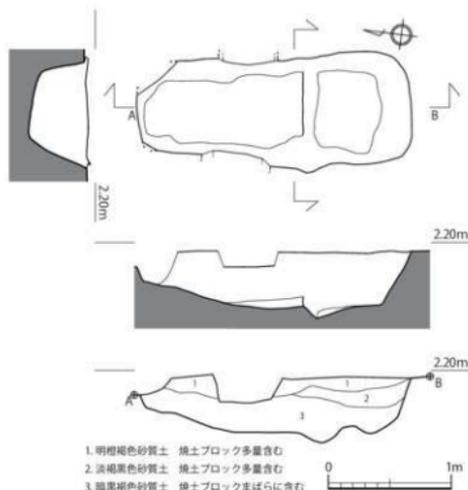
2.00m



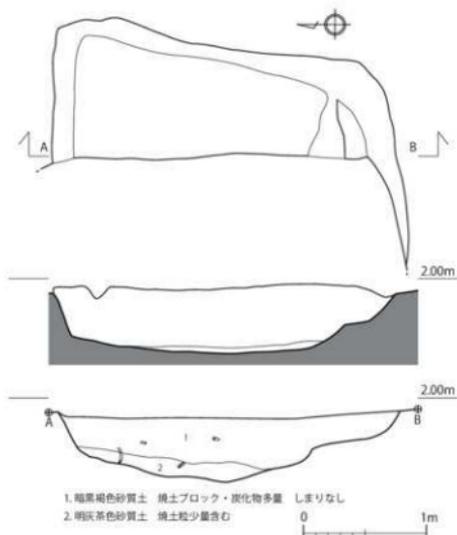
1. 明褐色砂質土 焼土粒・炭化物少量含む
2. 淡褐色砂質土 炭化物(大)多く含む
3. 淡褐色砂質土 焼土粒全体に多量含む
4. 淡黄色砂質土 灰黄色土ブロックまばらに含む
5. 暗黄色砂質土 焼土粒少量含む
6. 暗褐色砂質土 炭層
7. 暗褐色砂質土 炭化物多量含む



第18図 1区SK020 遺構実測図(1/40)



第 19 図 1 区 SK030 遺構実測図 (1/40)



第 20 図 2 区 SK005 遺構実測図 (1/40)

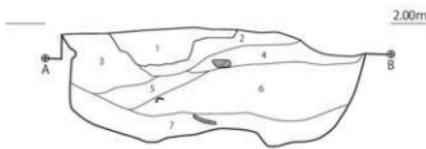
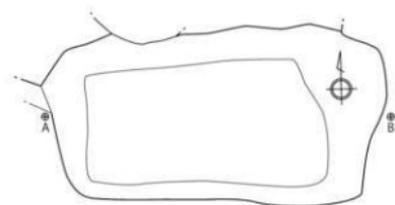
物は、絵唐津の皿や土師質土器焙烙、土師質土器皿、壁土など（第 267 図 9～13）が出土している。遺物に被熱の痕跡は認められないものの、埋土に焼土塊を多く含み、土坑底部の形状が不正形で凸凹を有することから廃棄のための土坑とみられ、火災処理土坑の可能性が考えられる。出土遺物は 18 世紀前半までの時期に比定されるが、18 世紀後半の土師質土器焙烙が出土している 1 区 S243 を切り、19 世紀代の関西系陶器土瓶が出土している 1 区 S173 に切られるという遺構の重複関係が認められることから、遺構の埋没時期は 18 世紀後半～19 世紀前半頃と考えられる。

2 区 SK005(第 20 図、第 268 図 1～6)

2 区中央の E21 グリッドで検出された火災処理土坑である。西側を視乱の 2 区 S018 に切られる。視乱の 2 区 S018 に切られるため全容は不明であるが、平面形状は隅丸長方形を呈すると推測される。断面形状は逆台形を呈し、土坑底部の形状は土層観察の結果から不整形であったとみられる。堀方の規模は、長軸 2.8 m、短軸 2.5+ a m、検出面からの深さは約 0.5 m を測る。埋土は砂質土で、2 層に区分される。各層に焼土塊を含み、その多寡で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。遺物は、瀬戸美濃産の染付端反碗、肥前系染付端反碗・香炉、焼継文字を有する肥前系染付小坏など（第 268 図 1）が出土しており、陶磁器類の多くには被熱の痕跡が認められる。焼土塊を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から 19 世紀前半～中頃と考えられる。

2 区 SK010(第 21 図、第 268 図 7～17)

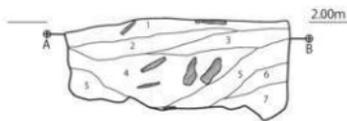
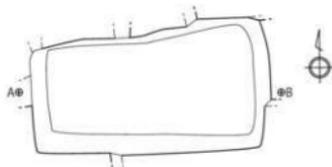
2 区中央南寄りの D 21 グリッドで検出された土坑である。視乱と 2 区 SK005 に切られる。平面形状は不整長方形、断面形状は底面に凹凸を有する逆台形を呈す。堀方の規模は、長軸 2.8 m、短軸 1.3 m、検出面からの深さは 0.9



1. 淡褐色砂質土 焼土塊まばらに含む 擾乱
2. 淡褐色砂質土 焼土ブロック・炭化物多量含む
3. 淡褐色砂質土 焼土ブロック・炭化物多量含む
4. 明褐色砂質土 焼土ブロック・炭化物多量含む
5. 淡褐色砂質土 焼土ブロック・炭化物多量含む
6. 淡褐色砂質土 焼土ブロック・炭化物多量含む
7. 暗灰色砂質土 焼土ブロック・炭化物多量含む



第21図 2区SK010 遺構実測図(1/40)



1. 明褐色砂質土 壁土多く含む 焼土ブロック(中)
2. 明褐色砂質土 焼土ブロック多い
3. 淡褐色砂質土 焼土ブロック(小)多い
4. 暗褐色砂質土 壁土・ブロック土(大)多い
5. 淡褐色砂質土 焼土ブロック(大)多い
6. 暗褐色砂質土 炭多量
7. 明褐色砂質土 焼土ブロック(中)多い



第22図 2区SK025 遺構実測図(1/40)

mを測る。埋土は砂質土で、6層に区分される。各層に焼土塊と炭化物を含み、その多寡で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。なお、第1層は攪乱の埋土であり、その平面形状を確認するための遺構検出はできていない。遺物は、肥前系の染付壺・段重、信楽産の陶器壺をはじめ、土師質土器小皿や壁土などが出土し、陶磁器類の多くには被熱の痕跡が認められる。また、肥前系の染付碗、色絵碗、染付段重などが1区SK010の出土遺物と接合する(第268図14～17)。土坑底部の形状が不正形で凸凹を有することから廃棄のための土坑とみられ、埋土に焼土塊や炭化物を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

2区SK025(第22図、第269図)

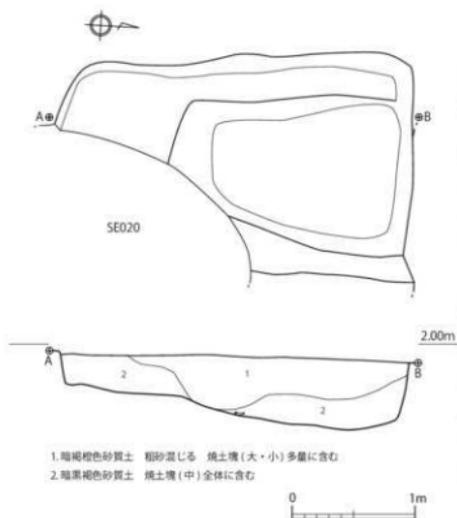
2区中央北寄りのG21グリッドで検出された土坑である。攪乱に切れ、2区S133を切る。平面形状は長方形、断面形状は底面に凹凸を有する不整形を呈する。掘方の規模は、長軸1.9m、短軸1.1m、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は砂質土で、7層に区分される。その大半に焼土塊や壁土を含み、土色の違いと焼土や壁土の形状や含有量で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。遺物は、肥前系染付皿・猪口・香炉、色絵瓶、陶器播鉢、瀬戸・美濃産陶器壺などのほか、土師質土器小皿や裏面に「太田氏」と線刻された頁岩製の硯(第269図15)などが出土している。また、出土遺物の一部に被熱の痕跡が認められ、17世紀末～18世紀前半頃のもの、18世紀後半頃のものがあるのも特徴である。土坑底部の形状が不正形で凸凹を有することから廃棄のための土坑とみられ、埋土に焼土塊や壁土を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。

出土遺物の主体が17世紀末～18世紀前半頃であることから、遺構の埋没時期は18世紀前半頃と判断されるが、土師質土器小皿の帰属年代を踏まえれば、その時期は18世紀後半頃まで下がる可能性がある。

2区 SK045(第23図、第270図・

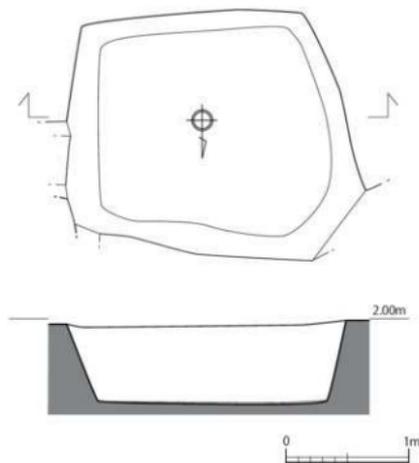
第271図1～5)

2区南西のD20グリッドで検出された土坑である。2区SE020、2区S121に切られる。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈し、底面北側がやや深くなっている。堀方の規模は、長径 $2.9 + a$ m、短径0.9 m、検出面からの深さは0.6 mを測る。埋土は砂質土で、2層に区分される。焼土塊を多量に含み、その形状や含有量で分層しているが、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土とみられるものである。遺物は、瀬戸・美濃産染付端反碗のほか、肥前系染付皿・鉢・鉢が出土している。また、磁器の一部に被熱の痕跡が認められ、18世紀前半～中頃のものを主体に、19世紀前半頃の瀬戸・美濃産の染付端反碗(第270図1)や唐津陶器播鉢(第271図4)などが含まれているのが特徴である。これらには2区SX055や3区S683の出土遺物と接合するもの(第271図4・5)がある。遺構の埋土に焼土塊を多く含み、出土遺物に被熱の痕跡が認められることから、本遺構は火災処理土坑と考えられ

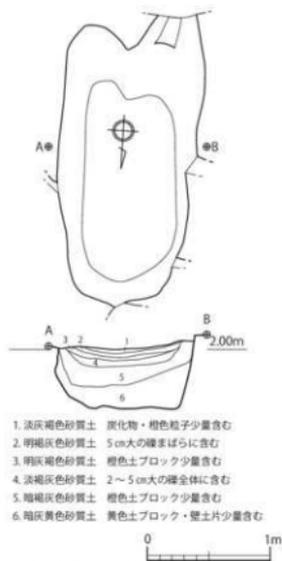


1. 暗褐色砂質土 粗砂混じる 焼土塊(大・小)多量に含む
2. 暗黒褐色砂質土 焼土塊(中)全体に含む

第23図 2区 SK045 遺構実測図(1/40)



第24図 2区 SK157 遺構実測図(1/40)



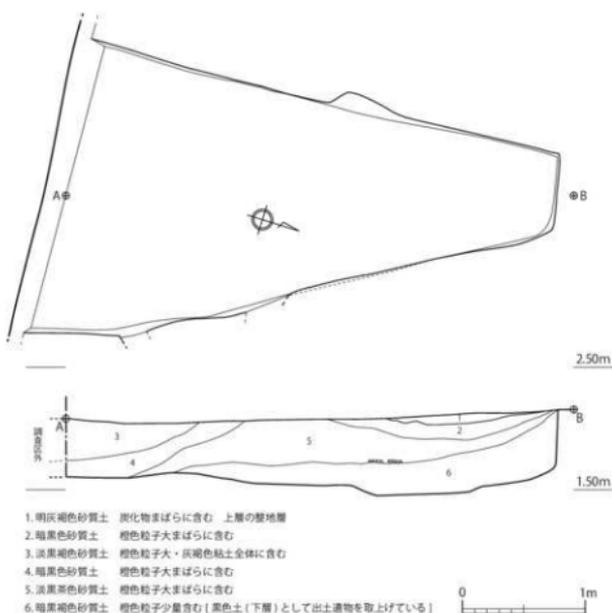
1. 淡灰褐色砂質土 灰化物・褐色粒子少量含む
2. 明褐色砂質土 5cm大の礫まばらに含む
3. 明灰褐色砂質土 褐色土ブロック少量含む
4. 淡褐色砂質土 2～5cm大の礫全体に含む
5. 暗褐色砂質土 褐色土ブロック少量含む
6. 暗灰黄色砂質土 黄色土ブロック・壁土片少量含む

第25図 1区 SK025 遺構実測図(1/40)

る。遺構の埋没年代については、出土遺物の主体が18世紀前半～中頃であることから、この時期と判断される。なお、19世紀前半頃に比定される瀬戸・美濃産の染付端反碗などについては、本遺構を切る19世紀前半頃の2区S121から混入した可能性がある。

2区SK157(第24図、第272～278図)

2区南側中央のC22グリッドで検出された土坑である。2区S007・S011・S119など埋土に焼土や炭化物が多く含む攪乱に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長さ2.3m、短径2.0m、検出面からの深さは0.6mを測る。埋土は焼土ブロックや炭化物を多量に含む単一の焼土層である。攪乱埋土との区別がつきにくく、近現代の遺物が出ることから焼土の範囲を当初は2区S007として掘削したものの、その下位から近現代の遺物と一緒に近世の遺物がまとめて出土し始めたため、ここで遺構検出を再度行い、平面方形の掘方を確認した。近現代の遺物が出土する範囲を攪乱(2区S119)と捉え、この部分を先に完掘した後、残りの埋土にも攪乱が及んでいるおそれがあることから埋土の掘り下げを任意に上位と下位に分け、出土した遺物については上位のものを攪乱(2区S119)に帰属させ、下位のものを本遺構の出土遺物として取り上げた。遺物は、肥前系染付の広東碗、外面青磁碗、筒型碗など(第272図1～16)のほか、同一規格の中国景德鎮系青花皿(第276図1～8)や肥前系古染付の皿(同図9～17)をはじめとして、肥前系染付皿や碗、白磁皿や猪口が、それぞれまとめて出土している(第272～276図)。これらには5点前後のものとは10点前後のものがある。また、陶磁器類の多くには被熱の痕跡が認められ、17世紀後半～18世紀前半頃の粗物と呼べるような一群と同じく16世紀末～17世紀初頭頃のもの为主体をなし、数種類の18世紀末～19世紀前半頃のもので一定量含まれているのが特徴である。遺構の埋土に焼土塊を多く含む、出土遺物に被熱の痕跡が認められ



第26図 1区SK052遺構実測図(1/40)

ることから、本遺構は火災処理土坑と考えられる。遺構の埋没年代は出土遺物の帰属年代から18世紀末～19世紀前半頃と判断されるが、17世紀後半～18世紀前半頃の陶磁器がまとめて出土していることから、この時期に遺構はすでに廃絶していた可能性がある。

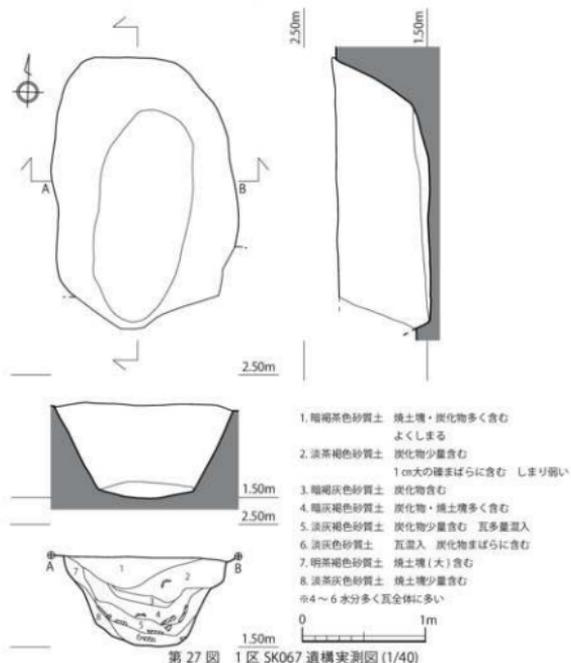
土坑(廃棄土坑)

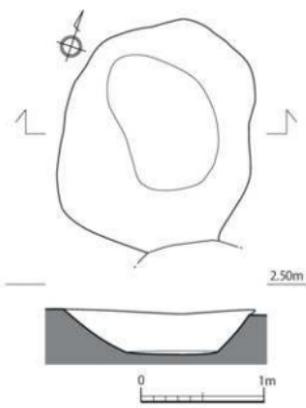
1区SK025(第25図、第279図1～4)

1区南端中央のC25グリッドで検出された廃棄土坑である。1区SK020、1区S029、1区S051に切られる。平面形状は不整楕円形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長軸2.3m、短軸1.1m、検出面からの深さは0.5mを測る。埋土は砂質土で、6層をなす堆積土が上位4層と下位2層に2分される。上位は色調がわずかに異なる薄い堆積土層からなり、下位はブロック土や壁土がわずかに含まれる厚さ約0.4mずつの堆積であることから、下位は人為的に埋め戻された埋土で、上位はその後少しずつ自然に堆積したものと判断される。遺物は、肥前系の染付筒形碗・外面青磁碗、肥前系陶器播鉢など(第279図1～4)が出土しており、遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から18世紀後半～19世紀前半頃と考えられる。

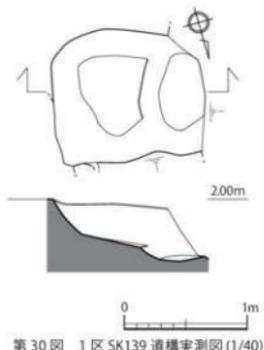
1区SK052(第26図、第279図5～16)

1区南西端のB24グリッドで検出された廃棄土坑である。1区S037に切られ、1区S114を切る。平面形状は北側を短辺とする台形状を呈し、南側は調査区外へと延びる。断面形状は底面に凹凸を有する不整形を呈する。掘方の規模は、短辺0.6m、長辺2.4m、南北の長軸は $4.0+\alpha$ m、検出面からの深さは0.6mを測る。埋土の大半はしまりのない黒色の砂質土で、第1層を除き、5層分層しているが、第2層～5層にかけて不整合な

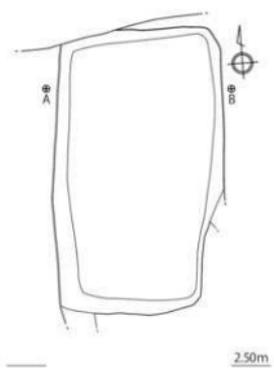




第28図 1区 SK069 遺構実測図 (1/40)

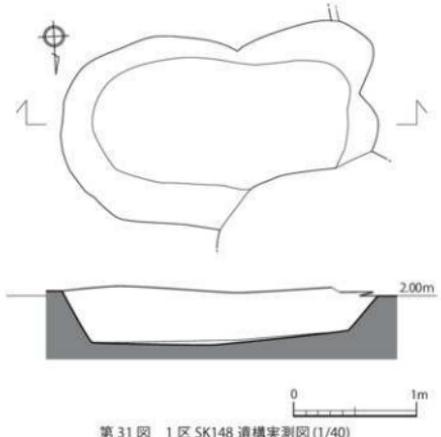


第30図 1区 SK139 遺構実測図 (1/40)



1. 淡灰褐色砂質土 サラサラ しまり強い
 2. 淡灰褐色砂質土 1層よりやや粘性あり
 3. 淡褐色砂質土 1cm大の礫混じる
 4. 明黄褐色砂利 鉄分含む
 5. 淡褐色砂質土 褐色粒子・炭化物含む
 6. 明黄褐色砂質土 0.5～1cm大の礫含む
 7. 暗褐色砂質土 褐色粒子含む
 8. 暗灰褐色砂質土 黄色土ブロック(三和土片)・瓦含む
- ※1～7層が掘返し、6・7層は2層として出土遺物を取上げている

第29図 1区 SK114 遺構実測図 (1/40)



第31図 1区 SK148 遺構実測図 (1/40)

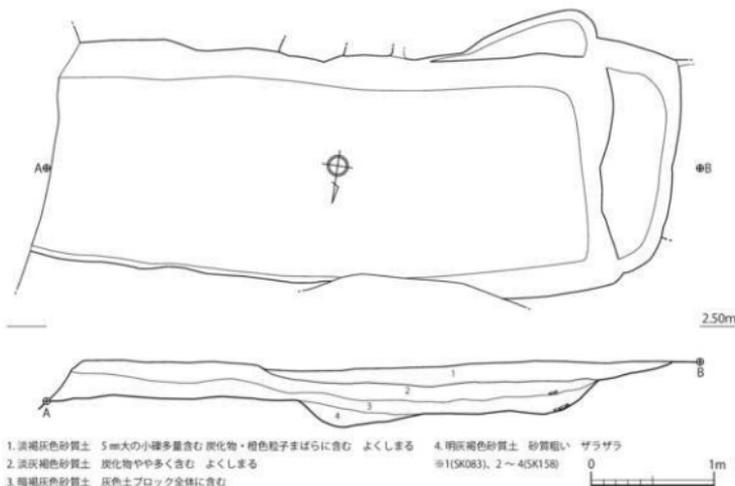
堆積が認められることから、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。なお、第1層は上位の整地層が最終埋没として堆積したものとみられる。遺構の形状が不整形で、出土遺物が多いことから廃棄土坑と考えられる。遺物は、第1層からの出土はなく、その下位の埋土から肥前系の染付端反碗、関西系陶器壺などのほか、黒色土(下層)として報告する第6層からは肥前系の染付端反碗、染付仏飯器など(第279図13～16)が出土しており、出土遺物の帰属年代に大差はない。このため遺構の埋没時期は、19世紀前半～中頃と考えられる。

1区SK067(第27図、第280図)

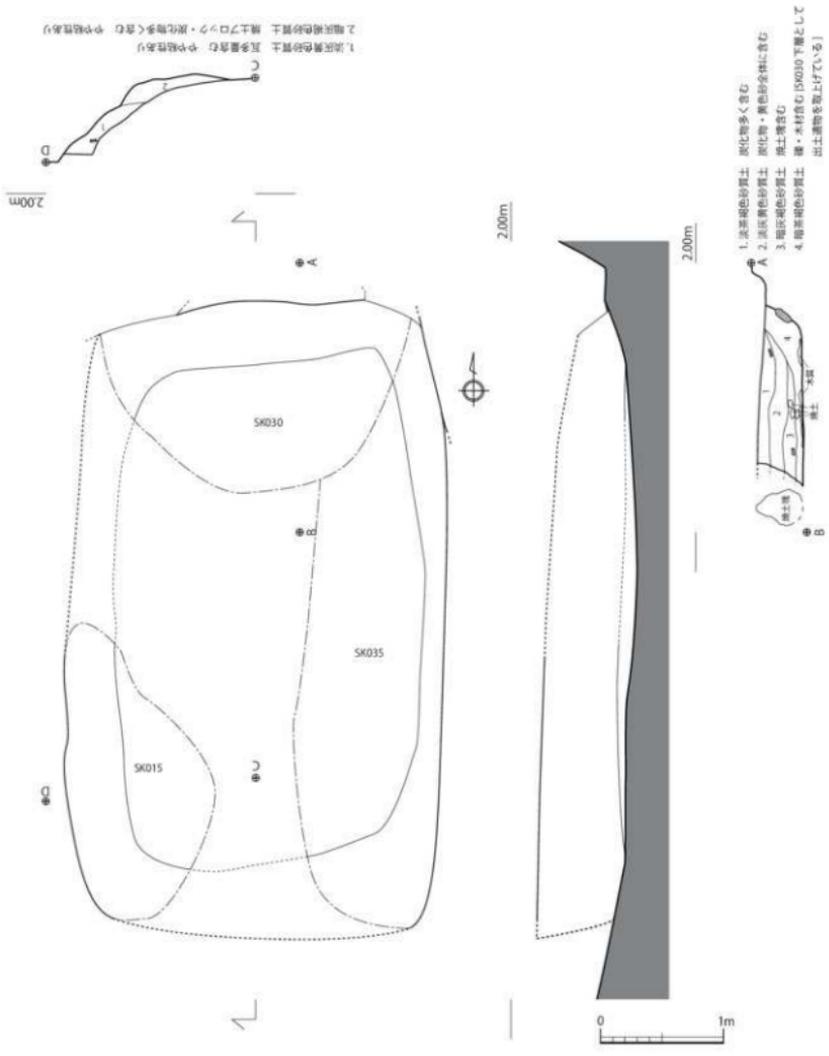
1区中央西端のD23グリッドで検出された廃棄土坑である。南側を掘乱に切られる。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長軸2.2+αm、短軸1.5m、検出面からの深さは0.7mを測る。埋土は砂質土で、8層に区分される。焼土塊、炭化物を含んでおり、第1・2層と第3層、第4～6層と第7・8層の間に不整合な堆積が認められることから、これらは掘り返しの痕跡、もしくは人為的に埋め戻された一連の埋土とみられるものである。出土遺物は多く、廃棄土坑と考えられる。遺物は、掘り返し後の埋土となり得る第1・2層については層位ごとに取り上げた結果、肥前系染付碗、肥前系陶器碗、京焼風陶器碗などが出土している。そのほかは遺構番号で取り上げており、肥前系の染付碗、外面青磁碗、関西系陶器の火入れなど(第280図)が出土しているほか、特に鬼瓦などの瓦片が多く出土している。両者での時期差は明確ではなく、遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から18世紀中頃～後半頃と考えられる。

1区SK069(第28図、第281・282図)

1区中央南西寄りのD24グリッドで検出された廃棄土坑である。南東隅を掘乱に切られる。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長軸1.8+αm、短軸1.7m、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土には大量の遺物が含まれており、廃棄土坑と考えられる。遺物は、コバルト軸の関西系染付急須や源内焼皿、福岡産の陶器胎壺(第281図6)などが出土している。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は、19世紀中頃から後半と考えられる。



第32図 1区SK083・SK158 遺構実測図(1/40)



第 33 図 2 区 SK015・2 区 SK030・2 区 SK035 遺構実測図 (1/40)

1区 SK114(第29図、第283図1～10)

1区南西C 24グリッドで検出された廃棄土坑である。1区SK052に切られる。平面形状は長方形、断面形状はほぼ方形を呈し、堀方の規模は、長軸は2.3 m、短軸1.4 m、検出面からの深さは0.8 mを測る。埋土は大きく3層に区分され、それぞれに不整合な堆積が認められることから、最低でも2回の掘り返しが行われたものと判断され、最終的には自然に堆積したものとみられる。第1～5層は砂質土で、粗砂を含む細かな堆積であり、第6・7層は橙色粒子と小礫を含む砂質土、第8層は三和土片を含む砂質土からなる。遺物は、肥前系染付丸碗、外面青磁碗など(第283図1～10)が出土しており、遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から18世紀後半頃と考えられる。

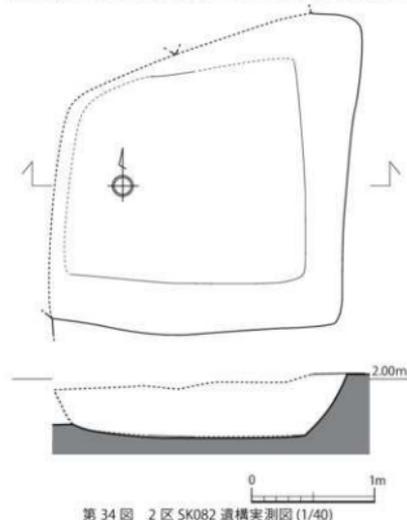
1区 SK139(第30図、第283図11～20)

1区南側中央のC 25グリッドで検出された廃棄土坑である。掘削の1区S029、1区S007に切られ、1区SK020を切る。掘削に切られるため全容は不明であるが、平面形状は隅丸方形もしくは長方形で東側にテラスを有し、断面形状は逆台形を呈するものとみられる。堀方の規模は、長軸 $1.2+a$ m、短軸 $0.5+a$ m、検出面からの深さは0.4 mを測る。遺物は、肥前系染付広東碗、塀産播鉢、瓦質土器火消壺など(第283図11～20)のほか、小片のため図示できていないが、1810年代頃に比定される内外面に菊散し文様を有する肥前系の染付碗片が出土している。遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から19世紀前半頃と考えられる。

1区 SK148(第31図、第284図1～10)

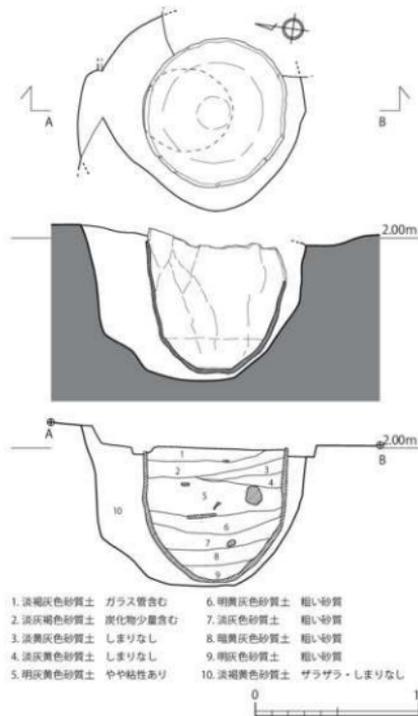
1区北東のG 27グリッドで検出された廃棄土坑である。第2調査面で検出した1区SK339とほぼ同じ位置にあり、主軸もほぼ同じである。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長軸2.5 m、短軸1.5 m、検出面からの深さは0.5 mを測る。

遺物は、肥前系染付碗、京焼風陶器碗、関西系陶器播鉢、土師質土器焙烙など(第284図1～10)が出土している。遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から18世紀前半～中頃と考えられる。なお、先述の1区SK339からは17世紀後半から18世紀中頃の遺物が出土しており、両者の埋没年代は極めて近い。





第 36 図 1区 SX072 遺構実測図 (1/30)



第 37 図 1区 SX093 遺構実測図 (1/30)

1区 SK083・1区 SK158

(第 32 図、第 284 図 11～19)

1区中央北寄りで検出された遺構である。東側と北側の一部を攪乱に切られ、上位を明治以降の整地層である黒灰色土で覆われる。また、1区 SK075 を切る。平面形状は長方形で、断面形状は底面に凹凸を有する不整形を呈する。堀方の規模は、長軸 5.0+α m、短軸 1.8 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。遺構検出時には、1区 SK083 が 1区 SK158 を切る別遺構と判断し調査を進めた結果、土層図(第 32 図)から分かるように、堆積土の新旧関係は正しいものの別遺構として捉えるものではなく、1区 SK158 の最終埋没土として位置づけられるものである。埋土は砂質土で、4層に区別される。各層にブロック土や炭化物を多量に含んでおり、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土と判断される。土坑底部の形状が不整形で凸凹を有することから廃棄のための土坑とみられる。遺物は、第 1層を 1区 SK083 として取り上げ、それ以外は 1区 SK158 又は出土層位で取り上げを行っている。1区 SK158 の 3層からは肥前系染付端反碗や、関西系陶器とみられる灯火具などが出土している。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没年代は、19世紀前半～中頃と考えられる。

2区 SK015・2区 SK030・2区 SK035

(第 33 図、第 285・286 図・第 287 図 1～3)

2区西側中央の F 19 グリッドで検出された廃棄土坑である。攪乱に切られ、当初は 3 基の別遺構として調査を行ったものである。調査の結果、全体の平面形が隅丸長方形の一つの土坑であったものとみられ、堀方の規模は、長軸 6.0 m、短軸 3.0 m となり、検出面からの深さは 0.7 m を測る。埋土は共通して砂質土で、焼土塊や炭化物を多量に含み、底面の高さもほぼ同じであることから判断したものである。遺物は、18世紀前半～後半頃のものが主体で、2区 SK015からは 18世紀中頃～後半頃に比定される肥前系色絵鉢(第 285 図 1)など、2区 SK030からは 18世紀後半頃の刷毛目唐津陶器の鉢をはじめ、肥前系染付碗、皿、肥前系陶器皿、絵唐津の火入れ、関西系陶器碗、瑠璃軸の皿、京焼風陶器皿など(第 285 図 2～11)、2区 SK035からは 18世紀

後半頃の外面青磁筒形碗をはじめとして、刷毛目唐津陶器の皿や唐津陶器の台付皿、さらには瓦側面に「伏見住藤原朝臣久吉画」「高島助ノ丞」のへら書きの文字がある瓦瓦（第 286 図 13・14）などが出土している。これらの帰属年代から、当初は 3 基の別遺構として調査を行った遺構群の埋没年代はすべて 18 世紀後半頃となり、一つの大きな土坑と位置付けて大過ないものと考えられる。

2 区 SK082(第 34 図、第 287 図 4～13・第 288・289 図)

2 区南西の B 20 グリッドで検出された廃棄土坑である。2 区 S019 に切られ、2 区 S107 を切る。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈するものとみられる。堀方の規模は、長径 $2.2+a$ m、短径 $2.1+a$ m、検出面からの深さは 0.5 m を測る。遺物は、肥前系の染付端反碗、広東碗、中国徳化窯の白磁小碗、土師質の焜炉や風などが出土している。これらには 3 区 S894 出土遺物と接合する肥前系陶器の鉢（第 289 図 6）がある。遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から 19 世紀前半～中頃と考えられる。

2 区 SK122(第 35 図、第 290・291 図)

2 区中央東寄りの F 22 グリッドで検出された廃棄土坑である。掘削の 2 区 S094 に切られる。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長径 2.3 m、短径 1.4 m、検出面からの深さは 0.6 m を測る。遺物は、肥前系染付碗・蛇ノ目目紋高台付染付皿、瀬戸・美濃産の染付碗（第 290 図 6）、京焼の「錦光山」の刻印がある火入れ（第 291 図 1）、志野焼の向付（第 290 図 11）などが出土している。遺構の埋没時期は、出土遺物の帰属年代から 19 世紀前半～中頃と考えられる。

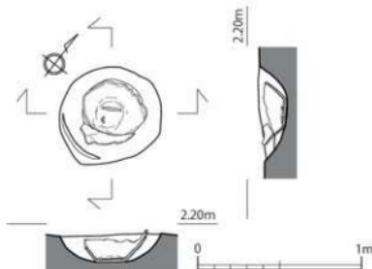
不明遺構（埋喪遺構）

1 区 SX072(第 36 図、第 292 図 1)

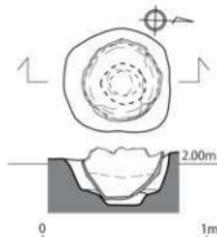
1 区中央南寄りの D26 グリッドで検出された埋喪遺構である。堀方の平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長径 0.7 m、短径 0.6 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。堀方の中央に土師質土器の裏がほぼ水平に埋置されており、底部から器高 20 cm 程が残存する。裏内部の埋土を採取して理化学分析を行った結果（詳細は第 VI 章を参照）では明確な寄生虫卵は検出されなかったものの、内面には黄色の付着物が残存しており、便所遺構の可能性が考えられる。出土遺物が少ないため時期は不明である。

1 区 SX093(第 37 図、第 292 図 2～13)

1 区北東の H27 グリッドで検出された埋喪遺構である。1 区 SE304 を切る。堀方の平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈し、掘方の規模は、長軸 1.4 m、短軸 $1.1+a$ m、検出面からの深さは 1.0 m を測る。埋喪は掘方内のやや南側に埋置されており、陶器製で最大径 $0.8+a$ m 高さ $0.9+a$ m を測る。付着物など明確には確認できず、陶器の裏を使用する利点は液体が漏れないことであることを踏まえれば、水溜め用の裏として埋置さ



第 38 図 1 区 SX211 遺構実測図 (1/30)

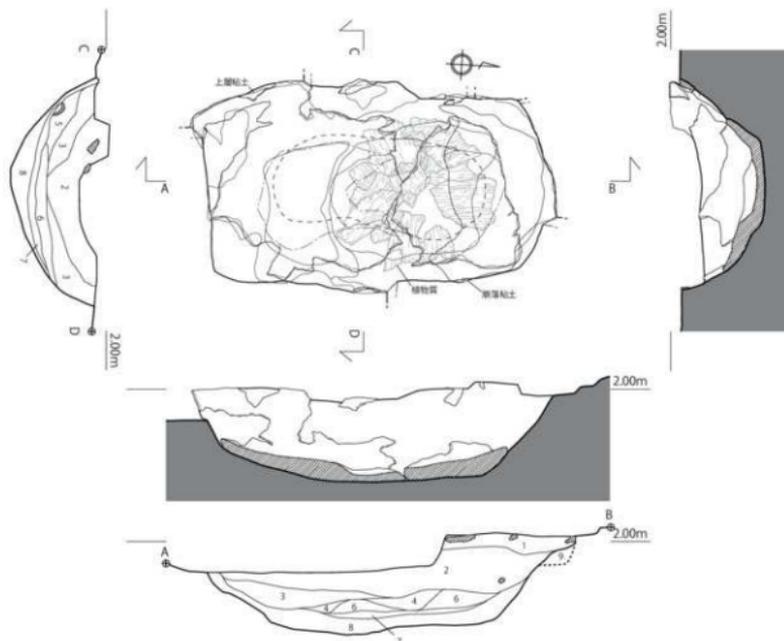


第 39 図 2 区 SX118 遺構実測図 (1/30)

れたものとみられる。遺物は、1区 SX093 外として取り上げた堀方(裏込土)から肥前系の陶器鉢や、小片のため図示できなかったものの内面に透明釉が掛けられた土師器皿(施釉かわらけ・土師質土器小皿C)が出土し、①層として取り上げた裏内の埋土からは瀬戸・美濃産染付端反碗や瀬戸・美濃産コバルト軸の小坏などが出土している。これらの出土遺物から、遺構の構築時期は19世紀前半～中頃、廃絶時期は19世紀後半以降と考えられる。

1区 SX211(第38図、第293図)

1区中央東端のF27グリッドで検出された埋裏遺構である。1区 S241、1区 S262 を切る。堀方の平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、直径約0.6m、検出面からの深さは0.2mを測る。堀方の中央に土師質土器裏が埋置されており、底部から0.2mの高さが残存する。裏の内面に黄白色の付着物が確認できることから、便所遺構とみられる。裏の底部内面に棒状の青銅製品と不明鉄製品が癒着して出土した。そのほか裏内から関西系の陶器皿などが出土して主なり、遺構の埋没時期は18世紀代以降と考えられる。



- | | | |
|------------|------------------|--------------|
| 1. 淡灰黄色砂質土 | 橙色粘質土ブロック大含む | 壁地による埋坪か |
| 2. 淡黄灰色砂質土 | 灰黄色土ブロック・炭化物多量含む | 廃絶後の埋土 |
| 3. 明灰黄色砂質土 | 2層とはほぼ同質 | 鉄分まばらに含む |
| 4. 明灰色砂質土 | 橙色粘質土ブロック大含む | 天井若しくは壁土の崩落土 |
| 5. 暗灰褐色砂質土 | やや粘性あり | 遺物・粘質土ブロック含む |
| 6. 明黄褐色粘質土 | 橙色粘質土ブロック | 貼り替え後の床面 |
| 7. 明灰色粘質土 | やや砂質あり | |
| 8. 明黄褐色粘質土 | 橙色粘質土ブロック | 壁土 |
| 9. 暗灰茶色砂質土 | 粗い砂質 | 下層 |



第40図 1区 SX040 遺構実測図(1/30)

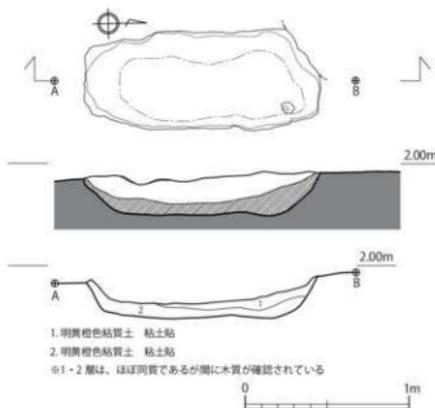
2区 SX118(第39図、第294図)

2区東端D23グリットで検出された埋裏遺構である。掘方の平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、直径0.6m、検出面からの深さは0.3mを測る。底部の部分はやや深く掘り込まれている。堀方の中央に土師質土器の裏が埋置されており、底部から0.3m程の高さが残存する。裏の内面に付着物等は認められない。出土遺物は僅少であり遺構の時期は不明である。

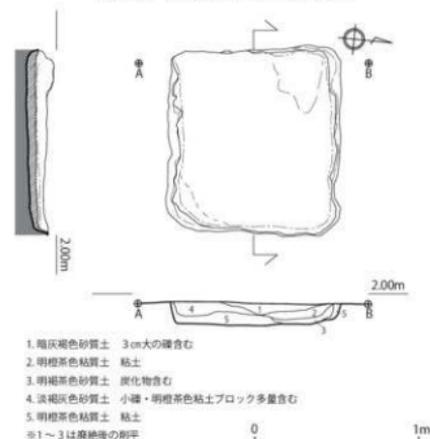
不明遺構(粘土貼土坑)

1区 SX040(第40図、第295図)

1区北東のF27グリットで検出された粘土貼土坑である。1区S094、1区S172に切られる。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長軸2.2m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.6mを測る。



第41図 2区 SX050 遺構実測図(1/30)



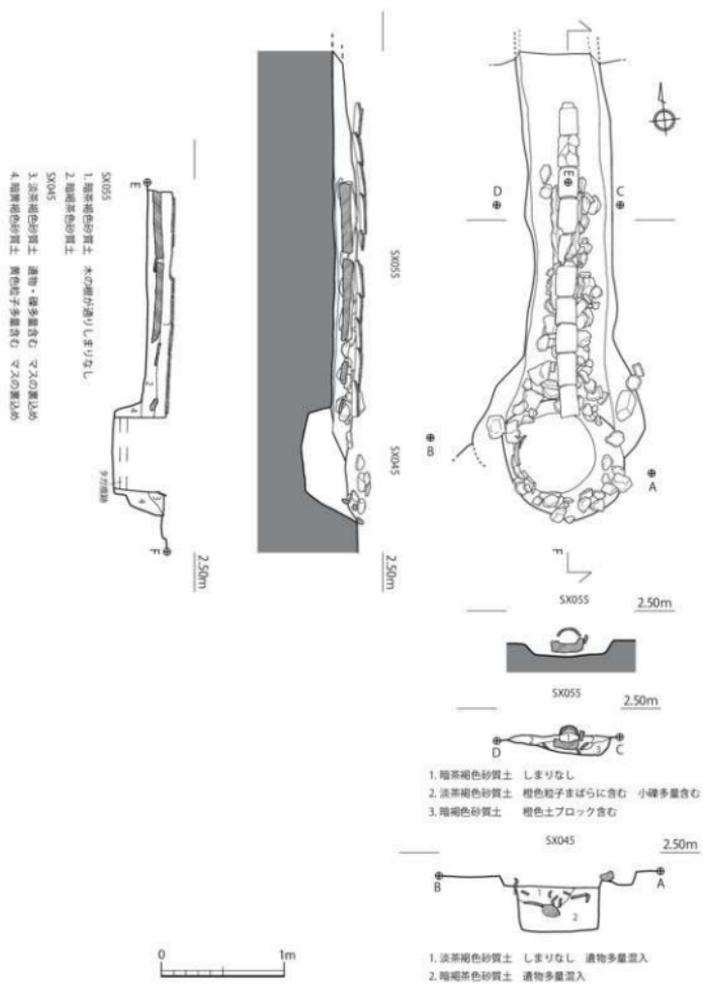
第42図 2区 SX055 遺構実測図(1/30)

土坑内面に黄褐色の粘土が貼り付けられており、その厚さは側面で2～5cm、底面で10cmを測る。底面の粘土は2層に分けられ(第40図第6層と8層)、その間に粘質土層(第40図第7層)と藁状の植物質の材が挟まれることから、底面の粘土は貼り直されたものと判断される。土坑の埋土は炭化物を多量含む砂質土からなり、床面付近では崩落した粘土とみられる塊が多量に堆積する(第40図第4層)。これと同様な遺構は今回の調査において15基確認されており、これらの遺構が機能していた段階では土坑内に埋土は存在せず、粘土の壁に囲まれた空間が保たれていたものと判断される。隣接する第19次調査地では木組みの内側に粘土を貼った事例で、地下式土坑として機能していた可能性が指摘されているものがある。また、全国的にも類例はあるものの、遺構の性格を特定できるものは僅少であり、比較検討は現状で困難といえる。

遺物は、肥前系の糸切細工成形の青磁手塩皿、タタキ目のある焙烙などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は17世紀末～18世紀前半頃と考えられる。

2区 SX050(第41図、第296図1・2)

2区南東のD22グリットで検出された粘土貼土坑である。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長軸1.4m短軸0.5m検出面からの深さ0.3mを測る。土坑内全面に黄褐色粘土が貼られ、その厚さは底部で10～20cm、側面の残存部では約5cmを測る。底部には1区SX040と同じように植物質の材を挟んで上下に粘土層が分かれる。出土遺物は僅少だが、粘土



第 43 図 1 区 SX045・1 区 SX055 遺構実測図 (1/40)

を覆う埋土から肥前系染付碗、銅製キセルなどが出土している。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は、18世紀前半以降であると考えられる。

2区 SX055(第42図、第296図3・271図4)

2区南西端のC19グリットで検出された粘土貼土坑である。遺構の東側の大半を2区調査時に検出し、西側0.2mほどの残り部分を3区調査時に検出した。平面形状はほぼ正方形で、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、一辺約1m、検出面からの深さは0.15mを測る。一部削平により消失しているが、土坑内全面に橙灰色粘土が貼られ、その厚さは底面で約8cm、側面では約3cmを測る。出土遺物は僅少だが、上層として取り上げた堆積土(第42図第1～3層)から肥前系染付皿(第296図3)が出土しているほか、第4層からは19世紀前半頃の肥前系唐津陶器搦鉢(第271図4)が出土し、2区SK045出土遺物と接合している。このことから遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

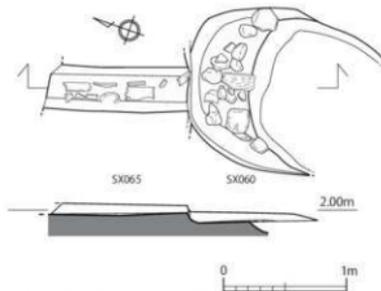
不明遺構(その他)

1区 SX045・1区 SX055(第43図、第297・298図)

1区中央西寄りのF24グリットで検出された樹と桶状の遺構である。1区SX045は、堀方の平面形状は不整形円形で、直径約0.9mを測り、断面形状は逆台形で、検出面からの深さは約0.5mを測る。また、堀方の中央部分と周囲の埋土に差異が認められ、平面形状が直径0.65mの円形の遺構を検出した。土層観察の結果、この円形の遺構は円筒形をなし(第43図A-B断面第1・2層)、その壁面には裏込め土とみられる堆積土を確認した(第43図E-F断面第3・4層)。両者の堆積土の間には平瓦が立てられた状態で部分的に出土し、帯状に木質が残存する。また、円形の遺構底面にも木質の形跡が認められたことから、1区SX045は、木製の桶を埋設した樹状の遺構と判断されるものである。

1区SX055は桶状遺構であり、北側を掘削しに切られる。1区SX045の北側に接続し、北方向へ延びる。掘方の残存する長さは3.0+ a m、幅は約0.6m、深さ約0.25mを測る。掘方の中心部に桶状の石製品が並べられ、これを覆うように丸瓦が設置されている。北側の桶状の石製品は北側に向かって傾斜し、中央から南側は概ね平坦である。丸瓦は10個体が連結した状態で残存し、長さは2.5mに及ぶが、下位に配置された桶状の石製品は長さ0.6mのものが2個体しか確認できない。石製品のない部分まで丸瓦が及んでいることから、石製品のない部分には、木製など有機質の製品が埋設され桶を形成していたものとみられる。1区SX045と同SX055は両者が接続し機能していたものと判断される。これは、埋土の土層観察から証明でき(第43図E-F断面)、樹状遺構の1区SX045を構築した後に桶状遺構の同SX055を接続したことが分かる。本遺構は水溜用の桶に導排水のための桶が連結する水利施設と判断される。

出土遺物は、1区SX045外として取り上げた堀方(第43図E-F断面第3・4層)から肥前系染付端反碗や広底碗、関西系陶器の小杉碗など、1区SX055の2層(第43図E-F断面第2層)として取り上げた1区SX055の堀方から肥前系染付鉢、関西系陶器の碗、皿、小丸菊の軒丸瓦など、1区SX045や1区SX055の遺構記号で取り上げたものに肥前系染付端反碗などがある。これらの出土遺物の帰属年代から、遺構の構築及び廃絶時期は、19世紀前半～中頃と考えられる。



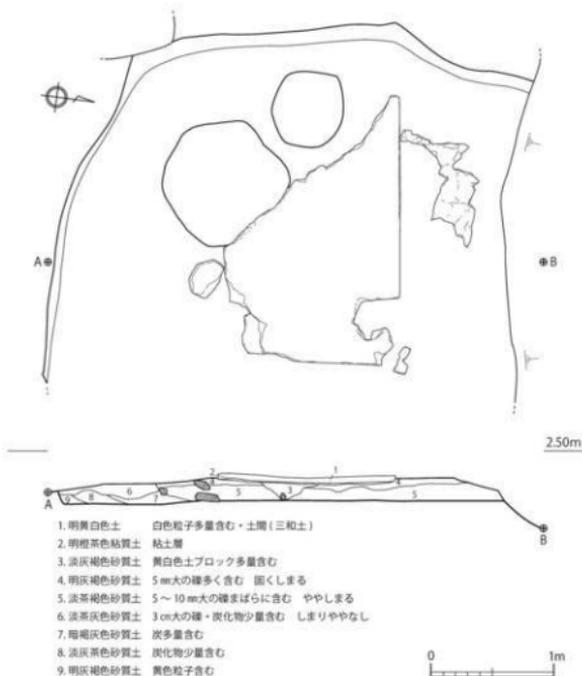
第44図 1区SX060・1区SX065遺構実測図(1/40)

1区 SX060・1区 SX065(第44図、第299図)

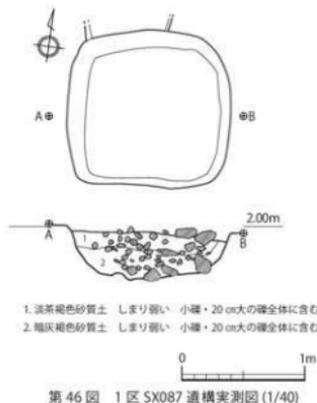
1区中央北端 H24 グリッドで検出された遺構である。1区 SX060・SX065 ともに上位を掘乱により削平されている。1区 SX060 は土坑状の遺構で、1区 S174 に南側を切られる。平面形状は不整形円で、断面形状はレンズ状を呈するとみられる。直径約 1.2 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。1区 SX065 との接続部で丸瓦が逆位で出土した。1区 SX065 は溝状遺構で、長さ $1.1 + a$ m、幅 0.4 m、検出面からの深さは 0.1 m を測る。1区 SX060 の北側で接続し、調査区外へと延びる。その中央部付近で丸瓦 3 個体が並んだ状態が確認され、樋を構成していたものとみられる。このことから、1区 SX060 の同 SX065 との接続部に置かれた丸瓦も樋の一部とみられ、両者は連結する遺構で、その機能は 1区 SX045・SX055 と同様な水利施設と判断される。出土遺物は僅少で、丸瓦、軒丸瓦が大半を占めるため、遺構の構築・廃絶時期は不明である。

1区 SX079(第45図、第300図)

1区南東の C 26 グリッドで検出された壑穴状の遺構である。1区 S108、同 S109 に切られる。堀方の規模は、一辺 3.6 m 以上で、検出面からの深さは 0.2 m を測る。中央付近には三和土が方形形状に広がり、北辺で 2.2 m、東辺で 0.7 m 程度が残存する。三和土の厚さは約 0.1 m を測り、黄白色の素地に 5 mm 程度の白色粒子を主体とした砂粒が多量混入し、固く締め固められている(第45図第1層)。三和土の下は薄い粘質土の層(同図第2層)と、その下位には固くしまった砂質土の層(同図第4・5層)が確認され、三和土を敷く前に整地が行われていたものと判断される。



第45図 1区 SX079 遺構実測図(1/40)



また、三和土の理化学分析を行った結果、三和土(同図第1層)は、表面と下層に分けられる。ともにカルシウムの密度が高く検出されているが、下層のほうがより密度が高く検出されており、突き固めた結果としてカルシウム密度が高く漆喰状に固結していると推定されている(詳細は第VI章を参照)。このことから、本遺構は建物の一部を構成する土間である可能性が指摘される。

遺物は、2層から肥前系染付筒形碗のほか、肥前系染付小坏、土師質土器焙烙などが出土しており、その所属年代から、18世紀後半以降に構築されたものと考えられる。

1区 SX087(第46図、第301図)

1区中央北東寄りのH 24 グリッドで検出された土坑状の遺構である。上位を攪乱により削平されている。平面形状は隅丸のほぼ正方形で、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は、長軸1.2 m、短軸1.2 m、検出面からの深さは0.4 mを測る。埋土はしまりの弱い砂質土で、2層に区分される。

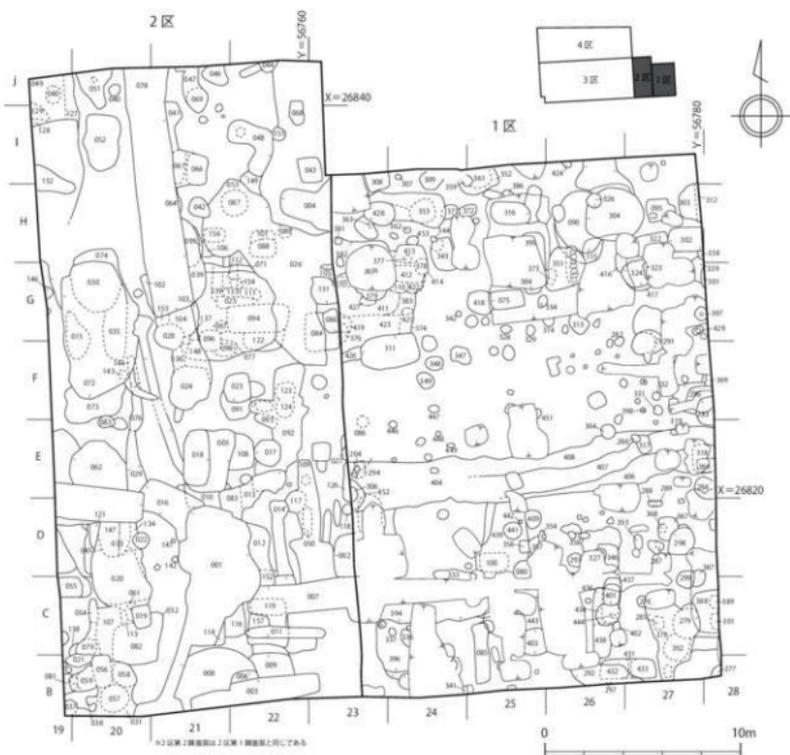
5～20 cm大の礫が大量に含まれる。遺構の用途は不明であるが、埋土の礫を廃棄とみなすか、栗石のように人為的に埋められたものとするかで評価は大きく異なる。また、遺構の年代も然りで、出土遺物が構築年代と埋没年代いずれかを示すものとなる。遺物は、肥前系染付碗や陶胎染付碗をはじめ、景德鎮窯産青花碗や漳州窯系青花碗、そして土師質土器焙烙や軒丸瓦片などが出土している。その中には、1区 SK085 から出土した肥前系の青磁香炉と接合するものがある。これらの所属年代から導き出される遺構の時期は18世紀前半頃と考えられる。

(2) 第2調査面

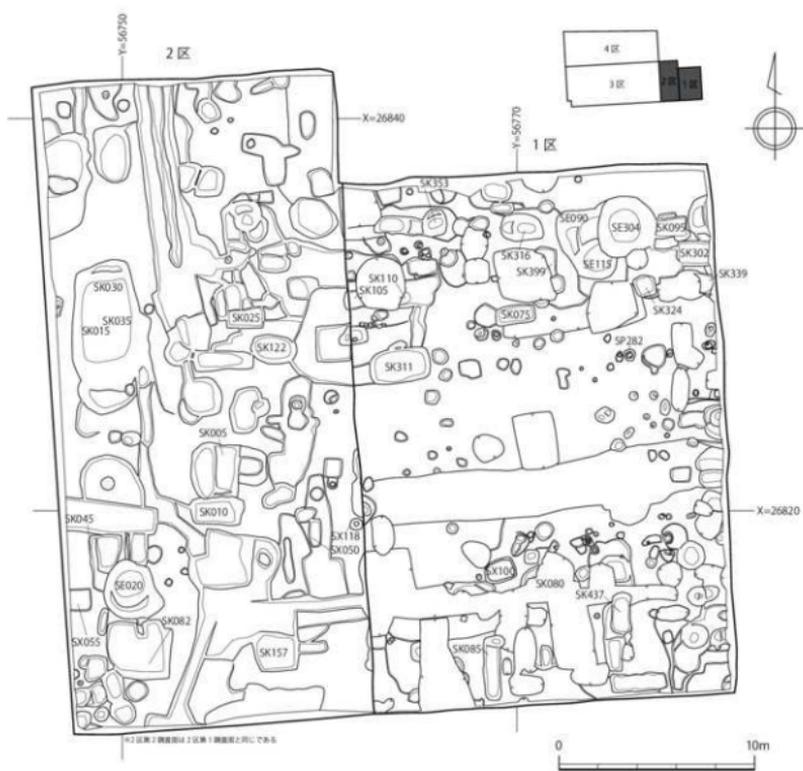
調査の概要

第2調査面は第1調査面と同一地点での2回目の調査で、第1調査面の遺構群を検出した堆積土を機械によって除去したのちに新たに確認された遺構を対象としたものである。また、2区については攪乱により1区の調査面と深さが大きく異なるため、前節の調査概要で述べたとおり、当該調査面に相当する遺構はない。このため、ここでは1区の調査を報告するものとする。

第2調査面の主な遺構は、井戸跡、火災処理土坑、廃棄土坑、柱穴、粘土貼土坑であり、その時期は、17世紀中頃～18世紀中頃である。なお、第2調査面でも19世紀代の遺構を確認しているが、これは第1調査面では認識できなかったものであり、本来は第1調査面から掘り込まれていたものとみられる。

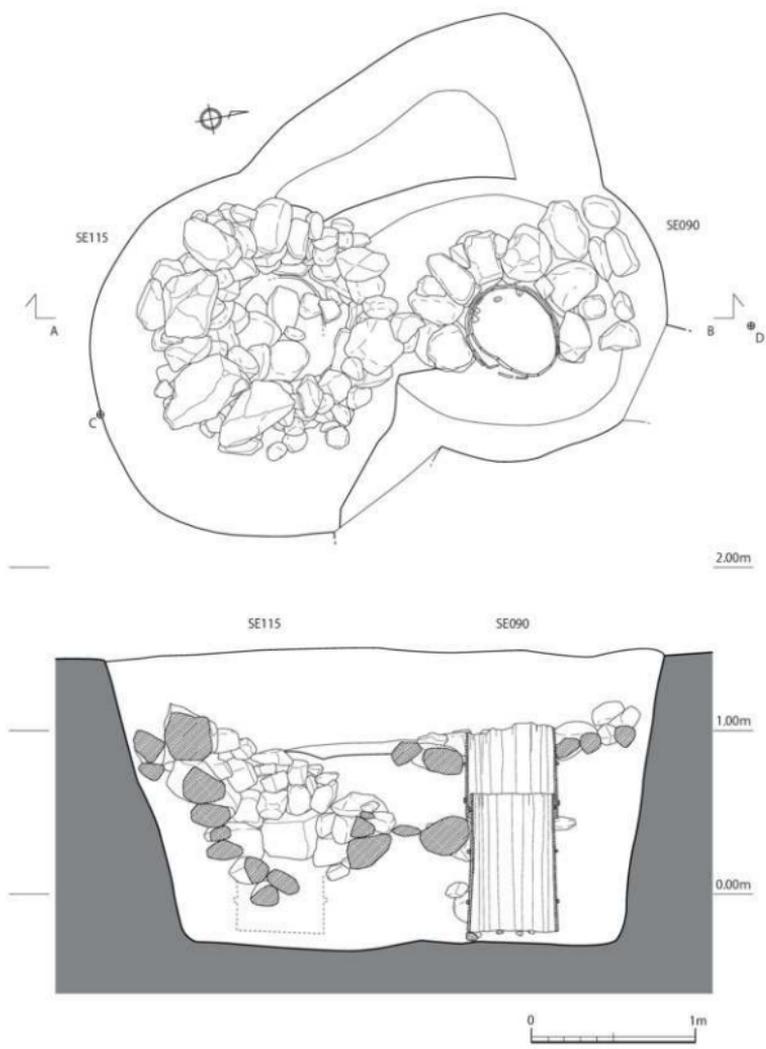


第47図 1・2区第2調査面遺構配置図(1/250)

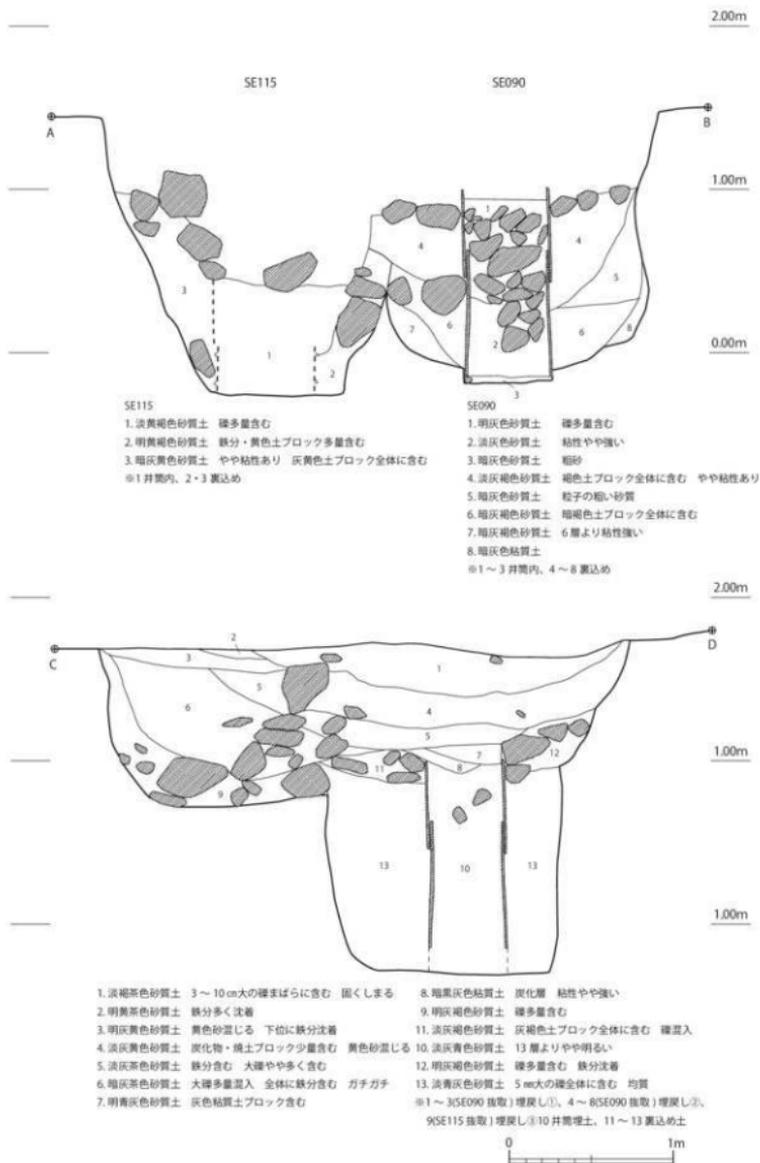


※2区第2調査面は2区第1調査面と同じである

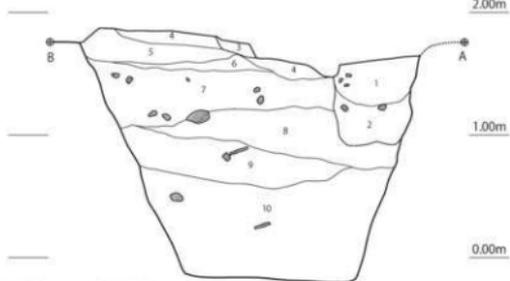
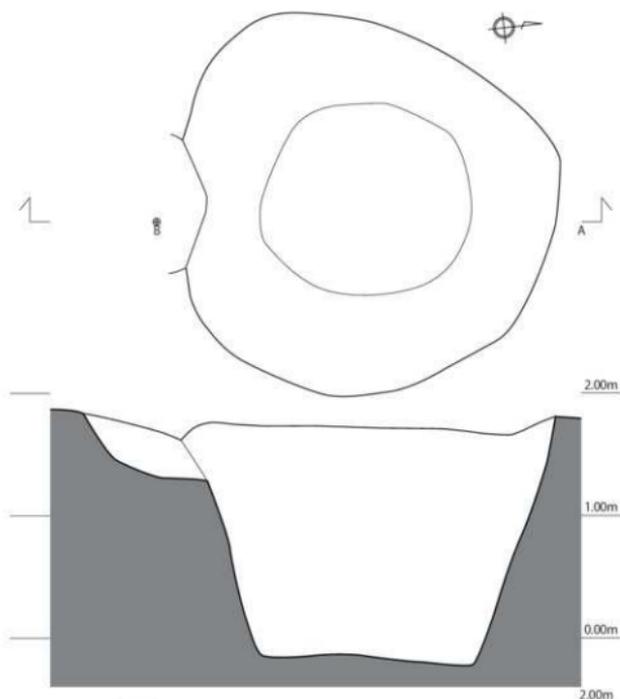
第48図 1・2区第2調査面全体遺構図(1/250)



第 49 図 1 区 SE090・1 区 SE115 遺構実測図① (1/30)



第50図 1区SE090・1区SE115遺構実測図②(1/30)



1. 暗褐色砂質土 1～5 cm大の礫含む
2. 暗灰褐色砂質土 5 cm大の礫・紫色土ブロックまばらに含む
3. 暗褐色砂質土 焼土ブロック大・炭化物多量含む
4. 暗茶褐色砂質土 焼土ブロック小まばらに含む
5. 淡茶褐色砂質土 焼土ブロック大・1 cm大の礫まばらに含む
6. 淡茶褐色砂質土 粗砂混じる 焼土ブロック小・炭化物まばらに含む
7. 淡黄灰色砂質土 5～20 cm大の礫全体に含む
やや粘性あり 粗砂混じる 鉄分沈着
8. 暗灰色砂質土 粘性あり 黄色土ブロック大まばらに含む
9. 淡灰色砂質土 粘性あり 1～5 cm大の礫・遺物含む
10. 暗灰白色砂質土 粘性強い 灰白色土ブロックまばらに含む(礫出土)



第 51 図 1 区 SE304 遺構実測図 (1/40)

井戸跡

1 区 SE090 (第 49・50 図、第 313 図)

1 区北東 H26 グリッドで検出された井戸跡である。1 区 SE304 に切られ、同 SE115 を切る。東側の一部が削平されている。平面形状は不整形で、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は、直径 $1.8+a$ m、検出面からの深度は 1.7 m、最深部の標高は -0.2 m を測り、調査時における滞水面は標高 0.3 m ~ 0.5 m で推移していた。検出面から 0.4 m 程の深さまで掘り返しが行われており (第 50 図 C-D 断面第 1 ~ 8 層)、その下位に石積みの最下段とみられる人頭大の礫群と木製の桶枠を確認した。桶枠は 2 段重ねで、長さ約 90 cm、幅 6 ~ 9.5 cm、厚さ 1.5 cm 程の杉材を 24 枚使用し、タガで 3 力所を固定している。桶枠の外径は上端が 50 cm、下端が 54 cm を測り、井筒内部には多量の礫や瓦片が廃棄されていた。遺物は、井筒内からの出土が大半で、肥前系の染付丸碗や土師質土器小皿をはじめ、唐津焼皿、京都系土師器皿、白磁碗 V 類、瓦器碗、軒平瓦などが出土している。掘り返しの埋土や裏込め土からは時期が判明する遺物は出土していない。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀中頃~後半頃と考えられる。

1 区 SE115 (第 49・50 図)

1 区北東の H26 グリッドで検出された石積みの井戸跡である。1 区 SE090 に切られる。平面形状はほぼ円形で、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は、直径 $2.2+a$ m、検出面からの深度は 1.8 m を測る。本遺構に重複する 1 区 SE090 の上位を掘り返した際の掘削が及ぶ (第 50 図 C-D 断面第 6 層など)。井筒は石積みで、10 ~ 50 cm 程の石を積み上げて構築される。その最下部には木材片が残存し、井筒埋土の土層観察の結果、桶を固定するタガの痕跡が認められることから、井筒の最下部に径約 55 cm 程度の桶枠があったものと判断される。

井戸枠内には大小の礫が多量に混入しており、廃棄されたものとみられる。遺物が僅少で、時期を特定できるものが出土していないため、遺構の時期は不明であるが、1 区 SE090 との切り合い関係から 18 世紀中頃~後半頃より古いことは間違いない。

1 区 SE304 (第 51 図、第 314 図)

1 区北東の H26 グリッドで検出された井戸跡である。1 区 SK093 に切られ、同 SE090 を切る。平面形状は円形で、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は、径 3.1 m、深さ 2.0 m を測る。埋土はブロック土をまばらに含む砂質土で、第 1・2 層を除き、8 層に区分される。最下層の第 10 層を除き、不整合な堆積が認められることから、人為的に埋め戻された一連の埋土であると判断されるものである。また、第 1・2 層は土層の堆積だけでなく、掘方にも不整合があることから、別遺構の可能性もある。本遺構は、井戸枠は堀方の深度が 2.0 m と深く、湧水が認められることから井戸跡と判断される。遺物は、肥前系の外面青磁碗、景徳鎮窯系染付碗、肥前系陶器の水指、木製の桶 (第 314 図 9) などが出土している。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は、18 世紀後半頃と考えられる。

土坑 (火災処理土坑)

1 区 SK080 (第 52 図、第 315 図 1 ~ 5)

1 区中央南の D 25 グリッドで検出された土坑である。攪乱によって南側と中央部の上位の大半が削平されており、西側と東端、中央部の底面近くのみが残存している。残存している部分が少なく正確な平面形状は不明であるが、断面形状は逆台形を呈している。堀方の規模は、長軸は $2.6+a$ m、短軸は $0.8+a$ m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は砂質土で、6 層に区分される。炭化物や焼土塊、黄色土ブロックを多量に含んでおり、その多寡で分層しているが、人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。大半を攪乱によって削平されているため僅少だが、肥前系染付皿や、福岡産陶器摺鉢、水指などの遺物が出土している。出土した遺物に被熱の痕跡は認められないが、埋土に炭化物や焼土塊を多く含むため、火災処理土坑と判断される。出土遺物

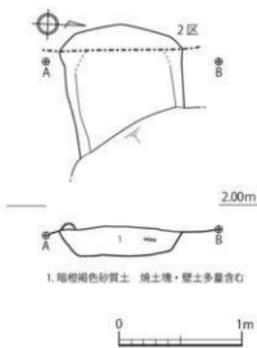
の帰属年代から、遺構の埋没時期は、17世紀末～18世紀前半頃と考えられる。

1区SK105(第53図、第315図6)

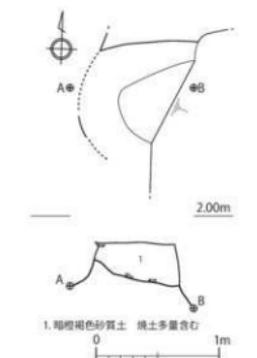
1区北西端のG23グリッドで検出された土坑である。上位の大半や東側を近代の井戸に切られ、西側の一部は2区で検出した。平面形状は隅丸長方形を呈すると考えられ、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は、長軸0.8+αm、短軸1.0m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は砂質土で、焼土塊、壁土を多量に含む単一土層である。遺構の残存状況が悪く遺物が僅少で、壁土(第315図6)や肥前系染付の小片などが出土しており、一部に被熱が認められる。埋土に炭化物や焼土塊を多く



第52図 1区SK080遺構実測図(1/40)



第53図 1区SK105遺構実測図(1/40)



第54図 1区SK110遺構実測図(1/40)

含み、壁土や一部被熱した遺物が出土していることから、火災処理土坑と判断される。明確な時期の判明する遺物は出土していないが、線描きと濃みで唐草文が描かれた肥前系染付の小片が出土しているため、遺構の埋没時期は18世紀代以降と考えられる。

1区SK110(第54図、第315図7～10)

1区北西のG24グリッドで検出された土坑である。1区SK422を切る。1区SK412と攪乱に大半を切られているため、北側の一部のみが残存する。このため、正確な形状は不明である。残存している堀方の規模は、長軸0.8+αm、短軸1.0+αm、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土で、焼土塊を多量に含む単一土層である。遺物は僅少だが、肥前系の染付壺や土師質土器小皿をはじめ、色絵碗や壁土、肥前系染付蓋付鉢の小片や関西系陶器碗の小片などが出土している。肥前系染付壺には被熱の痕跡が認められる。本遺構は、埋土に炭化物や焼土塊を多く含み、遺物に被熱の痕跡が認められるものがあることから、火災処理土坑と判断される。出土した土師質土器小皿の帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半以降と考えられるが、本遺構と重複する1区SK422から肥前系染付広東碗が出土していることを踏まえれば、厳密には19世紀初頭以降と位置付けられる。

土坑(廃棄土坑)

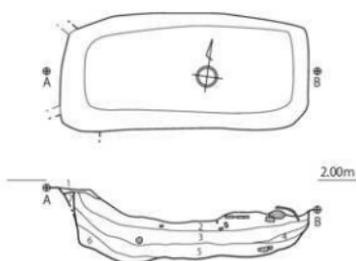
1区SK075(第55図、第316図1～13)

1区中央北寄りのG25グリッドで検出された廃棄土坑である。1区SK083・SK158に切られる。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は、長軸2.0m、短軸0.9m、検出面からの深さは0.6mを測る。埋土は灰褐色砂質土を基調とし、第1層を除き、5層に区別される。第1層は本遺構を覆う整地層の一部とみられるものである。第2～

6層は大量の遺物をはじめ、炭化物や礫を多く含むため、人為的に埋められたものとみられる。遺物は、肥前系の染付広東碗・筒型碗、関西系陶器土瓶、坪産陶器の播鉢などが大量に出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は19世紀初頭頃と考えられる。

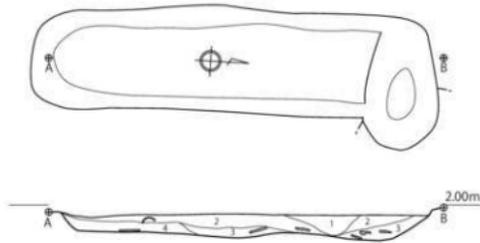
1区 SK085(第56図、第316図14~18)

1区中央南端のB25グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈し、北端がやや広く掘り込まれている。堀方の規模は、長軸3.2m、短軸0.9m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は灰褐色を基調とする砂質土で、4層に区分される。礫や遺物を多く含むため、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。遺物は、肥前系陶器壺、福岡系の陶器播鉢、京焼の灰落しなどが出土している。出土遺物の所属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半~中頃と考えられる。



1. 淡灰褐色砂質土 小礫多量含む 整地層
2. 淡黄褐色砂質土 炭化物・遺物多量含む
3. 暗灰褐色砂質土 0.5~1cm大の礫まばらに含む
4. 明黄褐色砂質土 鉄分沈着
5. 暗褐色砂質土 遺物・炭化物まばらに含む
6. 暗灰褐色砂質土 小礫多く含む
7. 明黄褐色砂質土 基盤層

第55図 1区 SK075 遺構実測図(1/40)



1. 淡灰褐色砂質土 炭化物・橙色粒子少量含む
2. 淡褐色砂質土 0.5~1cm大の礫多く含む よくしまる
3. 暗灰褐色砂質土 遺物多く含む
4. 暗褐色砂質土 小礫・遺物含む

第56図 1区 SK085 遺構実測図(1/40)

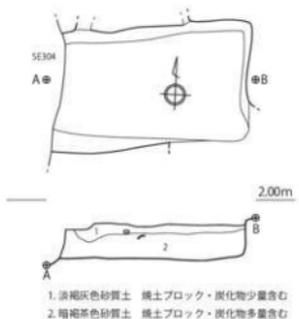
1区 SK095(第57図、第317図1~9)

1区北東のH27グリッドで検出された廃棄土坑である。西側を1区SE304に切られ、南東隅と北辺を攪乱に切られる。平面形状は長方形、断面形状も長方形を呈するとみられる。堀方の規模は、長軸1.5+m、短軸0.9m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土で、2層に区分される。遺物や焼土塊、炭化物を多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと判断される。遺物は、刷毛唐津陶器碗や土師質土器小皿(第317図9)をはじめとして肥前系の染付皿や碗、初期伊万里の天目碗などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は、18世紀前半頃と考えられる。

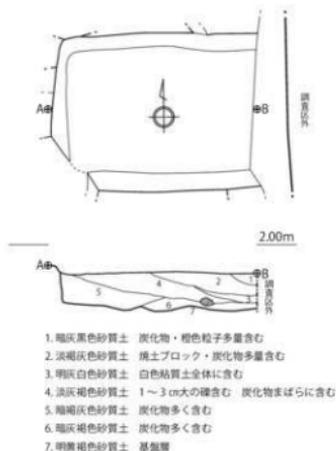
1区 SK302(第58図、第317図10~15)

1区北東端のH27グリッドで検出された廃棄土坑である。1区SK088に切られ、同SK322を切り、東側は調査区外へと延びる。平面形状は長方形、断面形状は概ね長方形を呈すが底面には凸凹を有す。堀方の規模は、

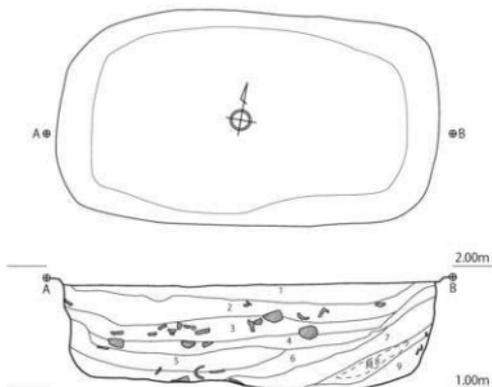
長軸1.7+m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土で、6層に区分される。これらには遺物をはじめ、ブロック土や炭化物を多く含むことから、人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。遺物は、肥前系染付丸碗、色絵碗、陶胎染付碗をはじめ、土師質土器小皿(第317図14)などが多く出土している。出土遺物の所属年代から遺構の埋没時期は、18世紀前半頃と考えられる。



第57図 1区 SK095 遺構実測図 (1/40)



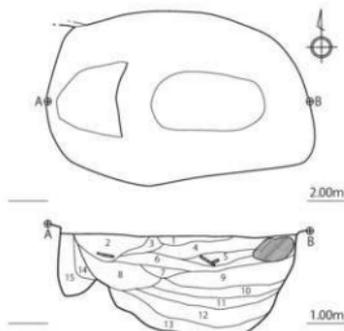
第58図 1区 SK302 遺構実測図 (1/40)



第59図 1区 SK311 遺構実測図 (1/40)

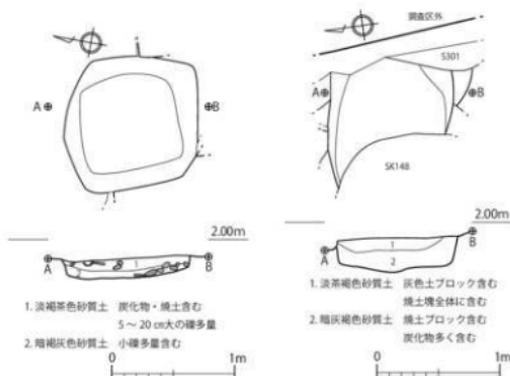
1区 SK311(第59図、第318図)

1区中央西側のF23グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は、長軸3.0m、短軸1.7m、検出面からの深さは0.9mを測る。埋土は砂質土を基調とし、9層に区分される。これらは遺物や貝殻を大量に含むことから人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。遺物は、肥前系の蛇の目四型高台をもつ染付皿や鉢をはじめ、瑠璃釉香炉や、瀬戸産の仏花瓶、土師質土器の十能のほか、備前産と考えられ、窯道具のサヤの可能性のある陶器の火入れや、傷隠しが施された肥前系の染付灰落とし、ガラス製品の皿などが出土している。これらの所属年代から、遺構の埋没時期は、18世紀後半頃と考えられる。



- | | | | |
|------------|--------------|-------------|--------------|
| 1. 明黄灰色砂質土 | 炭化物まばらに含む | 9. 暗黒灰色粘質土 | 炭層 黄色土ブロック含む |
| 2. 明灰褐色砂質土 | 炭化物・白色粘土ブロック | 10. 明黄褐色砂質土 | 炭化物・橙色粒子含む |
| 3. 淡灰褐色砂質土 | | 11. 淡灰褐色砂質土 | やや粘性あり 炭層 |
| 4. 暗灰褐色砂質土 | 炭層 粘性ややあり | 12. 明黄白色砂質土 | ザラザラ 木片含む |
| 5. 暗黒灰色粘質土 | 炭層 遺物含む | 13. 淡灰褐色砂質土 | 粗砂 |
| 6. 明灰白色粘質土 | 白色粘土層 炭化物混じり | 14. 明黄褐色砂質土 | 黄色土ブロック全体に含む |
| 7. 明灰黄色砂質土 | 炭化物含む | 15. 淡灰褐色砂質土 | 炭化物・黄色粒子含む |
| 8. 淡灰黄色砂質土 | 黄色土ブロック(大)含む | ※14・15は別遺構 | |
- ※1～8を①層、9～13を②層として遺物を取上げている

第60図 1区 SK316 遺構実測図(1/40)



第61図 1区 SK324 遺構実測図(1/40)

第62図 1区 SK339 遺構実測図(1/40)

1区 SK316(第60図、第319図)

1区北側中央のH25グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は不整楕円形、断面形状は逆台形形状を呈す。堀方の規模は、長軸2.1m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は砂質土で、13層に区分される。これらは遺物を多く含み、不整合な堆積が認められることから人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。ただし、第2層や8層の不整合な堆積は掘方にも不整合が看守されるため、掘り返しの痕跡である可能性がある。このため、上層の第1～8層を①層、下層の第9～13層を②層として遺物の取り上げを行った。遺物は、上層である①層からは肥前系染付碗をはじめ、砂目積み初期伊万里碗、朝鮮唐津徳利などが、下層である②層からは土師質土器小皿や土垂などが出土している。また下層には、1区SK353から出土した肥前系陶器二彩手の火入れ(第321図16)と接合するものがある。出土した土師質土器小皿の所属年代から遺構の埋没時期は、18世紀前半頃と考えられる。

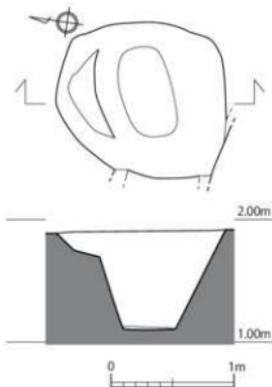
1区 SK324(第61図、第320図1～15)

1区北東のG26グリッドで検出された廃棄土坑である。1区SK323に切られ、同SK148・SK416・SK417を切る。平面形状は不整形で、断面形状

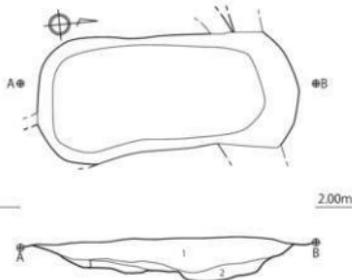
は方形を呈し、堀方の規模は、一辺 1.1 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土は砂質土で、2 層に区分される。小～大礫を多量に含み、遺物も多く、肥前系染付皿や望料型の肥前系染付蓋をはじめ、漆継痕を有する肥前系染付小皿や傷隠しが施された肥前系色絵瓶、京焼風陶器の皿、瀬戸美濃産の二彩手の鉢などが出土している。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は、18 世紀後半頃と考えられる。

1 区 SK339(第 62 図、第 320 図 16・17)

1 区北東端の G 27 グリッドで検出された廃棄土坑である。1 区 SK148・同 SK301・SK338 に切られ、東側は調査区外へと延びる。西側は攪乱や上層の遺構である 1 区 SK148 に切られるため平面形状は不明である。断面形状は方形を呈する。堀方の規模は、長軸 1.0 + α m、短軸 1.0 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は砂質土で、2 層に区分される。焼土塊や炭化物を多く含むことから、これらは人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。遺物は、肥前系の染付碗や唐津陶器碗などが出土しており、出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。



第 63 図 1 区 SK353 遺構実測図 (1/40)



1. 暗黒褐色砂質土 灰白色土ブロック含む
2. 暗黒灰色砂質土 粘性やや強い 炭層
3. 明黄灰色砂質土 炭化物含む やや粘性あり

第 64 図 1 区 SK437 遺構実測図 (1/40)

1 区 SK353(第 63 図、第 321 図 1～16)

1 区北東の H 24 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈し、北面にテラス上の段をもつ。堀方の規模は、長軸 1.4 m、短軸 1.3 m、検出面からの深さは 0.8 m を測る。遺物は多く、初期伊万里の染付皿や碗をはじめとして唐津陶器碗や搬入品とみられる京都系土師器(土師器皿 C)、砂目積みの肥前系陶器皿、肥前系陶器天目碗、上野・高取産の陶器浅鉢、関西系の土師質土器焙烙などが出土している。この他にも 18 世紀前半頃に埋没した 1 区 SK316 出土の肥前系陶器二彩手の火入れと接合したものが認められ、出土遺物に 17 世紀前半頃のもの 18 世紀前半頃のものがあるのが特徴である。このことから、遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と判断されるが、17 世紀前半頃の遺物が大半を占めることから、この頃に遺構はすでに廃絶していた可能性がある。

1 区 SK437(第 64 図、第 321 図 17～20)

1 区南東の C 26 グリッドで検出された廃棄土坑である。1 区 SK436 に切られる。平面形状は長楕円形、断面形状はレンズ状を呈し、底部には凸凹を有す。堀方の規模は、長軸 2.1 m、短軸 0.9 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は砂質土で、3 層に区分される。遺物は多く、肥前系青磁染付碗や刷毛目唐津陶器の皿をはじめ、京焼風陶器などが出土している。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

ピット

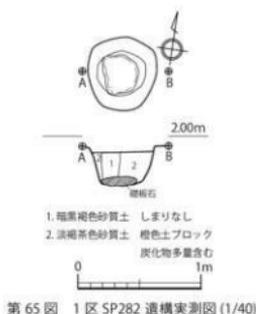
1区 SP282(第65図)

1区中央東寄りのF26グリッドで検出されたピットである。平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は、直径約0.5m、検出面からの深さは0.4mを測る。柱痕が確認され、径0.15mを測り、底面で礎板石が確認された。第2調査面で検出された明確な柱穴はこの1基のみある。出土遺物は少なく、磁器染付の細片のみであるため時期は特定できていない。

不明遺構(粘土貼土坑)

1区 SX100(第66図、第322図)

1区中央南寄りのD25グリッドで検出された粘土貼土坑である。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は、長軸1.7m、短軸1.2m、検出面からの深さは0.3mを測る。掘方の側面・底面に黄橙色粘土が貼られており、粘土の厚みは側面で2~3cm、底面で5~7cmを測る。埋土は砂質土を基調し、6層に区分される。これらに粘土塊が一定量含まれることから側面等の粘土が崩落した際の埋土と判断されるものである。遺物は、径2~4cm大の円形に打ち欠き整形された肥前唐津系の皿(第322図1・2)が複数出土した。出土遺物が僅少のため、遺構の埋没時期は特定できていない。

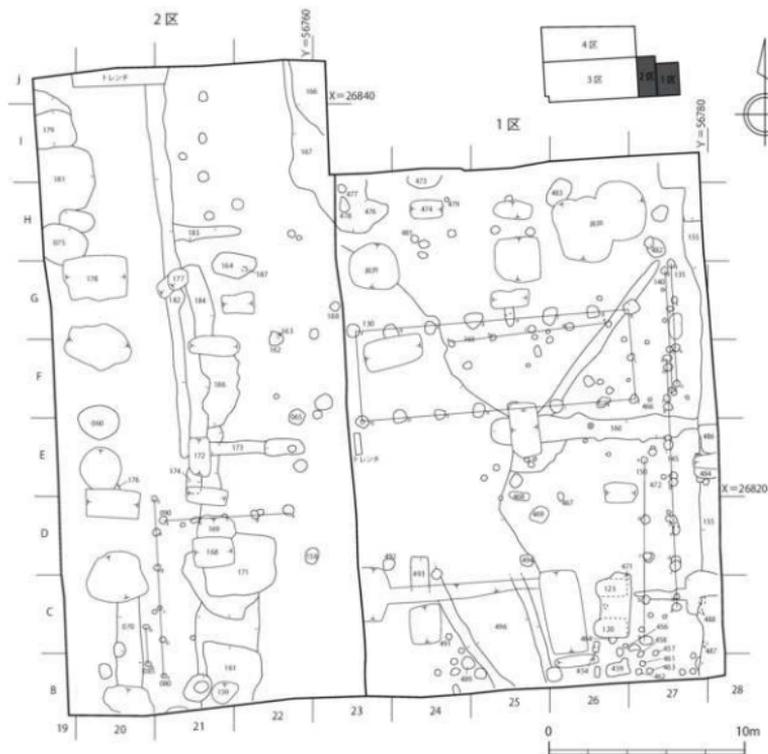


(3) 第3調査面

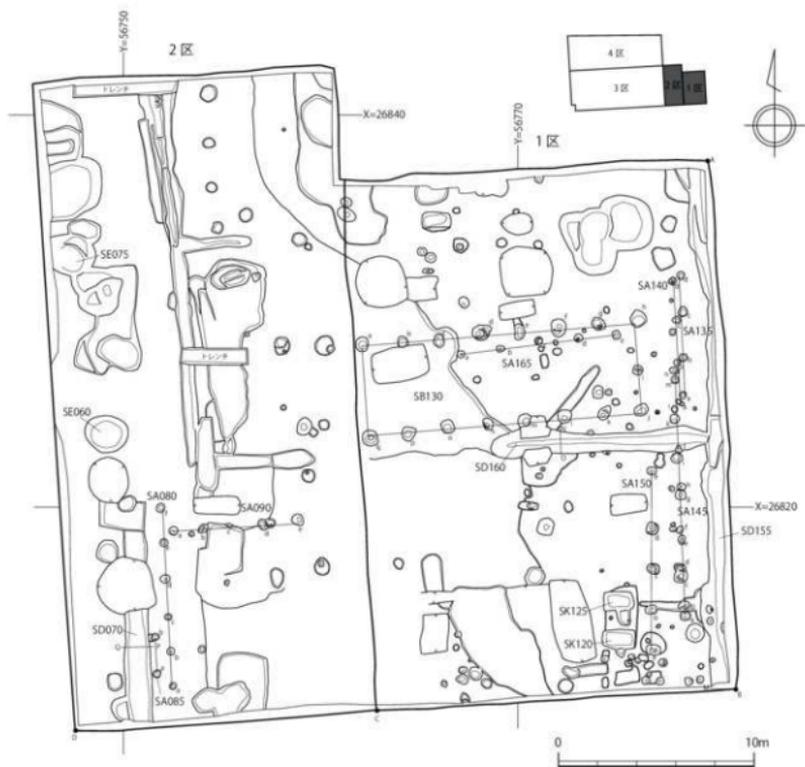
調査の概要

第3調査面は、第1調査面と同一地点での3回目の調査で、第2調査面の遺構群を検出した堆積土を機械によって除去したのちに新たに確認された遺構を対象としたものである。

第3調査面の主な遺構は、掘立柱建物跡、柵状遺構、井戸跡、廃棄土坑、溝状遺構であり、その時期は、16世紀末～17世紀中頃である。なお、第3調査面でも18世紀代の遺構を確認しているが、これは第2調査面では認識できなかったものであり、上位の調査面では認識できずに第3調査面での調査の際に検出されたものであり、本来は上位の調査面から掘り込まれていたものとみられる。



第67図 1・2区第3調査面遺構配置図(1/250)



調査の成果 (遺構編)
 第 IV 章

第 68 図 1・2 区第 3 調査面全体遺構図 (1/250)

掘立柱建物跡

1 区 SB130(第 69 図、第 326 図 1～3)

1 区中央やや北寄りの F23 グリッドで検出された掘立柱建物跡である。桁行 7 間、梁行は 2 間の東西棟で、西側については梁行の明確な柱穴を確認することはできなかった。身舎面積は 60.20 m²を測る。建物の主軸方位は N-85° E である。柱穴は直径 0.7～1.0 m の円形を呈し、検出面からの深さは 0.3 m～0.7 m を測る。柱間は 1.8～2 m を測り、礎板石の残る柱穴 a・h・m・q の 4 基と柱痕の残る柱穴 d・e・l・o の 4 基を確認している。残存する根石は 0.3 m 前後の平板な安山岩系の礎を使用し、柱痕は直径 0.15 m～0.20 m を測る。柱穴 d からは龍泉窯系青磁碗と銅製蓋(第 326 図 1・2)、柱穴 g からは瀬戸産の折縁皿(第 326 図 3)が出土している。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は 16 世紀末～17 世紀初頭頃であると考えられる。

柵状遺構

1 区 SA135(第 70 図)

1 区東側の F27 グリッドで検出された柵状遺構である。柱穴 4 基からなる 3 間分を確認した。主軸方位は N-1° W で、延長 6.07 m の南北方向の区画施設とみられる。柱間は 1.8 m～2.2 m を測る。柱穴は直径 0.4 m～0.5 m の円形を呈し、検出面からの深度は 0.2～0.4 m を測る。柱痕が残るものが柱穴 a・c の 2 基確認され、直径 0.15～0.20 m を測る。出土遺物は皆無なため、時期は特定できていない。

1 区 SA140(第 71 図、第 326 図 4)

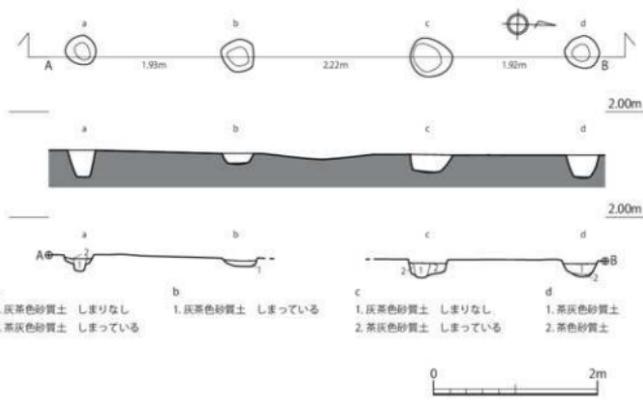
1 区東側の F27 グリッドで検出された柵状遺構である。柱穴 4 基からなる 3 間分を確認した。主軸方位は N-1° W で、延長 6.1 m の南北方向の区画施設とみられる。柱間は 2.0～2.2 m を測る。柱穴は直径 0.3～0.4 m の円形を呈し、検出面からの深度は 0.45～0.55 m を測る。すべての柱穴において柱痕が確認され、直径 0.15～0.25 m を測る。遺物は僅少であるが、柱穴 a から京都系土師器の皿(第 326 図 4)が出土している。その帰属年代から遺構の埋没時期は 16 世紀末頃と考えられる。

1 区 SA145(第 72 図、第 326 図 5～7)

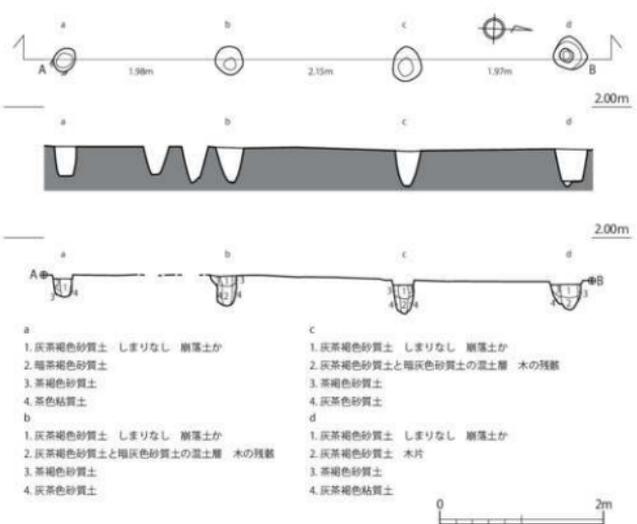
1 区東側の C27 グリッドで検出された柵状遺構である。1 区 SD160 を切る。柱穴 7 基からなる 6 間分を確認した。主軸方位は N-3° W で、延長 12 m の南北方向の区画施設とみられる。また、近接して等間隔に柱穴がもう一条並んでいるため、建て替えが行われたものと考えられる。柱穴 c が柱穴 d に切られていることから、柱穴 a・c・e・g・i・k・m が先行すると判断される。柱穴は直径 0.4～0.6 m の円形を呈し、検出面からの深さは 0.3～0.6 m を測る。柱穴 b・k・i・n の 4 基で柱痕が確認され、直径は 0.15～0.2 m を測る。遺物は柱穴 e から瀬戸産の折縁皿と肥前系絵唐津の向付(第 326 図 5・6)が出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 16 世紀末～17 世紀初頭頃と考えられる。

1 区 SA150(第 73 図)

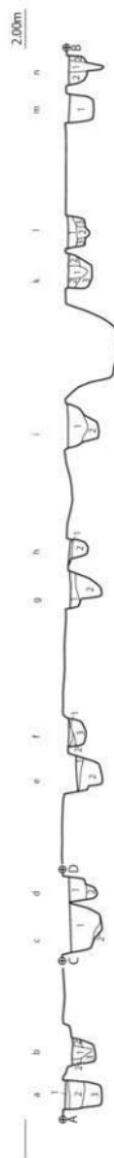
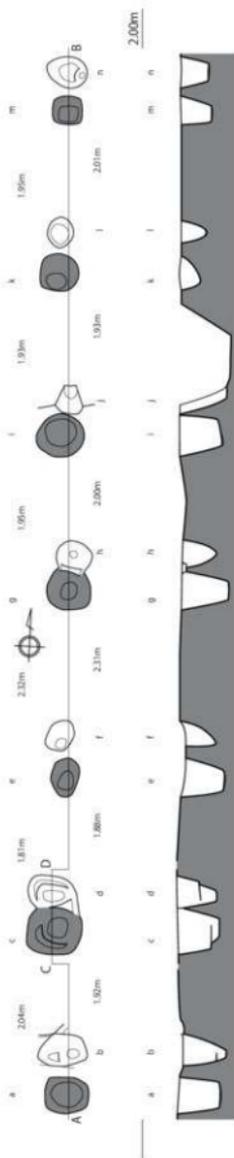
1 区東側の C27 グリッドで検出された柵状遺構である。柱穴 5 基からなる 4 間分を確認した。主軸方位は N-1° E で、延長 9.13 m の南北方向の区画施設とみられる。柱間は 1.9 m～3.0 m で、柱穴 d～e 間のみが 3.0 m とやや離れている。柱穴は直径 0.5～0.6 m の円形を呈し、検出面からの深さは 0.5～0.6 m を測る。柱穴 a～d の 4 基で柱痕が確認され、直径は約 0.15 m を測る。なお、柱穴 d では柱材がわずかに残存していた。出土遺物は皆無であり、時期の特定はできていない。



第 70 図 1 区 SA135 遺構実測図 (1/60)

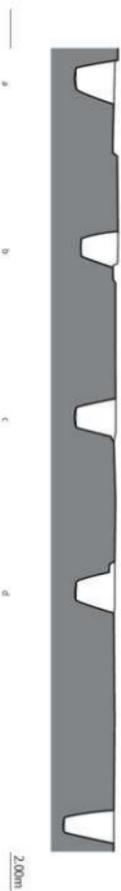
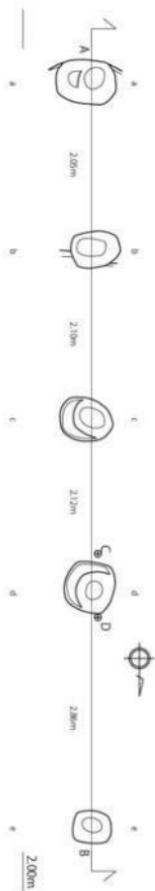


第 71 図 1 区 SA140 遺構実測図 (1/60)



- a**
1. 淡灰色砂質土 灰化層・焼土多く含む
 2. 淡灰色砂質土 粘質土ブロック含む
 3. 黒灰色砂質土 均質
- b**
1. 淡褐色砂質土 しまりなし、柱礎
 2. 淡褐色砂質土 焼土ブロック含む
 3. 黒灰色砂質土 灰化物少量含む
- c**
1. 淡褐色砂質土 小溝含む
 2. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 3. 黒灰色砂質土 均質
- d**
1. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 2. 淡褐色砂質土 均質
- e**
1. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 2. 淡褐色砂質土 均質
 3. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
- f**
1. 淡褐色砂質土 柱礎
 2. 淡褐色砂質土 やや粘質あり
 3. 淡褐色砂質土 やや粘質あり
- g**
1. 淡褐色砂質土 小溝含む
 2. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 3. 淡褐色砂質土 均質
- h**
1. 淡褐色砂質土 小溝含む
 2. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
- i**
1. 淡褐色砂質土 5mm水の溝少量含む
 2. 淡褐色砂質土 均質
- j**
1. 淡褐色砂質土 柱礎
 2. 淡褐色砂質土 やや粘質あり
 3. 淡褐色砂質土 やや粘質あり
- k**
1. 淡褐色砂質土 均質
 2. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 3. 淡褐色砂質土 均質
- l**
1. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 2. 淡褐色砂質土 均質
 3. 淡褐色砂質土 均質
- m**
1. 淡褐色砂質土 1~2cm水の溝含む
 2. 淡褐色砂質土 均質
- n**
1. 淡褐色砂質土 粘質土ブロック含む
 2. 淡褐色砂質土 5mm水の溝含む 柱礎

第72図 1区 SA145 遺構東測図 (1/60)



- a**
1. 明度褐色の質土 柱礎 5m×6の礎石に 鉄分沈積 しまりなし
 2. 淡褐色の質土 鉄分多量沈積
 3. 灰褐色の質土 鉄分多量沈積
 4. 暗灰色の質土 磁粉
- b**
1. 明度褐色の質土 柱礎 5m×6の礎石に 鉄分沈積
 2. 淡褐色の質土 1cm×6の礎石に 鉄分多量沈積
 3. 灰褐色の質土 鉄分多量沈積
- c**
1. 明度褐色の質土 柱礎 柱材附存
 2. 淡褐色の質土 1cm×6の礎石に 鉄分多量沈積
 3. 淡灰褐色の質土 鉄分多量沈積
- d**
1. 明度褐色の質土 柱礎 5m×6の礎石に 鉄分沈積 しまりなし
 2. 淡褐色の質土 鉄分多量沈積
 3. 淡灰褐色の質土 鉄分多量沈積
 4. 明度褐色の質土 やや磁粉あり



第73図 1区SAI50遺構実測図(1/60)

1 区 SA165(第 74 図)

1 区中央北寄りの F24 グリッドで検出された櫛状遺構である。1 区 SB130 の身舎内に位置する。柱穴 5 基からなる 4 間分を確認した。主軸方位は N-83° -E で、延長 7.9 m の東西方向の区画施設とみられる。柱間はほぼ 2.0m で揃う。柱穴は直径約 0.4 m の円形状を呈し、検出面からの深さは 0.15 m ~ 0.5 m を測る。柱穴 d で柱痕が確認されており、直径 0.1 m を測る。出土遺物は僅少であり、時期の特定はできていない。

2 区 SA080(第 75 図)

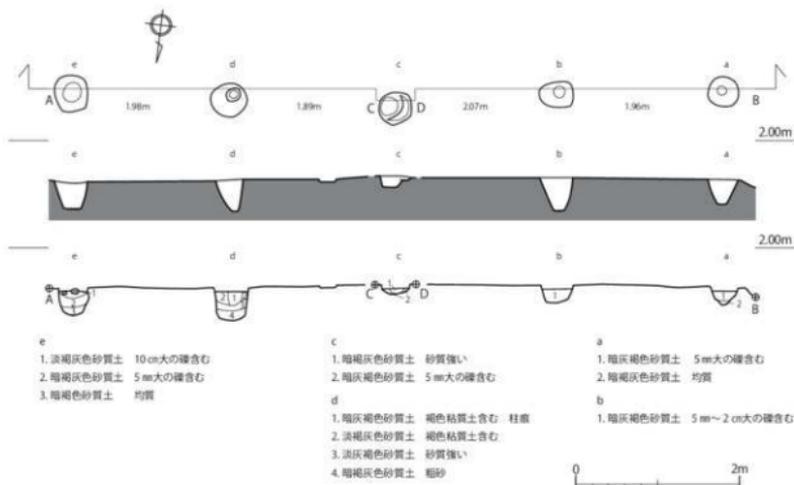
2 区南西の B21 グリッドで検出された櫛状遺構である。柱穴 6 基からなる 5 間分を確認した。柱穴列の主軸方向は N-4° -W で、延長 9.1 m の南北方向の区画施設とみられる。柱穴は直径 0.4 ~ 0.5 m の概ね円形を呈し、検出面からの深さは 0.3 ~ 0.6 m を測る。柱穴 a・b・d で柱痕が確認されており、直径は約 0.08 m である。出土遺物は僅少であり、時期は特定できていない。

2 区 SA085(第 76 図)

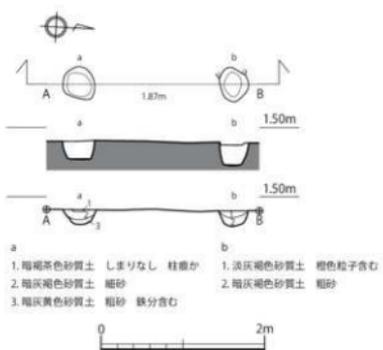
2 区南西の B20 グリッドで検出された櫛状遺構である。2 区 SD070 と並行する。柱穴 2 基からなる 1 間分を確認した。柱間は 1.9 m を測る。柱穴列の方位は N-3° -W で、南北方向を指向する。柱穴は直径 0.4 m の概ね円形を呈し、検出面からの深さは 0.3 m を測る。出土遺物は皆無であり、時期は特定できていない。

2 区 SA090(第 77 図)

2 区中央南寄りの D21 グリッドで検出された櫛状遺構である。2 区 SK169 に切られる。柱穴 5 基からなる 4 間分を確認した。柱穴列の主軸方向は N-84° -E で、延長 6.4 m の南北方向の区画施設とみられる。柱間は 1.8 m ~ 2.0 m を測る。柱穴は直径 0.4 ~ 0.6 m の概ね円形を呈し、検出面からの深さは 0.2 ~ 0.5 m を測る。柱穴 a・b・e で柱痕が確認されており、直径約 0.08 ~ 0.1 m を測る。出土遺物は僅少であり、時期は特定できていない。

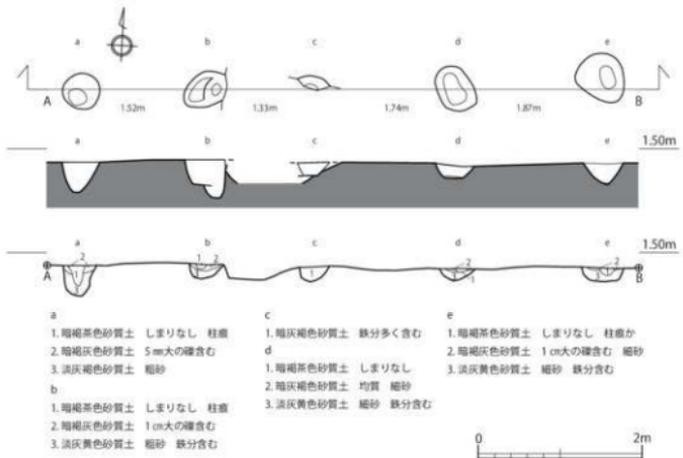


第 74 図 1 区 SA165 遺構実測図 (1/60)



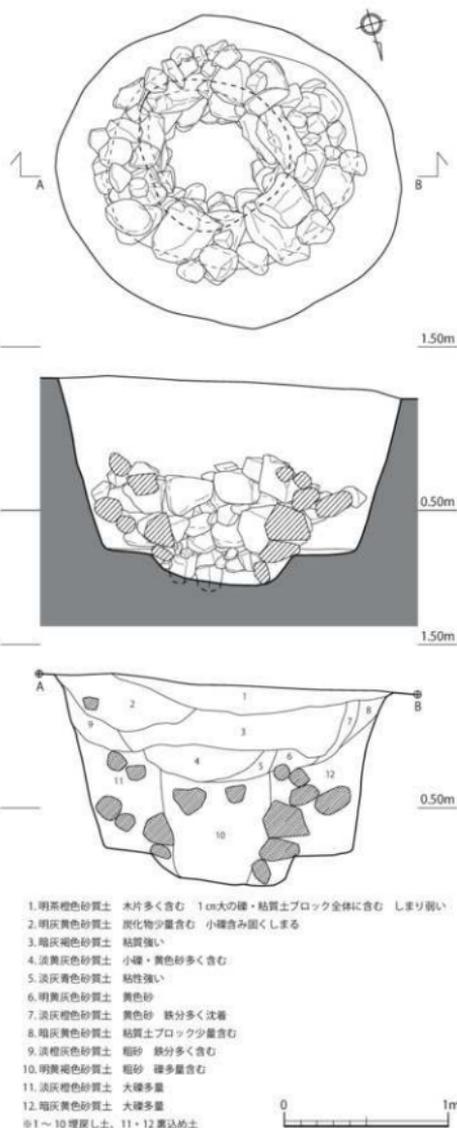
第 76 図 2 区 SA085 遺構実測図 (1/60)

- | | |
|--|--|
| <p>a</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 しまりなし 柱痕か 2. 暗灰色砂質土 細砂 3. 淡灰黄色砂質土 粗砂 鉄分含む | <p>b</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 淡灰褐色砂質土 橙色粒子含む 2. 暗灰色砂質土 粗砂 |
|--|--|



第 77 図 2 区 SA090 遺構実測図 (1/60)

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| <p>a</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 しまりなし 柱痕 2. 暗灰色砂質土 5m大の礫含む 3. 淡灰褐色砂質土 粗砂 | <p>b</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 しまりなし 柱痕 2. 暗灰色砂質土 1cm大の礫含む 3. 淡灰黄色砂質土 粗砂 鉄分含む | <p>c</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 鉄分多く含む | <p>d</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 しまりなし 2. 暗灰色砂質土 均質 細砂 3. 淡灰黄色砂質土 粗砂 鉄分含む | <p>e</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 しまりなし 柱痕か 2. 暗灰色砂質土 1cm大の礫含む 細砂 3. 淡灰黄色砂質土 細砂 鉄分含む |
|---|---|---|---|---|



第78図 2区SE060遺構実測図(1/30)

1. 明赤褐色砂質土 木片多く含む 1cm大の礫・粘質土ブロック全体に含む しまり強い
2. 明赤褐色砂質土 炭化物少量含む 小礫含む固くしまる
3. 暗赤褐色砂質土 粘質強い
4. 淡黄褐色砂質土 小礫・黄色砂多く含む
5. 淡黄褐色砂質土 粘性強い
6. 明黄褐色砂質土 黄色砂
7. 淡赤褐色砂質土 黄色砂 鉄分多く沈着
8. 暗赤褐色砂質土 粘質土ブロック少量含む
9. 淡褐色砂質土 粗砂 鉄分多く含む
10. 明黄褐色砂質土 粗砂 礫多量含む
11. 淡赤褐色砂質土 大礫多量
12. 暗赤褐色砂質土 大礫多量
- ※1～10埋戻し土、11・12裏込め土

井戸跡

2区SE060(第78図、第327図)

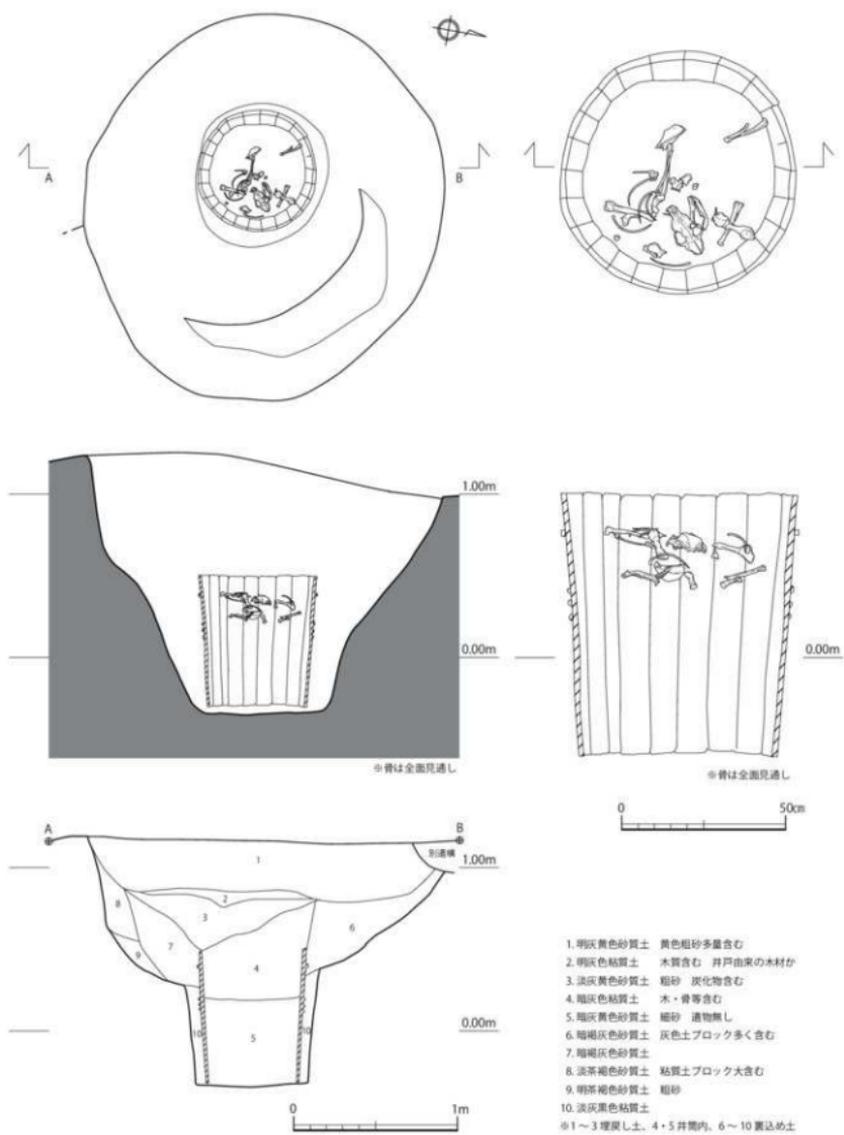
2区中央西側のE20グリッドで検出された石積みの井戸跡である。平面形状はほぼ円形、断面形状は逆台形の二段掘りを呈し、底面中央井筒部分が周辺より0.2m程深くなっている。堀方の規模は、長径2.1m、短径1.9m、検出面からの深さ約1.2mを測る。石積みには0.2m～0.6mの礫が使用され、安山岩系の自然石が大平を占める。

また、井筒内面の石面を合わせるかのように加工した石を配置している箇所がある。裏込めにも大小の礫が充填され、石積みをしっかり固定していたことがわかる。土層観察の結果、掘り返しが行われ(第78図第1～9層)、人為的に埋め戻されたものと判断される。遺物は景德鎮窯系青花皿や朝鮮半島産陶器碗、唐津陶器皿、京都系土師器皿、凝灰岩製石臼などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は16世紀末～17世紀初頭頃と考えられる。

2区SE075(第79図、第328図)

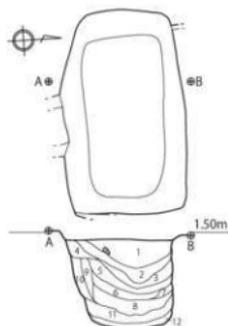
2区北西端のG19グリッドで検出された井戸跡である。大部分は2区で検出しているが、西側の一部は3区調査時に検出した。2区SK178に切られる。平面形状はほぼ円形、断面形状は不整逆台形を呈し、北東側壁面に緩やかなテラスを確認した。堀方の規模は長径2.4m、短径2.1m、検出面からの深さは1.6mを測り、最深部の標高は-0.3mである。最下部で木製の桶を1段分確認した。

土層観察の結果、掘り返しが行われており(第79図1～3層)、上位の井筒が抜き取られたものとみられる。井筒の木桶は、長さ80cm、幅8～10cm、厚さ約1cmの杉材が24枚組使用されている。外周の上端から約10cmの位置に竹製のタガが残存し、また中心部付近の外周を縄で巻き、固定していた。木桶の径は上端が64cm、下端が56cmを測る。木桶内の埋土は桶の中間で分層され、細



第 79 図 2 区 SE075 遺構実測図 (1/30・1/15)

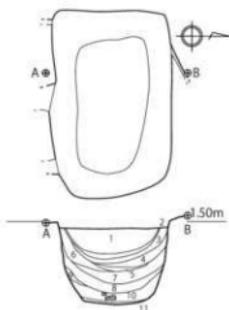
- 1. 明灰黄色砂質土 黄色粗砂多量含む
 - 2. 明灰色粘質土 木質含む 井戸由来の木材が
 - 3. 淡灰黄色砂質土 粗砂 炭化物含む
 - 4. 暗灰色粘質土 木・骨等含む
 - 5. 暗灰黄色砂質土 細砂 遺物無し
 - 6. 暗褐色砂質土 灰色土ブロック多く含む
 - 7. 暗褐色粘質土
 - 8. 淡茶褐色砂質土 粘質土ブロック大含む
 - 9. 明茶褐色粘質土 粗砂
 - 10. 淡灰黑色粘質土
- ※1～3埋戻し土、4・5井筒内、6～10裏込め土



1. 暗茶褐色砂質土
2. 灰青色土と茶色土の混土 やや粘質
3. 暗灰色土 炭層 軟質
4. 茶褐色土 やや砂質
5. 茶褐色粘質土と暗茶色粘質土の混土
6. 灰色土と明茶色土の混土 やや粘質
7. 灰色砂質土 やや軟質
8. 黒色土 炭層 軟質
9. 茶褐色砂質土 炭含む
10. 茶褐色砂質土
11. 灰色砂質土 炭含む
12. 灰青色砂質土



第80図 1区 SK120 遺構実測図(1/40)



1. 茶褐色砂質土
2. 暗灰色土 炭層 軟質
3. 茶褐色砂質土
4. 暗灰色土 炭層 軟質
5. 茶褐色砂質土
6. 暗褐色砂質土
7. 灰青色砂質土 暗茶粘土ブロック含む
8. 灰色砂質土
9. 茶色砂質土 灰色砂混じる
10. 灰青色砂質土
11. 茶色粘質土



第81図 1区 SK125 遺構実測図(1/40)

砂・粘質土の順で堆積する。

この上層の粘質土の最下位から犬の骨とネズミ科の骨、それぞれほぼ一一体分の全身骨格がまとまって出土したほか、別個体の犬の骨や複数体のカエルの骨なども含まれており注目される。これらの理化学分析の結果、全身骨格が現存する犬は成犬で、自然死するまで飼育された可能性が指摘され、死亡後投棄されたものとみられ、また別個体の犬は解体痕がみられるため食用にしていたものを井戸廃絶後に廃棄し、カエルやネズミ科は意図せず落ちたものと考えられている(詳細は第Ⅵ章を参照)。

遺物は上層とした掘り返しの埋土(第79図第1～3層)から肥前系染付碗(第328図4)が、井筒内の粘質土(第79図第4層)から肥前系染付皿や銅製煙管(第328図5・6)などが出土している。井戸の裏込めからの出土遺物は皆無である。このため、遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀中頃から後半頃と考えられる。

土坑(廃棄土坑)

1区 SK120(第80図、第329図1～5)

1区南西のC26グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は長方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸1.7m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.7mを測る。埋土は大きく3層に区分され、砂質土と粘質ブロック土、炭層等が交互に堆積する。これらには不整合な堆積が認められ、掘り返しが複数回行われたものとみられる。このような堆積状況に合わせて、遺物が大量に出土することから人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は第1・2層で多く出土しており、景徳鎮窯系の芙蓉手皿や漆継ぎが施された肥前系の天目碗、備前系陶器鉢などが出土している。その帰属年代から、遺構の埋没時期は17世紀前半～中頃と考えられる。

1区 SK125(第81図、第329図6～9)

1区南西のC26グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は長方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸1.5m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.6mを測る。1区SK120と隣接し、遺構の規模、主軸方位もほぼ揃う。埋土は大きく2分され、第1層の茶褐色砂質土とその他の炭層や粘質ブロック土、砂質土が細かく堆積するものに区別される。また、これらに不整合な堆積が認められることから、掘り返しが行われた可能性があり、その後人為的に埋め戻されたものと判断される。

遺物は、初期伊万里皿、砂目跡積みの肥前唐津系陶器の皿などが多く出土しており、その帰属年代から、遺構の埋没時期は17世紀前半～中頃と考えられる。

溝状遺構

1区SD155(第82図、

第330図1～7)

1区東端のB 27グリットで検出された溝状遺構である。東側調査区壁面の直下に位置し、西肩のみ検出したものである。主軸方位をN-1°-Wとする南北方向の溝である。南北面、東面は調査区外へと展開する。攪乱、1区SK484・SK486に切られ、同SD160を切る。長さは $27+a$ m、幅は $1.0+a$ m、検出面からの深さは0.6mを測る。埋土は褐色土を基調とし、4層に区分される。

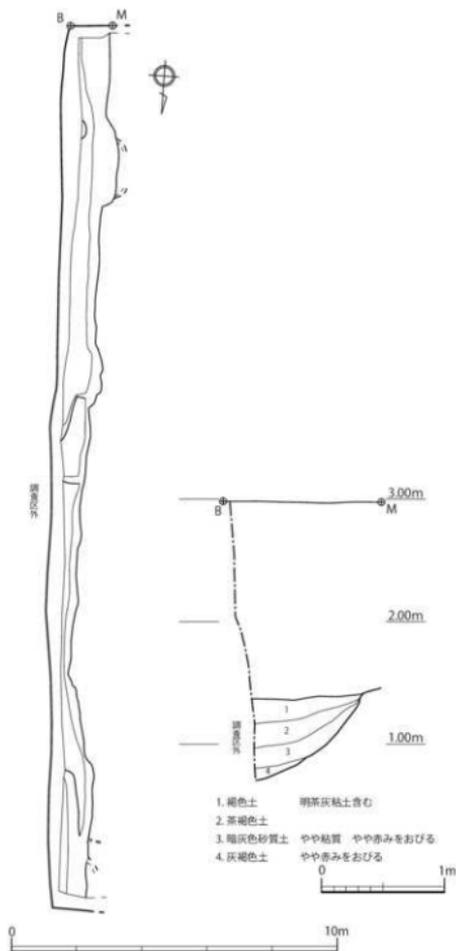
遺物は、京都系土師器皿や摺り目が交差する備前焼陶器摺鉢をはじめとして、石塔類の一部(第330図7)などが出土している。これらの帰属年代からは遺構の埋没時期は16世紀末～17世紀初頭頃と考えられる。

1区SD160(第83図、

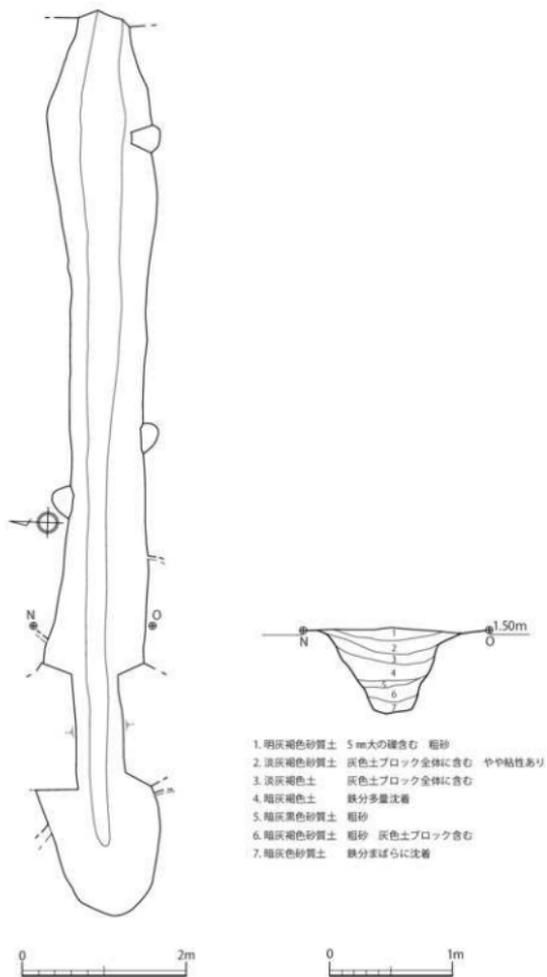
第330図8～14)

1区中央のE 25グリットで検出された溝状遺構である。攪乱と1区SA145・SD155に切られる。西側は1区中央で途絶え、東側は調査区外に延びる。主軸方位をN-87°-Eとする東西方向の溝である。長さは $15+a$ m、幅は $1.4+a$ m、検出面からの深さは0.7mを測る。断面形状はV字状で、底部幅は約0.2mを測る。埋土は砂質土を基調とし、7層に区分される。粗砂、灰色土ブロックを多く含むことから、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。また、鉄分の沈着が多くみられ、溝内に滞留していた可能性がある。

遺物は、肥前唐津陶器碗(第330図9)をはじめ、中国産白磁椀V類や瓦器椀、白色研磨土師器などが出土しており、中世末のものと中世前半期のものが混在するのが特徴である。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は16世紀末頃と判断されるが、その大半が12～13世紀頃のものであることを踏まれば、この頃に遺構はすでに廃絶していた可能性がある。



第82図 1区SD155 遺構実測図(1/150・1/40)

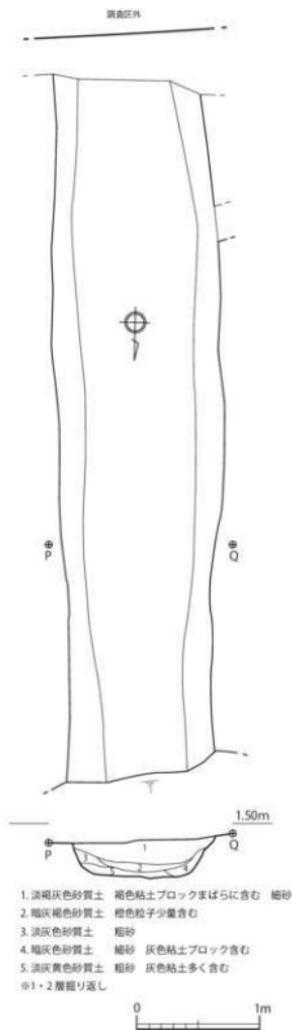


第 83 図 1 区 SD160 遺構実測図 (1/60・1/40)

2区 SD070(第84図)

2区南西のB20グリットで検出された溝状遺構である。南側は掘乱に切れ、北側は2区 SE020に切られる。残存する長さは $4.4 + a$ m、幅 1.3 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。主軸方向を $N 2^{\circ} - W$ とする南北方向の溝である。断面形状は逆台形を呈し、砂質土を基調とする埋土は大きく2層に区別される。これらには不整合な堆積が認められることから掘り返しが行われていたものとみられる。

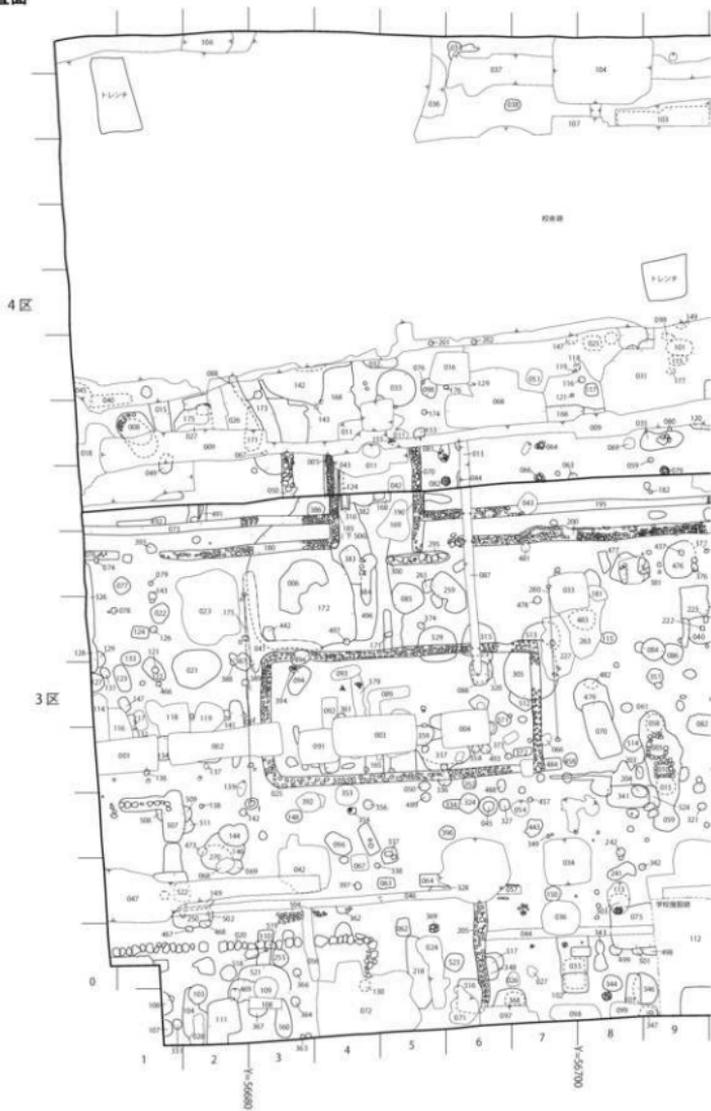
遺物は非常に少なく、土師器小片が出土したのみである。出土遺物の所属年代から遺構の時期は 15 世紀後半～ 16 世紀前半以降と考えられるが、小片であるため、正確な時期は特定できていない。



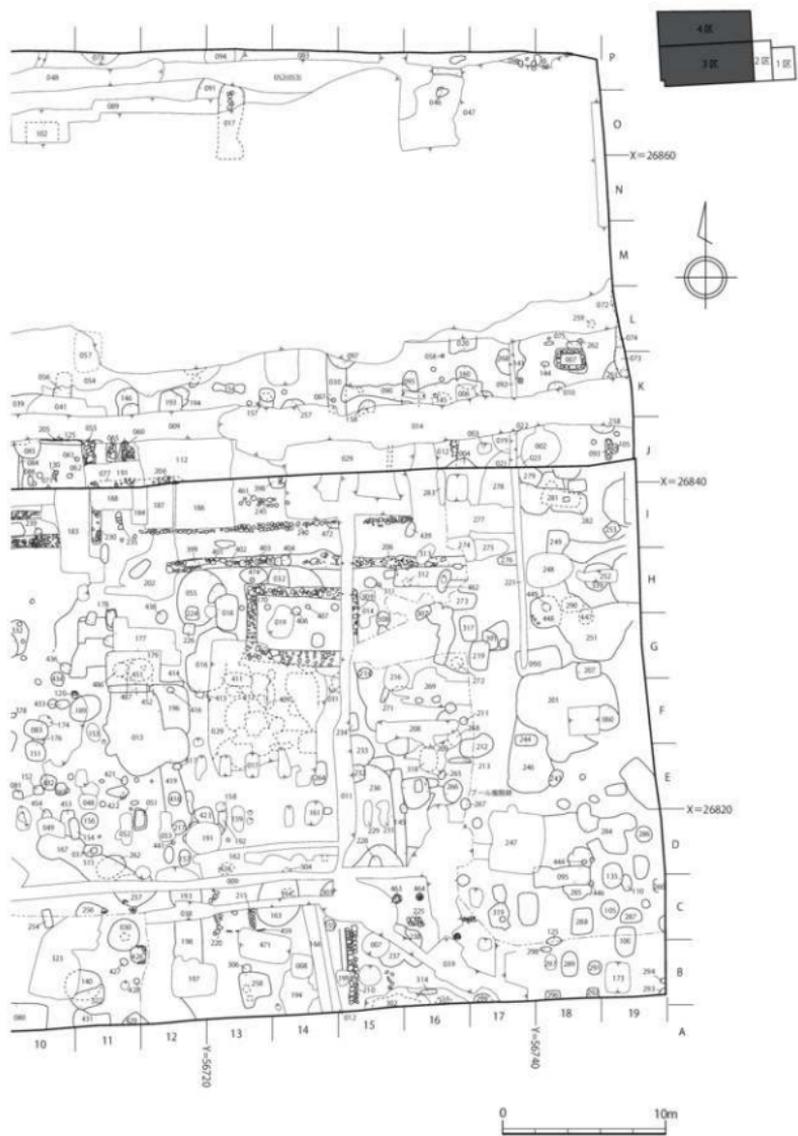
第84図 2区 SD070 遺構実測図 (1/40)

第2節 3・4区

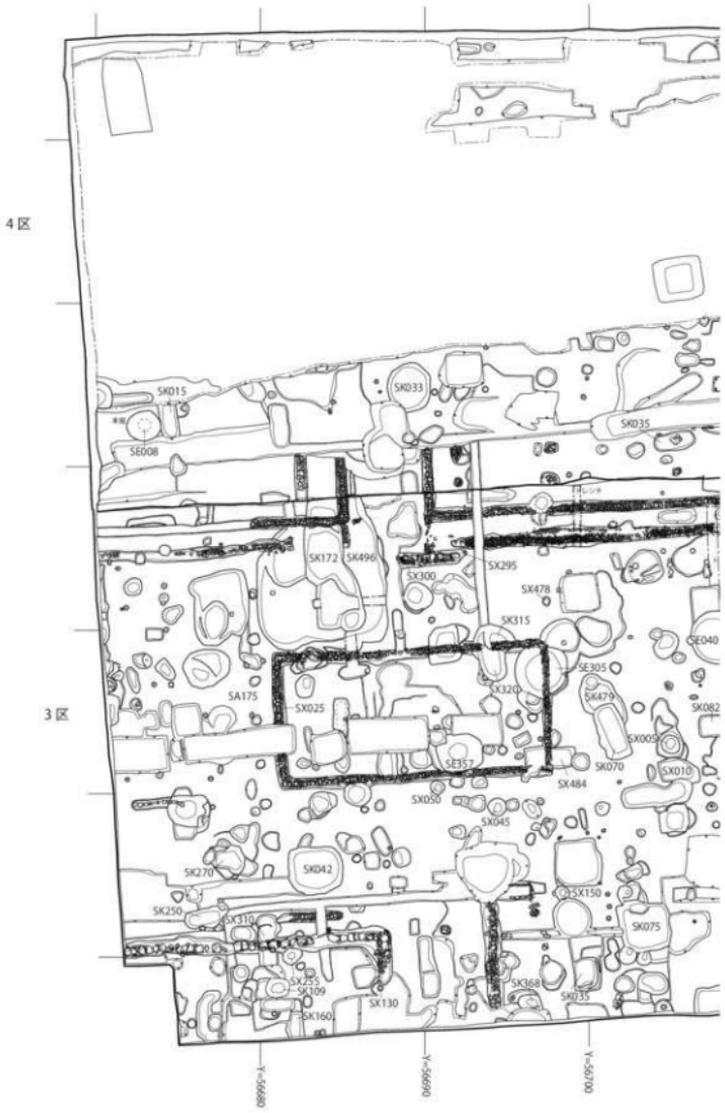
(1) 第1調査面



第85図 3・4区第1調査面西側遺構配置図(1/300)



第 86 図 3・4 区第 1 調査面東側遺構配置図 (1/300)



第87図 3・4区第1調査面西側全体遺構図(1/300)

調査の概要

3・4区は調査区全体のうち、西側の大部分にあたり、西側には隣接して第19次調査区が位置する。幕末頃の屋敷地割の復元による想定では、「上原氏」「岡本氏」「神屋氏」「伴氏」「木戸氏」「阿部氏」の屋敷の一部にあたり、各屋敷の境が存在するとみられる地点である。第三章で述べたように、校舎解体工事終了後に、廃土置き場の関係上、3区の調査を先行して行い、調査終了後、反転して4区の調査を行った。また、学校建設前後のものと思われる明治期の整地層の下位面を第1調査面として調査を行っているものの、第1調査面の遺構検出時に石列や集石などを多数確認したため、その周辺部は整地層から調査を行っている。さらに3区東側においては、旧荷揚町小学校プールの基礎が深く及び、後述する第2調査面に相当する高さまで削平を受けていたため、この一帯で検出された遺構は第1調査面の遺構として報告する。

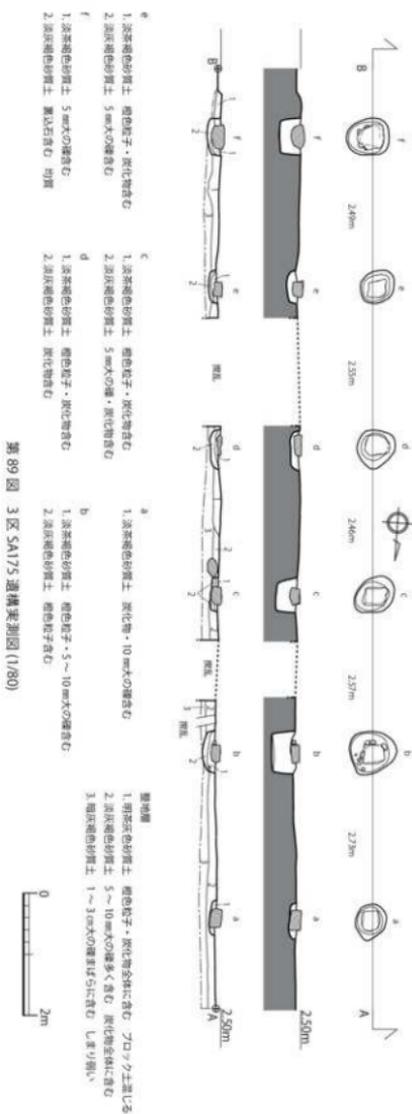
同様に、4区の大部分は解体された旧校舎の基礎による攪乱が深く、第3調査面に相当する高さまで及んでいた。その下位を一部機械によって掘削した結果、これも後述する第3調査面から1.5m下まで攪乱が及び、また湧水がみられたことから、攪乱の全面的な掘削は行わずに、調査を終了している。

第1調査面の主な遺構は、井戸跡、火災処理土坑、廃棄土坑、埋糞遺構、粘土貼土坑、土間状遺構、不明土坑で、これらの遺構の時期は、18世紀中頃～19世紀中頃である。

柵状遺構（礎石列）

3区 5A175(第89図、第337図)

3区西側のD3グリッドで検出された礎石列である。第2調査面で検出した3区 5E460を切る。6基からなる5間分を確認しており、延長12.4mを測る。主軸方位はN-4°-Wで、南北方向の区画施設と判断されるものである。柱間は2.5～2.6mを測り、0.3m前後の方形状を呈する上面が平坦な自然石を使用している。堀方は直径0.6mの円形を呈し、検出面からの深さは0.1～0.3mを測る。礎石b・fでは小礫を使用した根締め石が確認された。礎石の上面は標高2.5mで揃う。遺物は堀方から出土しており、礎石aから白磁の香炉、礎石bから肥前系陶器灯火具、礎石eから焼雜痕のある肥前系染付碗や同波佐見焼の皿などが



出土していることから、遺構の構築年代は 19 世紀前半～中頃と考えられる。

井戸跡

3 区 SE030(第 90 図、第 338 図 1～8)

3 区中央南の C 11 グリッドで検出された井戸跡である。広東碗や施釉かわらけ(土師質土器小皿 C)が出土する 3 区 S426 を切る。平面形状は円形を呈し、断面形状は逆台形状に 2 段掘りをしていたものとみられる。掘方の規模は長径 2.0 m、短径 1.8 m、検出面から最深部までの深さは 1.9 m を測る。掘方の底部からは木桶が 1 段分確認された。木桶は直径 0.6 m を測り、幅約 10 cm、高さ約 58 cm、厚さ 1.5 cm の木材を 16 枚使用している。土層観察の結果、掘り返しの痕跡が認められ、井筒が抜き取られたものと判断される。調査時の湧水は木桶上端のやや下位、標高 0.7 m 前後で滞水していた。木桶部分の掘削途中で壁面の砂層が崩落したため、木桶の下端や掘方の最下部の形状は確認できていない。

遺物は、井筒抜き取りの埋土から肥前系染付皿、白磁紅皿、透明釉が施された施釉かわらけや、「軍」の刻印を有する平瓦などのほか、鍋島藩窯の輪繫文の皿(第 338 図 3)が出土している。今回出土した鍋島藩窯の皿は破片であるが、同形の完形品が芝離宮遺跡で出土している。また、これらには石組遺構 3 区 SX010 から出土したものと接合する萩焼のピラ掛け碗がある。これらの所属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SE040(第 91 図、第 338 図 9～17)

3 区中央の G9 グリッドで検出された井戸跡である。3 区 S222・223 に切れ、同 SK332 を切る。平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長径 3.2 m、短径 2.6 m、検出面からの最大深度は 1.6 m を測る。底面中央に直径約 1.0 m、深さ 0.2 m の窪みを確認しており、調査時には滞水していたことから、井戸の水溜部とみられる。埋土は概ね砂質土で、6 層に区分される。その内、第 1～5 層には不整合な堆積が認められることから人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。

遺物は、肥前系染付広東碗や瀬戸美濃産の火鉢をはじめ、胎土目積みの唐津陶器の皿などが出土しており、その所属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

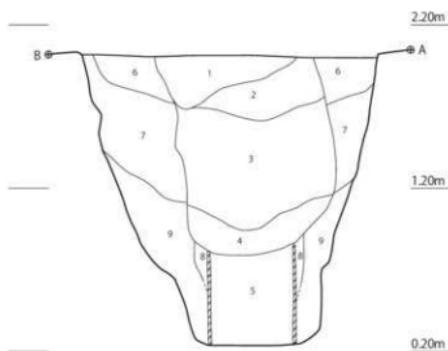
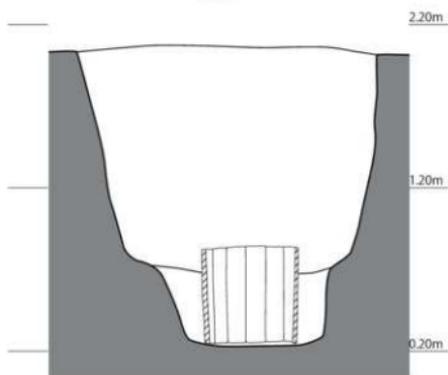
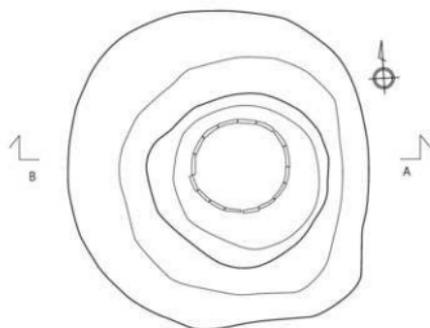
3 区 SE060(第 92 図、第 339 図 1～9)

3 区東端 F19 グリッドで検出された井戸跡である。学校プールの基礎に大きく削平され、3 区 SK201 を切る。平面形状は円形、断面形状は逆凸状で 2 段掘りになっている。掘方の規模は長径 1.35 m、短径 1.1 + a m、検出面からの深さは 0.8 m を測る。井戸枠は凝灰岩製の円形の石枠で、内径は 0.8 m、厚さ 0.08 m、残存する高さは 0.1～0.25 m である。石枠内の埋土は 4 層に区分され、石枠下位の 2 段目の掘方内の埋土につながる一連の堆積土である。このことから、石枠の下位に木製の桶のような有機物の井筒があったものとみられ、埋土に炭化物や漆喰片が多量に含まれることから井戸廃絶時に埋め戻されたものと判断される。また、裏込め部分には大量の瓦片が含まれており、井筒をしっかりと固定していたものとみられる。

遺物は、裏込め部分から瀬戸美濃産の端反碗が出土し、井筒内からは瀬戸美濃産のコバルト釉の染付蓋や、中国徳化窯の色絵小碗、兵庫県三田産の青磁花瓶などが出土していることから、19 世紀前半頃から中頃に構築され、19 世紀後半頃に埋没したものと考えられる。

3 区 SE140(第 93 図、第 339 図 10～14)

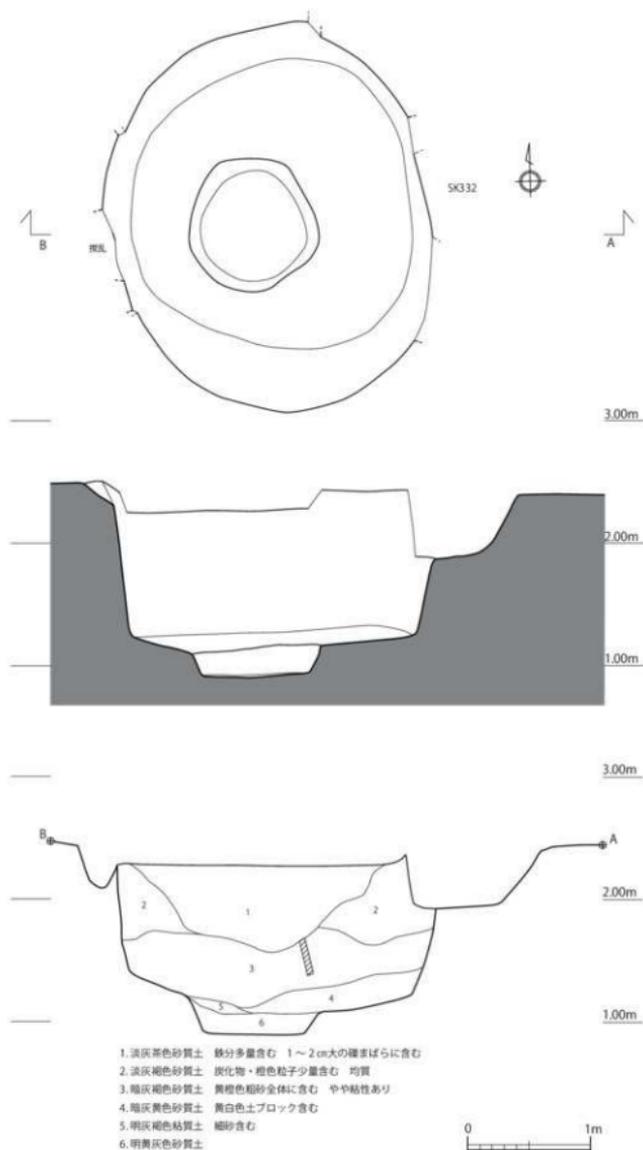
3 区中央南端の B11 グリッドで検出された井戸跡である。校舎基礎の掘乱 (S323) 及びくわらんか碗や肥前系の土瓶が出土する 3 区 S322 に切られる。平面形状は不整形円形、断面形状は逆凸状で 2 段掘りになっている。掘方の規模は長径 2.5 m、短径 1.8 m、検出面からの深さは 1.3 m を測る。遺構の底部ほぼ中央で木桶を確認した。



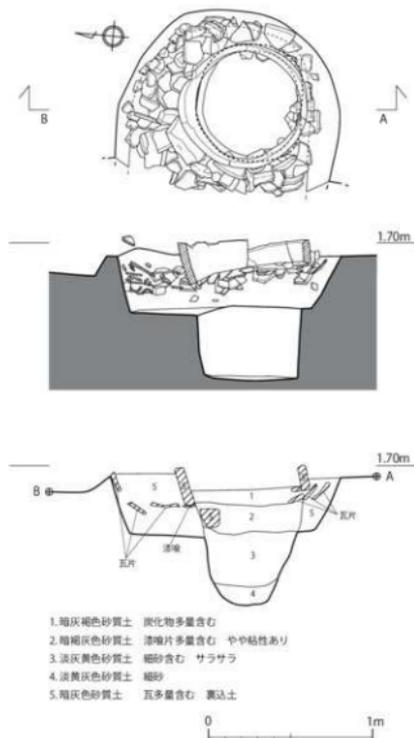
1. 淡茶灰色砂質土 橙色粘土ブロック含む
1～2cm大の礫まばらに含む
 2. 暗灰褐色砂質土 炭化物少量含む
よくしまる
 3. 淡灰茶色砂質土 5～10cm大の礫含む
しまり強い
 4. 淡灰褐色砂質土 粗砂 7の流れ込みが
 5. 淡灰色砂質土 粗砂 遺物僅かに含む
 6. 明茶灰色砂質土 1cm大の礫
鉄分やや多く含む
 7. 暗褐色砂質土 粗砂 遺物含む
2～3cm大の礫多量含む
 8. 暗灰色砂質土 粗砂 シルト質土含む
(崩落の高一部確定線)
 9. 淡灰色砂質土 粗砂
- ※1～4層は井筒撤去後の埋土
6～9層は築込め土



第90図 3区 SE030 遺構実測図 (1/30)



第 91 図 3 区 SE040 遺構実測図 (1/40)



第92図 3区SE060 遺構実測図(1/30)

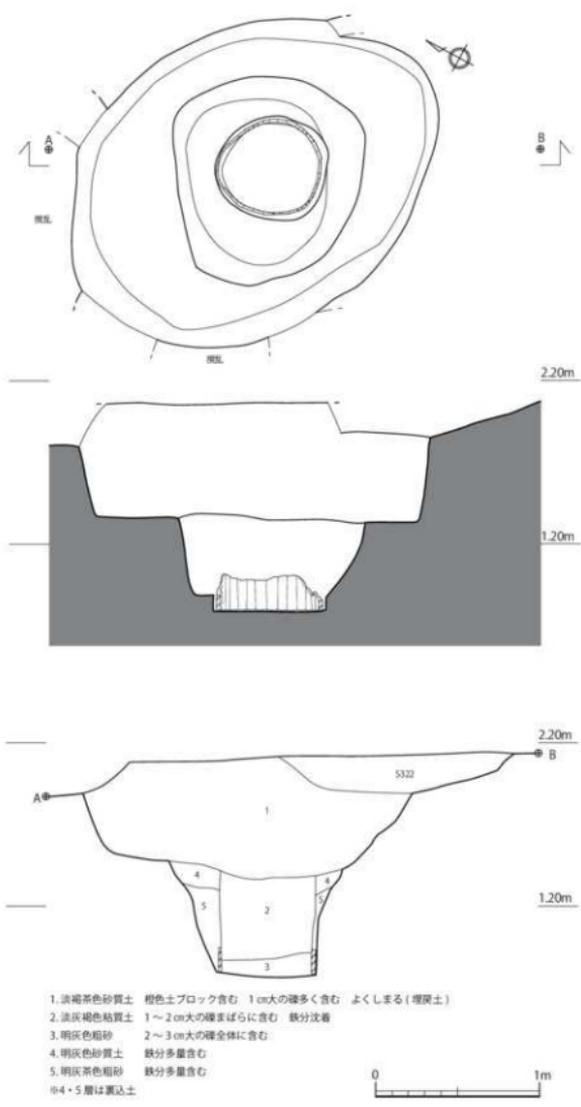
木桶は内径0.6m、残存する高さは0.2～0.3mを測り、6～10cm程の板材を29枚使用していた。残存状態が悪く、上部は腐食していた。土層観察の結果、埋土は大きく3層に区分され、掘り返しの埋土と井筒内、そして裏込めに相当するものである。とりわけ井筒内の埋土と(第93図第2層)と裏込め土(同図第4・5層)から掘方が2段掘りになる位置まで井筒が存在していたことが分かる。

遺物は、最上層の掘り返し埋土から肥前系染付蓋、関西系陶器火入れなどが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。

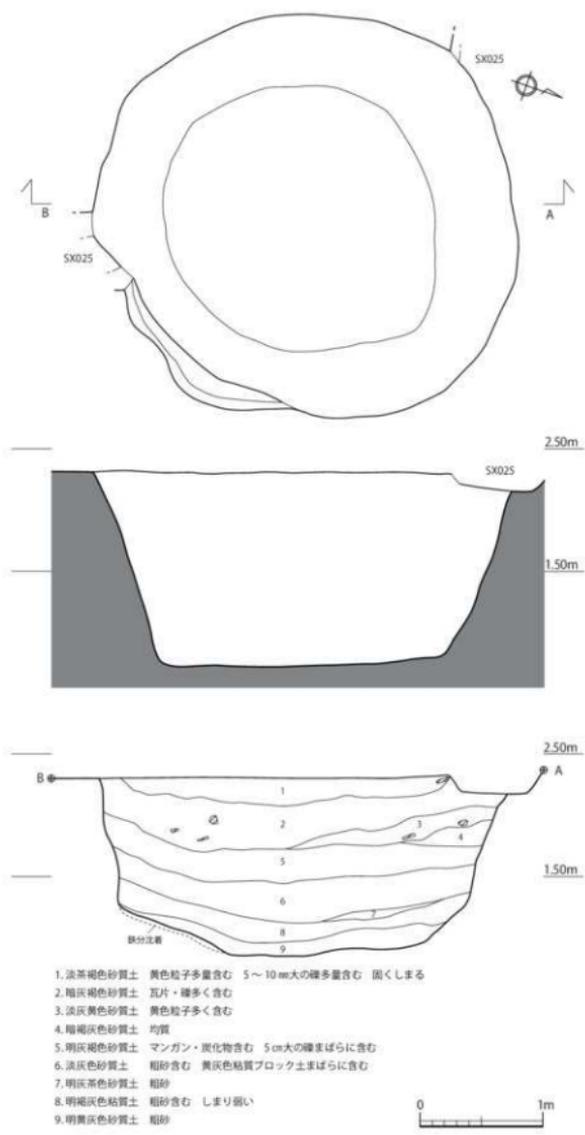
3区SE305(第94図、第340図、第341図1～4)

3区中央西寄りのF7グリッドで検出された井戸跡である。3区SX025に切られ、3区S512及び陶胎染付片や肥前系土瓶が出土する同S513を切る。平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長径3.5m、短径3.4m、検出面からの深さは1.6mを測り、最下部では湧水があり、鉄分の沈着が認められる。埋土は砂質土を基調とし、9層に区分される。小礫、瓦片、ブロック土を多く含んでおり、人為的に埋められたものと判断される。

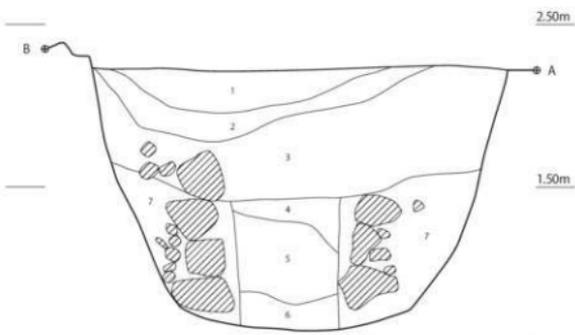
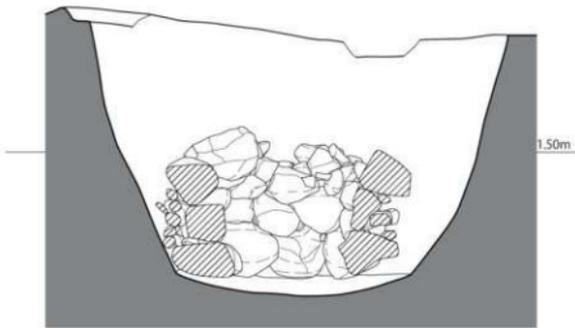
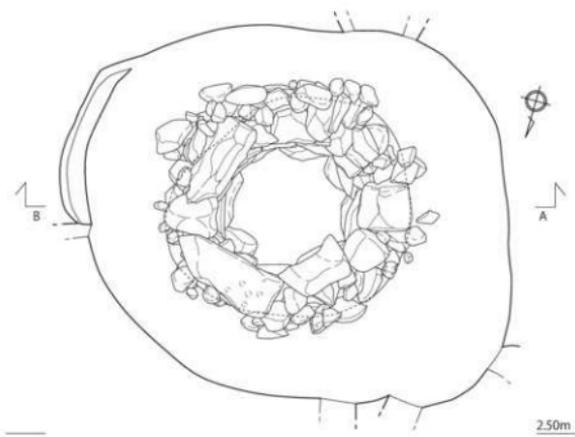
遺物は、焼継文字が書かれた肥前系染付小杯、肥前系染付端反碗蓋、肥前系白磁薬用合子の身、肥前系や福岡系の陶器摺鉢をはじめとして、土製品ミニチュア御神酒徳利や、ままごと道具の土製品かまど、鉄製鎌などが出



第 93 図 3 区 SE140 遺構実測図 (1/30)



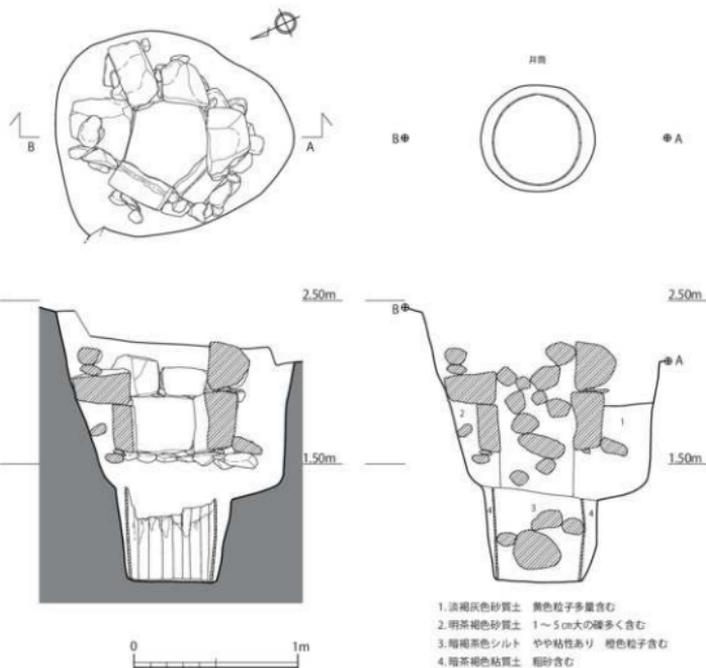
第 94 図 3 区 SE305 遺構実測図 (1/40)



- 1. 明茶褐色砂質土 1 cm大の礫含む
ややしまる
 - 2. 暗灰褐色砂質土 炭化物少量含む
しまり強い
 - 3. 淡黄灰色砂質土 よくしまる
 - 4. 淡灰黄色土 鉄分まばらに含む
 - 5. 明灰色粘質土 10 cm大の礫まばらに含む
黄色砂全体に含む
 - 6. 明黄褐色砂質土 粗砂
 - 7. 淡灰褐色砂質土 裏込土
- ◎1~3層は埋戻し土
④4~6層は井筒内埋土



第 95 図 3 区 SE357 道構実測図 (1/30)



第96図 3区SE515遺構実測図(1/30)

土している。また、これらには3区SK315から出土した肥前系外面青磁碗(第341図4)と接合するものもある。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は19世紀前半～中頃と考えられる。

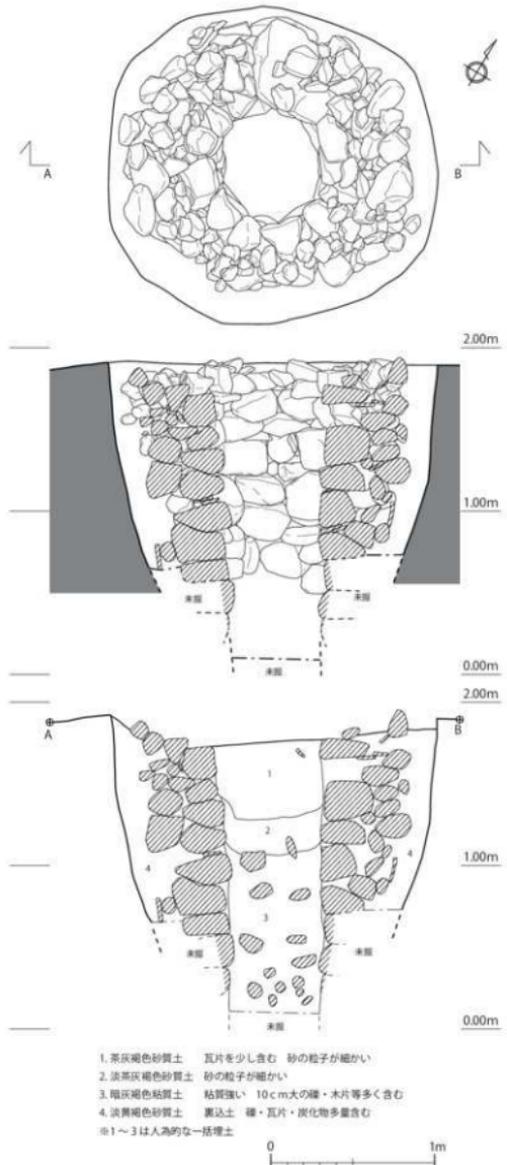
3区SE357(第95図、第341図5～17)

3区西側中央のE5グリッドで検出された石積みの井戸跡である。ガラス瓶が出土する3区S004と同SX025に切られる。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長径2.6m、短径2.3m、検出面からの最大深度は1.7mを測る。石積みの井戸枠は直径約0.8mの円形を呈し、高さは0.7mを測る。0.2～0.5m程の自然石を使用して積み上げており、裏込めには小礫を詰めている。埋土の土層観察の結果、掘方の上位はすべて掘り返されたものと判断される。また、石積みのさらに内側に垂直に立ち上がる土層(第95図第4～6層)が認められることから、木製の桶など有機質の井筒が存在していたことが分かる。

遺物は、掘り返しの埋土から瀬戸美濃産染付端反碗や肥前系染付小杯をはじめ、備前系の朱泥陶器、茶臼などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀中頃と考えられる。

3区SE515(第96図、第341図18)

3区中央のD11グリッドで検出された石組の井戸跡である。3区S857を切り、同S037・S167・2S262に切られる。平面形状は不整形円形、断面形状は逆凸状の2段掘りとなっている。掘方の規模は長径1.5m、短径1.3m、検出面からの最大深度は1.6mを測る。井筒は石組で、直径は約0.45mを測る。平坦に加工された0.3～0.7



第 97 図 4 区 SE008 遺構実測図 (1/30)

mの石を使用し、側面に溝状の加工痕があるものや凹状のものもあり、石材を転用している可能性がある。その下位には0.1m程の小礫が敷き詰められており、掘方が2段掘りになる位置からさらに下位で木桶が確認された。木桶は直径0.55m、残存高0.55mを測る。出土遺物は僅少で、遺構の時期は特定できていない。

4区 SE008(第97図、第342図)

4区南西のJ1グリットで検出された石積み井戸跡である。上部や堀方の一部を旧校舎基礎やそれに伴う排水管などの掘削に切られる。調査途中で粗砂の掘方壁面が崩落したため、安全上の理由から完掘はできていない。平面形状は円形を呈し、断面形状は逆台形を呈すると推測される。掘方の直径は約2.0m、検出面からの深度は $1.8 + \alpha$ mを測る。石積みは、0.3～0.5m大の自然石を積上げ、裏込めには0.1～0.2m大の礫と瓦片が充填される。また、石積みの外周側面と裏込め土の間に平瓦片が立てられた場所が数カ所確認されており、裏込め土が井筒内に流入を止め、石積みの崩壊を防ぐ目的で施工された可能性がある。石積みの内径は、上端で0.6m、確認できた最深部で0.5mを測る。その埋土は砂質土と粘質土に大きく2分される。下位の第3層には多量の礫や木片が含まれており、人為的に埋め戻されたものと判断される。

遺物は僅少で、井筒内から肥前系白磁碗、備前産陶器建水、軒平瓦などが、裏込め土からは軒平瓦や、図示できていないが口縁部内面に四方禪文を有する肥前系染付皿の小片などが出土しており、これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

土坑(火災処理土坑)

3区 SK070(第98図、第343～345図・第346図1～6)

3区中央西寄りのE8グリットで検出された土坑である。3区SK479を切る。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は長軸3.6m、短軸1.6m、検出面からの深さは0.8mを測る。主軸はN-17°-Wとやや北西-南東方向を指向する。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊、炭化物、壁土片を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、肥前系染付筒型碗、肥前系外面青磁碗、肥前系陶器掃鉢をはじめ、土師質土器の小皿や肥前系染付皿や同碗など同一規格の磁器が一定量出土している。18世紀前半頃のまとまりのある一群と18世紀後半頃のものがあるのが特徴である。埋土に炭化物や焼土塊を多く含み、出土した遺物に被熱の痕跡が認められることから、本遺構は火災処理土坑と判断される。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と位置づけられるが、土師質土器小皿や同一規格の肥前系染付の皿や碗の存在を踏まえれば、18世紀前半頃には遺構はずでに廃絶していた可能性がある。

3区 SK075(第99図、第346図7～9・11～20・第347～350図)

3区南中央のB8グリットで検出された土坑である。旧校舎の基礎である掘削に切れ、3区SK498・SK499・SK501・SK503を切る。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸3.1m、短軸2.9m、検出面からの深さは0.9mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊、炭化物を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたものと判断されるものである。遺物は、その多くに被熱の痕跡が認められ、焼継文字を有する肥前系染付端反碗、肥前系外面青磁碗、肥前系陶器鉢・甕、関西系陶器碗・向付、備前焼徳利・火入れなどをはじめ、肥前系染付皿(第346図11・12)や肥前系染付型紙刷りの菊唐草文変形皿(同図7・8)、肥前系白磁猪口(同図13・14)など同一規格の肥前系の磁器が一定量出土しており、その中には後述する3区SK080と接合するもの(第346図8・9・12・14、第350図)も数多く認められる。また、焼継文字で「岡本■」と書かれている肥前系染付端反碗(第346図18)が出土しており、当該地が「岡本氏」の屋敷推定地であることと符合する。本遺構の出土遺物も18世紀前半頃のまとまりのある一群と19世紀前半頃のものがあるのが特徴である。埋土に炭化物や焼土塊を多く含み、多量に出土した遺物に被熱の痕跡が認められることから、本遺構は

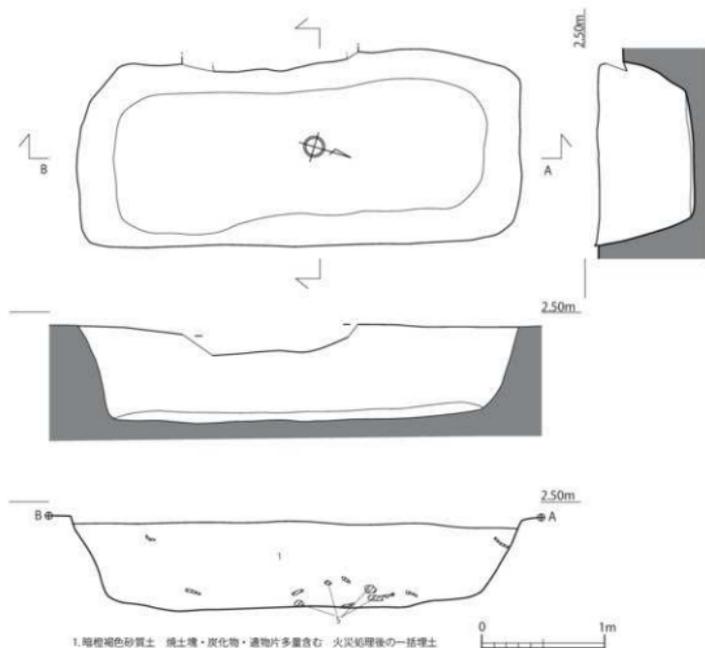
火災処理土坑と判断される。

出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と位置づけられるが、18 世紀前半頃のまとまりのある一群の存在を踏まえれば、その時期に遺構はすでに廃絶していた可能性がある。

3 区 SK080(第 100 図、第 346 図 8 ～ 10・12・14・第 350 図・第 351 図・第 352 図 1 ～ 4)

3 区中央南端の A9 グリッドで検出された土坑である。校舎の基礎に一部削平され、遺構の南側は調査区外へ延びる。また、第 2 調査面で検出した 3 区 S592 とは重複する。平面形状は長方形とみられ、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 3.6 m、短軸 1.7 + a m、検出面からの深さは 0.45 m を測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊や炭化物を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、大半に被熱の痕跡が認められ、肥前系青磁瓶、肥前系染付鉢、肥前系白磁小瓶、肥前系陶器鉢、瀬戸黒と呼ばれる瀬戸美濃産碗などのほか、軒丸瓦などの瓦片も数多く出土している。また、18 世紀前半頃の肥前系染付皿(第 346 図 10) が 13 点、3 区 SK075 と接合するもの(第 346 図 8・9・12・14、第 350 図) も認められる。本遺構の出土遺物も 18 世紀前半頃の一群と 19 世紀前半頃のものがあるのが特徴である。埋土に炭化物や焼土塊を多く含み、大量に出土した遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と考えられる。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没年代は 19 世紀前半頃と判断されるが、18 世紀前半頃の一群の存在を踏まえれば、この頃には遺構はすでに廃絶していた可能性がある。なお、切り合い関係は検証できないが、本遺構と重複する第 2 調査面で検出された 3 区 S592 の時期も 19 世紀前半頃とみられ、両者の埋没年代は矛盾しない。

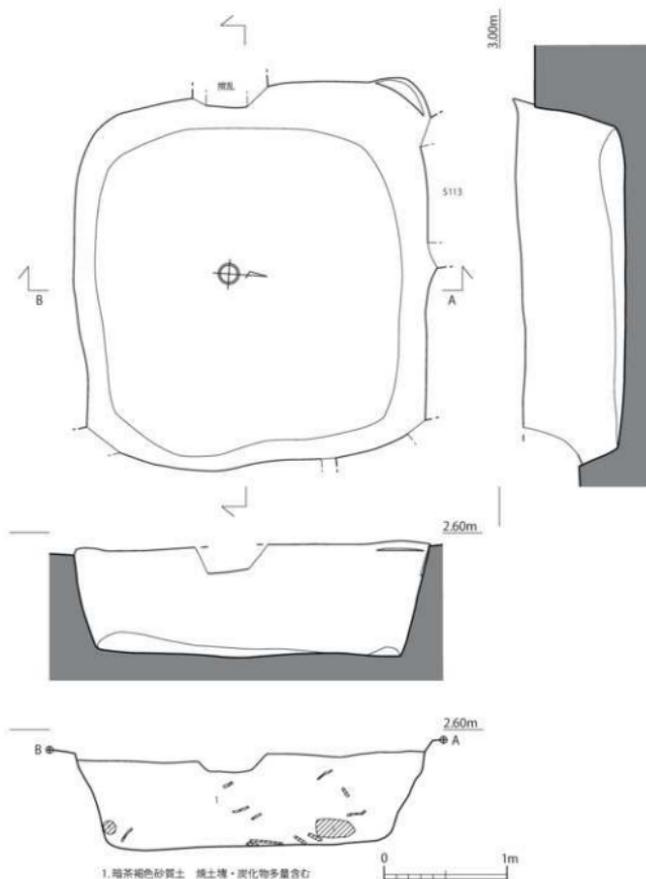


第 98 図 3 区 SK070 遺構実測図(1/40)

3区SK090(第101図、第352図5～12・第353～355図)

3区東側中央のG17グリットで検出された土坑である。プールの基礎に削平され、3区SK201に切られる。平面形状は長方形、断面形状はほぼ方形を呈す。堀方の規模は長軸2.6m、短軸1.6m、検出面からの深さは1.1mを測る。埋土は砂質土を基調とし、2層に区分される。これらは西側から堆積したものとみられ、焼土塊と遺物を多量に含むことから人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。

遺物には、多くに被熱の痕跡が認められ、肥前系の染付皿・碗・水注、広東碗蓋、肥前系白磁猪口・壺、肥前系瑠璃軸壺、肥前系陶器鉢・播鉢・煎鉢、関西系陶器碗・播鉢、土師質土器壺、同小皿、温石などの多様な器種が存在する。本遺構の出土遺物も17世紀後半～18世紀前半頃のまとまりのある一群と18世紀後半～19世紀初頭頃のものがあるのが特徴である。埋土に焼土塊を多く含み、多量に出土した遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と判断される。これらの帰属年代から遺構の埋没年代は18世紀後半～19世紀初頭と



第99図 3区SK075 遺構実測図(1/40)

位置づけられるが、17世紀後半～18世紀前半頃のまとりのある一群とりわけ土師質土器小皿の帰属年代から18世紀前半頃には遺構はすでに廃絶していた可能性がある。

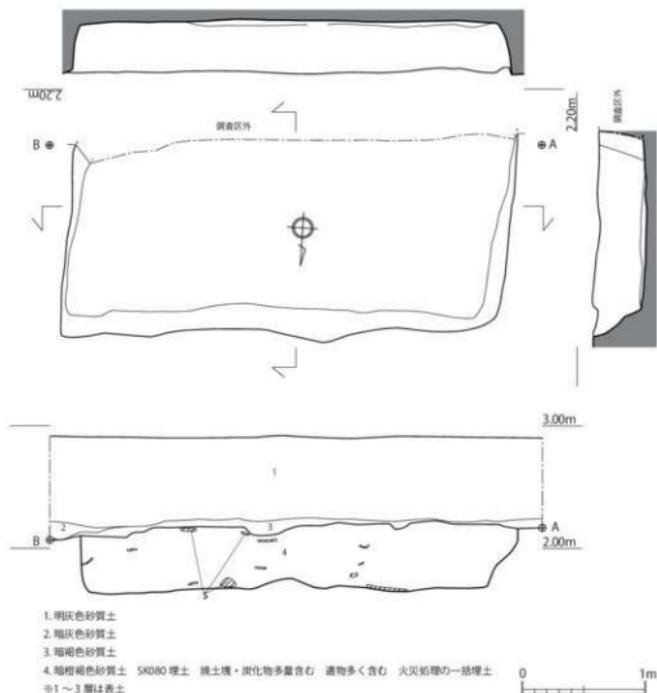
3区 SK095(第102図、第356図)

3区南東隅のC18グリットで検出された土坑である。プールの基礎に削平され、3区SK285を切る。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸3.4m、短軸1.2m、深さ1.0mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊を多量含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

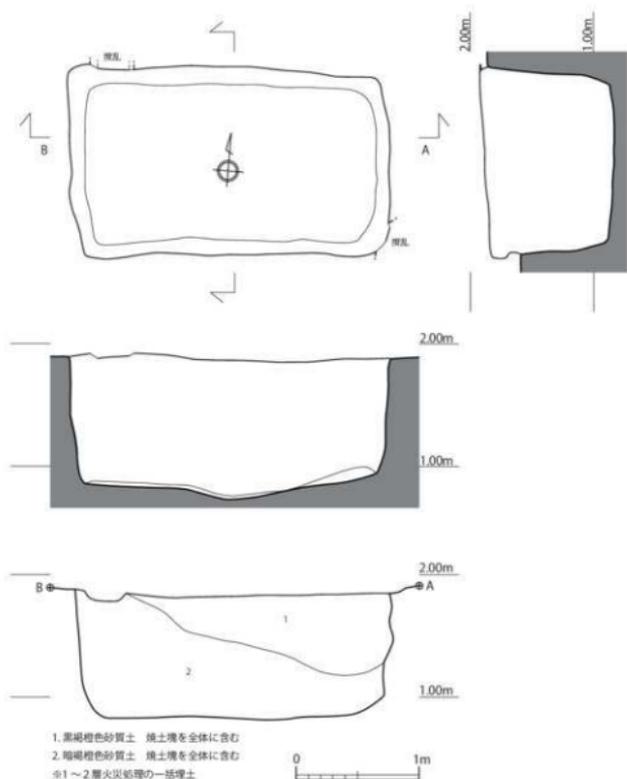
遺物は、大半に被熱の痕跡が認められ、肥前系の染付丸碗、肥前系染付蓋付鉢の蓋、肥前系青磁瓶、肥前系陶器土瓶蓋をはじめとして、土師質土器小皿や関西系陶器搗鉢などが出土している。本遺構は、埋土に焼土塊を多く含み、出土した遺物に被熱の痕跡が認められることから、火災処理土坑と判断される。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

3区 SK160(第103図、第357図1～4)

3区南西端のA3グリットで検出された土坑である。道具の基礎に削平され、南側を攪乱に切られる。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈するとみられる。堀方の規模は長軸1.6+αm、短軸1.1m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、炭化物や焼土ブロックを全体に含んでおり、人為的に埋め



第100図 3区SK080遺構実測図(1/40)



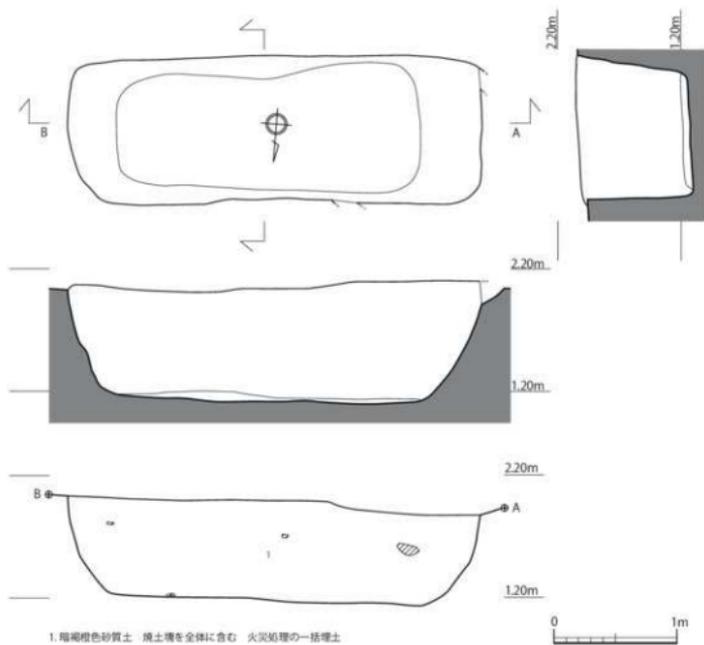
第 101 図 3 区 SK090 遺構実測図 (1/40)

戻された埋土と判断されるものである。遺物は僅少で、肥前系染付の雨降文仏飯器、肥前系陶器の刷毛唐津碗などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

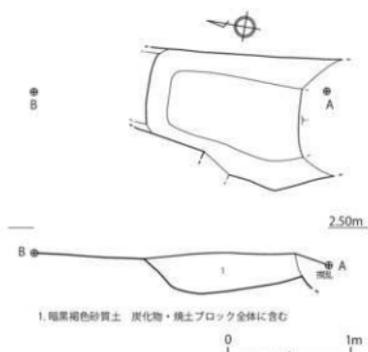
3 区 SK250 (第 104 図、第 357 図 5 ~ 13)

3 区南西隅の B 1 グリットで検出された土坑である。校舎の基礎と 3 区 S149・467・468 に切られ、肥前系染付丸碗が出土する 3 区 S502 を切る。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸 2.3 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.6 m を測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊、炭化物を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物の多くには被熱の痕跡が認められ、肥前系外面青磁碗をはじめ、肥前系染付蓋付鉢、京・信楽系陶器の端反碗などが出土している。また、埋裏遺構である 3 区 SX255 から出土したものと接合する肥前系染付の丸碗 (第 357 図 13) がある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半と考えられる。



第 102 図 3 区 SK09S 遺構実測図 (1/40)



第 103 図 3 区 SK160 遺構実測図 (1/40)

3区SK270(第105図、第357図14)

3区南西のC2グリットで検出された土坑である。板ガラスが出土する3区S068と肥前系染付筒形碗が出土する3区S146に切られる。平面形状は不整楕円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸2.1m、南北1.1m、検出面からの深さは0.7mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊や炭化物を多量に含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は僅少で、肥前系の陶器裏(第357図14)のほか、小片のため図示できていないが肥前唐津系陶器の陶胎染付の小片が出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

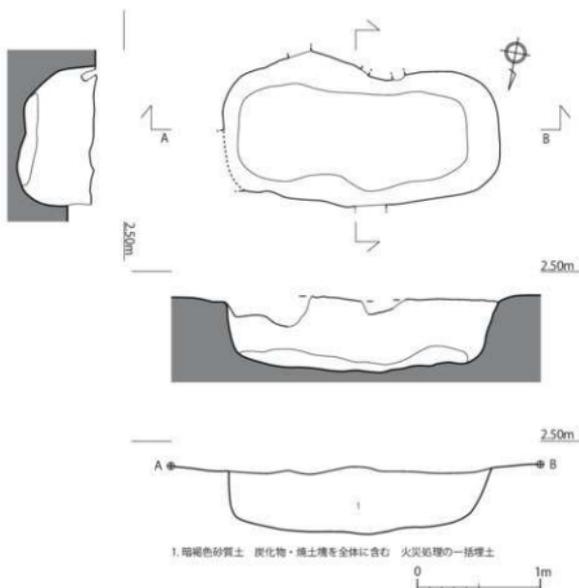
4区SK010(第106図、第358図1~5)

4区南東のK18グリットで検出された土坑である。南側を排水菅の掘込に切られる。平面形状は不整楕円形を呈すると推測され、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸1.2m、短軸 $0.7+\alpha$ m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊を多量含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、焼継痕を有する肥前系染付段重や、瀬戸美濃産の染付端反碗、透明軸が施された土師質土器皿(施軸かわらけ)などが出土している。その帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半~中頃と考えられる。

4区SK020(第107図)

4区南東のK16グリットで検出された土坑である。北側を旧校舎の基礎に切られる。平面形状は方形を呈するとみられ、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸1.4m、短軸 $0.8+\alpha$ m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊を多量含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるもの



第104図 3区SK250 遺構実測図(1/40)

である。

遺物は僅少で、小片のため図示できていないが、肥前系染付の丸碗などが出土している。その帰属年代から、遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

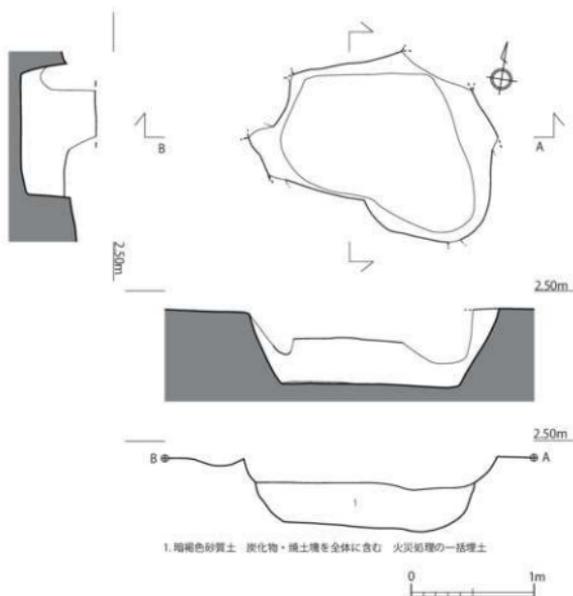
4 区 SK030(第 108 図、第 358 図 6 ~ 23)

4 区南東の K14 グリッドで検出された土坑である。南側を排水管の攪乱に、北側を旧校舎の基礎や銅板転写の磁器片が出土した 4 区 S097、板ガラスなどが出土した 4 区 S090 に切られる。平面形状は長方形を呈し、断面形状は方形状を呈するとみられる。堀方の規模は長軸 3.3+ a m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土は砂質土の単一土層で、炭化物や焼土塊を多量含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

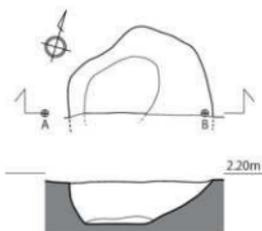
遺物の多くに被熱の痕跡が認められ、肥前系染付皿、肥前系外面青磁碗、肥前系染付筒型碗、関西系陶器の小杉碗、鉛製品沈子などが出土している。その中には、4 区 SK095 から出土したものと接合する青磁盃台、土師質土器焙烙 (第 358 図 22・23) などがある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、18 世紀後半頃と考えられる。

4 区 SK075(第 109 図)

4 区南東の J18 グリッドで検出された土坑である。4 区 SX007 に切られる。平面形状は不整長方形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 2.8 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土は砂質土の単一土層で、焼土塊、炭化物を多量含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。この埋



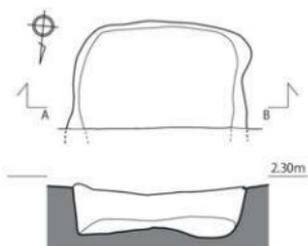
第 105 図 3 区 SK270 遺構実測図 (1/40)



1. 暗灰褐色砂質土 焼土塊多量に含む 炭化物・瓦片まばらに含む



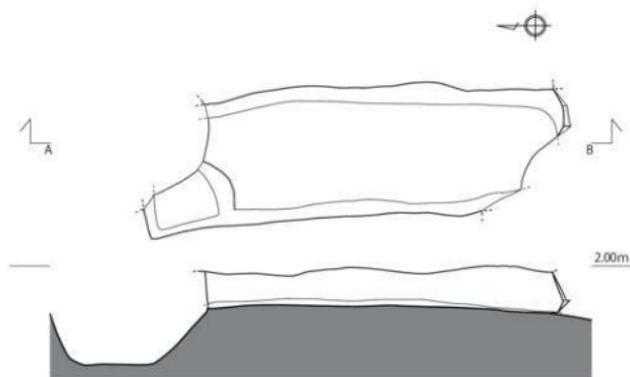
第 106 図 4 区 SK010 遺構実測図 (1/40)



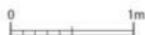
1. 暗灰褐色砂質土 焼土塊多量に含む 炭化物まばらに含む



第 107 図 4 区 SK020 遺構実測図 (1/40)



1. 暗灰褐色砂質土 焼土塊・炭化物多量に含む 遺物まばらに含む



第 108 図 4 区 SK030 遺構実測図 (1/40)

土を採取して理化学分析を行った結果、炭化物の中にはマツ属とタケ亜科の木材が含まれていることが判明している（詳細は第VI章を参照）。

遺物は僅少で、小片のため図示できていないが、被熱した蛇ノ目凹形高台を有する肥前系染付猪口などが出土している。その帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀後半以降と考えられる。

4区 SK095(第110図、第359図)

4区南東のK16グリットで検出された火災処理土坑である。南側を攪乱及び板ガラスが出土した3区S090に切られる。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸2.4+ α m、短軸1.2m、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、多量に焼土や炭化物のほか、被熱した遺物、礫を含んでおり、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は僅少で、肥前系染付丸碗や肥前系青磁染付の香炉、「助之丞」と刻印された軒丸瓦(第359図3)などが出土している。この中には、4区SK030から出土したものと接合する青磁盃台や土師質土器焙烙(第358図22・23)がある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

土坑(廃棄土坑)

3区 SK035(第111図、第360図)

3区南中央西寄りB7グリットで検出された廃棄土坑である。3区S102に切られる。平面形状は不整長方形、断面形状は逆台形を呈し、中心部分がやや深くなる。堀方の規模は長軸2.0m、短軸1.6m、検出面からの最大深度は0.6mを測る。埋土は砂質土を基調とし、2層に区別される。上層には炭化物や礫、そして遺物が多く含まれており、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、肥前系の染付皿や碗、肥前系の外面錆軸の筒型碗などのほか、土製の人形や特筆されるものとして景徳鎮窯系青花の蓮華(第360図5)がある。それらの帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。



第109図 4区SK075遺構実測図(1/40)

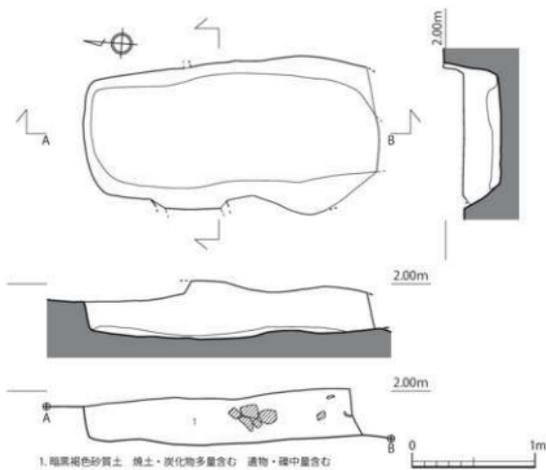
3 区 SK042 (第 112 図、第 361～366 図)

3 区南西の C 3 グリッドで検出された廃棄土坑である。第 2 調査面で検出した 3 区 SK345 と重複する。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 3.3 m、短軸 2.9 m、検出面からの深さは 0.8 m を測る。埋土中からは遺物が大量に出土しており、焼継痕や焼継文字を有する肥前系染付皿・大皿・碗、肥前系染付端反碗、肥前系色絵の仏飯器や御神酒德利、肥前系の青磁香炉や白磁合子、染付水滴、瀬戸美濃産コバルト軸の小杯、肥前系陶器の播鉢や関西系陶器の行平鍋、瓦質土器の火鉢・熨斗、土師質土器の焙烙や胡麻煎り、土師質土器の小皿をはじめ、人形・ままごと道具・箱庭道具など多種多様である。また、焼継文字には「上原」・「上原■」と書かれているものがあり、当該地が「上原氏」の屋敷推定地であることと符合する。さらに、動物遺存体や種実も多く出土しており、理化学分析の結果、貝類ではアワビやサザエ、ヤマトシジミなど、魚類は解体痕を有するハタ科やタイ科のほか、サメ科やマダイ、ボラ科など、陸生動物としてはスッポン、キジ科、ニホンシカなど、種実ではモモが同定されており、食用の残滓と考えられている（詳細は第 VI 章を参照）。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は明治初期と考えられる。

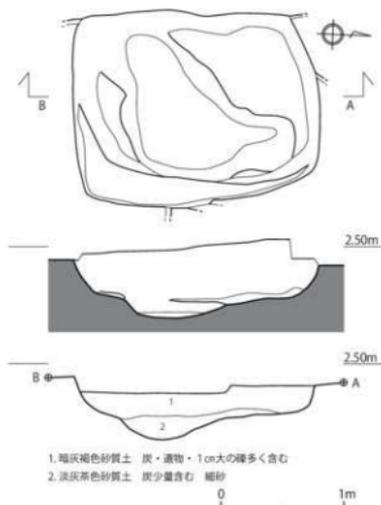
3 区 SK055 (第 113 図、第 367～369 図)

3 区中央北東寄りの G 12 グリッドで検出された廃棄土坑である。石板などが出土した 3 区 S018 に切れ、明治初期頃の同 SX206 を切る。平面形状は不整形円形、断面形状は緩やかな逆台形を呈す。堀方の規模は長軸 4.2 m、短軸 3.4 m、検出面からの深さは 1.2 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、8 層に区分される。遺物が大量に含まれることからこれらも人為的に埋め戻されたものとみられる。

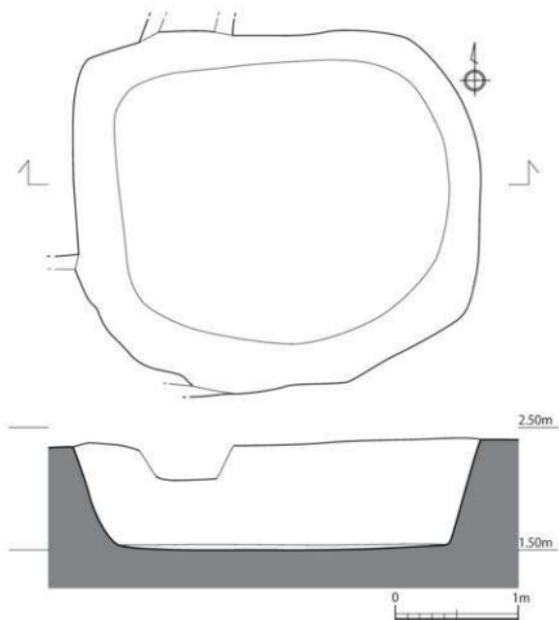
遺物は、肥前系染付皿、肥前系染付筒形碗・広東碗、瀬戸美濃産染付端反碗をはじめ、肥前系陶器碗・播鉢、関西系陶器碗・播鉢、志野焼皿、胎土目積み唐津陶器皿、絵唐津の皿、備前焼火入れ、土師質土器の小皿や風炉などが出土している。また、「神屋」と線刻された石板や、ろう石の石筆が出土している。これらは 12・13 世紀のものから 16 世紀末～17 世紀初頭頃のもの、そして幕末から明治前半頃のものまで混在する。出土遺物の帰属年代と遺構の切り合い関係から、本遺構の埋没年代は明治前半頃と考えられる。



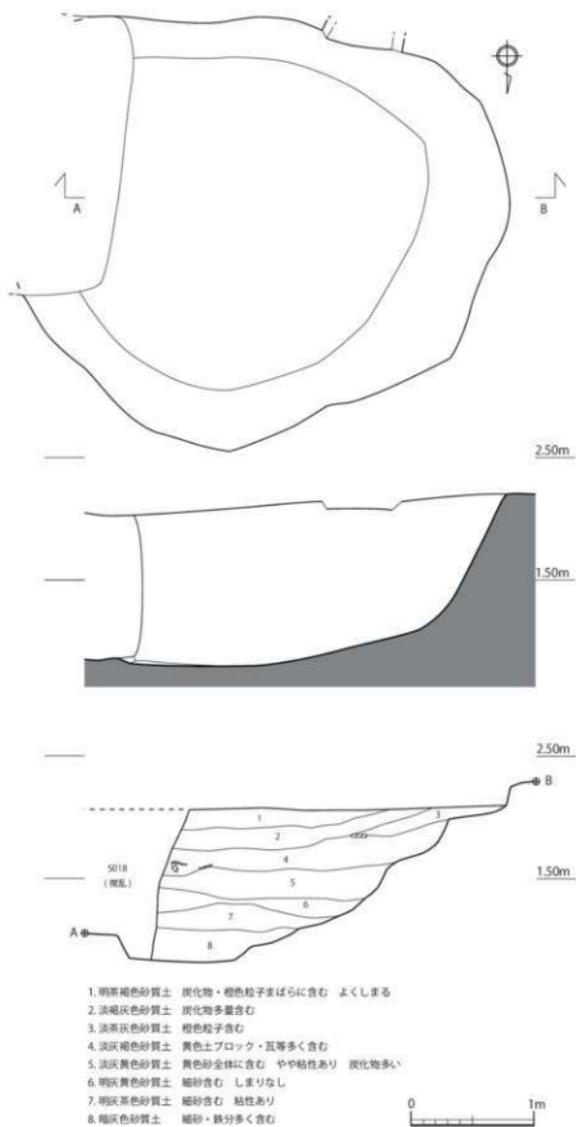
第 110 図 4 区 SK095 遺構実測図 (1/40)



第 111 図 3 区 SK035 遺構実測図 (1/40)



第 112 図 3 区 SK042 遺構実測図 (1/40)



第113図 3区SK055遺構実測図(1/40)

3区 SK082(第114図、第370図1～4)

3区中央のE9グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸1.7m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、貝殻片、炭化物を多量含む。

遺物は、貝殻片のほか、肥前系の外面青磁碗や関西系の陶器碗が出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。

3区 SK109(第115図、第370図5～11)

3区南西隅のA3グリッドで検出された廃棄土坑である。コバルト軸の磁器片が出土した3区S108に切られ、外面青磁碗が出土した3区S521を切る。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸1.4m、短軸1.2m、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土中に多量の遺物が含まれており、廃棄土坑と判断される。

遺物は、焼継痕のある肥前系染付皿、肥前系色絵鉢、瀬戸美濃産の染付碗、井戸枠の可能性のある大型瓦片などが出土しており、その帰属年代から、遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

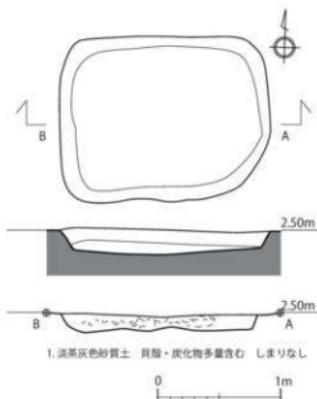
3区 SK125(第116図、第370図12・13、第371図1・2)

3区南東隅のB18グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は楕円形、断面形状はレンズ状を呈す。堀方の規模は長軸1.1m、短軸0.8m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土はシルト質土を基調とし、2層に区分される。瓦片が大量に出土しており、人為的に埋められたものと判断されるものである。

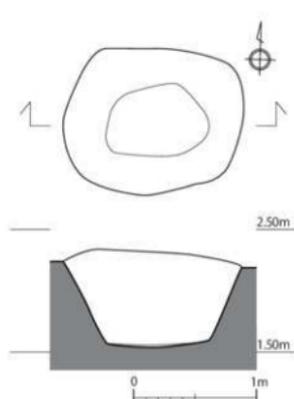
遺物は、肥前系染付端反碗や「宮三」の刻印が施された瓦質土器燵などが出土しており、その帰属年代から、遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

3区 SK135(第117図、第371図3～14)

3区南東隅のC19グリッドで検出された廃棄土坑である。3区SX110を切る。平面形状は長楕円形、断面形状は方形を呈する。堀方の規模は長軸2.1m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土を基調とし、3層に区分される。鯉瓦を含む大量の瓦片やブロック土を含むことから、人為的に埋められたものと判断されるものである。



第114図 3区 SK082 遺構実測図(1/40)



第115図 3区 SK109 遺構実測図(1/40)

遺物は、肥前系染付丸碗や肥前系染付輪花皿、福岡産陶器描鉢、鯉瓦、軒平瓦、軒丸瓦などが出土しており、福岡産の陶器描鉢の所属年代から遺構の埋没時期は、18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

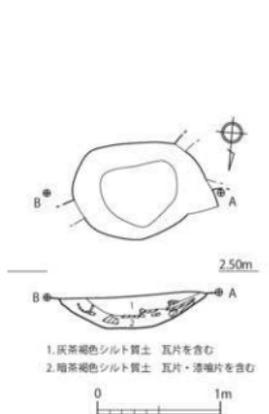
3区SK172(第118図、第372～374図)

3区北西のG3グリッドで検出された、大型の廃棄土坑である。近代以降に構築された漆喰製の池状構造物に削平される。3区S073・S180・S185に切られ、同SK496を切る。平面形状は不整形、断面形状も不整形で底面に凸凹を有する。堀方の規模は長軸8.4m、短軸6.2m、検出面からの深さは1.2mを測る。埋土中には遺物が多量に含まれており、「阿部」や「○や」と焼継文字を有する肥前系染付皿・碗、肥前系の色絵でアルファベットが書かれた碗、瀬戸美濃産の色絵碗・小坏、中国産の散蓮華、関西系陶器の「南西局付」と墨書で書かれた急須、瓦質製の土管、木製の下駄、すべて図示することはできていないが丸型、角型合わせて十数個体の火鉢、土製品の泥面子や人形、箱庭道具などの玩具、染付や色絵の水筒、石製硯などのほか、多くの石板や、鯉石、大量の板ガラスなどが出土している。多量の石板や板ガラスの存在などから遺構の埋没時期は、荷揚町小学校があった明治後半～大正と判断されるが、江戸時代の大量の遺物が含まれていることの明確な理由は特定できていない。

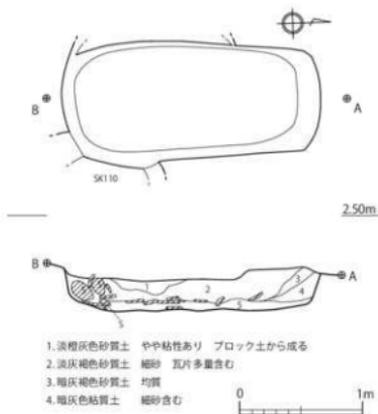
3区SK201(第119図、第375・376図、第377図1～7)

3区東端中央のE18グリッドで検出された廃棄土坑である。プールの基礎などの掘削と3区SE060に切られ、同SK090を切る。平面形状は不整形、断面形状も不整形で、底面には緩やかに凸凹を有する。堀方の規模は長軸6.2m、短軸5.2m、検出面からの深さは0.6mを測る。埋土はやや粘性のある砂質土を基調として、6層に区分される。シルト質土からなり、遺物やブロック土を多く含み、不整な堆積が認められることから、これらは人為的に埋められたものと判断されるものである。

遺物は、肥前系染付皿・碗・猪口・鉢、肥前系色絵仏飯器、瀬戸美濃産碗、肥前系陶胎染付御神酒徳利、京焼風陶器碗、砂目積みの唐津陶器皿、瓦質土器焔鉢、木製下駄、木刀、木製建材などのほか、図示できていないがコバルト軸の型紙摺り染付磁器片なども出土している。また、これらには3区SK090から出土したものと接合する関西系陶器手桶(第354図7)・肥前系白磁猪口(第353図11)や3区SX206のものと同接合する肥前系染付鉢(第377図7)がある。木製品の理科学分析の結果、下駄(第376図9)はクリ、丸柱(第377図4)や建材(第377図3)はマツ、木刀(第376図7)はスギなどが使われていた(詳細は第VI章を参照)。建材の中には一部炭



第116図 3区SK125遺構実測図(1/40)



第117図 3区SK135遺構実測図(1/40)

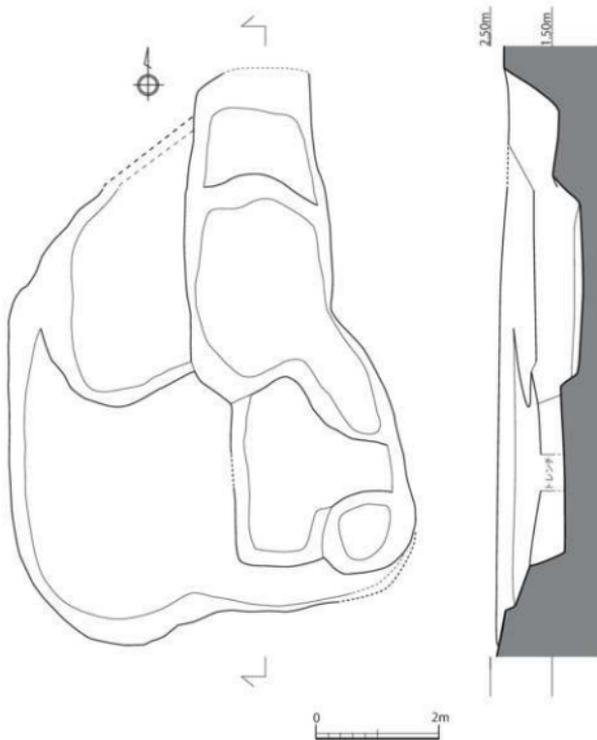
化しているものがあり、火を受けた後に廃棄された可能性が考えられる。出土した遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀後半頃と考えられる。なお、出土遺物に18世紀後半～19世紀前半のものが主体を占めているが陶磁器の存続幅として連続して併存し得るものと判断されるものである。

3区 SK234(第120図、第377図8)

3区東側中央のF15グリッドで検出された土坑である。旧校舎の排水管に切られる。平面形状は隅丸方形と推みられる。堀方の規模は南北1.1m、東西0.6+ α m、検出面からの深さは0.5mを測る。土坑の底面直上で瀬戸美濃産の瓶掛が1個体出土した。瓶掛の内面には灰が残存しており、火鉢として使用されていたものと判断される。出土遺物の帰属年代から、遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

3区 SK265(第121図、第378図1～4)

3区東側中央のE16グリッドで検出された廃棄土坑である。広東碗などが出土する3区S209に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸0.6+ α m、短軸0.4m、検出面からの深さは0.3mを測る。遺構は小規模ながら、多くの遺物が出土した。焼継痕の残る肥前系染付皿や碗をはじめ、史料形の染付碗などがある。その中には、第2調査面で検出し、19世紀前半頃の廃棄土坑3区SK335から出土し

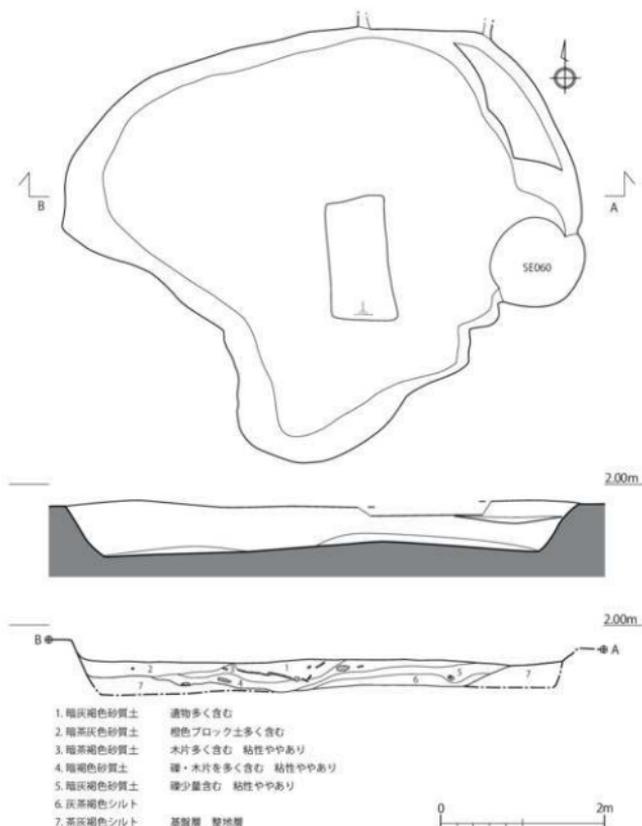


第118図 3区SK172 遺構実測図(1/80)

たものと接合する口縁部内面に墨弾きで連弁を施した染付皿(第378図4)がある。これらの帰属年代から、遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

3区SK268(第122図、第378図5~10)

3区東側中央のF16グリッドで検出された廃棄土坑である。罫子や板ガラスが出土した3区S208に切られる。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸1.2m、短軸0.8m、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土は砂質土を基調とし、2層に区分される。軒平瓦を含む瓦片が多量に含まれることから、人為的に埋められたものと判断されるものである。軒平瓦は、瓦当文が雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦を主体とする。その他の遺物では、肥前系の染付丸碗や、瀬戸美濃産陶器の色絵菊皿などが出土しており、その帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。



第119図 3区SK201遺構実測図(1/60)

3 区 SK285(第 123 図、第 378 図 11～15)

3 区南東端の C 18 グリッドで検出された土坑である。プールの基礎に削平され、火災処理土坑 3 区 SK095 に切られる。平面形状は隅丸方形とみられ、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 1.6 m、短軸 0.8+α m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、4 層に区分される。全体に炭化物を含み、不整な堆積が認められることから、掘り返しが行われた痕跡を示す堆積もしくは人為的に埋め戻された一連の埋土と位置付けられるものである。

遺物は、肥前系染付の碗や皿をはじめ、肥前系陶器の天目碗や肥前系陶器壺、景徳鎮系青花碗などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は、17 世紀後半～18 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SK290(第 124 図、第 378 図 16～28、第 379 図、第 380 図 1～3)

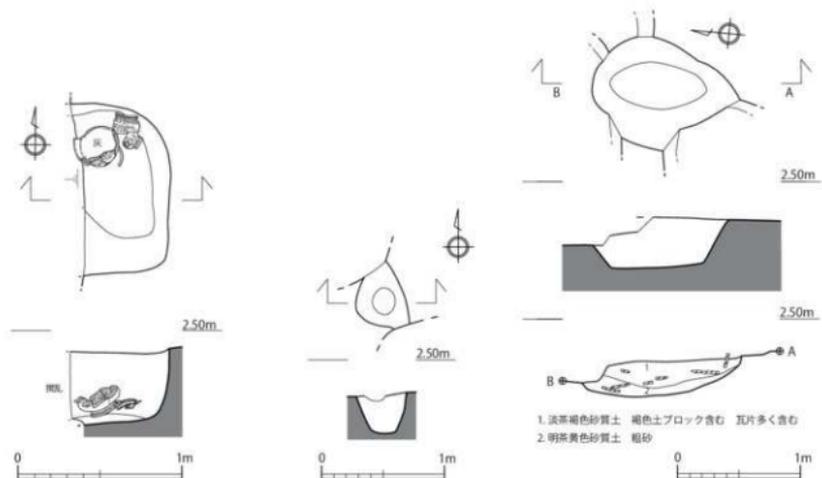
3 区北東の H18 グリッドで検出された廃棄土坑である。プール基礎の下位にあたり、銅板転写の磁器片などが出土する 3 区 SK251 に切られる。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸 1.6 m、短軸 1.3 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、2 層に区分される。これらには遺物が多量に含まれることから、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、肥前系染付筒型碗、蛇の目凹型高台を有する肥前系染付皿をはじめ、肥前系染付丸碗、京焼風陶器碗、陶胎染付碗、肥前系陶器の刷毛唐津の片口鉢などがある。18 世紀後半頃のものとして 17 世紀後半から 18 世紀前半頃の一群が混在する。これらの出土遺物から遺構の埋没年代は 18 世紀後半頃と考えられる。なお、出土遺物に時期差はあるものの、陶磁器の存続幅として連続して併存し得るものと判断されるものである。

3 区 SK315(第 125 図、第 380 図 4～13)

3 区北西の G 6 グリッドで検出された土坑である。3 区 SX025 に切られ、同 SK320 を切る。平面形状は不整形円形、断面形状はレンズ状を呈する。堀方の規模は長軸 2.7 m、短軸 1.9 m、検出面からの深さは 0.7 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、4 層に区分される。出土遺物が多いことから、廃棄土坑と判断される。

遺物は、肥前系の染付広東碗をはじめ、瀬戸美濃産の陶器紅皿、関西系陶器色絵碗などが出土している。これ



第 120 図 3 区 SK234 遺構実測図(1/30) 第 121 図 3 区 SK265 遺構実測図(1/40) 第 122 図 3 区 SK268 遺構実測図(1/40)

らには3区 SX005の裏込土から出土したものと接合する肥前系染付広東碗(第380図13)や3区 SE305のものと接合した肥前系外面青磁碗(第341図4)がある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、19世紀前半頃と考えられる。

3区 SK332(第126図、第381図1~9)

3区中央北寄りのG9グリッドで検出された廃棄土坑である。3区 SE040に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈するとみられる。堀方の規模は長軸3.4+α m、短軸2.5+α m、検出面からの深さは1.0 mを測る。

遺物は多く、肥前系染付の梵字文の碗や肥前系外面青磁碗をはじめ、人型や動物形の青磁香炉(第381図5)などが出土している。また、3区 S894から出土したものと接合する肥前系青磁の香炉がある。これらの帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。

3区 SK368(第127図、第381図10~14)

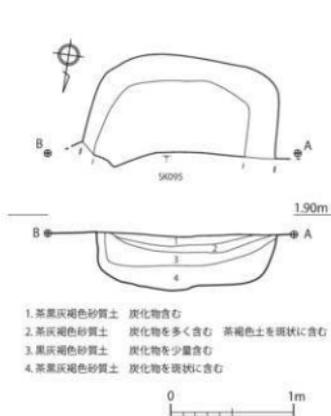
3区南西のA6グリッドで検出された廃棄土坑である。南側を遊具基礎に切られる。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸1.4 m、短軸0.8+α m、検出面からの深さは0.6 mを測る。埋土はシルト質土を基調とし、2層に区分される。これらには遺物を多く含むことから、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、肥前系染付の丸碗や、肥前唐津系陶器碗・播鉢をはじめ、髪盥などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

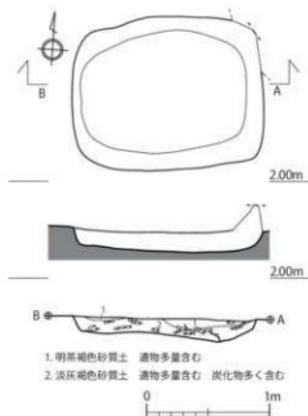
3区 SK391(第128図、第381図15~17)

3区北東のG17グリッドで検出された廃棄土坑である。クロム軸による軸下彩の磁器片が出土する3区 S219に切られる。平面形状は隅丸方形を呈するとみられ、断面形状は緩やかなV字状を呈する。堀方の規模は、長軸1.5 m、短軸1.1+α m、検出面からの深さは0.6 mを測る。埋土はシルト質土を基調とし、4層に区分される。これらには炭化物や遺物を多く含むことから、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

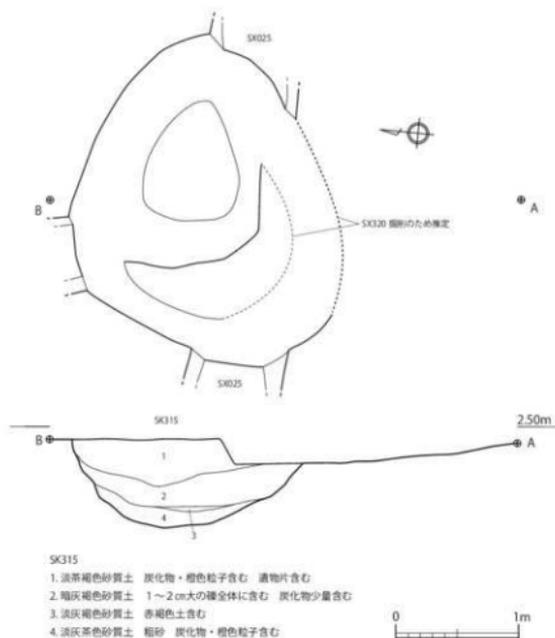
遺物は、肥前系の染付筒型碗、染付皿などが出土しており、なかでも内面見込みに軸剥ぎのある肥前系染付皿



第123図 3区 SK285 遺構実測図(1/40)



第124図 3区 SK290 遺構実測図(1/40)



(第 381 図 16) には口縁部に打ち欠きの痕跡が認められる。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半頃と考えられる。

3 区 SK431 (第 129 図、第 381 図 18 ~ 27)

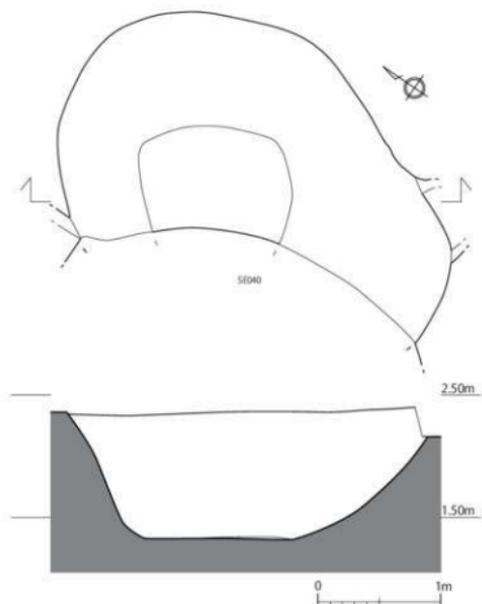
3 区南端中央の A11 グリッドで検出された廃棄土坑である。南側が調査区外へと延びる。平面形状は方形を呈すると推測され、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 2.1 m、短軸 $0.5 + a$ m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。

遺物は多く、肥前系の染付端反碗・広東碗をはじめとして、京・信楽系の面取りを有する陶器碗や土師質土器の植木鉢などが出土し、わずかに胎土目積み唐津陶器皿など 16 世紀末 ~ 17 世紀初頭頃のものも混在する。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

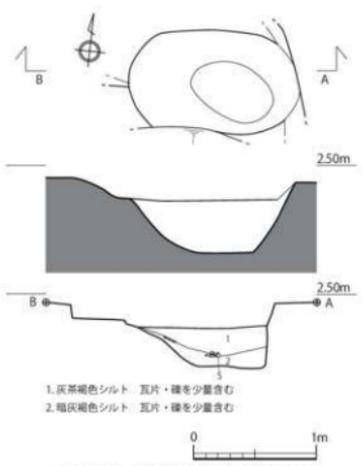
3 区 SK447 (第 130 図、第 382 図 1 ~ 3)

3 区北東端の G18 グリッドで検出された廃棄土坑である。学校プールの基礎の下位にあたり、3 区 SK251 に切られる。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 1.6 m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。

遺物は多く、肥前唐津系陶器碗や絵唐津皿などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀前半頃と考えられる。

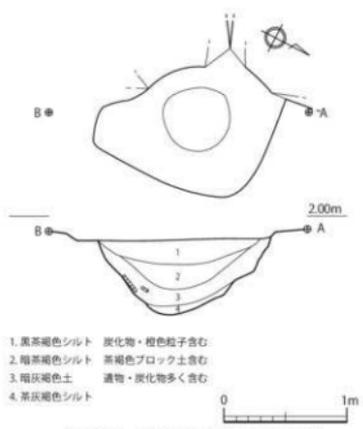


第126図 3区SK332 遺構実測図(1/40)



1. 灰茶褐色シルト 瓦片・礫を少量含む
2. 暗灰褐色シルト 瓦片・礫を少量含む

第127図 3区SK368 遺構実測図(1/40)



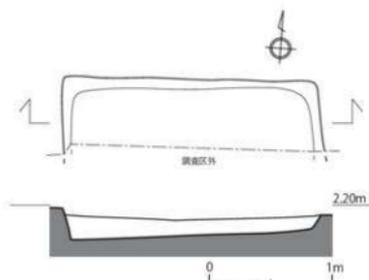
1. 黒茶褐色シルト 炭化物・橙色粒子含む
2. 暗茶褐色シルト 茶褐色ブロック土含む
3. 暗灰褐色土 遺物・炭化物多く含む
4. 茶灰褐色シルト

第128図 3区SK391 遺構実測図(1/40)

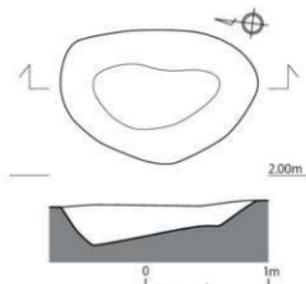
3区 SK479(第131図、第382図4～14)

3区中央のF8グリッドで検出された廃棄土坑である。南側を火災処理土坑の3区SK070に切られ、丸碗片などが出土する同SK482を切る。平面形状は不整形円形とみられ、断面形状は逆台形を呈する。長軸3.8+ α m、短軸2.1m、検出面からの深さは0.4mを測る。

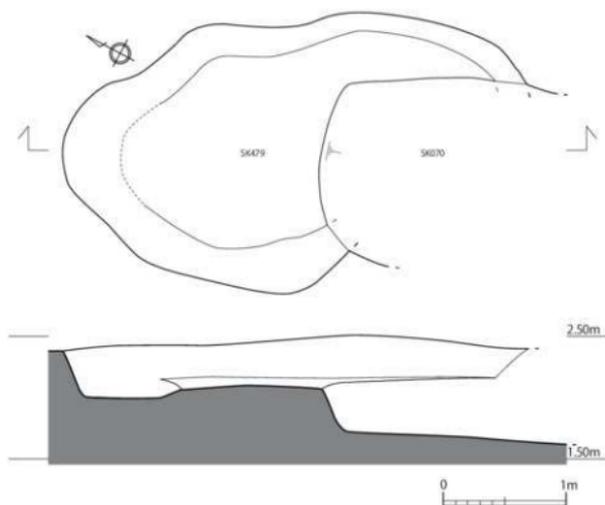
遺物は多く、肥前系外面青磁碗の蓋や肥前系染付の望料形の碗をはじめ、肥前系陶器や瀬戸美濃産陶器の播鉢、煙管などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。



第129図 3区SK431 遺構実測図(1/40)



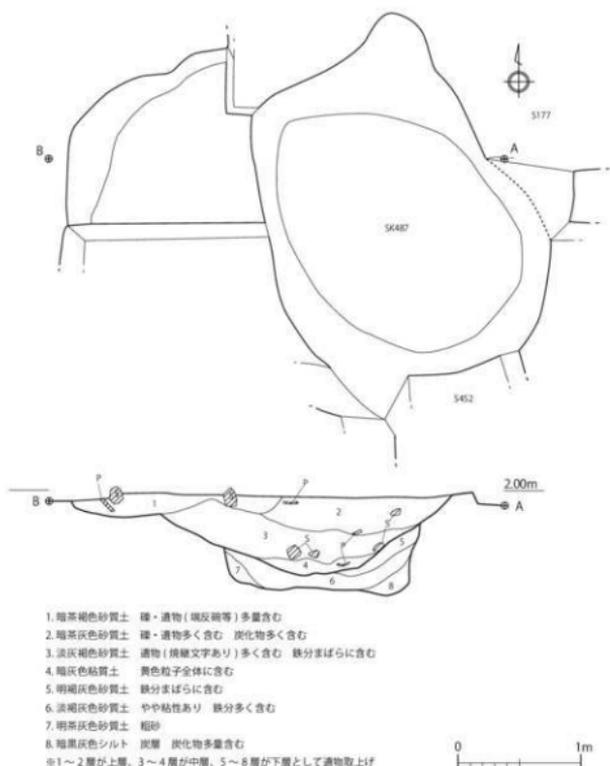
第130図 3区SK447 遺構実測図(1/40)



第131図 3区SK479 遺構実測図(1/40)

3区SK487(第132図、第383図)

3区中央北東寄りのG11グリッドで検出された廃棄土坑である。コバルト軸の磁器片が出土した3区S179に切れ、同SD452を切る。平面形状は不整形形、断面形状も不整形で緩やかな2段掘りになっている。長軸4.0m、短軸3.4m、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は砂質土を基調とし、大きく2分される。上位は掘り返しの痕跡をしめす堆積土で、下位からは多くの遺物が出土していることから人為的に埋め戻されたものと判断される。遺物の取り上げを大きく3層に分け行っており、上層(第132図の第1・2層)からは、焼継文字が書かれた肥前系染付皿、中層(同図の第3・4層)からは、焼継痕のある肥前系色絵猪口や現川焼の碗をはじめ、関西系の陶器碗、関西系陶器の合子蓋など、下層(同図の第5～8層)からは、肥前系染付端反碗、瀬戸美濃産の染付筒型碗、そして透明軸が施された土師質土器小皿C(施軸かわらけ)をはじめ、肥前系白磁の合子や焼塩壺などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、19世紀前半頃と考えられる。



3区 SK496(第133図、第384・385図)

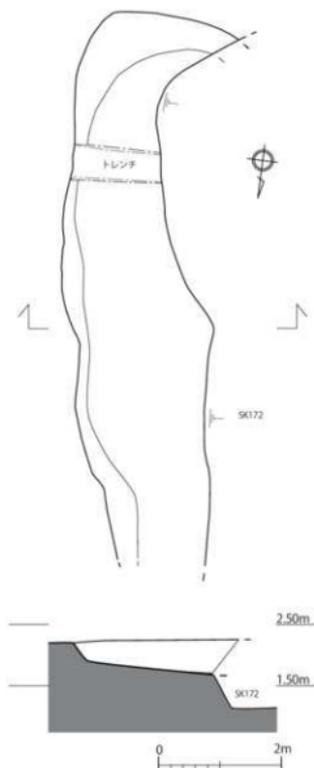
3区北西のG4グリッドで検出された土坑である。3区SK172に西側を切られ、北側は同S168に切られる。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈するとみられる。堀方の規模は長軸 $8.3+a$ m、短軸 $2.2+a$ m、検出面からの深さは0.4mを測る。

遺物は多く、肥前系染付端反碗、焼継文字の書かれた肥前系染付皿、外面青磁碗、肥前系の蛸唐草の染付仏飯器、肥前系陶器ひょうそく、埴産陶器播鉢、土師質土器培格などが出土している。また、これらに第2調査面で検出した3区SD400から出土したものと接合する萩焼の陶器鉢(第385図17)や、瀬戸美濃産陶器皿や土師質土器小皿や胎土目積みの肥前唐津陶器皿など16世紀末～17世紀前半頃のものが若干含まれる。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は、19世紀前半頃と考えられる。

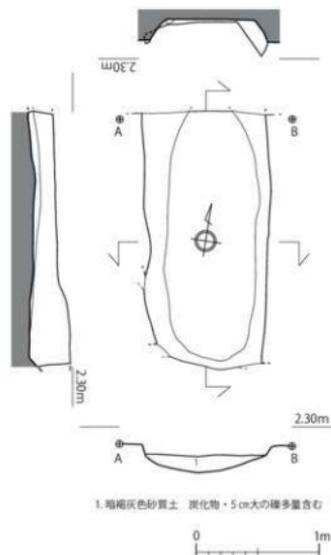
4区 SK015(第134図、第386図1～15)

4区南西のJ1グリッドで検出された廃棄土坑である。南側と北側を旧校舎の基礎や排水管の攪乱に切られる。平面形状は長楕円形とみられ、断面形状は浅い皿形を呈する。堀方の規模は長軸 $2.1+a$ m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、炭化物や礫をはじめ遺物も多量に含むことから、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は、肥前系のコンニャク印判の染付碗、陶胎染付碗、京焼風陶器碗、現川焼碗、石製の沈子鋳型などが出土している。その帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。



第133図 3区 SK496 遺構実測図(1/80)



第134図 4区 SK015 遺構実測図(1/40)

4区SK033(第135図、第386図16～26)

4区南西のK4グリットで検出された廃棄土坑である。旧校舎の基礎の掘削に切られる。平面形状は円形、断面形状は浅い皿形を呈す。掘方の規模は長径3.0m、短径2.6m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は砂質土を基調とし、2層に区分される。1層には瓦類が大量に含まれていることから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は多量の瓦片とともに、土師質土器皿と搬入品とみられる京都系土師器の皿(皿C)が10点程度(第386図20～24)、そして肥前系の染付筒型碗(同図16)や肥前系染付碗などが出土している。また、4区S076から出土したものと接合する肥前系唐津陶器片口鉢(同図26)もある。本遺構の出土遺物は、17世紀前半頃のものとして18世紀代のものが混在するのが特徴である。出土遺物の所属年代から遺構の埋没時期は18世紀代と判断されるが、土師質土器がまとまって出土していることを踏まえれば、17世紀前半頃には遺構はすでに廃絶していた可能性がある。

4区SK035(第136図、第386図27～35)

4区南側中央のJ9グリットで検出された廃棄土坑である。4区S080に切られる。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸2.4m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.2mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、瓦片を大量に含んでいることから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

出土した瓦のなかには吉田分類G-2類とみられる瓦当文様に「細善」の刻印を有するものや、「神」や「細仙」などの多種の刻印を有するものがある。そのほか、萩焼ピラ掛け碗など(第386図27)や、小片のため図化していないが焼痕のある磁器片などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

不明遺構(埋裏遺構)

3区SX045(第137図、第387図1・2)

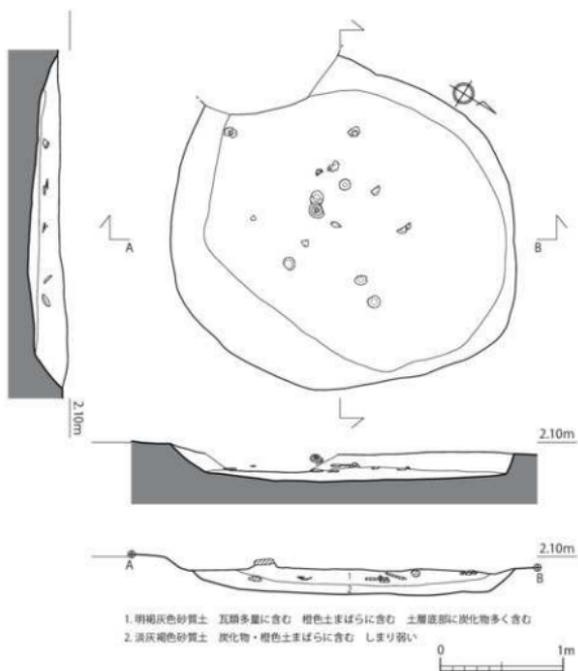
3区中央西寄りのD6グリットで検出された埋裏遺構である。平面形状は円形、断面形状はレンズ状を呈す。掘方は長径1.15m、短径1.1m、検出面からの深さは0.45mを測る。掘方のほぼ中心に土師質土器甕が正位置で埋置される。甕は底部から0.4m程が残存しており、内壁に化粧土が塗られている。甕内の埋土は砂質土を基調とし、3層に区分される。甕内面には白色の付着物が認められることから、便所遺構と判断される。

遺物は、甕内の埋土より明治6年から明治10年までに製造された「明治■年」の銘がある角ウロコの竜一銭銅貨が出土している。このため、遺構の埋没年代は明治初期と考えられる。

3区SX050(第138図、第387図3～7)

3区西側中央のE5グリットで検出された埋裏遺構である。平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方は長径0.9m、短径0.85m、検出面からの深さは0.5mを測る。掘方の中心部に土師質土器の甕が正位置で埋置される。甕は底部から約0.4mが残存している。甕内の埋土はシルト質土を基調とし、3層に区分される。埋置された甕の破片や貝殻片が多量に含まれており、遺構が廃絶した後に埋没したものとみられる。甕内面に付着物が認められる。甕内部の埋土を採取して理化学分析を行った結果、生活汚染程度ではあるが回虫卵が検出され、魚骨や食用となるアブラナ科の花粉が優勢となることから、糞便の混入ないし堆積があったものと考えられている(詳細は第VI章参照)。

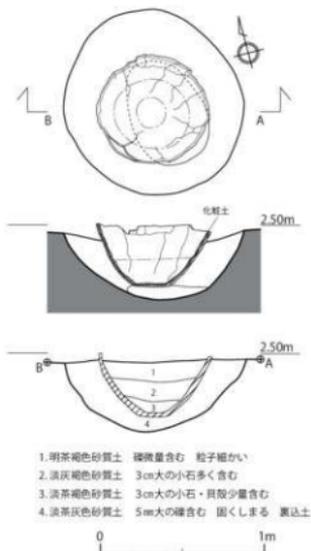
遺物は、甕内の埋土より肥前系外面青磁碗、肥前系染付筒型碗、京焼風陶器などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。



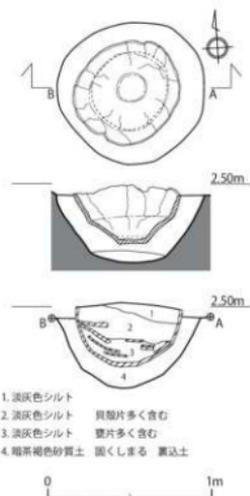
第 135 図 4 区 SK033 遺構実測図 (1/40)



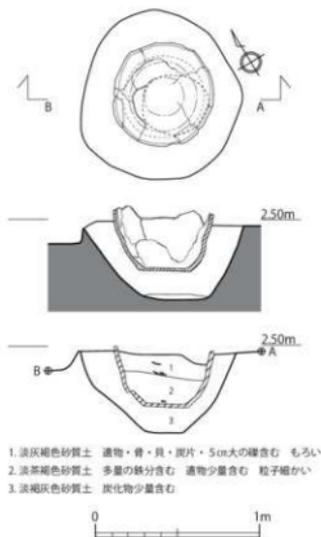
第 136 図 4 区 SK035 遺構実測図 (1/40)



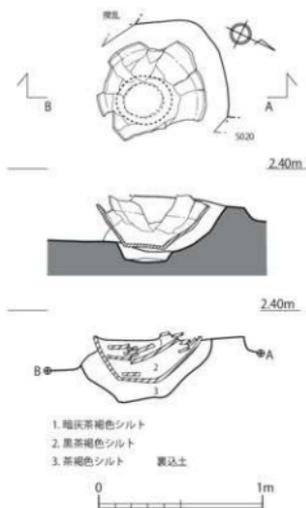
第137図 3区 SX045 遺構実測図 (1/30)



第138図 3区 SX050 遺構実測図 (1/30)



第139図 3区 SX065 遺構実測図 (1/30)



第140図 3区 SX130 遺構実測図 (1/30)

3区 SX065(第139図、第387図8～12)

3区中央のE10グリッドで検出された埋裏遺構である。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方は長径1.05m、短径0.95m、深さ0.6mを測る。掘方の中心部に土師質土器の裏が正位置で埋置される。比較的焼成がよい裏を使用しており、裏は底部から約0.4mが残存している。裏内の埋土は砂質土を基調とし、2層に区分される。下層に鉄分の沈着がみられる。裏の内壁に付着物は認められず、同種の遺構に埋置された土師質土器に比べ比較的焼成が良いことを踏まえれば、水裏として使用されていた可能性がある。出土遺物の所属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

3区 SX130(第140図、第387図13・14)

3区南西のB4グリッドで検出された埋裏遺構である。学校遊具に基礎に切られる。平面形状は円形とみられ、断面形状はレンズ状を呈する。掘方は長軸 $0.65+a$ m、短軸 $0.4+a$ m、検出面からの深さは0.3mを測る。土師質土器の裏が正位に埋置されるが、北東側にわずかに傾斜する。裏は底部から0.28mが残存している。裏内部の埋土はシルト質土を基調とし、2層に区分される。埋置された裏の破片が多量に含まれており、遺構が廃絶した後に埋没したものとみられる。裏内面に白色付着物が認められるため、便所遺構と判断される。裏内の埋土からは破碎された裏片が大量に出土したほか、肥前系の陶器碗などが出土した。これらの所属年代から遺構の埋没時期は、18世紀代と考えられるが、遺物が少ないため特定できていない。

3区 SX150(第141図、第387図15・16)

3区中央南西寄りのC7グリッドで検出された埋裏遺構である。平面形状は円形、断面形状はU字状を呈す。掘方は長径0.8m、短径0.7m、検出面からの深さは0.6mを測る。掘方内に土師質土器裏が正位置に埋置される。裏は底部から0.5mが残存する。裏内の埋土は砂質土を基調とし、4層に区分される。土師質土器の裏の破片や瓦などをはじめ、炭化物が多く含まれており、これらは遺構が廃絶した後に埋没したものとみられる。裏の内面には白色の付着物が認められることから、便所遺構と判断される。

遺物は、裏内の埋土から「神」の刻印がある平瓦が出土しており、遺構の埋没時期は19世紀代と考えられる。

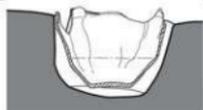
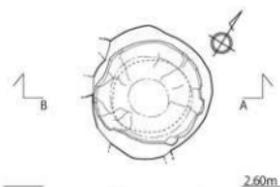
3区 SX155(第142図、第388図1～3)

3区南東のC14グリッドで検出された埋裏遺構である。掘削の3区S012に切られる。平面形状は円形、断面形状はU字形を呈す。掘方は長径1.0m、短径、0.9m、検出面からの深さは0.6mを測る。掘方中央に土師質土器裏がやや北側に傾斜する形で埋置される。裏は底部から高さ0.6mが残存し、内面に化粧土が塗られている。裏内の埋土はシルト質土を基調とし、2層に区分される。下層には鉄分が沈着し、上層には裏の内壁に塗られたとみられる化粧土が多く含まれる。壁内面に付着物はなく、裏内部の埋土下層に鉄分が沈着していることから、水裏として使用された可能性がある。

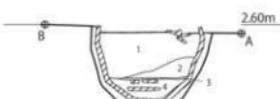
遺物は、裏込土から「清水」の刻印がある京焼風陶器碗(第388図3)、裏内の埋土からは銅製のかんざしなどが出土している。裏込め土の出土遺物から遺構の構築時期は17世紀後半以降とみられるが、出土遺物が僅少で具体的な年代は判明できていない。

3区 SX255(第143図、第388図4～6)

3区南西のB3グリッドで検出された埋裏遺構である。校舎の基礎3区S020に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方は長径1.2m、短径1.0m、検出面からの深さは0.7mを測る。掘方中央に底部を欠いた土師質土器裏が埋置される。残存部での径は0.7m、高さは0.4mを測る。裏内の埋土はシルト質土を基調とし、4層に区分される。これらには不整合な堆積が認められることから人為的に埋め戻されたものと判断される。ここで注目される事象が、裏下位の土層堆積状況である。あたかも裏の底部があり、その内部に堆積し



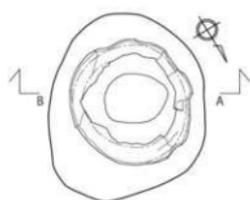
2.60m



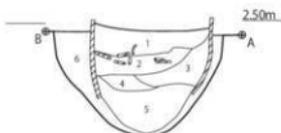
1. 淡灰褐色砂質土 壘片・瓦等含む
2. 暗茶褐色砂質土 炭化物多量含む
3. 暗黒褐色砂質土 炭層
4. 明灰白色砂質土 粗砂
5. 淡灰褐色砂質土 焼土塊・炭化物含む しまりなし



第 141 図 3 区 SX150 遺構実測図 (1/30)



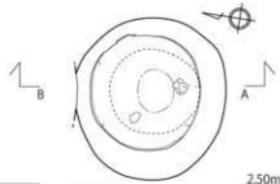
2.50m



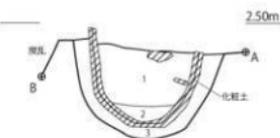
1. 暗灰褐色シルト
2. 暗茶褐色シルト 棕色土をブロック状に含む 遺物(壘片)含む
3. 黒茶褐色シルト 棕色土をブロック状に含む
4. 茶褐色シルト 棕色土を多く含む
5. 黒茶褐色砂質土
6. 黒茶褐色シルト 裏込土



第 143 図 3 区 SX255 遺構実測図 (1/30)



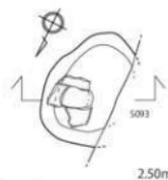
2.50m



1. 淡褐色砂質土 壘内化粧土多量含む
2. 明褐色砂質土 糠分多く含む
3. 暗茶褐色シルト



第 142 図 3 区 SX155 遺構実測図 (1/30)



2.50m



第 144 図 4 区 SX105 遺構実測図 (1/30)

たかのような裏裏込め土の不整合な堆積が認められることから、裏の下位に籠のような丸底で有機質の容器が置かれていた可能性がある。裏内面に付着物はなく、用途を特定することができていない。

出土遺物は僅少で、裏内の埋土から 3 区 SK250 から出土したものと接合する肥前系染付の丸碗（第 357 図 13）や、吉田分類 G 類と推定される軒平瓦などが出土しており、これらの所属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半頃と考えられる。

4 区 SX105(第 144 図)

4 区南東の J18 グリットで検出された埋裏遺構である。4 区 S093 に切られる。平面形状は不整形を呈し、断面形状は円形とみられる。掘方は長径 0.7 m、短径 0.4+ α m、検出面からの深さは 0.1 m を測る。掘方の北側底面に、土師質土器の裏とみられる底部の一部が埋置された状態で残存する。出土遺物は皆無であり、遺構の時期は特定できていない。

不明遺構(粘土貼土坑)

3 区 SX100(第 145 図、第 389 図 1～6)

3 区南東隅の B18 グリットで検出された粘土貼土坑である。プールの基礎に削平される。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸 1.8 m、短軸 1.3 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。掘方沿って底部全面と側面の一部に黄橙色粘土が残存する。本来は土坑内全面に粘土が貼られていたものとみられる。粘土の厚さは底面で約 10 cm、側面で 1～2 cm 程を測る。土坑の埋土は砂質土を基調とし、8 層に区別される。これらには不整合な堆積が認められることから人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。

遺物は僅少で、埋土からは肥前系染付丸碗、肥前系唐津陶器播鉢、関西系陶器碗などが出土しており、これらの所属年代から遺構の埋没年代は 18 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SX105(第 146 図、第 389 図 7)

3 区南東隅の C19 グリットで検出された粘土貼土坑である。プールの基礎に削平される。平面形状は不整形、断面形状は浅い皿形を呈す。掘方の規模は長径 1.2 m、短径 1.1 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。底部と側面に黄橙色粘土が貼られる。粘土の厚みは底面で 3 cm 程度を測り、側面にかけて徐々に薄くなる。土坑埋土は砂質土を基調とし、4 層に区別される。

遺物は、コバルト軸で型紙刷りの肥前系染付蓋付鉢などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は明治初期と考えられる。

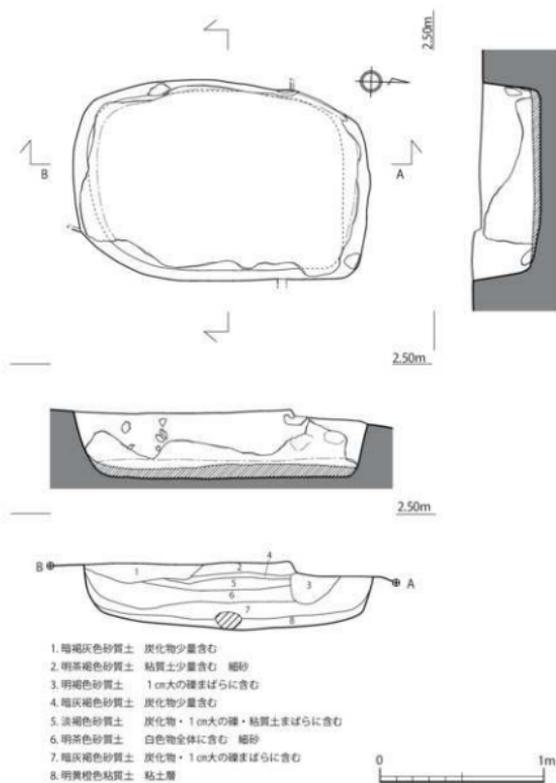
3 区 SX110(第 147 図、第 389 図 8)

3 区南東隅の C19 グリットで検出された粘土貼土坑である。プールの基礎で削平され、3 区 SK135 に切られる。平面形状は楕円形、断面形状はレンズ状を呈す。掘方の規模は長軸 1.2 m、短軸 0.8+ α m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。土坑内全面に黄橙色粘土が貼られる。粘土は底面中央が段状に窪んでおり、底面での粘土の厚さは約 5 cm を測る。埋土は砂質土を基調とし、2 層に区別される。

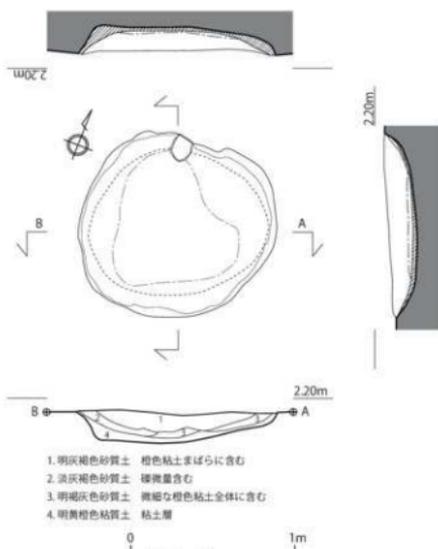
遺物は僅少で、初期伊万里の染付鉢などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀前半以降と考えられるが、特定できていない。

3 区 SX310(第 148 図)

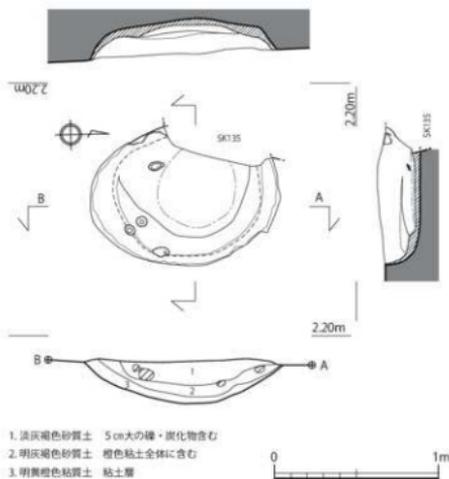
3 区南西の B3 グリットで検出された粘土貼土坑である。中央部分を校舎の基礎である 3 区 S020 に切れ、南側を外面青磁碗が出土した 3 区 S521 に切られる。平面形状は長楕円形を呈すと推定され、断面形状は逆台形を呈する。掘方の規模は長軸 2.4+ α m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。掘方の底面から側



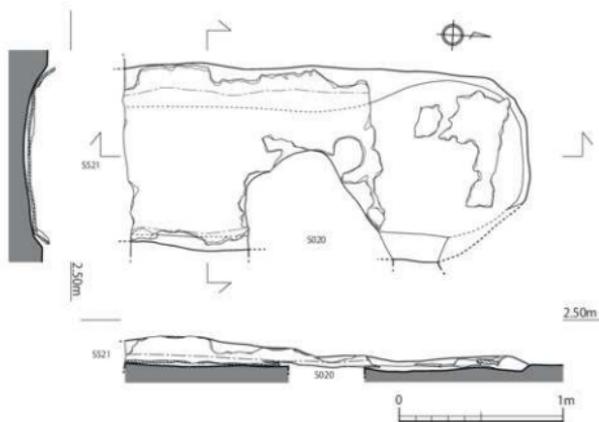
第 145 図 3 区 SX100 遺構実測図 (1/30)



第 146 図 3 区 SX105 遺構実測図 (1/30)



第 147 図 3 区 SX110 遺構実測図 (1/30)



第148図 3区 SX310 遺構実測図(1/30)

面には橙色粘土が貼られていたものとみられる。粘土の厚さは底部、側面ともに2cm程度である。

出土遺物は僅少で、遺構の時期は特定できていない。

不明遺構(石組遺構、石列遺構)

3区 SX005(第149図、第390図1～20)

3区中央のE9グリッドで検出された石組遺構である。同種の3区 SX010と隣接する。遺構検出時には、不定形土坑(3区 S059)として認識し、0.05～0.1mほど掘り下げた結果、新たに確認された2つの遺構が本遺構と3区 SX010である。3区 SX005の掘方の平面形状は不整形で、断面形状は逆台形を呈する。規模は長径1.8m、短径1.65m、検出面からの深さは0.5mを測る。石組みの規模は南北1.5m、東西1.45mを測り、0.1～0.3m程の自然石を使用し、内側に石の面を合わせるように2段に積み重ねられている。北東端部には石組は認められない。

遺物は、石組内から肥前系染付端反碗やコバルト軸の磁器片をはじめ、瀬戸美濃産染付筒形碗、備前焼德利、土師質土器焙烙などのほか、石組内の底面直上で「岡本氏」の焼継文字のある肥前系染付皿が出土している。また、裏込め土からの出土遺物には肥前系染付端反碗や広東碗をはじめとして、肥前系錆軸染付木目太鼓文香などが、これらの帰属年代から遺構の構築時期は19世紀前半頃で、19世紀後半頃の明治初期には埋没したものと考えられる。

3区 SX010(第150図、第390図21～25、第391図)

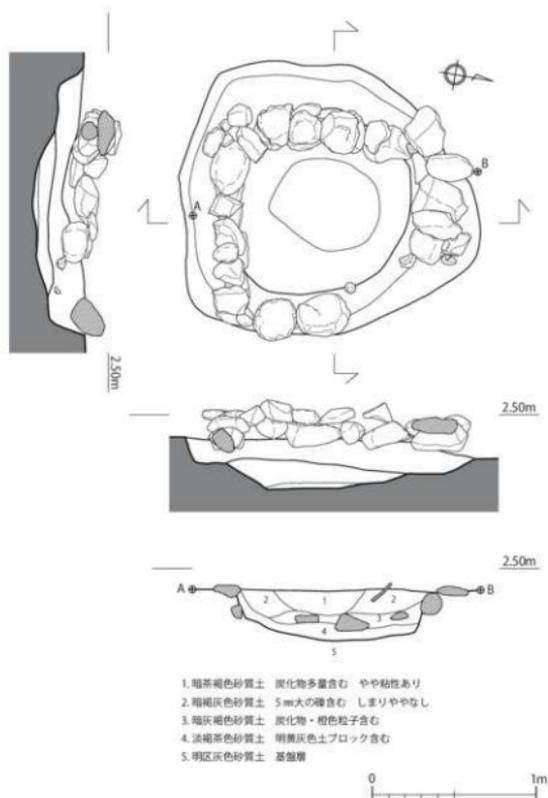
3区中央のE9グリッドで検出された石組遺構である。前述の3区 SX005の南側に隣接する。掘方の平面形状は不整形で、断面形状も不整形で土層図からは2段掘りになっていたことが分かる。規模は長軸2.24m、短軸1.42m、検出面からの深さは1段目で0.3m、石組みの内部に相当する2段目では0.5mを測る。石組みの規模は南北1.3m、東西1.35mを測り、0.1～0.3m程の自然石を使用して、内側に面を持ちながら、二段に積み重ねられている。

遺物は、石組内の埋土からは隣接する3区 SX005から出土したものと接合する肥前系染付端反碗やコバルト軸の磁器片をはじめ、京・信楽系の陶器碗や関西系の陶器急須、土師質土器焙烙やガラス製かんざしなどが出土

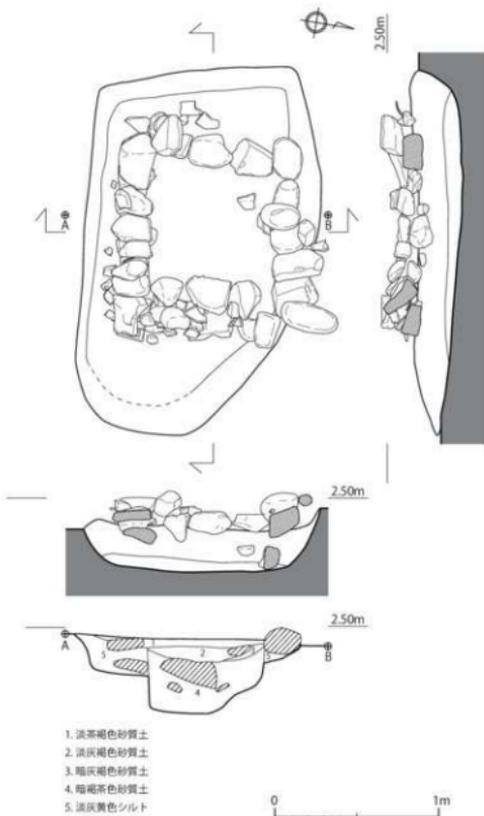
している。さらには、火災処理土坑3区SK075から出土したものと接合する肥前系色絵鉢(第349図12)をはじめ、3区のはば全域に遺物の接合関係が認められる(第391図7～9)。これらの編年年代から遺構の埋没時期は、19世紀後半以降と考えられる。

3区SX025(第151図、第392図1～13)

3区西側のE3グリッドからG7グリッドにかけて検出された配石遺構である。掘乱(3区S002)などに切られ、3区SE305・SX320などを切る。平面長方形の区画溝に0.1～0.2m程度の礫を敷きつめたもので、南東、南西の隅には径0.4m程の大きめの礫が配置される。区画溝の範囲は長軸17.0m、短軸8.1m、溝の幅約0.7m、検出面からの深さ約0.2mを測る。溝で囲まれた範囲の面積は137.7㎡で、主軸の方位はN-88°-Eである。平面では礫を3列で規則的に並べている箇所も見受けられるが、概ね配石は不規則で、断面では礫を1段もしくは2段に重ねて高さを揃えている。配石の上面の標高は約2.65mを測り、南東隅だけが2.55mとやや低くなっている。配石の裏込めの埋土は砂質土の単一土層で、0.2～1cm大の小礫を多く含み、固くしまる。これらの構造から、大型建物の布石基礎と判断される。遺物は、瀬戸美濃産染付端反碗や、型押し成形で唐草文が施された紅



第149図 3区SX005 遺構実測図(1/30)

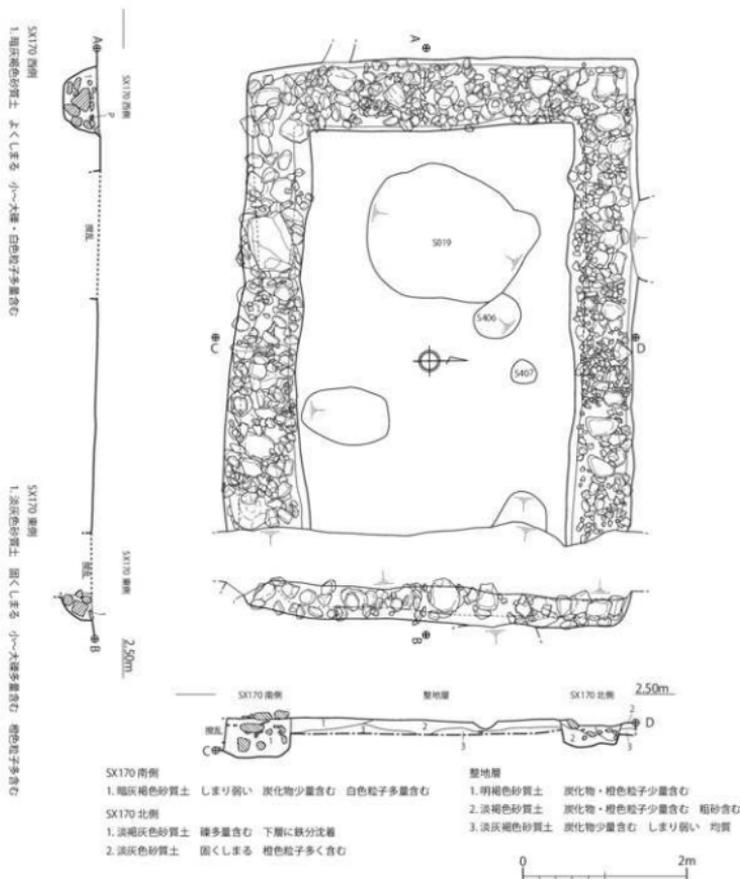


第150図 3区 SX010 遺構実測図(1/30)

皿が出土し、配石の上面から肥系系染付端反碗蓋や、コバルト軸で型紙摺りの瀬戸い濃産染付蓋のほか、焼継文字を有する磁器片が出土しており、概ね幕末～明治初期のものである。遺構の深さが浅く、その遺構内に石が配置されていることからこれらの出土遺物が遺構の構築年代を示すものかそれとも埋没を示すものかは特定できていない。

3区 SX170(第152図、第392図14～24、第393図)

3区 G13 グリッドから H15 グリッドにかけて検出された配石遺構である。排水管などの攪乱と3区 S474 に切れ、同 S032 を切る。平面長方形とみられる区画溝に 0.1～0.6 m 程の礫を規則性なく敷きつめたもので、区画溝の範囲は長軸 6.9 m、短軸 4.8 m、溝の幅は約 0.9 m、検出面からの深さ約 0.4 m を測る。囲まれた範囲の面積は 33.12 m² で、主軸の方位は N89° W である。残存する配石上面の標高は約 2.2 m を測る。配石の裏



第152図 3区 SX170 遺構実測図(1/60)

込め土は灰褐色の砂質土で、白色粒子を含み固くしまる。これらの構造から、建物の布石基礎と判断される。なお、第152図の土層図には溝に区画された範囲に整地層が記録されているが、これは当該遺構に伴うものではなく、遺構下位の整地層である。

遺物はすべて裏込め土からで、肥前系の染付端反碗や広東碗をはじめ、肥前系の錆軸木目文の磁器花入れ、京・信楽系陶器筒形碗、関西系陶器行平鍋の蓋などが出土しており、隣接する3区SK055から出土した瀬戸美濃産染付小皿(第369図11)と接合するものもある。これらの帰属年代から遺構の構築時期は19世紀前半頃と考えられる。

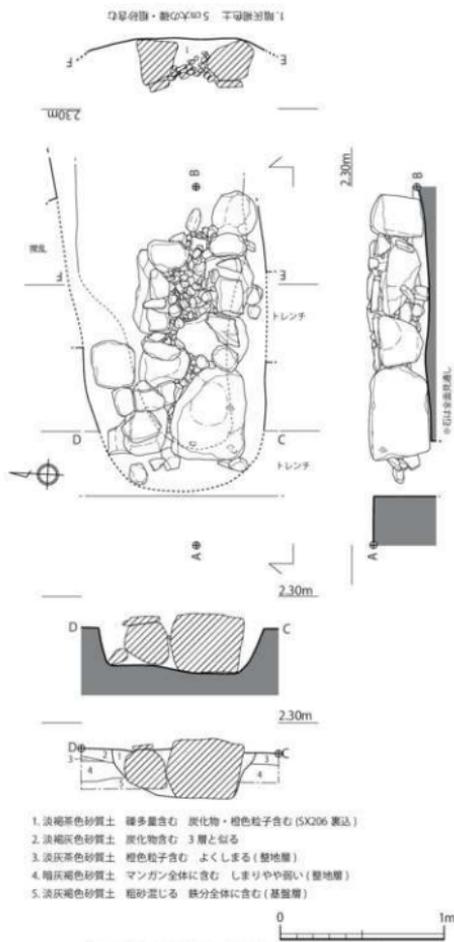
3区SX206(第153図、第394図)

3区中央北寄りのH12グリッドからH16グリッドにかけて検出された配石遺構である。3区SK055に切れ、東端はプールの基礎などの攪乱で削平を受けている。掘方の平面形状は長方形とみられ、断面形状は逆台形を呈す。幅約1.0m、長さは17.8+amを測り、検出面からの最大深度は約0.3mを測る。主軸方向はN-89°-Eである。石組みは、長さ0.5m、高さ0.3m、幅0.3m程の角礫を南西隅に配し、そこを基点に0.3m程の上辺が平らな礫を2列、掘方に沿って並べており、南北の石組みの隙間には小礫が充填される。石組みの南北の幅は0.6m、高さ0.3mを測る。石組みの上面は水平になるように配置され、低い個所には漆喰を貼り、高さを調整している。石組み上面の標高は2.2mである。

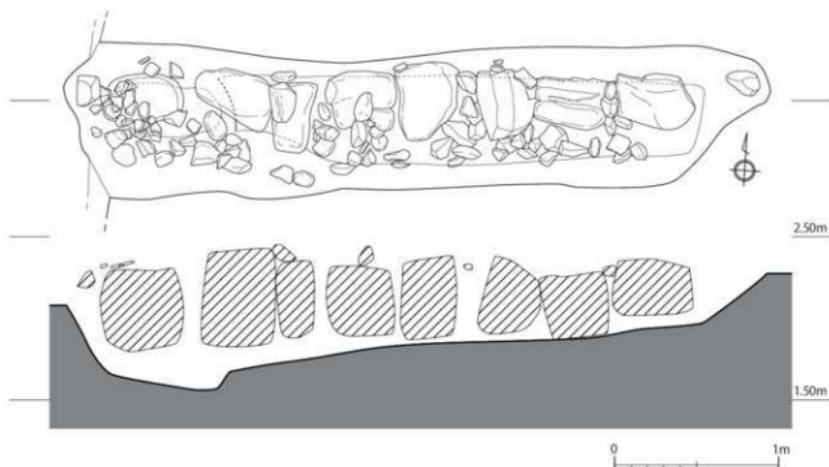
遺物は、裏込め土から肥前系染付端反碗や肥前系青磁灰入れなど、石組みの内部に堆積した埋土からは瀬戸美濃産染付端反碗や肥前系の銅板転写による染付鉢をはじめ、肥前系染付広東型猪口、関西系の陶器碗などが出土している。また、3区SK201から出土した肥前系の輪花で隔刻を有する染付鉢(第377図7)と接合するものも認められる。これらの帰属年代から遺構の構築時期は19世紀前半以降と判断され、19世紀後半頃には埋没したものと考えられる。

3区SX295(第154図)

3区北西のH5グリッドで検出された配石遺構である。掘方の平面形状は長楕円形で、断面形状は逆台形を呈する。その規模は、長



第153図 3区SX206(西端)遺構実測図(1/30)



第154図 3区 SX295 遺構実測図(1/30)

軸 4.3 m、短軸 0.9 m、検出面からの最大深度は 0.5 m を測る。主軸方位は N-86° -E で、東西方向の長土坑とみられる。掘方内には幅、高さ共に 0.3 ~ 0.5 m 大の礫を使用した石列が並ぶ。石列は北側の面が揃い、南側にある小礫は石列を固定するための栗石と判断される。石列上面の標高は 2.3 ~ 2.4 m で、ほぼ水平を保つ。これらの構造から土塼などの建造物の基礎である可能性がある。

遺物は僅少で、小片のため図示できていないが、掘方から肥前系染付の口縁部内面に雷文を描く筒形碗が出土している。これらの帰属年代から遺構の構築時期は 19 世紀前半以降と考えられる。

4区 SX007(第155図、第395図)

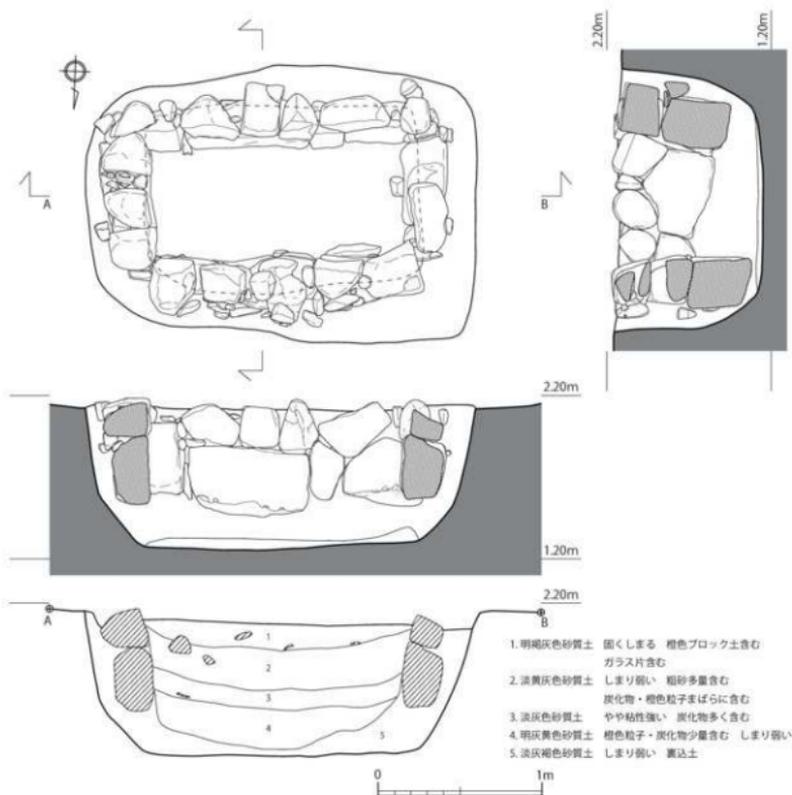
4区南東の K18 グリットで検出された石組遺構である。4区 SK075 を切る。掘方の平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈する。その規模は長軸 2.3 m、短軸 1.7 m、検出面からの深さは 0.9 m を測る。石組は 0.2 ~ 0.7 m 大の石を使用し、裏込め土を土坑底面から側面に入れながら石を固定し 2 段に組み上げたものと判断される。石組の規模は、内法で長軸が 1.5 m、短軸が 0.7 m、深さは 0.6 m を測る。石組の下段には 0.4 m ~ 0.7 m 程の比較的大きな石を使用しており、欠穴が残る石も確認した。石組内の埋土は砂質土を基調とし、4 層に区分される。ほぼ水平に堆積しており、第 1 層が固くしめることから、人為的に埋め戻された一連の埋土と判断される。

遺物は、石組内の埋土から焼雑痕のある肥前系染付端反碗や、明治 6 年から明治 10 年及び明治 13 年に製造され、市場には明治 10 年までに製造されたものが流通した竜五銀銭貨が出土していることから、遺構の埋没年代は明治初期頃と考えられる。

不明遺構(その他)

3区 SX120(第156図、第396図1)

3区中央の F10 グリットで検出された遺構である。掘方の平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈す。規模は南北 0.65 m、東西 0.4 m、深さ 0.3 m を測る。掘方の北壁に 3 枚の軒平瓦をコの字状に並べ、瓦当面を上に向けて埋設する。瓦に囲まれた内部には炭層が広がり、瓦の内壁には煤が付着する。このことから、この遺構



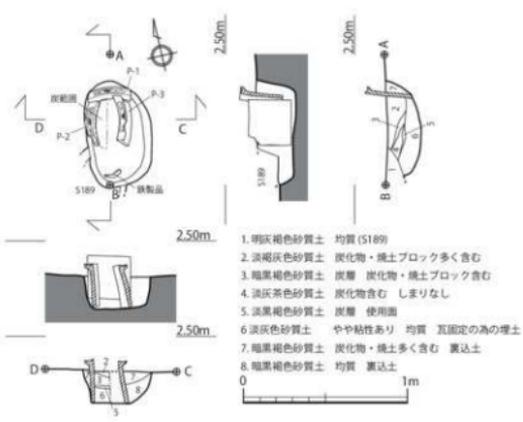
第 155 図 4 区 SX007 遺構実測図 (1/30)

で火が焚かれていたものと判断される。瓦は中心飾りを雄蕊状文とする均整唐草文軒平瓦で、それ以外の出土遺物は僅少である。このため、瓦の帰属年代から遺構の構築時期は 18 世紀中頃以降と考えられるが、特定はできない。

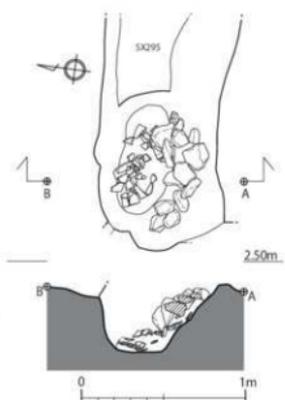
3 区 SX300(第 157 図、第 396 図 2・3)

3 区北西の H5 グリッドで検出された土坑である。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈する。掘方の規模は、長軸 0.9 m、短軸 0.7 m、検出面からの深さは 0.1 m を測る。

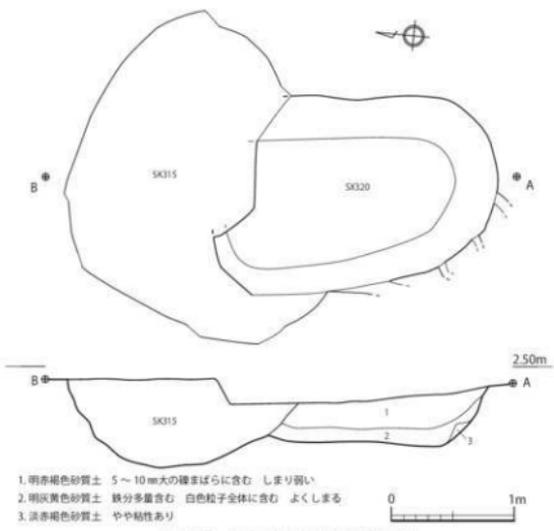
遺物は僅少で、肥前系染付壺(第 396 図 3)や肥前系の青磁大皿(第 396 図 2)が出土している。この青磁の大皿は出土状況の記録(第 157 図・写真図版 19)にあるとおり、破片がまとまって出土したもので、礫と同様に廃棄されたものとみられる。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は、17 世紀後半頃と考えられる。



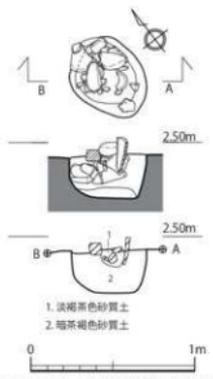
第156図 3区 SX120 遺構実測図 (1/30)



第157図 3区 SX300 遺構実測図 (1/30)



第158図 3区 SX320 遺構実測図 (1/40)



第159図 3区 SX478 遺構実測図 (1/30)

3区 SX320(第158図)

3区北西のG6グリッドで検出された土坑である。3区SX025・SK315に切られる。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形とみられる。堀方の規模は長軸 $2.2 + a$ m、短軸1.6 m、検出面からの深さは0.4 mを測る。埋土は砂質土を基調とし、3層に区分される。特に土坑底面に堆積する第2層は鉄分を多く含む固くしまる。出土遺物は皆無で、遺構の時期の特定はできていない。

3区 SX478(第159図)

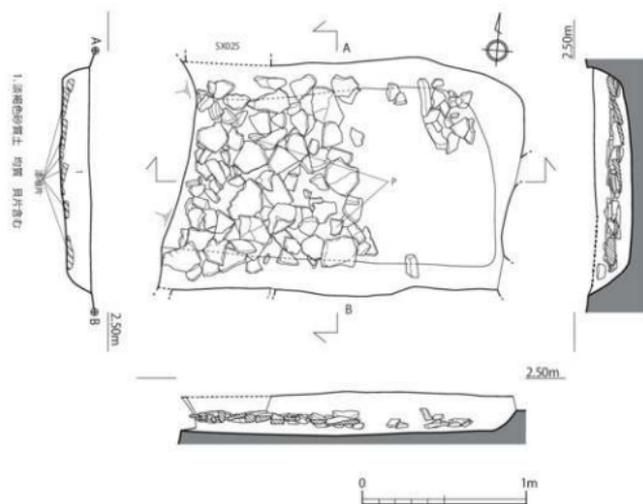
3区中央北西寄りのG7グリッドで検出されたピットである。平面形状は不整円形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸0.6 m、短軸0.4 m、検出面からの深さは0.4 mを測る。ピットのほぼ中央には柱痕が認められ、その周りの裏込め土には15 cm大の礫や丸瓦を詰めて固定している。

出土遺物は僅少で、時期の特定はできていない。

3区 SX484(第160図、第396図4～7)

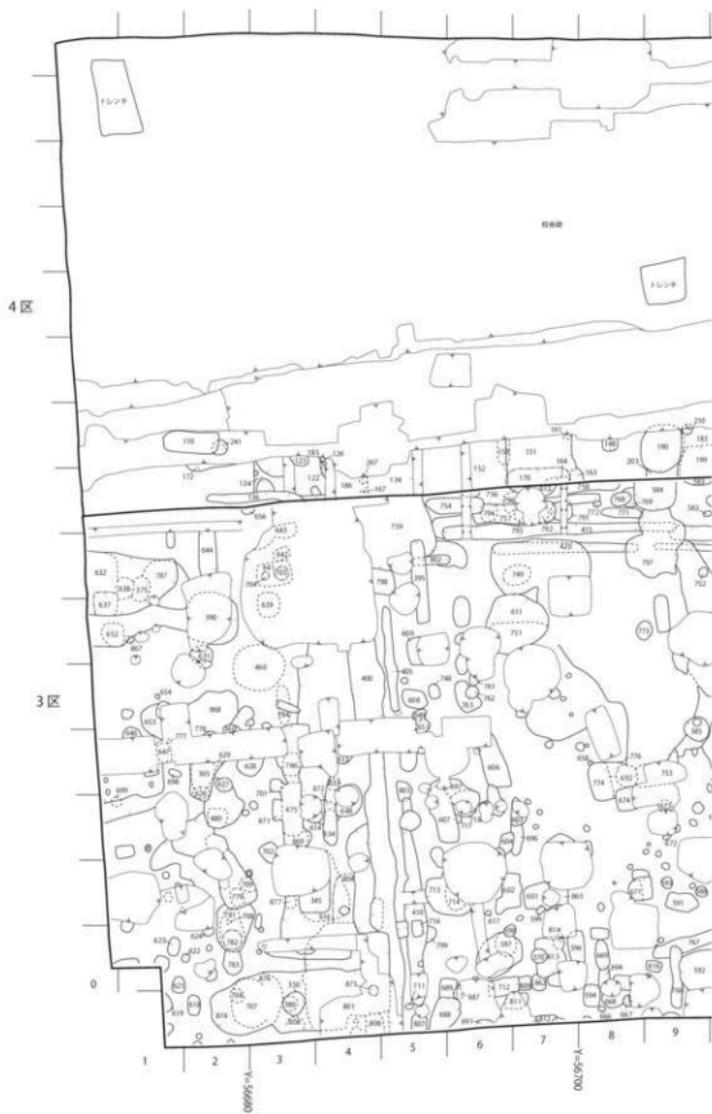
3区中央西側のE7グリッドで検出された土坑である。攪乱と3区SX025に切られる。平面形状は不整長方形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸3.2 m、短軸1.4 m、検出面からの深さは0.3 mを測る。土坑底面には割れた漆喰が広がり、漆喰の範囲を一部記録できていないものの、本来は底部のほぼ全域に敷かれていたものとみられる。埋土は砂質土の単一土層である。これらの構造は粘土貼土坑と類似するが、漆喰を用いた理由があるのかもしれない。

出土遺物は僅少で、肥前系染付鉢などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられるが、特定はできていない。

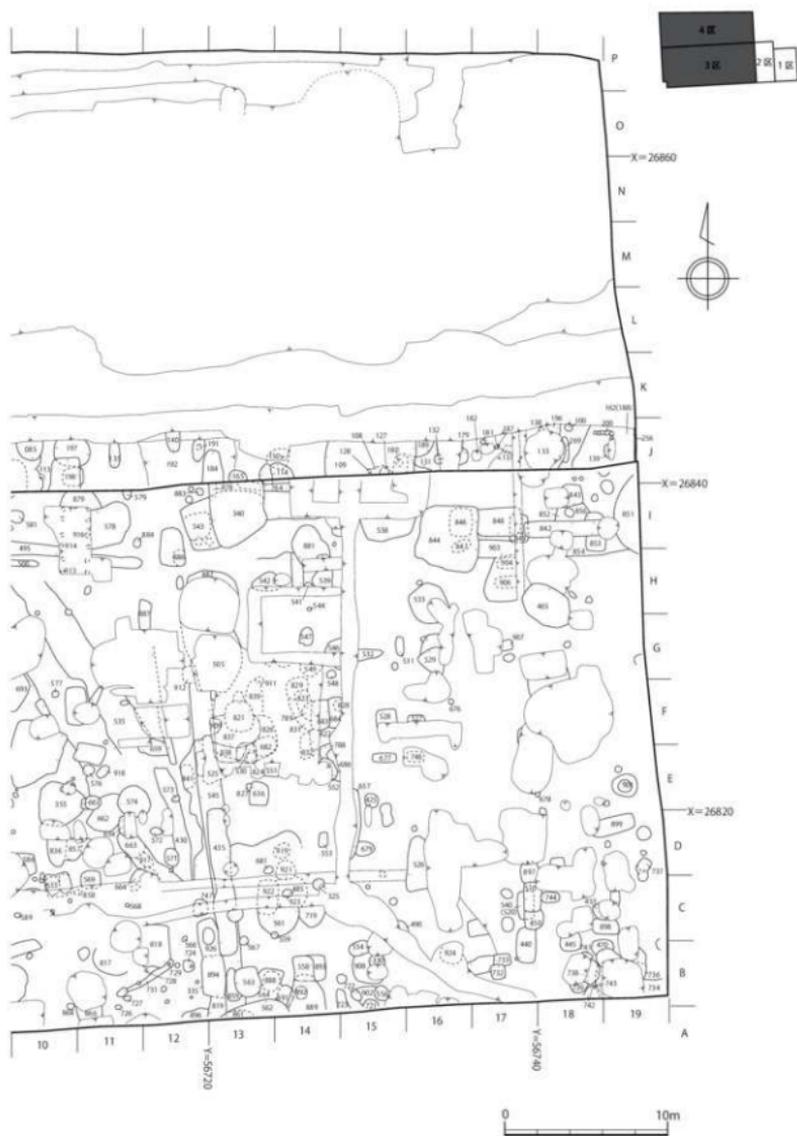


第160図 3区 SX484 遺構実測図 (1/30)

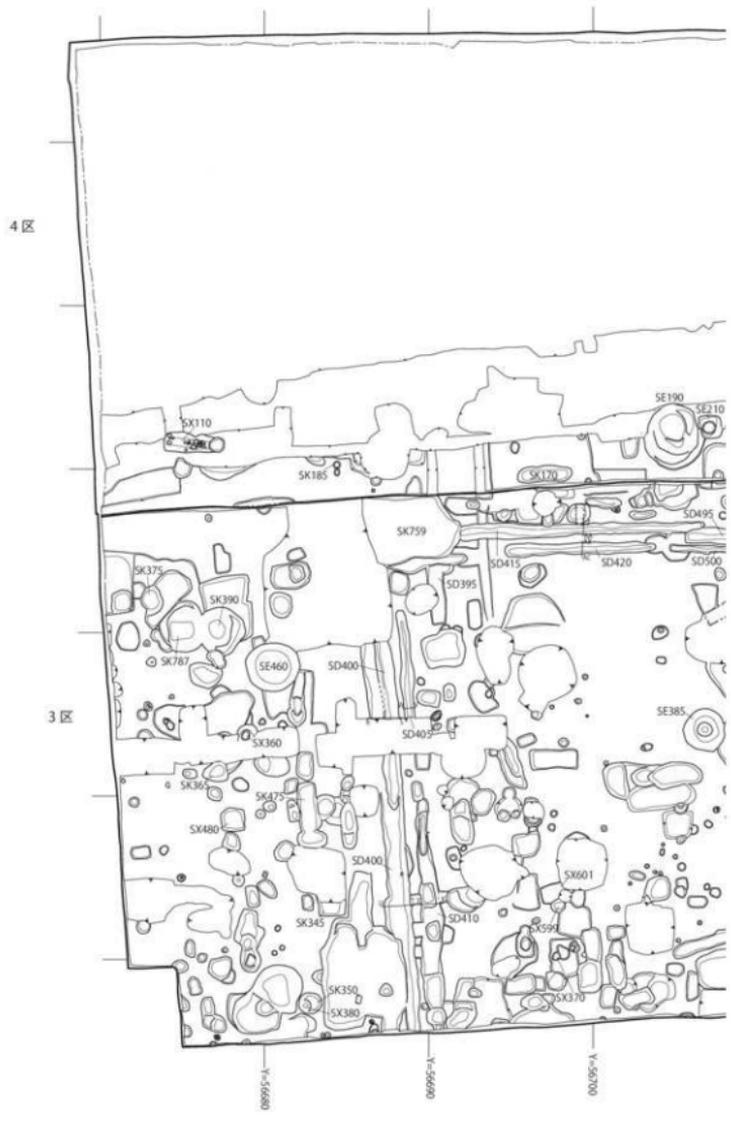
(2) 第2調査面



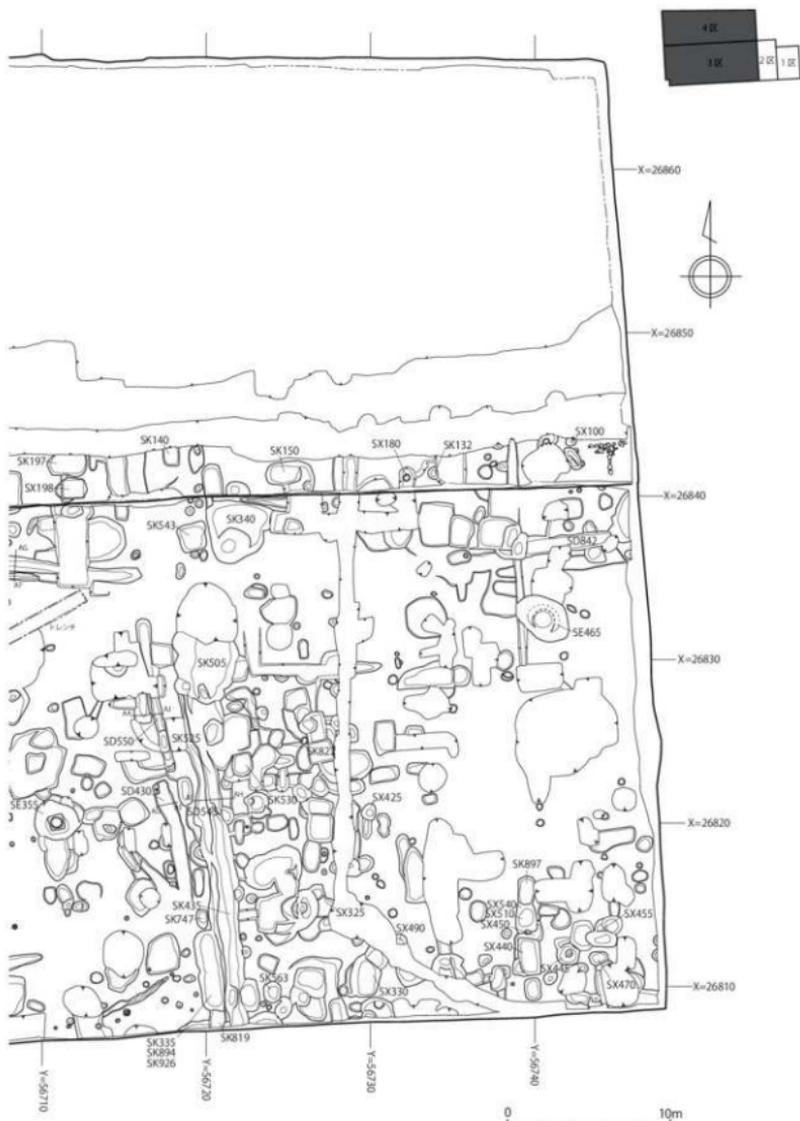
第161図 3・4区第2調査面西側道横配置図(1/300)



第162図 3・4区第2調査面東側遺構配置図(1/300)



第163図 3・4区第2調査面西側全体遺構図(1/300)



第164図 3・4区第2調査面東側全体遺構図(1/300)

調査の概要

第2調査面は、第1調査面と同一地点での2回目の調査で、第1調査面の遺構群を検出した堆積土を機械によって除去したのちに新たに確認された遺構を対象としたものである。主な遺構は、井戸跡、火災処理土坑、廃棄土坑、柱穴、粘土貼土坑であり、その時期は、17世紀前半頃～18世紀後半頃である。なお、第2調査面でも19世紀代の遺構を確認しているが、これは第1調査面では認識できなかったものであり、本来は第1調査面から掘り込まれていたものとみられる。

井戸跡

3区SE355(第165図、第422図)

3区中央のD10グリットで検出された木組みの井戸跡である。井戸掘方の平面形状は円形、断面形状は3段掘りとなる。掘方の規模は長軸2.6m、短軸2.5m、検出面からの最大深度は1.4mを測る。2段目の掘方の平面系は方形で、その壁面で横板状の木質が確認できたことから、ここには木製の方形の井戸枠が組まれていたものと判断される。その下位には直径0.4mの木製の桶が埋設され、高さ約0.3mが残存する。1段目の掘方の埋土は砂質土を基調とし、4層に区分される。これらは掘り返しの埋土で、井筒を抜き取ったものとみられる。

遺物は、最上層として取り上げた1段目の掘り返しの埋土(第165図第1～4層)から肥前系染付外面青磁筒形碗をはじめ、唐津陶器皿や景徳鎮窯系青花碗C群のほか、土師器皿Cや土師質土器羽釜などが出土している。また、井筒内の埋土や裏込め土からは、瓦器碗や中国産白磁のⅢ類系の壺などが出土している。これらの帰属年代から井戸の最終埋没年代は18世紀後半頃と判断されるものの、井筒内埋土及び裏込め土からは13世紀前半頃の遺物が出土しており、井戸の構築年代はこの頃であった可能性が高い。

3区SE385(第166図、第423図)

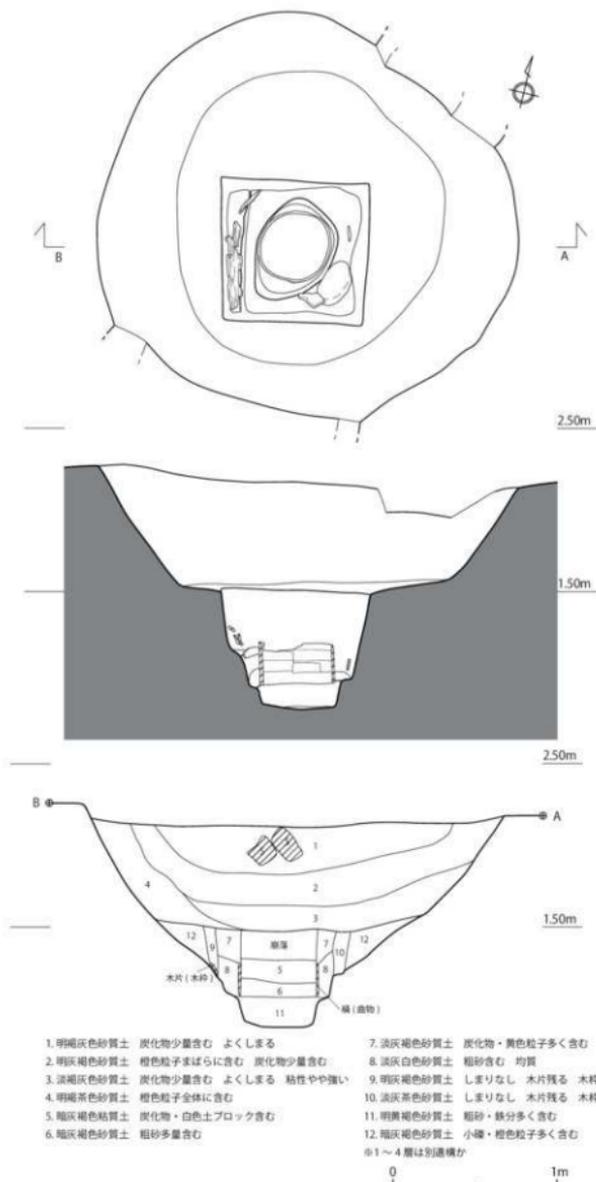
3区中央のF9グリットで検出された石積み井戸跡である。平面形状は円形状、断面形状は緩やかに2段掘りとなる。掘方の規模は直径約2.5m、検出面からの最大深度は1.7mを測る。石積みには0.2m～0.5m程の石を使用し、裏込めに0.2～0.4m程の礫が大量に充填させて固定しながら積み上げている。直径約0.7mの円筒形の井戸枠を形成し、3～5段の石積みが残存する。その下位には直径約0.4mの木桶が埋置されており、高さは約0.3mを測る。掘方の上位の埋土は砂質土を基調とし、礫を大量に含む(第166図第1～3層)。これらは下位の埋土(同図第4・5層)と不整合な堆積にあり、掘り返しの埋土と判断されることから井筒を抜き取ったものとみられる。

遺物は僅少で、掘方の上位の埋土から肥前系の外面青磁碗や肥前系陶器褐釉の碗、肥前系唐津陶器白刷毛手の鉢などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。

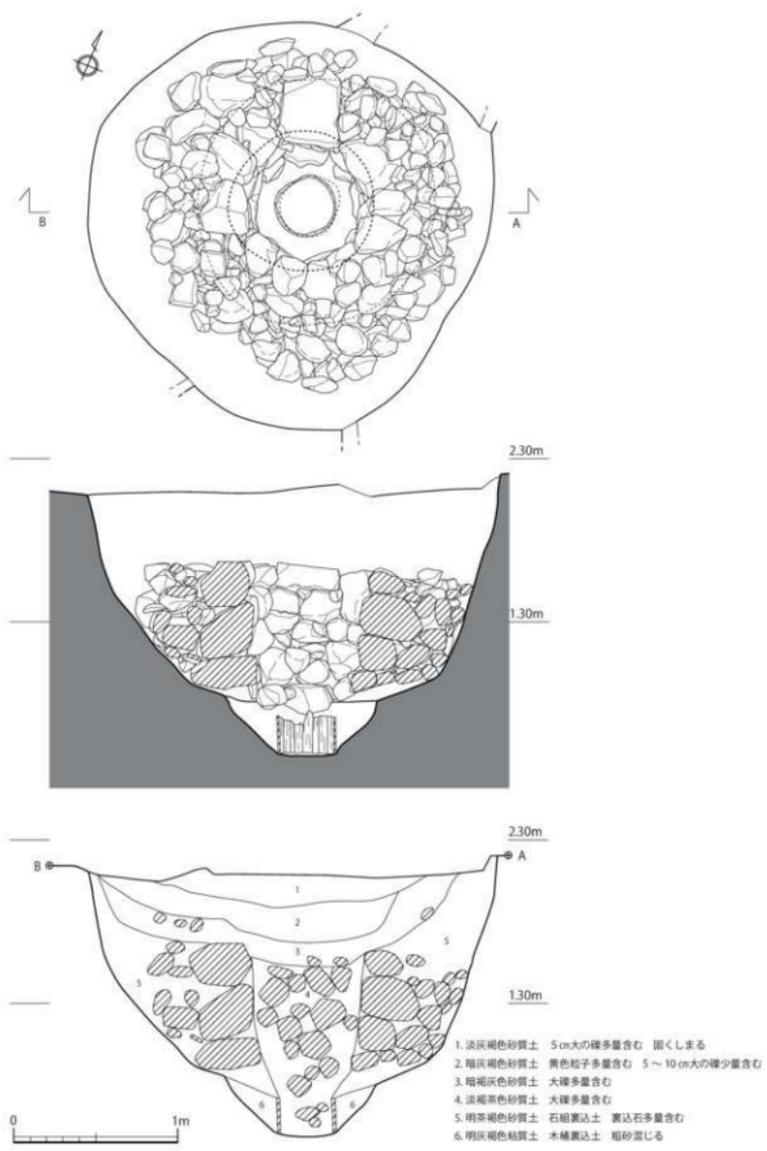
3区SE460(第167図、第424・425図)

3区西側F3グリットで検出された井戸跡である。3区SX025に切られる。平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸3.3m、短軸3.1m、検出面からの深さは1.9mを測る。明確な井筒等は確認できなかったが、土層観察の結果、底面付近で不整合な堆積が認められ、井筒(第167図第5層)とそれを固定する裏込め土(同図第6・7層)と判断されることから、本遺構は井戸跡と位置付けられるものである。これらの埋土と掘方の埋土上位(同図第1～4層)とは不整合な堆積にあり、後者の埋土上位は井筒を抜き取るための掘り返しの痕跡であることが分かる。

遺物はこの掘り返しの埋土から、肥前系染付端碗をはじめ、肥前系青手の雲気文大皿や関西系の端反形の陶器碗、備前焼火入れや土師質土器火消し壺、鉢型の焼壺などが出土し、これらには3区SD400から出土した鉄軸の土瓶(第425図1)と接合するものがある。また、裏込め土からは僅少だが、肥前系染付皿や唐津陶器白刷毛手の鉢などが出土しており、廃棄土坑3区SK390から肥前系の染付仏飯器(第425図6)と接合するものも



第 165 図 3 区 SE355 遺構実測図 (1/30)



第 166 図 3 区 SE385 遺構実測図 (1/30)

ある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SE465 (第 168 図、第 426 図)

3 区北東 G17 グリットで検出された井戸跡である。検出時は不定形のプランであったため、3 区 S448 として遺構掘削を行ったものである。平面的に掘削を行った結果、桶の上端が確認されたことから、井戸跡であることが明らかとなった。ここで遺構の再検出を行い、遺構の平面形状を確定させたものが本遺構である。平面形状は不整形、断面形状は逆凸状を呈する。堀方の規模は、長軸 3.2 m、短軸 2.5 m、検出面からの深さは 1.8 m を測る。井筒の木桶は底面に 2 段重ねで置かれ、長径 0.6～0.7 m、短径が 0.5 m 程に歪み楕円形を呈す。下段の桶は残存状態が良く、幅約 10 cm、長さ 90 cm、厚さ 1.5 cm の板材の側面に 5 mm 程のホゾ穴を二カ所あけ、木製のダボでそれぞれの板材を接合する。その上で桶胴部の二カ所をタガで固定する。上段の桶は腐食が進み、高さ約 60 cm が残存する。

この上にも木枠があったとみられ、井戸埋土の土層観察の結果、掘り返しの痕跡が認められ（第 168 図第 1・2・5・6・7 層）、残存する 2 段の桶の内、上段のものまで抜き取ろうとしたことが分かる。また、現存するこれらの木桶は井戸構築当初のものではない。これも埋土の土層観察から、下段の木桶を固定する裏込め土（同図第 13・14 層）と上段の木桶を固定していたものとみられる埋土（同図第 10～12 層）に不整合な堆積が認められ、さらに下段の木桶が埋設される以前の埋土（同図第 15・16 層）が存在するからである。

遺物は、掘り返しの埋土（上層）から初期伊万里の染付碗など、井筒内から初期伊万里のほか、肥前系陶器鉢などが出土している。裏込め土からは皆無である。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀後半頃と考えられる。

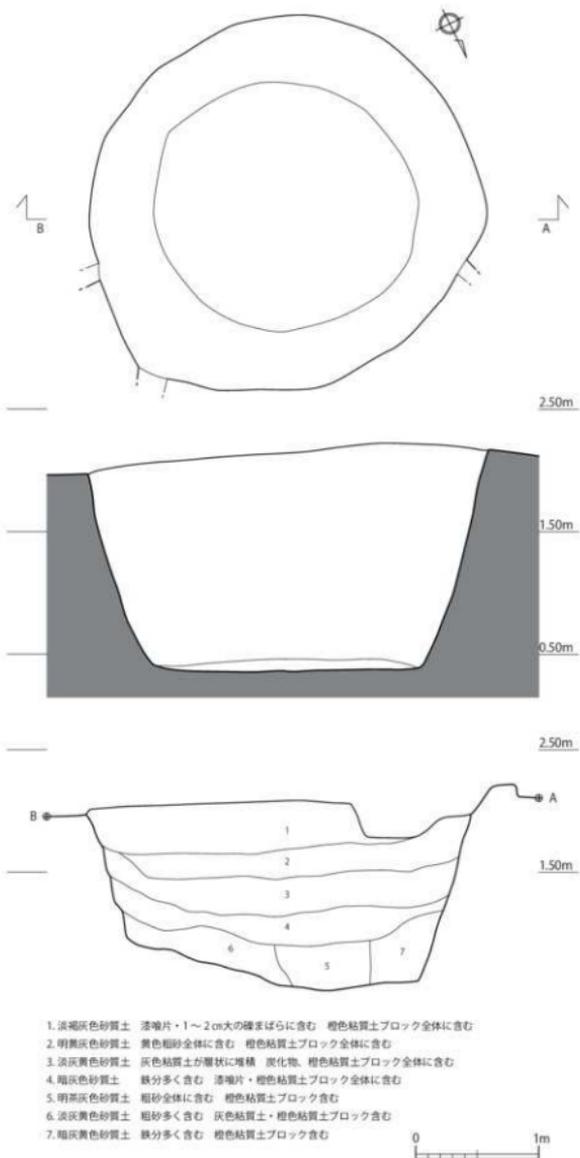
4 区 SE190 (第 169 図、第 427 図)

4 区南側中央の J9 グリットで検出された井戸跡である。北側を排水管の掘削に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆凸状を呈し、2 段掘りとなる。掘方の直径は約 3.5 m、検出面からの深度は 1.6 m を測り、最深部の標高は 0.6 m を測る。埋土の土層観察により、掘方のほぼ中央で掘り返しの痕跡が最低でも 2 回認められることから、最初の掘り返し（第 169 図第 5～7 層）は井筒抜き取りを目的にしたもので、2 回目（同図第 1～4 層）のそれは別遺構の掘方とみられる。同図第 8～11 層は井戸の 1 段目の埋土にあたり、固くしまりが強い砂質土で、井筒の裏込め土であったものと判断される。また、2 段目の埋土（同図第 12・13 層）も同様に裏込め土とみられるものの、上段の埋土と同系統ながら軟質で、色調が灰色を帯びていることから湧水の影響を受けている可能性があり、井戸底の水溜め部の埋土とも考えられるものである。

遺物は、掘り返しの埋土から萩焼のピラ掛け碗、裏込め土からは焼継文字を有する肥前系染付端反碗、肥前系陶器鉢などが出土している。また、隣接する 4 区 SE210 から出土した肥前系唐津陶器壺（第 427 図 9）と接合するものが裏込め土のものにある。これらの帰属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

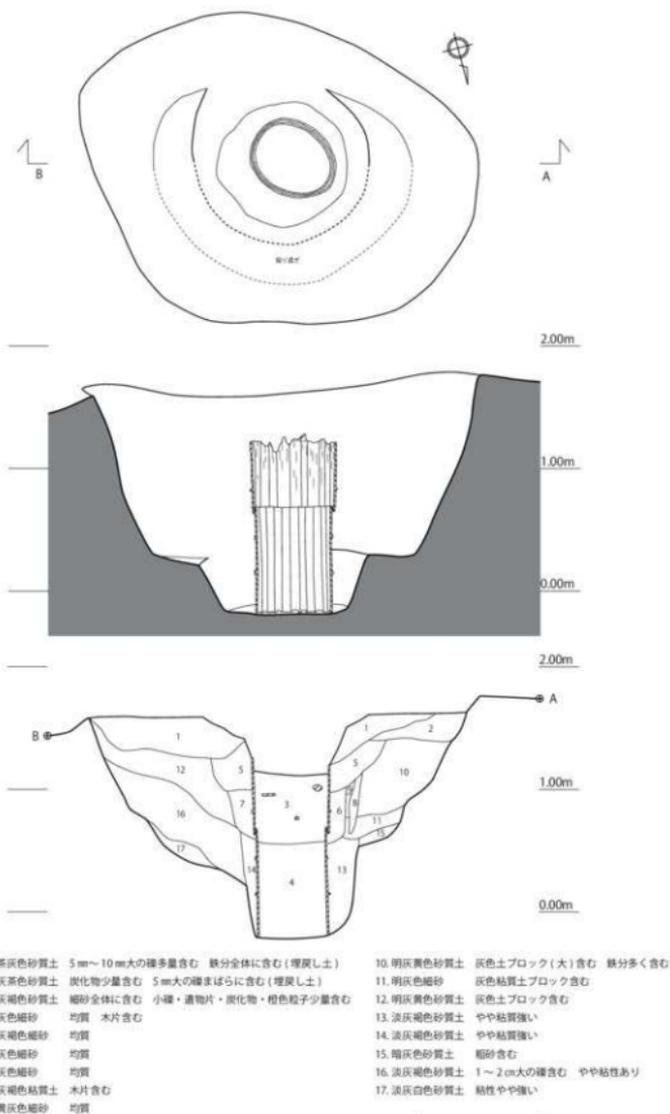
4 区 SE210 (第 170 図、第 428 図)

4 区南側中央の J10 グリットで検出された井戸跡である。北側を排水管の掘削に切れ、4 区 SE190 と隣接する。平面形状は不整形、断面形状は逆凸状を呈し、2 段掘りとなる。掘方は直径 1.5 m、検出面からの深さは 1.7 m を測る。堀方のほぼ中央で、井戸の底部に木桶を 1 段分確認した。木桶は幅 6～8 cm、長さ 80 cm、厚さ 1.5 cm の板材を 24 枚使用する。埋土は掘方の上段と下段で大きく 2 分され、前者は褐色土、後者は灰色シルト質土を基調とする。また、1 段目の埋土に多量の礫や炭化物を多く含み、不整合な堆積が認められることから人為的に埋め戻された一連の埋土と判断されるものである。木桶が残る下段埋土の最上位には混入物は少なく、木桶内の埋土と裏込め土の上位に堆積することから、下段の井戸が一度完全に埋没したことが分かる。これは上段の埋め戻しとは時期差があるものとみられる。

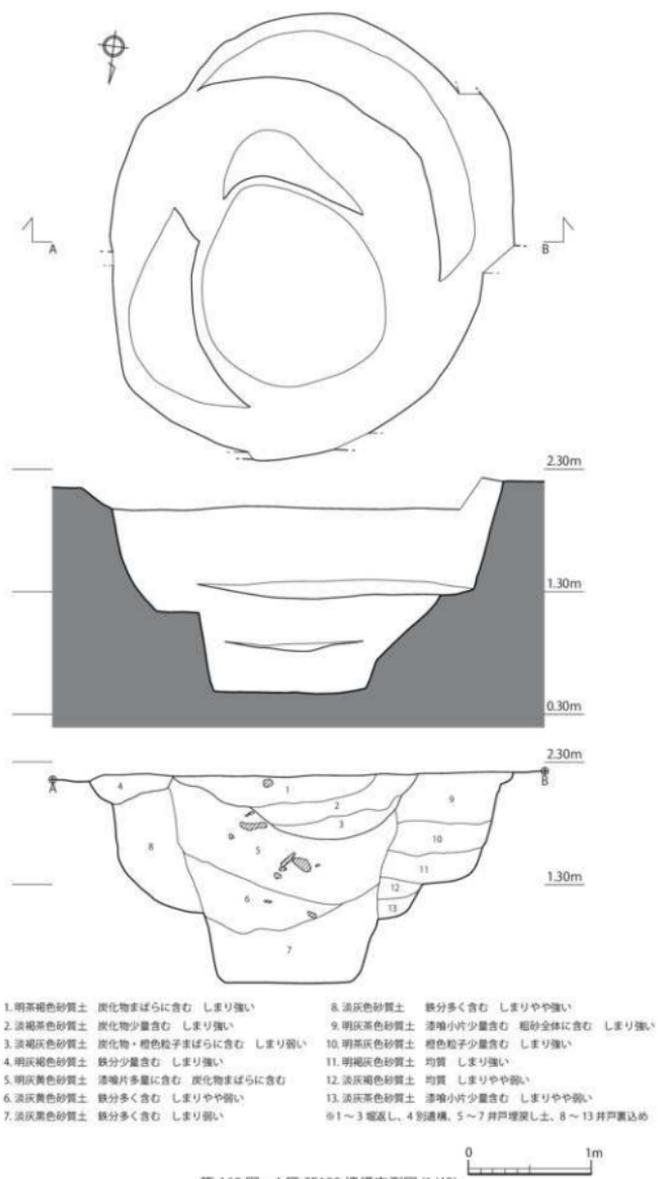


1. 淡褐色砂質土 漆喰片・1~2m大の礫まばらに含む 橙色粘質土ブロック全体に含む
2. 明黄褐色砂質土 黄色粗砂全体に含む 橙色粘質土ブロック全体に含む
3. 淡灰黄色砂質土 灰色粘質土が層状に堆積 炭化物、橙色粘質土ブロック全体に含む
4. 暗灰色砂質土 鉄分多く含む 漆喰片・橙色粘質土ブロック全体に含む
5. 明茶褐色砂質土 粗砂全体に含む 橙色粘質土ブロック含む
6. 淡灰黄色砂質土 粗砂多く含む 灰色粘質土・橙色粘質土ブロック含む
7. 暗灰黄色砂質土 鉄分多く含む 橙色粘質土ブロック含む

第167図 3区 SE460 遺構実測図 (1/40)

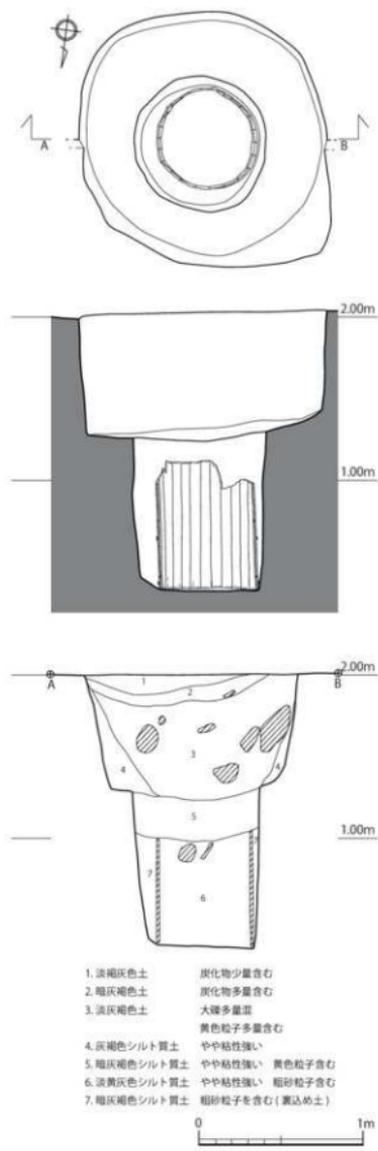


第 168 図 3 区 SE465 遺構実測図(1/40)

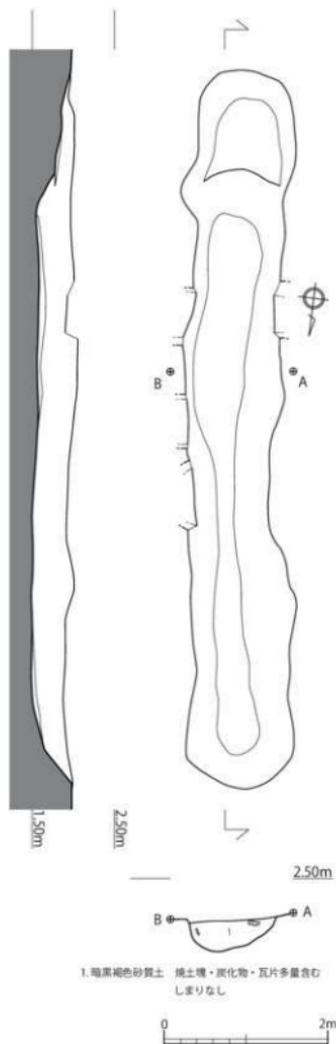


- | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 明茶褐色砂質土 炭化物まばらに含む しまり強い | 8. 淡灰色砂質土 鉄分多く含む しまりやや強い |
| 2. 淡褐色砂質土 炭化物少量含む しまり強い | 9. 明茶褐色砂質土 漆喰小片少量含む 粗砂全体に含む しまり強い |
| 3. 淡褐色砂質土 炭化物・橙色粒子まばらに含む しまり弱い | 10. 明茶褐色砂質土 橙色粒子少量含む しまり強い |
| 4. 明茶褐色砂質土 鉄分少量含む しまり強い | 11. 明褐色砂質土 均質 しまり強い |
| 5. 明茶褐色砂質土 漆喰片多量に含む 炭化物まばらに含む | 12. 淡灰色砂質土 均質 しまりやや弱い |
| 6. 淡灰色砂質土 鉄分多く含む しまりやや弱い | 13. 淡褐色砂質土 漆喰小片少量含む しまりやや弱い |
| 7. 淡灰色砂質土 鉄分多く含む しまり弱い | ※1～3 堀返し、4 別遺構、5～7 井戸埋戻し土、8～13 井戸裏込め |

第169図 4区 SE190 遺構実測図 (1/40)



第 170 図 4 区 SE210 遺構実測図 (1/30)



第171図 3区SK435遺構実測図(1/60)

遺物は、掘り返しの埋土から肥前系染付筒形碗、肥前系青磁香炉など、木枠内からは肥前系染付碗、小坏、肥前系唐津陶器皿のほか、木製製の風呂部分がほぼ完形で出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。

土坑(火災処理土坑)

3区SK435(第171図、第429図1～23)

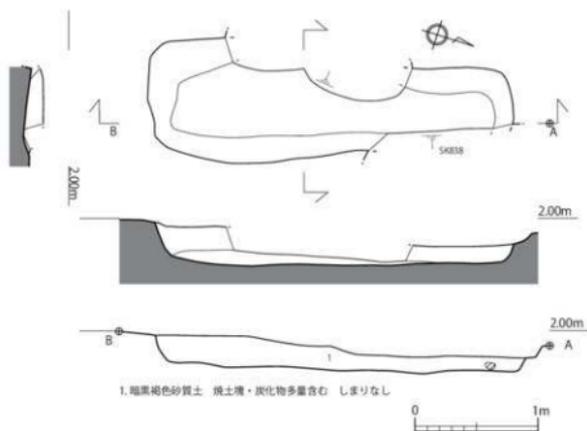
3区南東のB13グリッドからD13グリッドにかけて延びる火災処理土坑である。大正～昭和時代の校舎基礎及び排水管の攪乱に切れられ、3区SD545を切る。平面形状は長楕円形、断面形状はU字形を呈し、堀方の規模は長軸8.8m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.5mを測る。埋土は焼土塊、炭化物を多量含む単一埋土である。下位の3区SD545と幅、方位が重複することから、3区SD545の最終埋没段階に火災処理土坑として利用されたものとみられる。

遺物は、肥前系の染付端反碗、望料形の碗、肥前系染付皿、面子状に加工された蛇の目門型高台の染付猪口底部、京焼風陶器皿、高台がつく肥前系陶器ひょうそく、関西系陶器の小杉碗などが出土し、他の遺構との遺物の混入を防ぐため、上位0.1mほどを上層として取り上げた部分からは、焼継を有する肥前系染付皿や透明釉が施された施釉かわらけ(土師質土器小皿C)など(第429図20～23図)が出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

3区SK525(第172図、第429図24～28)

3区中央東側のE13グリッドで検出された火災処理土坑である。3区S838・S837に切れられ、3区SD545を切る。平面形状は隅丸長方形、断面形状は逆台形を呈し、堀方の規模は長軸2.9m、短軸0.8m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は焼土塊、炭化物を多量に含む単一埋土である。3区SK435と同様に、下位の3区SD545と幅、方位が重複することから、3区SD545の最終埋没段階に火災処理土坑として利用されたものとみられる。

遺物は僅少で、肥前系染付端反碗や肥前系陶器印花文の皿などが出土している。また、遺構検出時の出土遺物に「岡九」と焼継文字が書かれた肥前系染付蓋(第429図28)があり、享和二年(1802)の絵図に描かれ



第 172 図 3 区 SK525 遺構実測図 (1/40)

ている岡本家の当主「岡本九郎五郎」の略称である可能性が高い。これらの所属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SK530 (第 173 図)

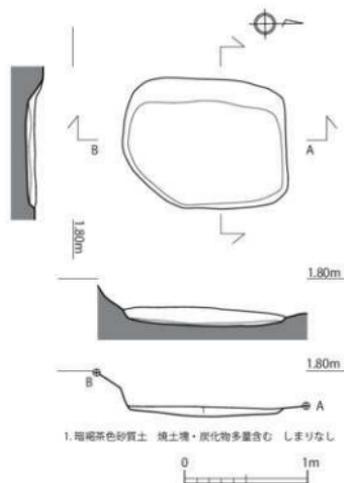
3 区中央東側の E13 グリッドで検出された火災処理土坑である。3 区 S682・S838・S837 に切られる。平面形状は不整形円形を呈し、断面形状は逆台形を呈するとみられる。堀方の規模は長軸 1.4 m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土は焼土塊、炭化物を多量含む単一埋土である。19 世紀前半頃の 3 区 S837 に切られるため、埋没時期はそれ以前と考えられるものの、出土遺物が僅少のため、時期の特定はできていない。

土坑 (廃棄土坑)

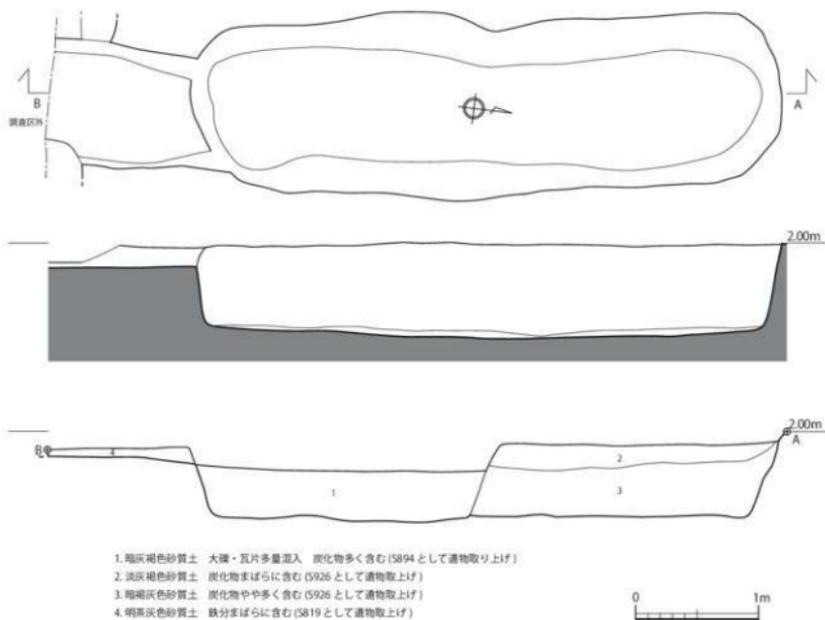
3 区 SK335 (第 174 図、第 430～432 図)

3 区南東の A 13 グリッドから C 12 グリッドに広がる廃棄土坑である。平面形状は、長土坑が 2 つ連結するような形を呈し、断面形状は階段状をなす。掘方の規模は、長軸 4.8 m、短軸 1.5 m、検出面からの深さは 0.8 m を測る。遺構を半截して掘り下げて土層を観察した結果、埋土は砂質土を基調として 4 層に区分され、第 1 層と第 2～4 層に不整合な堆積が認められる (第 174 図)。このため、第 1 層は掘り返しの痕跡もしくは別遺構の埋土である可能性がある。また、瓦片をはじめ礫や炭化物が多く含まれるため、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。第 1 層とそれに切られる第 2・3 層及び第 4 層が堆積する土坑の掘削深度が異なることから、それぞれを 3 区 S894・S926・S819 の別遺構として調査を行ったものの、出土遺物に大きな時期差はみられない。

具体的には、第 1 層 (3 区 S894) から肥前系の染付端反碗、広東碗、底部が打ち欠きされた染付碗、関西系陶器碗、箱底道具など (第 432 図 1～11)、第 2・3 層 (3 区 S926) からは肥前系の染付端反碗や萩焼碗をはじめ、



第173図 3区SK530遺構実測図(1/40)



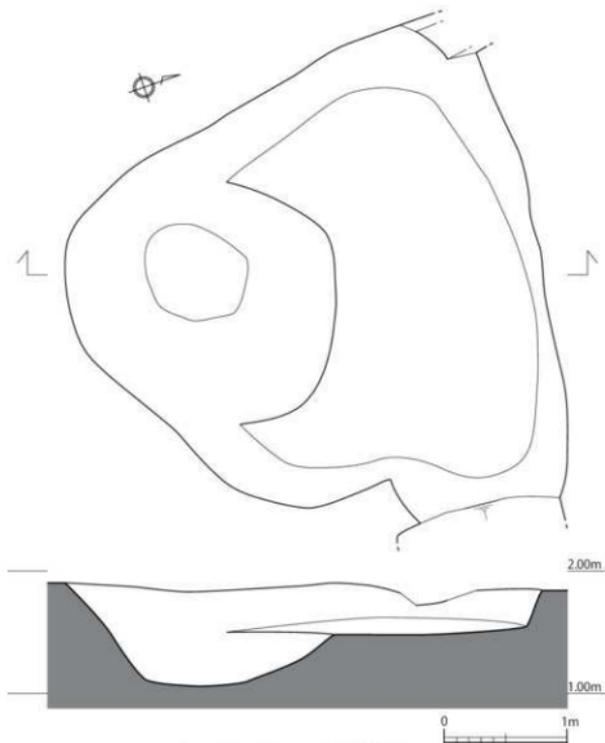
第174図 3区SK335遺構実測図(1/40)

土師質土器小皿やミニチュア土器鍋と釜、平瓦を加工した沈子の鋳型など(同図12～22)、第4層(3区S819)からは関西系の陶器碗、青銅製かんざしなど(同図23～27)が出土している。以上のことから本遺構は、掘り返しが行われた長土坑として調査記録がなされたものであり、出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は、18世紀後半～19世紀前半頃と考えられる。

3区SK340(第175図、第433～435図)

3区北東のI13グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は不整形、断面形状は北側に段を有する逆台形を呈し、南側が深くなっている。堀方の規模は長軸3.9m、短軸3.8m、検出面からの最深部は0.8mを測る。埋土の情報は取れていないものの、瓦を主体とする遺物が多く出土しており、本遺構は廃棄土坑と考えられる。

出土遺物には「助ノ丞」の刻印が施された平瓦(第435図13)、鯉瓦の頭部、尾部(同図6・7)などをはじめ、肥前系染付端反碗、望形碗、蛸唐草の染付鉢、中国磁器と考えられる金彩蛸唐草の色絵小坏、漳州窯系の青花皿、瀬戸美濃産小坏、肥前系磁器染付煙管(第433図27・28)など多様な遺物が認められる。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、19世紀中頃に廃棄されたと考えられる。



第175図 3区SK340 遺構実測図(1/40)

3 区 SK345(第 176 図、第 436 図・第 437 図 1・2)

3 区南西の C3 グリットで検出された廃棄土坑である。平面形状は方形とみられ、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 1.8 m 短軸 0.9+ α m、検出面からの深さは 0.6 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、2 分される。上層には遺物を大量に含む。遺物は、肥前系染付端反碗や染付線香立て、瀬戸美濃産小坏、備前焼鉢、柿軸が施された施軸かわらけ(土師質土器小皿 C)、「細保」の刻印を有する平瓦のほか、浅い桶形的大型瓦製品(第 436 図 9)などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、19 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SK350(第 177 図、第 437 図 3～5)

3 区南西端の A3 グリットで検出された土坑である。埋裏遺構である 3 区 SX380 を切る。平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は直径約 1.3 m、検出面からの深さは 0.35 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、5 層に区分される。第 6 層は別遺構の埋土で、下位の 3 区 SX380 の裏内部に堆積した埋土であり、2 つの遺構の調査記録を同時に行ったものとみられる。しかしながら、第 3・4 層と 5 層に不整合な堆積が認められ、それらの不整合面と下位に埋設された裏の立ち上がりが整合することから、第 5 層が埋裏の裏込め土であった可能性がある。これらのことから、本遺構は埋裏遺構 3 区 SX380 の堀方の一部と位置付けることも可能とみられる。

出土遺物は僅少で、肥前系染付紅猪口、色絵碗などが出土しており、これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半頃と考えられる。

3 区 SK365(第 178 図、第 437 図 6～21)

3 区西側の E2 グリットで検出された廃棄土坑である。北側を掘乱 3 区 S002 に切れられ、3 区 SX480 を切る。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。長軸 1.6+ α m、短軸 1.6 m、検出面からの深さは 0.6 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、3 層に区分される。これらには遺物が多く含まれており、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、第 1 層から肥前系染付紅猪口、柿軸が施された土師質土器小皿 c など、第 2 層から肥前系染付碗、肥前系陶器行平鍋、肥前系陶器灯火具など、遺構埋土を分層して層位ごとに遺物を取り上げることができていないものには、肥前系の染付小瓶、備前焼小皿、肥前系陶器ひょうそく、甲冑を着た武将の土製人形など(第 437 図 16～21)がある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

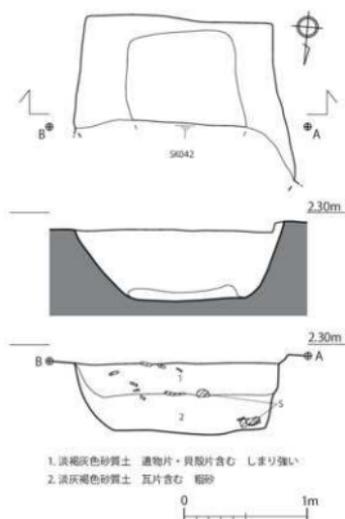
3 区 SK375(第 179 図、第 438 図)

3 区北西端の H1 グリットで検出された廃棄土坑である。3 区 SK787 を切り、同 S638 に切られる。平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸 1.5 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.6 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、2 分される。炭化物や遺物が多く含まれており、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

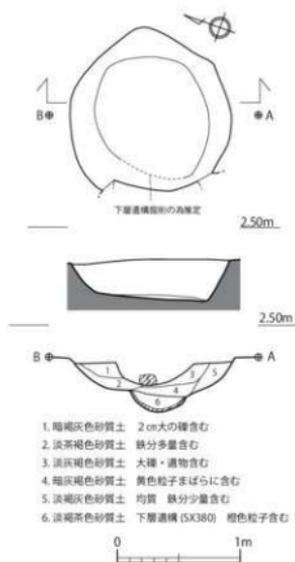
遺物は、土師質土器小皿をはじめとして、肥前系染付丸碗や肥前系色絵合子、肥前系青磁鉢などが出土している。その中には、土師質土器小皿に鉄製の把手が置かれ状態で確認されたもの(第 438 図 9)もある。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、18 世紀後半頃と考えられる。

3 区 SK390(第 180 図、第 439 図・第 440 図 1～10)

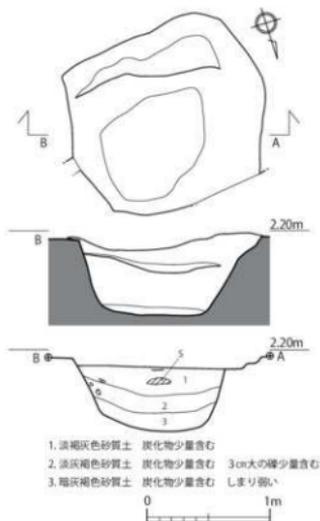
3 区北西の G2 グリットで検出された廃棄土坑である。平面形状は円形状、断面形状は東側に段を有する逆台形を呈し、西側が深く掘り込まれている。堀方の規模は長軸 3.0 m、短軸 2.9 m、検出面からの深さは 1.1 m を測る。埋土はシルト質土を基調とし、17 層に区分される(第 180 図)。その箇所不整合な堆積が認められることから、掘り返しの痕跡もしくは人為的に埋め戻された埋土とみられ、第 2～10 層が掘り返しの痕跡、第



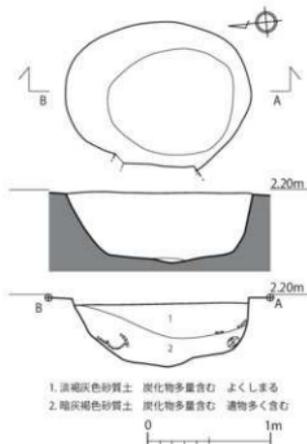
第176図 3区 SK345 遺構実測図(1/40)



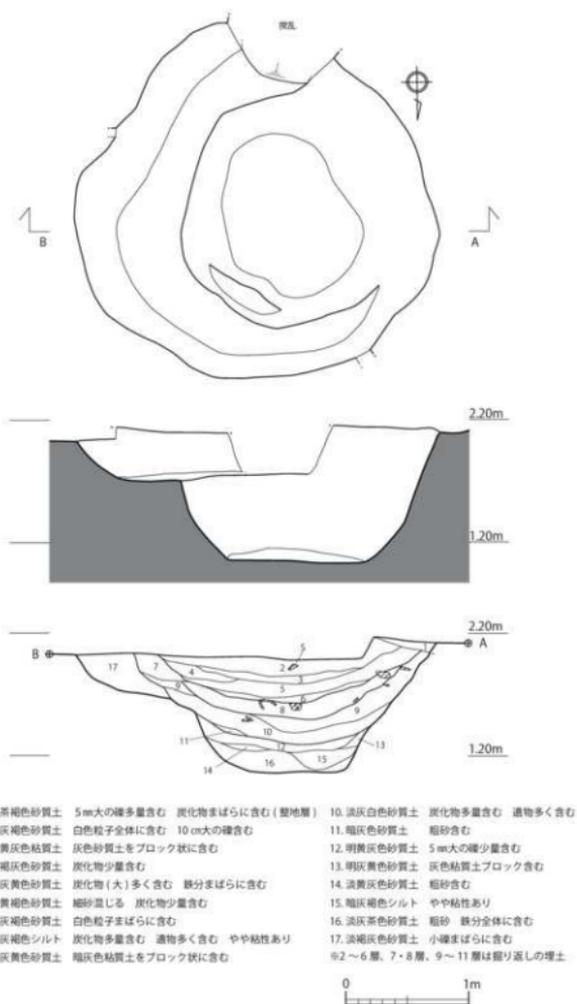
第177図 3区 SK350 遺構実測図(1/40)



第178図 3区 SK365 遺構実測図(1/40)



第179図 3区 SK375 遺構実測図(1/40)



第 180 図 3 区 SK390 遺構実測図 (1/40)

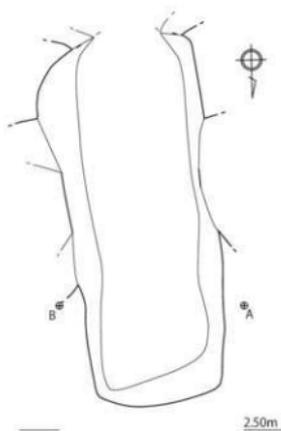
11～16層が人為的な埋め戻し、第17層は土坑が掘り返される前に堆積した埋土と判断される。なお、第1層は他遺構の埋土である。

遺物は、土師質土器小皿や搬入品とみられる京都系土師器皿をはじめ、肥前系染付丸碗、初期伊万里を含む肥前系染付皿、外面鉄軸の肥前系磁器天目碗、景德鎮窯系の青花芙蓉手大皿、肥前系陶器刷毛手皿、絵唐津陶器皿、瓦質土器風が、火消壺、関西系や在地系の土師質土器焙烙などが出土している。

17世紀前半頃のものとして18世紀後半頃のものが入混しているのが特徴で、年代決定に有効な土師質土器が両者に認められる。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は、18世紀後半頃と判断されるが、掘り返しの痕跡が埋土にあることから、当初の遺構の埋没時期は17世紀前半頃であった可能性がある。

3区SK475(第181図、第440図11～29・第441図)

3区西側中央のD3グリッドで検出された廃棄土坑である。3区S392に切られ、同S871・S869を切る。平面形状は長方形、断面形状は方形を呈する。堀方の規模は長軸3.0+ α m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.6mを測る。埋土は砂質土を基調とし、3層に区別される。遺物を多量に含むことから、人為的に埋め戻された埋土とみられる。遺物は、土師質土器小皿をはじめ、肥前系染付丸碗、肥前系の染付皿、陶胎染付碗、京焼風陶器碗、瀬戸美濃産の腰筒碗、関西系陶器の鉢や創鉢などが出土している。また、これらの中には、茶入とみられる瀬戸美濃産の小壺(第441図23)など特筆される17世紀前半頃の遺物も認められる。年代決定に有効な土師質土器の帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀後半～19世紀前半頃と考えられる。



1. 淡灰褐色砂質土 砂利まばらに含む しまり強い
2. 明灰褐色砂質土 砂利・礫まばらに含む 炭化物多く含む しまり強い
3. 暗灰褐色砂質土 炭・炭化物まばらに含む 粘性強い



第181図 3区SK475遺構実測図(1/40)

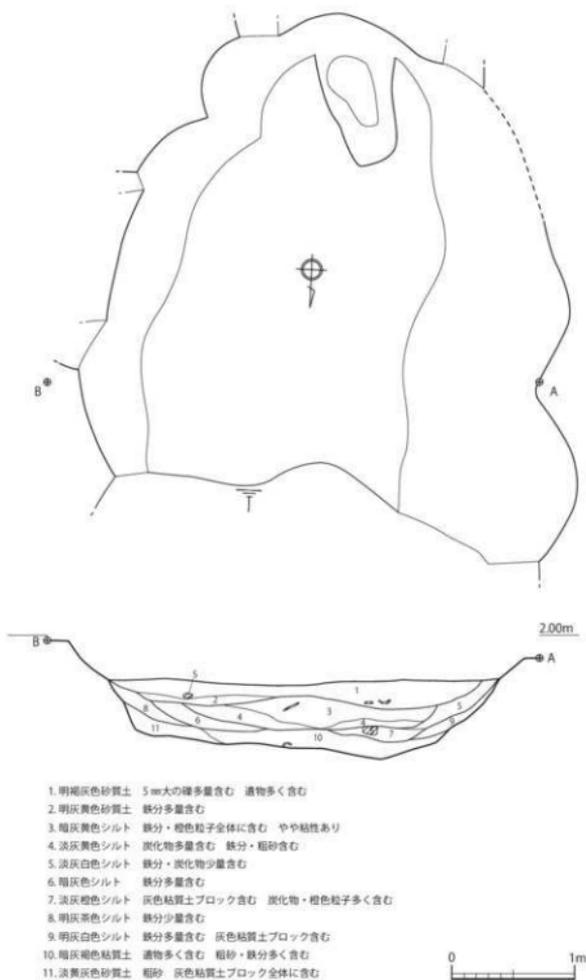
3区SK505(第182図、第442・443図)

3区中央北東寄りのG12グリッドで検出された廃棄土坑である。3区SD545を切り、同3区SK055に切られる。平面形状は不整楕円形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸3.7+ α m、短軸3.7m、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は砂質土とシルト質土を基調とし、大きく3層に区別される。これらには不整合な堆積が認められることから掘り返し、もしくは人為的な埋め戻しが行われたものと判断される。

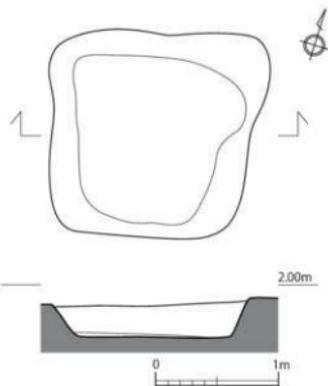
また、遺物もこの3層の最上位からそれぞれ多量に出土していることを踏まえれば、これらの堆積は積極的に掘り返しの痕跡と位置付けより、遺物の廃棄に伴う人為的な埋め戻しの単位で、最低3回の廃棄が行われたものとみることが妥当である。遺物は、上層の第1・2層から肥前系染付広東碗蓋、瀬戸美濃産陶器紅皿など(第442図1～7)、中層の第3～5層から信楽産と思われる屋根型の陶器(第442図8)など、下層の第10・11層からの出土遺物は特定できていない。

そのほかにも、遺構埋土を分層して層ごとに遺物を取り上げることができていないものには、中世前半期の土師器杯や中世末の京都系土師器をはじめ、18世紀前半頃の搬入品とみられる京都系土師器皿や肥前系染付広東碗、三田産青磁皿や関西系陶器土瓶、そして肥前系陶器茶入や土製品人形など(第442図9～22・第443図)がある。

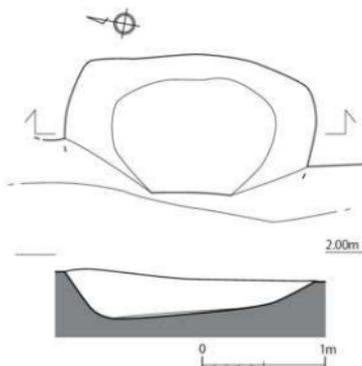
これらの帰属年代は年代幅が大きく、遺構の最終埋没時期しか特定することができない。上層の第1・2層から出土した遺物の帰属年代から、19世紀前半頃と考えられる。



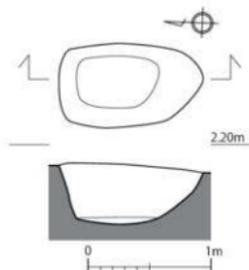
第182図 3区SK505遺構実測図(1/40)



第 183 図 3 区 SK543 遺構実測図 (1/40)



第 184 図 3 区 SK563 遺構実測図 (1/40)



第 185 図 3 区 SK747 遺構実測図 (1/40)

3 区 SK543(第 183 図、第 444 ~ 446 図)

3 区北東の H12 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈する。長軸 1.8 m、短軸 1.6 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土の特定はできていないものの、遺物や瓦片が多量に含まれており、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、肥前系の染付端反碗、広東碗、青磁染付皿、白磁皿、肥前系染付舟形水滴、肥前系陶器白刷毛手鉢、京焼風陶器鉢か皿、関西系陶器碗、萩焼碗、植木鉢に転用された瀬戸美濃産陶器の壺か瓶、「泉湊伊織」の刻印を有する焼塩壺などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SK563(第 184 図、第 447 図)

3 区南東の B13 グリッドで検出された廃棄土坑である。3 区 SD545・S564・S859 を切る。平面形状は楕円形とみられ、断面形状は北側がやや深い逆台形を呈する。堀方の規模は、長軸 2.0 m、短軸 1.1 + a m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土の特定はできていないものの、遺物が多量に含まれていたことから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、肥前系染付端反碗や瀬戸美濃産の染付端反碗肥前系青磁の鉢、土師質土器小皿をはじめとして、肥前系染付小瓶、関西系陶器土瓶、透明軸土師器皿、鳩笛などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半～19 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SK747(第 185 図、第 448・449 図)

3 区中央南東寄りの C12 グリッドで検出された廃棄土坑である。3 区 S038 に切られる。平面形状は不整形長方形、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 1.2 m、短軸 0.7 m、検出面からの深さは 0.5 m を測る。埋土の特定はできていないものの、遺物が多量に含まれていたことから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、瀬戸美濃産染付碗・皿など残存状態の良い 19 世紀代前半頃の陶磁器類が多く、景德鎮窯の可盃、肥前系染付碗・皿や板ガラスなども出土している。特に「神や」と書かれた焼継文字を有する肥前系染付碗 (第 448 図 13) は、当該遺構が「神屋氏」の屋敷推定地であることと符合するものである。また、3 区 SK822 出土の焼継を有する肥前系染付皿と接合するもの (第 449 図) も認められる。これらの帰属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀後半頃と考えられる。

3区SK759(第186図、第450図)

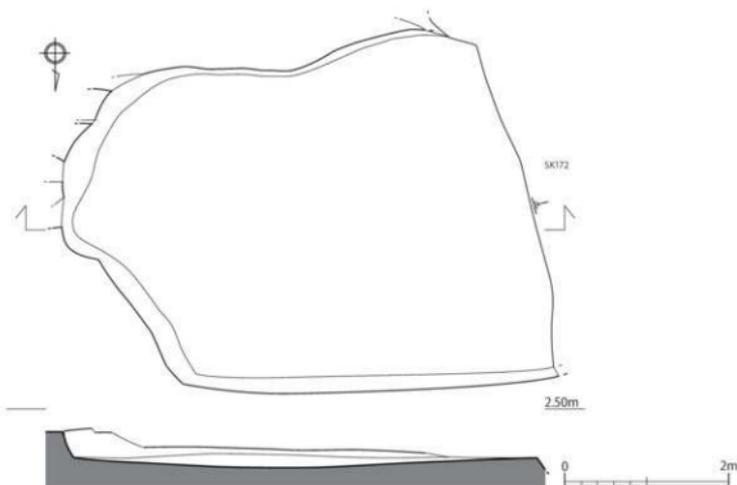
3区北西端のH4グリッドで検出された廃棄土坑である。3区SK172に切られる。平面形状は不整形、断面形状は方形を呈すとみられる。掘方の規模は長軸5.7+a m、短軸4.4 m、検出面からの深さは0.2 mを測る。埋土の特定はできていないものの、遺物が多量に含まれていたことから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、陶胎染付碗や土師質土器小皿をはじめ、景徳鎮窯系の色絵小坏、瀬戸美濃産陶器天目碗、さらには在地の17世紀前半頃の京都系土師器皿や初期伊万里の皿、肥前唐津陶器碗や吉田分類A・B・D類の軒平瓦などが出土しており、18世紀前半頃のものとして17世紀前半頃のものとの混在するのが特徴である。両者には、年代決定に有効な土師質土器や土師器が認められる。以上のことから、遺構の最終埋没年代は18世紀前半頃と判断されるが、17世紀前半頃から埋没が開始されていたものとみられる。

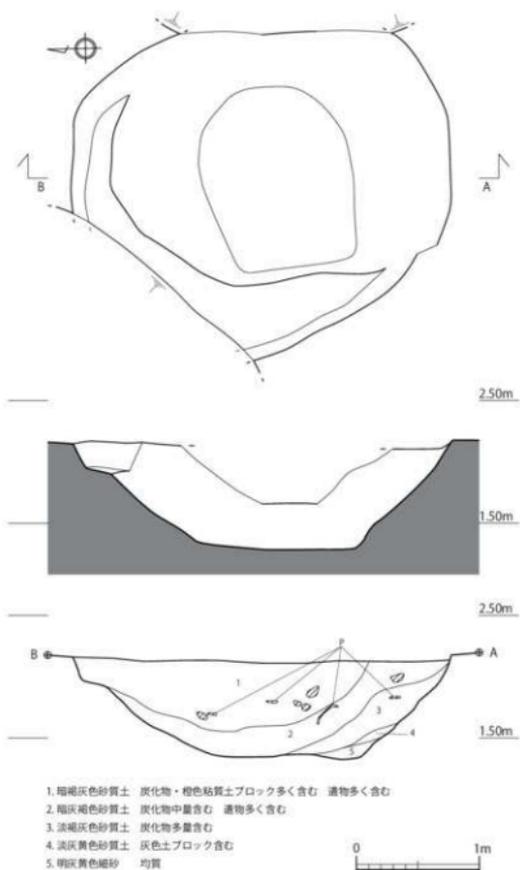
3区SK787(第187図、第451～453図)

3区北西端のH1グリッドで検出された廃棄土坑である。3区SK375に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸3.1 m、短軸2.7 m、検出面からの深さは0.8 mを測る。埋土は砂質土を基調とし、5層に区分される。炭化物や粘質土ブロック、そして遺物を多く含むことから、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

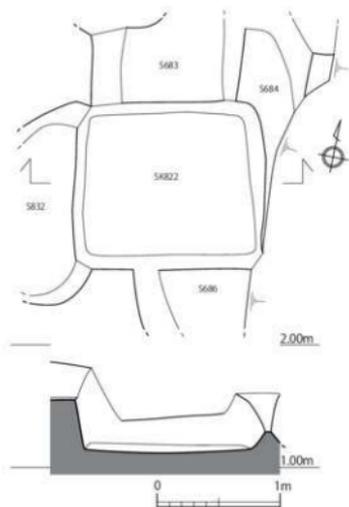
遺物は、第1層から肥前系染付丸碗や陶胎染付碗をはじめ、18世紀後半頃の底部に焼成後の穿孔が認められる土師質土器小皿や墨書がある土師器坏、そして現川焼の蛭手の碗や漳州窯系青花皿など、第2層から肥前系染付丸碗、肥前系染付型紙摺の変形皿をはじめとして、17世紀前半頃の在地の京都系土師器皿や18世紀前半頃の墨書のある搬入品とみられる京都系土師器皿、そして2枚が隣着する土師質土器小皿や、肥前系染付鉢、肥前系色絵水滴、肥前系陶器裏や鉢などが出土している。そのほかにも3区SK475から出土した茶入とみられる瀬戸美濃産の小壺(第441図23)と接合するものも認められる。これらの所属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半～後半にかけてと判断され、遺構最上層の第1層の埋没が18世紀後半頃、下層の2層以下の埋没が18世紀前半頃と考えられる。



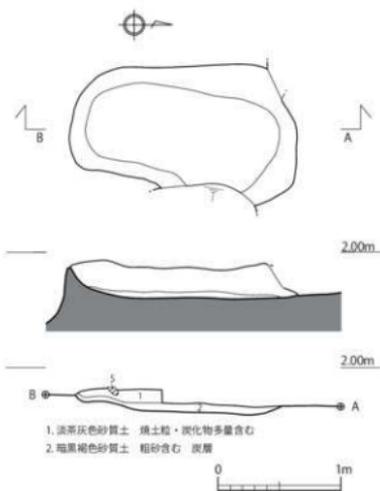
第186図 3区SK759 遺構実測図(1/60)



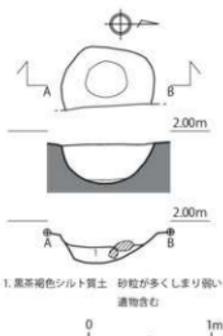
第 187 図 3 区 SK787 遺構実測図 (1/40)



第188図 3区SK822遺構実測図(1/40)



第189図 3区SK897遺構実測図(1/40)



第190図 4区SK132遺構実測図(1/40)



第191図 4区SK140遺構実測図(1/40)

3 区 SK822(第 188 図、第 454 図 1～8)

3 区東側中央の E14 グリッドで検出された廃棄土坑である。3 区 SK683・SK684・SK788 に切られ、同 SK832 を切る。平面形状は方形、断面形状は逆台形を呈していたものとみられる。堀方の規模は長軸 1.6 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土の特定はできていないものの、遺物が多量に含まれていたことから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、「神屋■」と書かれた焼継文字を有する肥前系染付湯呑碗や皿及び鉢、コバルト釉の染付碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は、19 世紀後半頃と考えられる。

3 区 SK897(第 189 図、第 454 図 9～11)

3 区南東の C17 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は不整楕円形を呈し、断面形状は逆台形になるものとみられる。堀方の規模は長軸 1.9 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、2 分される。焼土塊や炭化物を多く含むことから、人為的に埋め戻された埋土と判断されるものである。

遺物は僅少で、肥前系染付碗や在地の京都系土師器皿をはじめとして、吉田分類 B 類の軒平瓦などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀前半頃と考えられる。

4 区 SK132(第 190 図、第 455 図 1～3)

4 区南東の J16 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は円形状とみられ、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 0.8 m、短軸 $0.5 + \alpha$ m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は粗砂混じりの単一土層で、遺物、礫を多く含む。

遺物は、肥前系染付小坏、肥前系の唐津陶器碗、瀬戸美濃産陶器皿などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀後半頃と考えられる。

4 区 SK140(第 191 図、第 455 図 4～17・第 456 図)

4 区南側中央の J12 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は隅丸長方形とみられ、断面形状はレンズ状を呈する。堀方の規模は長軸 $1.2 + \alpha$ m、短軸 0.9 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は砂質土の単一土層で、瓦や陶磁器等の遺物を多量に含んでいることから、人為的に埋め戻されたものとみられる。遺物は肥前系端反碗、瀬戸美濃産染付端反碗、焼継痕を有する肥前系染付鉢、肥前系青磁染付鉢、白磁菊皿、備前焼鉢、隅瓦などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

4 区 SK150(第 192 図、第 457 図 1～5)

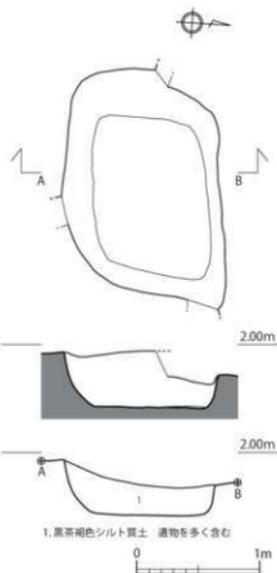
4 区南東の J14 グリッドで検出された廃棄土坑である。4 区 SK114 に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸 1.8 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土はシルト質土の単一土層で、遺物を多く含むことから、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、肥前系花唐草文の染付皿、肥前系白磁皿、陶胎染付碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

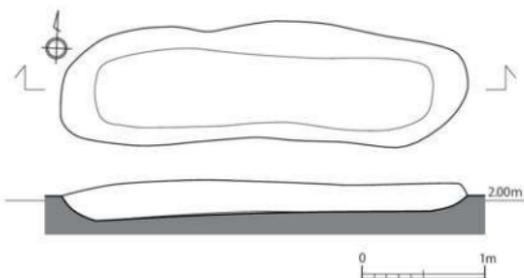
4 区 SK170(第 193 図、第 457 図 6～10)

4 区南端中央の I7 グリッドで検出された土坑である。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈す。堀方の規模は長軸 3.3 m、短軸 1.0 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土の特定はできていない。

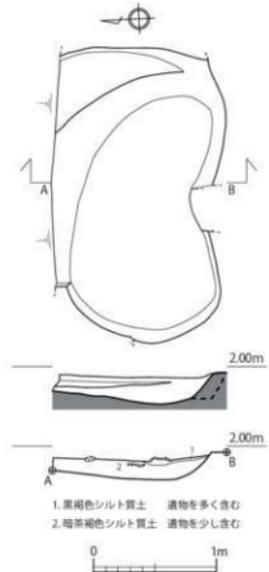
遺物は、瀬戸美濃産の染付端反碗や肥前系染付小碗、関西系陶器茶こし、そして瓦質土器燈台(第 457 図 10) などが出土しており、その帰属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。



第192図 4区 SK150 遺構実測図 (1/40)



第193図 4区 SK170 遺構実測図 (1/40)



第194図 4区 SK197 遺構実測図 (1/40)



第195図 4区 SK185 遺構実測図 (1/30)

4 区 SK197(第 194 図、第 457 図 11 ~ 17)

4 区南側中央の J10 グリッドで検出された廃棄土坑である。4 区 SX113 に切られる。平面形状は不整楕円形とみられ、断面形状は逆台形を呈する。堀方の規模は長軸 2.4 m、短軸 1.4+ α m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土はシルト質土を基調とし、2 分される。上層から遺物がまどまど出土しており、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、肥前系染付端碗、焼継痕を有する肥前系染付皿、瀬戸美濃産白磁小杯、「合」の刻印を有する椀瓦などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

土坑 (その他)

4 区 SK185(第 195 図、第 458 図)

4 区南側中央の J4 グリッドで検出された土坑である。平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は直径 0.4 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。埋土は砂質土の単一土層で、炭化物、橙色粒子を含み固くしまる。その上位からはほぼ完形の関西系陶器鉢が逆位で出土している。

遺物は、その関西系陶器鉢をはじめとして、関西系陶器碗などが確認されており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半頃と考えられる。

溝状遺構

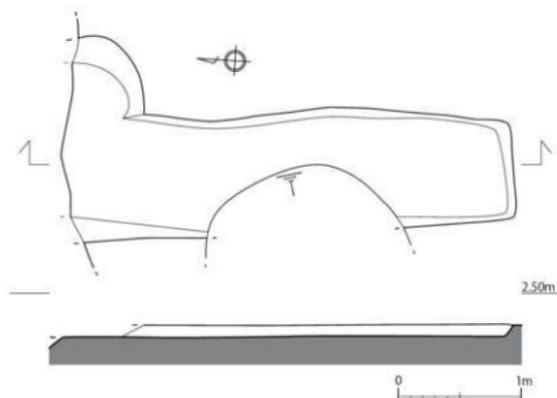
3 区 SD395(第 196 図、第 459 図 1・2)

3 区北西の G5 グリッドから H グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構の一部とみられる。3 区 SK085 に切られ、同 SK759・S802 を切る。主軸方位を N-4°-W とする南北方向の遺構である。幅 1.0 m、長さ約 6.0 m、検出面からの深度は 0.1 m を測り、底部の標高は約 2.2 m である。

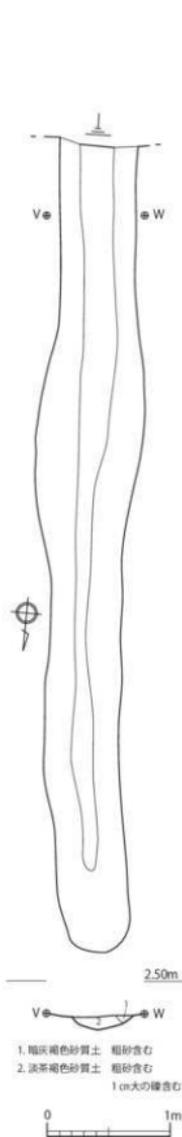
出土遺物は僅少であるが、瀬戸・美濃産の向付(第 459 図 1) が出土している。この他に小片のため図示できていないが、肥前系染付の丸碗が認められることから、遺構の埋没時期は、18 世紀前半頃と考えられる。

3 区 SD400(第 197 図、第 459 図 3 ~ 29・第 460 図 1 ~ 24)

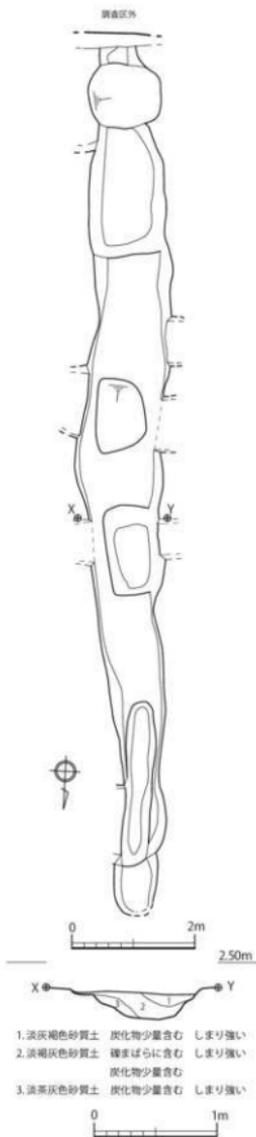
3 区南西の A 5 グリッドから北東の G 4 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3 区 SK172・S801 に切られる。第 3 調査面で検出した 18 世紀後半頃の 3 区 SX565 の上位に位置する。主軸方向を N-4°



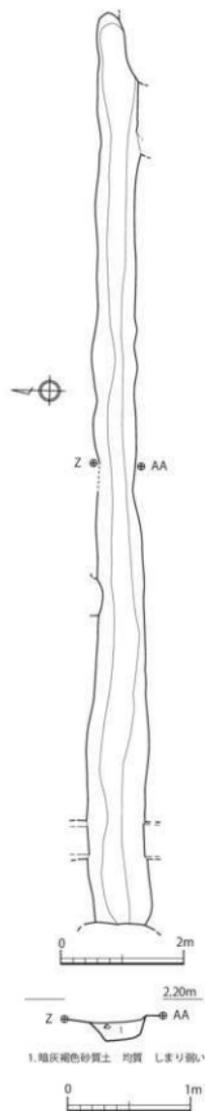
第 196 図 3 区 SD395 遺構実測図 (1/40)



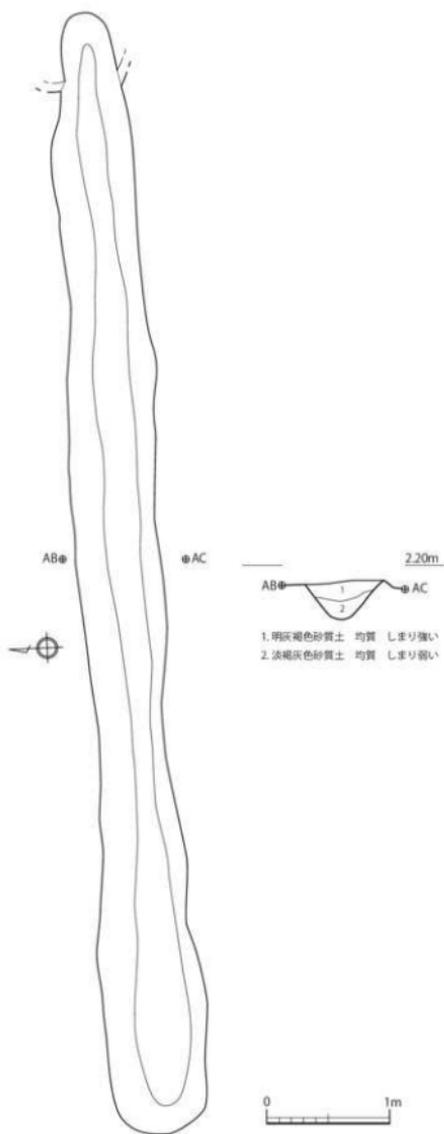
第198図 3区 SD405 遺構実測図
(1/40)



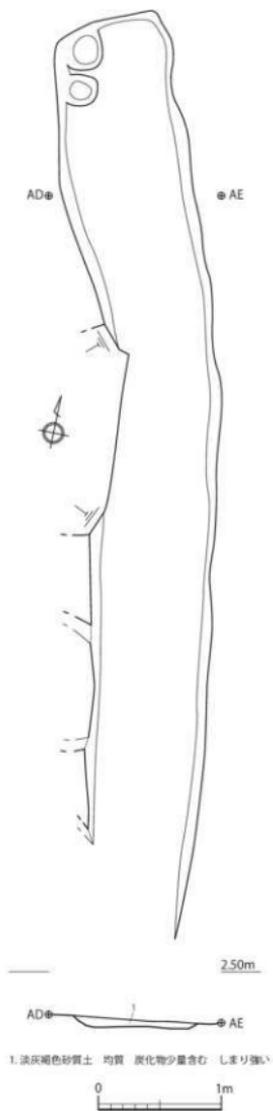
第199図 3区 SD410 遺構実測図
(1/80・1/40)



第200図 3区 SD415 遺構実測図
(1/80・1/40)



第201図 3区SD420遺構実測図(1/40)



第202図 3区SD430遺構実測図(1/40)

3区 SD405(第 198 図)

3区中央西寄りの F 5 グリッドから G 5 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。主軸方向を N-5°-W とする南北方向の溝で、幅 0.5 m、検出面からの最大深度は 0.15 m を測り、断面形状はレンズ状を呈する。埋土は砂質土を基調とし、粗砂を含み 2 分される。先述の 3区 SD400 と平行し、次に報告する同 3区 SD410 の延長線上に位置するものである。出土遺物は僅少で、遺構の埋没時期は特定できていない。

3区 SD410(第 199 図、第 460 図 25～28)

3区南西の A 5 グリッドから D 5 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3区 SD405 の延長線上にあたる。主軸方向を N-3°-W とする南北方向の溝で、幅 0.5～1.0 m、検出面からの最大深度は 0.2 m を測り、断面形状はレンズ状を呈する。埋土は砂質土を基調とし、3層に区分される。各層東側から堆積したものとみられる。

遺物は、焼継文字を有する肥前系の染付端反碗や肥前系陶器灯火具などが出土している。焼継文字には「光蔵様」とあり、この陶磁器の所有者の手掛かりとなる。陶磁器の焼継文字は修理を受注した焼継師が発注者を特定するため陶磁器の外底部に記したもので、近接する 2区 SE020 出土の陶磁器の焼継文字に「岡本みつ蔵様」とあることを踏まえれば、焼継文字が示す「光蔵様」とは文久 3 年(1863)4 月の絵図「豊後国府内藩御家中名前付」に登場する府内藩士・岡本益蔵(みつぞう)である可能性がある。焼継師が発注主の名前の後に通常ではみられない「様」という敬称を付けたのもこれで頷ける。出土遺物の帰属年代から遺構の埋没時期は 19 世紀前半頃と考えられる。

3区 SD415(第 200 図、第 461 図 1～12)

3区中央北側の H 6 グリッドから I 9 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。主軸方向を N-89°-E とする東西方向の溝で、幅 0.6～1.0 m、検出面からの最大深度は 0.2 m を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は砂質土の単一土層で、遺物は、肥前系の染付筒型碗、白磁碗、関西系の小杉碗などが出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半頃と考えられる。

3区 SD420(第 201 図、第 461 図 13～16)

3区中央北側の H 6 グリッドから H 8 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3区 SK797 に切られる。主軸方向を N-88°-E とする東西方向の溝で、幅 0.5～0.6 m、検出面からの最大深度は 0.4 m を測り、断面形状は緩やかな V 字状を呈する。埋土は砂質土を基調とし、2 分される。

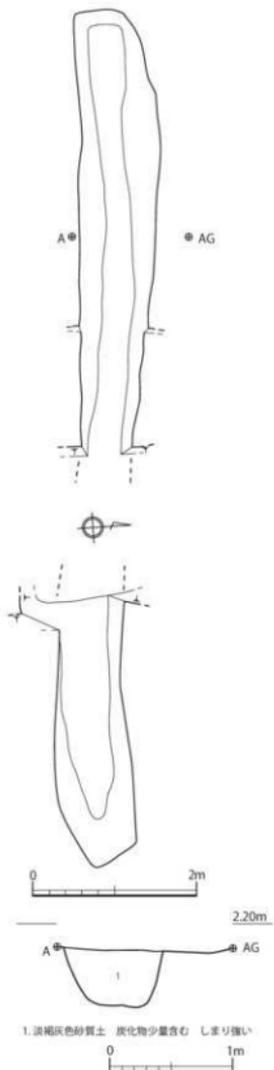
遺物は、在地系の京都土師器皿をはじめ、肥前系の天目青磁碗、唐津陶器碗・皿などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀中頃～後半頃と考えられる。

3区 SD430(第 202 図、第 461 図 17・18)

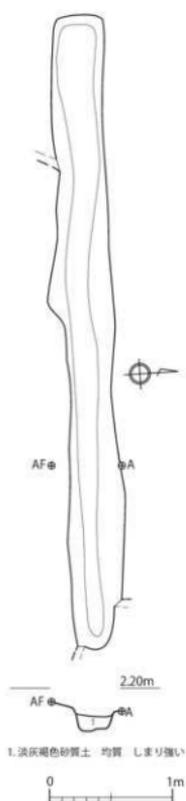
3区中央東寄りの C 12 グリッドから E 12 グリッドにかけてやや直線的に延びる溝状遺構である。主軸方向を N-13°-W とする南北方向の溝で、幅約 1.0 m、検出面からの最大深度は 0.1 m を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は砂質土の単一土層で、遺物は肥前系唐津陶器の播鉢や壺などが出土しており、その帰属年代から、遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

3区 SD495(第 203 図、第 462 図 1～22)

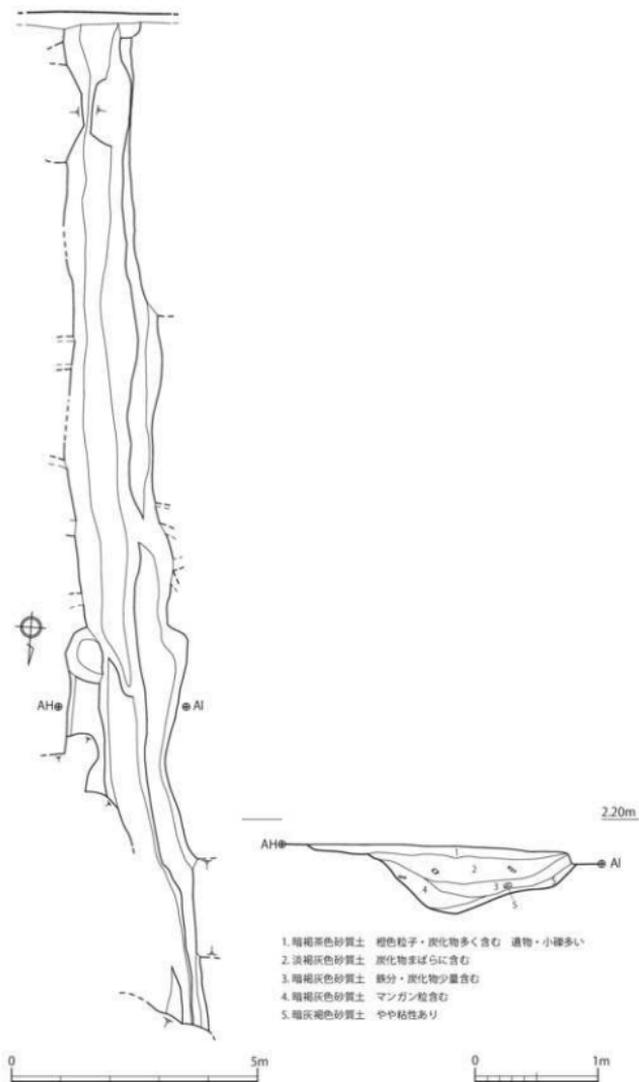
3区中央北側の H 9 グリッドから H 10 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3区 SD415 に西端を切れ、下位には 17 世紀前半頃の第 3 調査面で確認された 3区 SD630 が位置する。主軸方向を N-87°-W とする東西方向の溝で、幅 0.8～0.9 m、検出面からの最大深度は 0.5 m を測り、断面形状は逆台形を呈する。



第 203 図 3 区 SD495 遺構実測図 (1/60・1/40)



第 204 図 3 区 SD500 遺構実測図 (1/40)



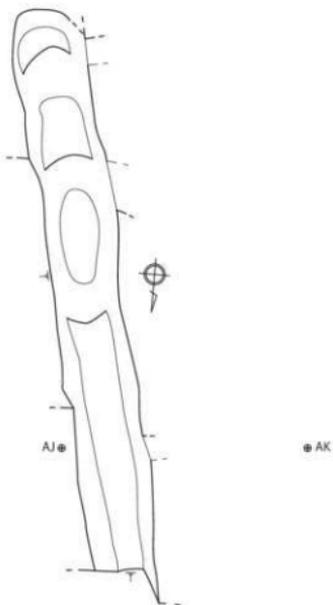
第 205 図 3 区 SD545 遺構実測図 (1/100・1/40)

埋土は砂質土の単一土層で、遺物を多く含むことから人為的に埋め戻されたものと判断される。

遺物は、肥前系唐津陶器白刷毛手碗や関西系とみられる播鉢をはじめ、土師質土器小皿や在地系の京都系土師器皿、搬入品とみられる京都系土師器皿などが出土している。この他にも肥前系の染付皿や白磁猪口・小坏、青磁碗、また、肥前系唐津陶器皿や碗などもあり、17世紀前半頃と、17世紀後半～18世紀前半頃のものが混在するのが特徴である。とりわけ、土師質土器や京都系土師器の帰属年代から17世紀前半頃と18世紀前半頃に2分される可能性があり、遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。なお、17世紀前半頃の比較的症状とまとった一群は、下位の3区SD630と同じ時期のものであり、本来はこれに帰属していたものとみられる。

3区 SD500(第204図、第462図23～25)

3区中央北側のH9グリッドからH10グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3区SD495と並行し、西側を3区SK797に切られる。主軸方向をN-88°-Wとする東西方向の溝で、幅0.5m、検出面からの最大深度は0.2mを測り、断面形状は方形を呈する。埋土は砂質土の単一土層で、出土遺物は僅少である。肥前系唐津陶器碗や備前焼播鉢、吉田分類D群の軒平瓦などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は17世紀前半頃と考えられる。



1. 暗茶褐色砂質土 5cm大の罐含む
2. 明黄灰色砂質土 黄色粘質土ブロック状に含む



第206図 3区SD500遺構実測図(1/40)

3区 SD545(第205図、第463図・第464図1～5)

3区中央北東のA13グリッドからF12グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3区SK335・SK435・SK525・SK563に切られる。主軸方向をN-7°-Wとする南北方向の溝で、幅1.6～2.0m、検出面からの最大深度は0.6mを測り、断面形状は西側が緩やかなV字状を呈し、部分的にテラス状の段がつく。埋土は砂質土を基調とし、大きく2分される。具体的には、炭化物や遺物の多寡で第1層と第2～5層に区分され、第1層は炭化物や遺物を多く含み、第2層以下に包含されるものは少ないもの第3～5層にそれぞれ不整な堆積が認められることから、両者ともに人為的に埋め戻された埋土と判断される。

遺物は、第1層から肥前系の染付端反碗や透明軸が施された施軸かわらけ(土師質土器小皿C)など、第2～5層からは肥前系染付丸碗や染付猪口、そして関西系陶器の小碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。なお、第1層と第2～5層の埋没年代に若干の差異が認められ、本遺構は18世紀後半頃にすでに廃絶していた可能性がある。

3区 SD550(第206図、第464図6～15)

3区中央東寄りのE12グリッドからG12グリッドにかけて検出された直線的に延びる溝状遺構である。下位には16世紀末～17世紀初頭頃の第3調査面で確認された3区SF535が位置する。主軸方向をN-15°-Wとする南北方向の溝で、幅0.5m、検出面からの最大深度は0.6mを測り、斯

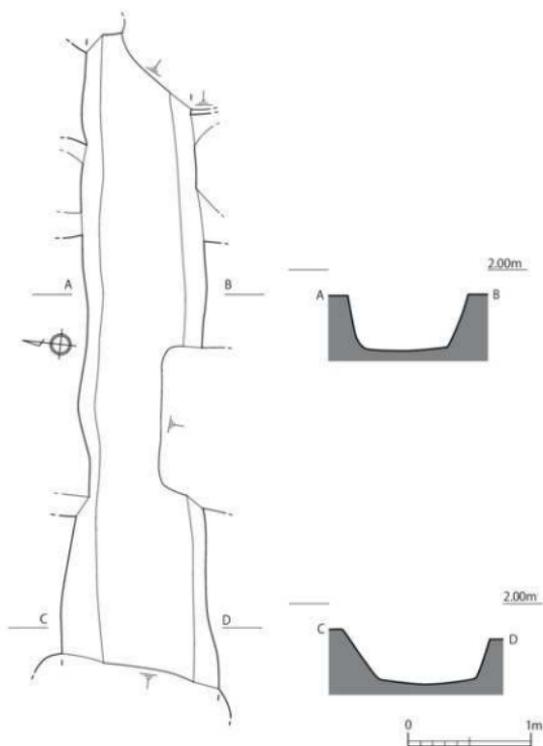
面形状はU字状を呈する。埋土は砂質土を基調とし、2分される。

遺物は、肥前系唐津陶器碗や肥前系の染付碗、そして土師質土器小皿など17世紀後半頃～18世紀前半頃のものと、備前焼の播鉢や唐津陶器皿、そして在地系の京都系土師器皿など16世紀末～17世紀前半頃のものが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。なお、16世紀末～17世紀前半頃の遺物は、下位の3区SF535と同じ時期のものであり、本来はこれに帰属していたものとみられる。

3区SD842(第207図、第464図16～26)

3区北東端のI 17グリッドからI 18グリッドにかけて検出された直線状に延びる溝状遺構である。19世紀前半頃とみられる3区S849などを切る。主軸方向をN-83°-Eとする東西方向の溝で、幅1.2m、検出面からの最大深度は0.4mを測り、断面形状は逆台形を呈する。

遺物は、銅版転写で絵付けされた小坏をはじめ、肥前系外面青磁筒形碗、白磁蓋、青磁皿、色絵水滴、関西系陶器碗、瀬戸美濃産陶器天目碗などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は、19世紀後半頃と考えられる。



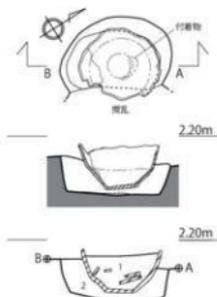
第207図 3区SD842遺構実測図(1/40)

不明遺構 (埋裏遺構)

3区 SX325 (第208図、第465図1~3)

3区南東のC14グリッドで検出された埋裏遺構である。掘方の平面形状は円形状とみられ、断面形状は逆台形を呈する。掘方の規模は長軸0.7m、短軸0.7+a m、検出面からの深さは0.5mを測る。掘方中央に土師質土器の甕が正位に埋置されるが、南側にわずかに傾斜する。甕は底面から約0.3mが残存する。甕内の埋土は砂質土の単一土層で甕片や小石が大量に含まれる。甕の内底部に黄白色の付着物がみられることから、便所遺構と判断される。

遺物は甕内埋土より肥前系外面青磁高形碗、備前焼朱泥陶器のミニチュア描鉢などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。



1. 淡茶褐色砂質土 甕片多量含む 5mm大の礫多量含む
2. 淡褐色砂質土 5mm大の礫少量含む 橙色粒子まばらに含む

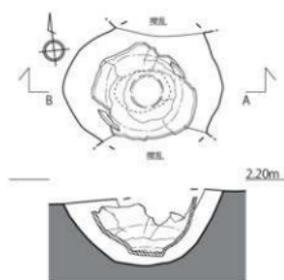


第208図 3区 SX325 遺構実測図 (1/30)

3区 SX330 (第209図、第465図4~6)

3区南東のB15グリッドで検出された埋裏遺構である。掘方の平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸1.0m、短軸0.5+a m、検出面からの深さは0.3mを測る。掘方中央に土師質土器の甕が正位に埋置され、底面から約0.4mが残存する。甕内の埋土は砂質土の単一土層で、甕片を多量に含む。甕内面に白色の付着物が認められることから、便所遺構と判断される。

遺物は、甕内埋土より肥前系染付広底碗、関西系の小形碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。



1. 淡褐色砂質土 甕片多量含む 灰まばらに含む
2. 淡茶褐色砂質土 均質 甕片少量含む しまり強い



第209図 3区 SX330 遺構実測図 (1/30)

3区 SX360 (第210図、第465図7~9)

3区西側のE2グリッドで検出された埋裏遺構である。18世紀代とみられる3区SK868を切る。掘方の平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈する。掘方の規模は径1.2+a m、検出面からの深さは0.7mを測る。掘方の中央に土師質土器の甕が正位に埋置され、底面から約0.6mが残存する。甕内の埋土は砂質土を基調とし、4層に区分される。第1層には甕片を多く含む、最下層に粗砂が堆積する。甕内面に白色の付着物が確認できたことから、便所遺構と判断される。

出土遺物は僅少で、関西系の陶器などが出土しているのみであり、時期の特定はできていない。

3区 SX370 (第211図、第465図10)

3区中央南西のB7グリッドで検出された埋裏遺構である。18世紀代とみられる3区SK813を切る。掘方の平面形状は円形、断面形状は二段の逆台形を呈す。掘方の規模は径0.9m、検出面からの深さは0.4mを測る。掘方の中央に土師質土器の甕が正位に埋置され、底部から0.2mが残存する。甕内の埋土は砂質土の単一土層で、

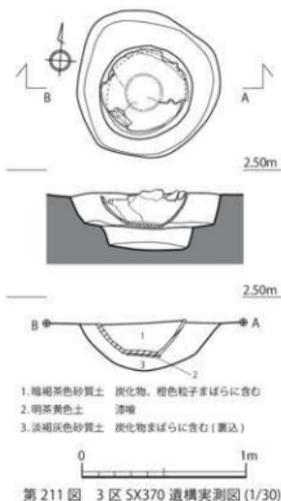
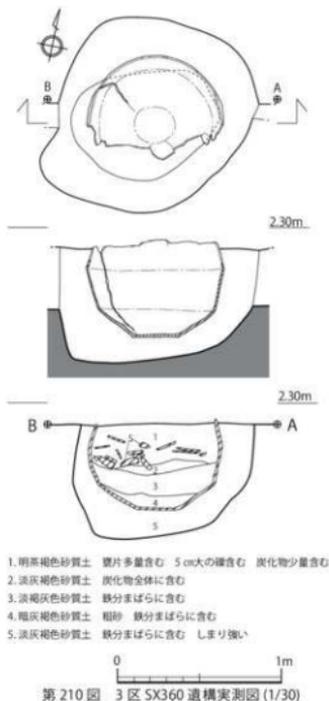
裏込土では、裏の底部直下に厚さ2 cm程の漆喰が確認されたことから、埋設時に裏を固定したものと判断される。出土遺物は僅少で、時期の特定はできていない。

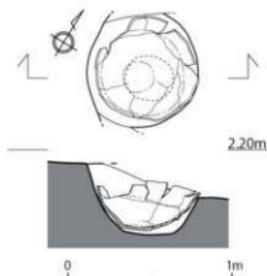
3区 SX380(第212図)

3区南西端のA3グリッドで検出された埋裏遺構である。3区SK350に切られる。掘方の平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は直径0.7 m、検出面からの深さは0.5 mを測る。掘方中央に土師質土器の裏が正位で埋置されるが、東側にわずかに傾斜する。裏は底部から0.3 mが残存し、内面に付着物は確認できていない。このため、裏内部の埋土の理化学分析を行った結果、寄生虫卵は検出されていないことから便所遺構の可能性は低い。また、珪藻分析でわずかに滞水し湿った環境であったと推定されているため、水囊などに使用された可能性はある。出土遺物は僅少で、時期の特定はできていない。

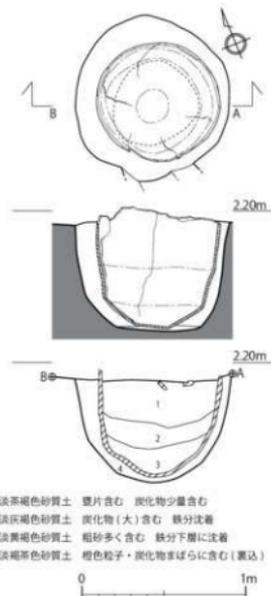
3区 SX425(第213図)

3区中央東側のE15グリッドで検出された埋裏遺構である。19世紀前半頃の3区S229などに切られる。掘方の平面形状は円形状、断面形状はU字形を呈する。掘方は径1.0 m、検出面からの深さは0.8 mを測る。掘方の中央に土師質土器の裏が正位に埋置され、底面から約0.7 mが残存する。裏は比較的焼成が良好なものが使用されている。裏内部の埋土は砂質土を基調とし、3層に区分される。第1層には裏片を多く含み、第3層には粗砂を多く含み、その下位に鉄分が沈着する。裏内面には付着物は認められない。





第212図 3区 SX380 遺構実測図 (1/30)



第213図 3区 SX425 遺構実測図 (1/30)

このため、裏内部の埋土の理化学分析を行った結果、寄生虫卵をはじめ、アブラナ科やイネ科の花粉や、アジ科椎骨などの硬骨魚綱細片も検出されており、便所遺構の可能性が高い。これらのイネやアブラナ、アジ科などの魚類は、本遺構を使用した人物が摂食していたものとみられる（詳細は第VI章を参照）。

遺物は僅少で、小片のため図示できていないものの、肥前系染付丸碗などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

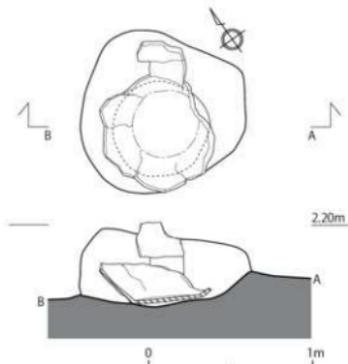
3区 SX490 (第214図、第465図11)

3区南東のC15グリッドで検出された埋糞遺構である。掘方の平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈するとみられる。掘方の規模は直径約0.5m、検出面からの深さは0.5mを測る。掘方のほぼ中央に土師質土器の裏が正位で埋置され、底面から約0.5mが残存する。裏内の埋土の情報は記録できていない。また、裏内面に付着物は確認できていない。

遺物は、裏内部の埋土から関西系陶器筒型碗が出土しており、遺構の埋没時期は18世紀後半以降と考えられる。

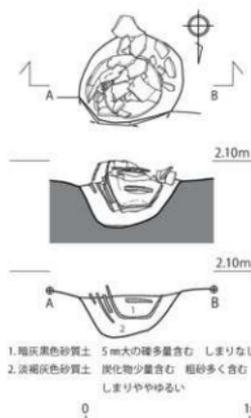
4区 SX100 (第215図、第466図1)

4区南東のJ18グリッドで検出された埋糞遺構である。掘方の平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は直径0.6m、検出面からの深さは0.3mを測る。埋糞は肥前系の陶器裏を使用しており、掘方中央に埋置される。埋糞内の埋土は砂質土の単一土層である。また、裏込め土も砂質土で、埋糞に使用された陶器の裏の外面を囲むように多量の土師質土器の裏片が埋設されており、陶器の裏を固定していたものと判断される。裏内面には付着物などは認められず、水嚢に使用していたものとみられる。

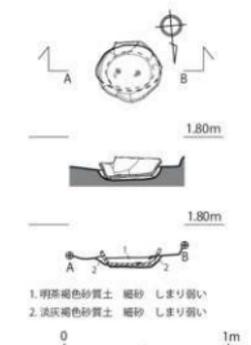


第214図 3区 SX490 遺構実測図 (1/30)

遺物は皆無で、埋設された陶器甕の帰属年代から遺構の構築時期は17世紀後半頃と考えられる。



第215図 4区 SX100 遺構実測図 (1/30)



第216図 4区 SX180 遺構実測図 (1/30)

4区 SX180(第216図、第466図2)

4区南東のJ15グリッドで検出された埋遺遺構である。掘方の平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は直径0.4m、検出面からの深さは0.1mを測る。掘方の中央に土師質土器の甕が正位に埋置され、底面から約0.2mが残存する。甕内の埋土は砂質土の単一土層である。甕の内底部からは2枚の銅銭が出土した。甕内面に付着物は認められない。

遺物は僅少で、甕内の埋土から肥前系の染付広底碗蓋が出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる。

不明遺構(粘土貼土坑)

3区 SX440(第217図、第467図1~7)

3区南東端のB17グリッドで検出された粘土貼土坑である。3区SK450に切られる。平面形状は長方形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸2.1m、短軸1.2m、検出面からの深さは0.5mを測る。土坑底面と壁面に橙色粘土が貼られる。粘土は底面で厚さ8~10cm、壁面で約1cmを測り、鉄分が多く含まれる。壁面の一部に粘土は認められず、剥落したものと判断される。埋土は砂質土を基調として、5層に区分される。その内、第1層は別遺構の埋土とみられる。第2~4の各層は東から堆積し、第3・4層の堆積は残存する土坑の上面から底面にまで及んでいることから、これらは連続して堆積した可能性がある。

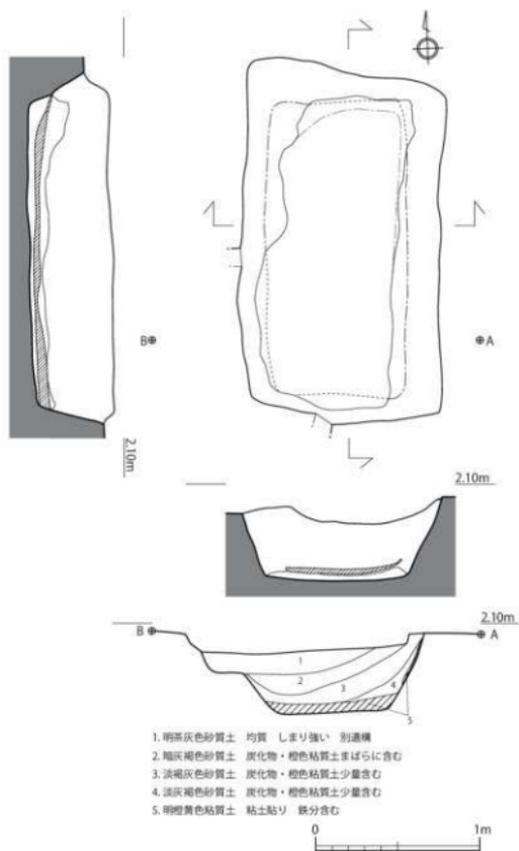
遺物は、第2層から砂目積み痕のある肥前系唐津陶器皿(第467図6)、第3層から肥前系染付菊文碗(同図7)、そのほか肥前系唐津陶器壺や面子状に加工された陶器片などが出土しており、これらの帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

3区 SX445(第218図、第467図8)

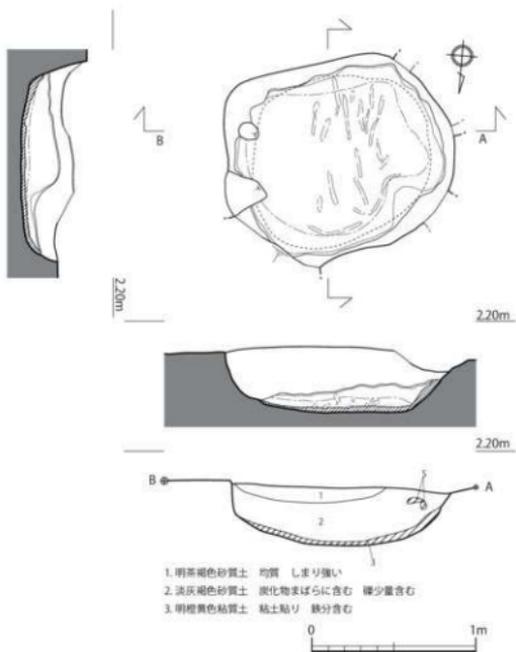
3区南東端のB18グリッドで検出された粘土貼土坑である。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸1.4m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.5mを測る。底面、壁面に橙色粘土が貼られ、その底面に帯状の窪みを数条確認した。粘土は全面3~4cmの厚さを測り、鉄分を含む。土坑の埋土は砂質土を基調とし、2分される。

遺物は僅少で、埋土から肥前系染付皿が出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は、17世紀中頃以降と考えられる。

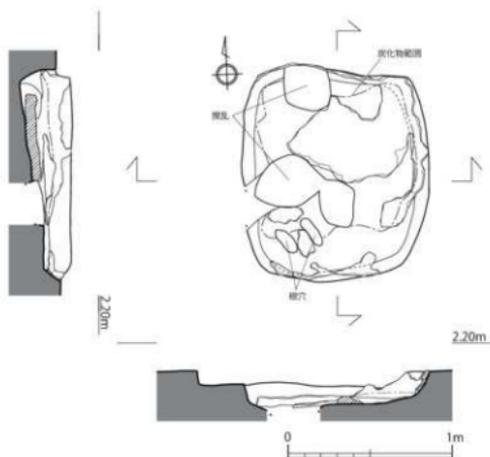
調査の成果(遺構編) 第IV章



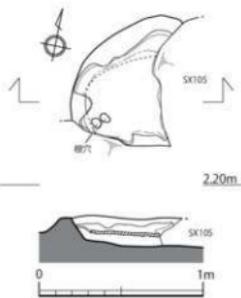
第217図 3区 SX440 遺構実測図 (1/30)



第218図 3区 SX445 遺構実測図(1/30)



第219図 3区 SX450 遺構実測図(1/30)



第 220 図 3 区 SX455 遺構実測図 (1/30)

3 区 SX450(第 219 図)

3 区南東端の B18 グリッドで検出された粘土貼土坑である。3 区 SK440・SK540 を切る。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸 1.3 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。底面、側面に橙色粘土が貼られ、その厚さは底面で 10 cm、壁面で約 3 cm を測る。底面粘土の直上で炭化物が広範囲に堆積する。出土遺物は皆無で、時期の特定はできていない。

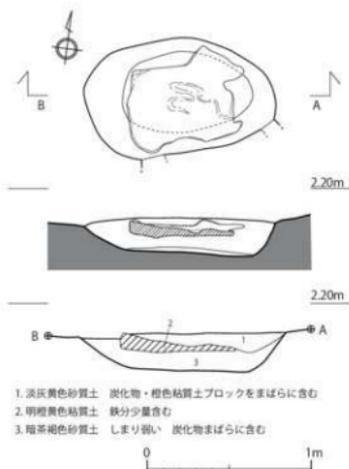
3 区 SX455(第 220 図、第 467 図 9・10)

3 区南東端の C18 グリッドで検出された粘土貼土坑である。平面形状は円形、断面形状は逆台形とみられる。掘方の規模は長径 0.8+ α m、短径 0.6+ α m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。底面、壁面に橙色粘土が貼られ、その厚さは約 2 cm を測る。

出土遺物は僅少で、初期伊万里の肥前系染付碗や朝鮮王朝産陶器皿(第 467 図 10)などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は出土遺物から 17 世紀前半頃と考えられる。

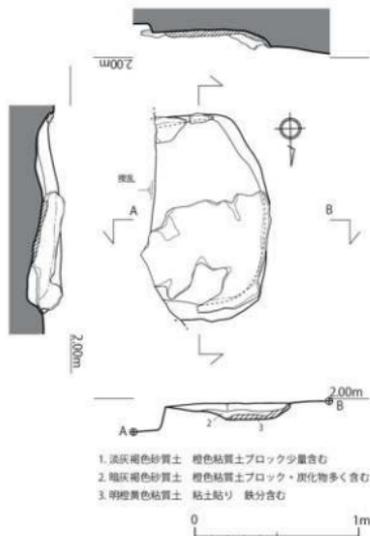
3 区 SX470(第 221 図、第 467 図 11～13)

3 区南東端の B18 グリッドで検出された粘土貼土坑である。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸 1.2 m、短軸 0.7 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。底面と壁面に橙色粘



1. 淡灰黄色砂質土 炭化物・橙色粘質土ブロックをまばらに含む
2. 明橙黄色粘質土 鉄分少量含む
3. 暗茶褐色砂質土 しまり強い 炭化物まばらに含む

第 221 図 3 区 SX470 遺構実測図 (1/30)



1. 淡灰黄色砂質土 橙色粘質土ブロック少量含む
2. 暗灰褐色砂質土 橙色粘質土ブロック・炭化物多く含む
3. 明橙黄色粘質土 粘土貼り 鉄分含む

第 222 図 3 区 SX510 遺構実測図 (1/30)

土が貼られ、その厚さは、壁面は残存状態が悪く計測不可、底面は最大10cmを測る。

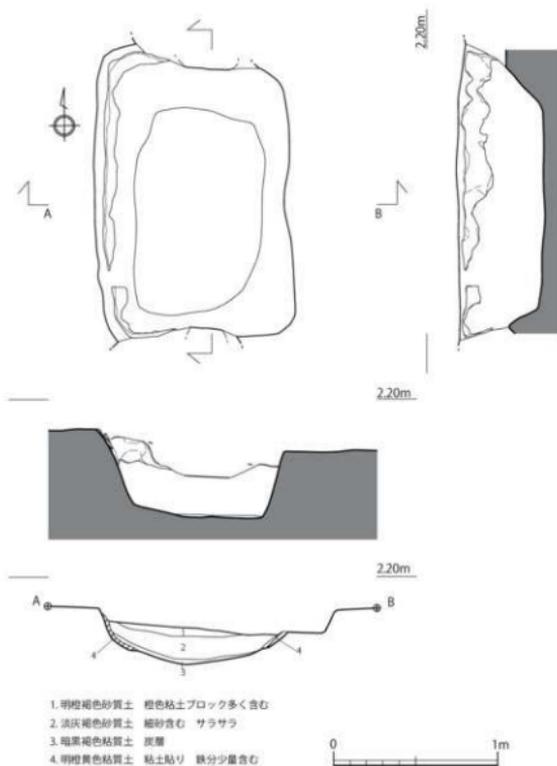
遺物は僅少で、肥前系唐津陶器皿、絵唐津向付、在地系の京都系土師器皿などが出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は17世紀前半頃と考えられる。

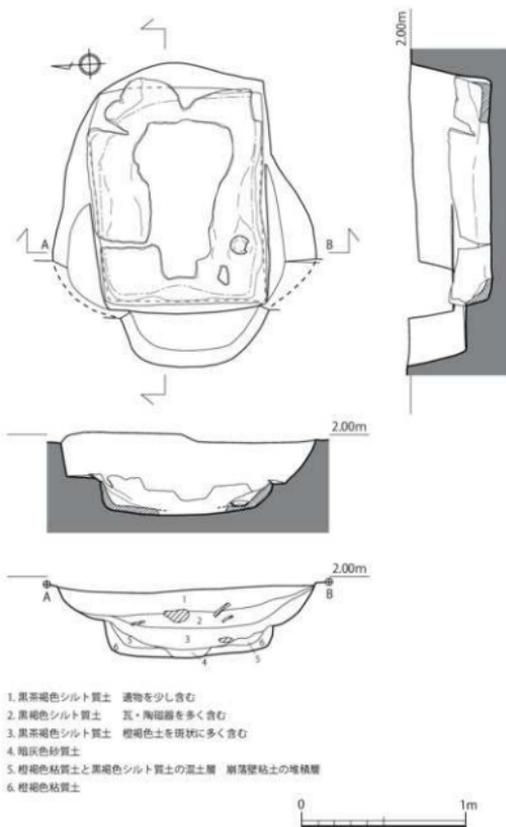
3区 SX510(第222図)

3区南東端のC17グリットで検出された粘土貼土坑である。3区SK450・SK540・SK897を切る。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形とみられる。掘方の規模は長軸1.3m、短軸0.8+αm、検出面からの深さは0.2mを測る。底面、壁面に橙色粘土が貼られ、その厚さは底面で5cm、壁面で約2cmを測る。埋土は砂質土を基調とし、2分される。出土遺物は皆無であり、時期の特定はできていない。

3区 SX540(第223図、第467図14～16)

3区南東のC17グリットで検出された粘土貼土坑である。3区SK450・SK510に切られる。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸1.6m、短軸1.2m、検出面からの深さは土層図から0.5m





第224図 4区 SX198 遺構実測図 (1/30)

とみられる。掘方の内面に厚さ 2 cm 程の粘土が貼られ、土層図から土坑内面の壁面から底部の一部にまで及んでいたことが分かる。埋土は砂質土を基調とし、3層に区分される。最下層の第3層には炭層が堆積する。土坑内面に被熱による変色が認められないことから、その炭層は土坑内で形成されたものではなく、土坑底部に敷設もしくは流入した可能性がある。なお、遺構図の見通し断面と土層図の遺構の深さや形状が合致していないことから、実際には粘土の下位に裏込め土のような埋土が堆積していたものと判断される。

遺物は、肥前系唐津陶器碗、瀬戸美濃産陶器壺、関西系陶器裏などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀前半頃と考えられる。

4 区 SX198(第 224 図、第 468 図)

4 区南側中央の J10 グリッドで検出された粘土貼土坑である。平面形状は不整隅丸長方形、断面形状は逆凸状の 2 段掘りとなる。埋土は砂質土を基調とし、5層に区分される。その内、第1層～4層は底面に貼られた粘土の一部を掘削した可能性がある程に深く掘り返された埋土である。

また、2段掘りの下段の内壁面から底面にかけて粘土が貼られており、第5層は粘土直上に堆積する埋土である。粘土が貼られた土坑下段の規模は長軸 1.2 m、短軸 1.0 m、検出面からの深さは 0.2 m を測る。粘土の厚さは 7～8 cm である。

遺物は、上層遺物として取り上げた掘り返し埋土の第1～3層でコバルト軸の染付小坏、肥前系染付端反碗をはじめ、土師質土器小皿や搬入品とみられる京都系土師器皿(第 468 図 1～5)、下層遺物として取り上げた第4・5層からは、土師質土器小皿(同図 6)がある。これらの帰属年代から、遺構の埋没時期は 19 世紀後半頃で、掘り返しが行われる前の粘土貼土坑の埋没年代は 18 世紀前半頃と考えられる。

不明遺構 (その他)

3 区 SX480(第 225 図)

3 区西側中央 D2 グリッドで検出された石組遺構である。掘方の平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸 1.4 m、短軸 1.4 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。石組みの規模は内法で約 0.6m、0.1～0.3 m の礫が北側で 2 段、南側で 1 段分が残存する。石組内の埋土は砂質土の単一土層で、5 mm 大の礫を多く含む。出土遺物は皆無であり、時期の特定はできていない。

3 区 SX599(第 226 図)

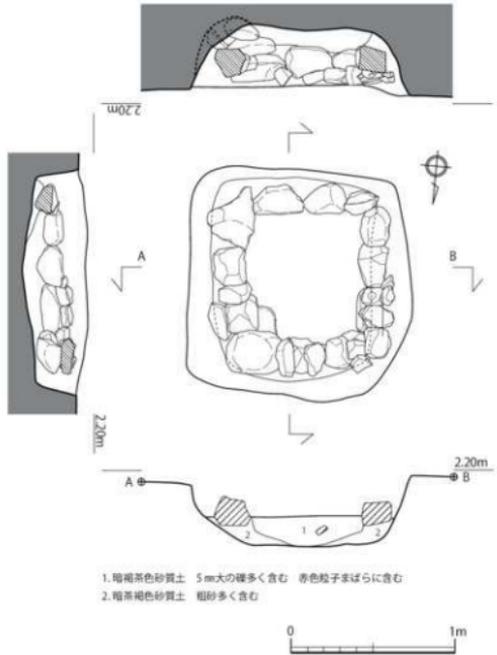
3 区中央南西寄りの C7 グリッドで検出された遺構である。平面形状は不整形とみられ、断面形状は逆台形を呈する。掘方の規模は長軸 $0.9 + \alpha$ m、短軸 $0.8 + \alpha$ m、深さ 0.2 m を測る。底面に橙色の粘土が貼られており、その厚さは底面で約 2 cm、側面で約 10 cm を測る。他の粘土貼土坑と比べ規模が小さい。出土遺物は皆無であり、時期の特定はできていない。

3 区 SX601(第 227 図)

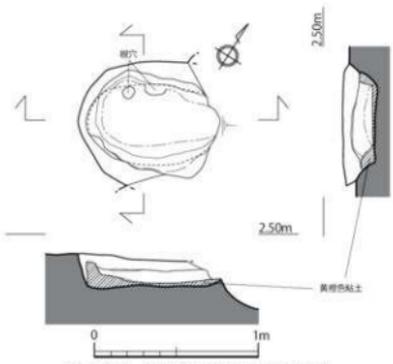
3 区中央南西寄りの C7 グリッドで検出された粘土の構造物である。3 区 SX599 と隣接する。掘方は確認できていない。粘土の平面形状は方形を呈し、中央部から東側にかけて窪み、断面凹状を呈する。規模は長軸 0.6 m、短軸 0.5 m、最大厚は 0.1 m を測る。その形状からが跡が想起されるものの、被熱による変色などは認められない。出土遺物は皆無であり、時期の特定もできていない。

4 区 SX110(第 228 図、第 469 図)

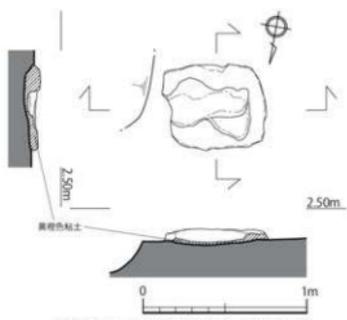
4 区南西の J1 グリッドで検出された長土坑である。平面形状は隅丸長方形、断面形状は緩やかなレンズ状とみられる。その規模は長軸 3.6 m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは約 0.1 m を測る。埋土はシルト質土を基調



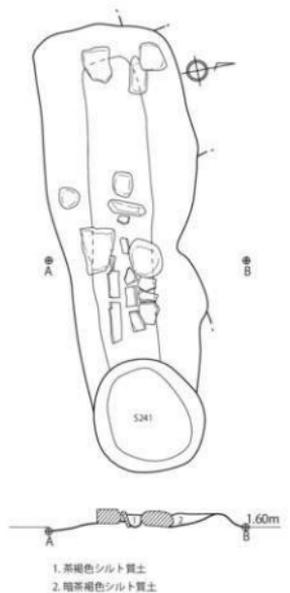
第 225 図 3 区 SX480 遺構実測図 (1/30)



第 226 図 3 区 SX599 遺構実測図 (1/30)



第 227 図 3 区 SX601 遺構実測図 (1/30)

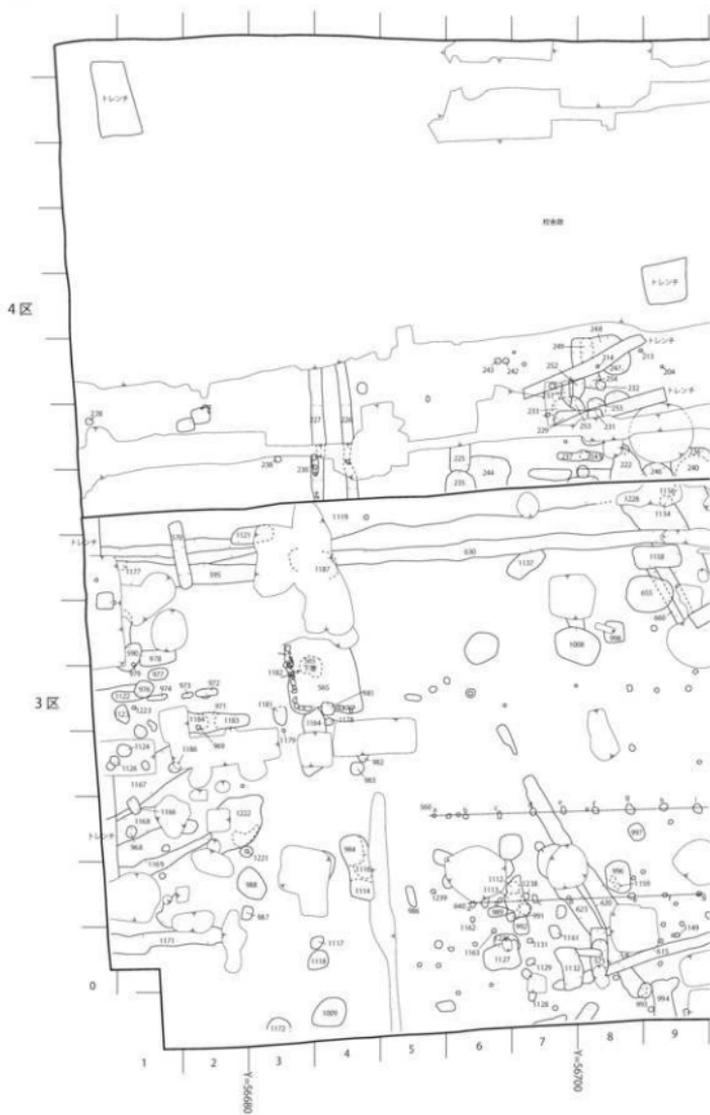


第 228 図 4 区 SX110 遺構実測図 (1/40)

とし、0.2～0.3 m 大の礫と平瓦片が部分的に並び、礎状を呈す。

出土遺物は僅少で、肥前系の染付蓋や陶器鉢などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は、18 世紀前半頃と考えられる。

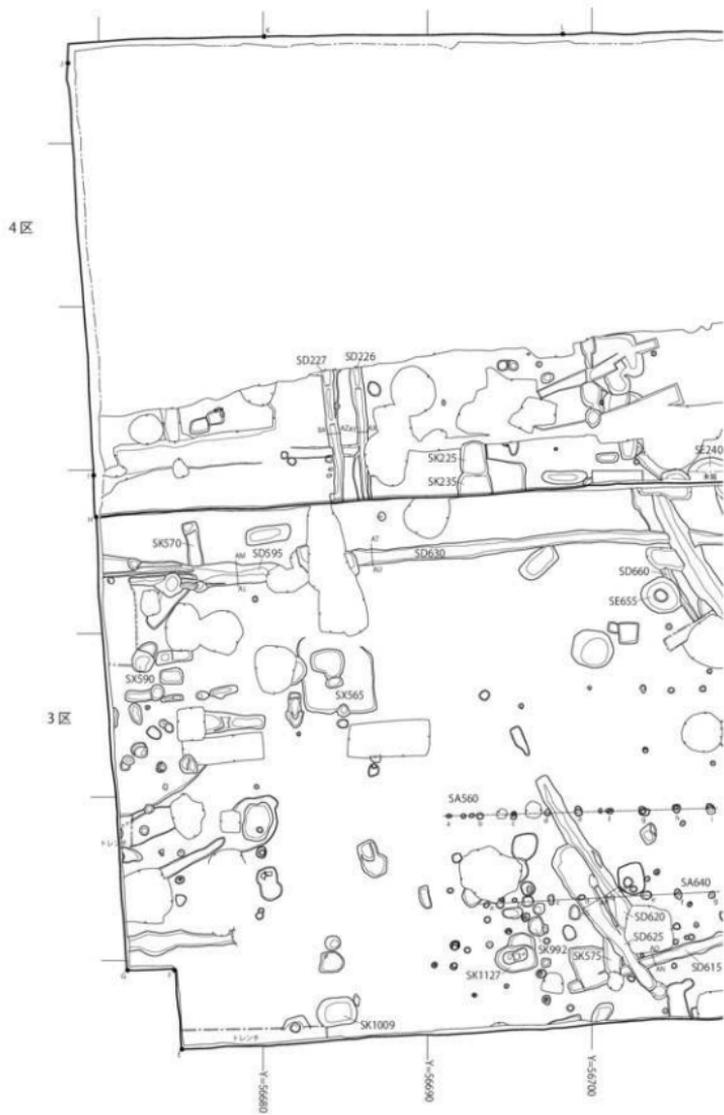
(3) 第3調査面



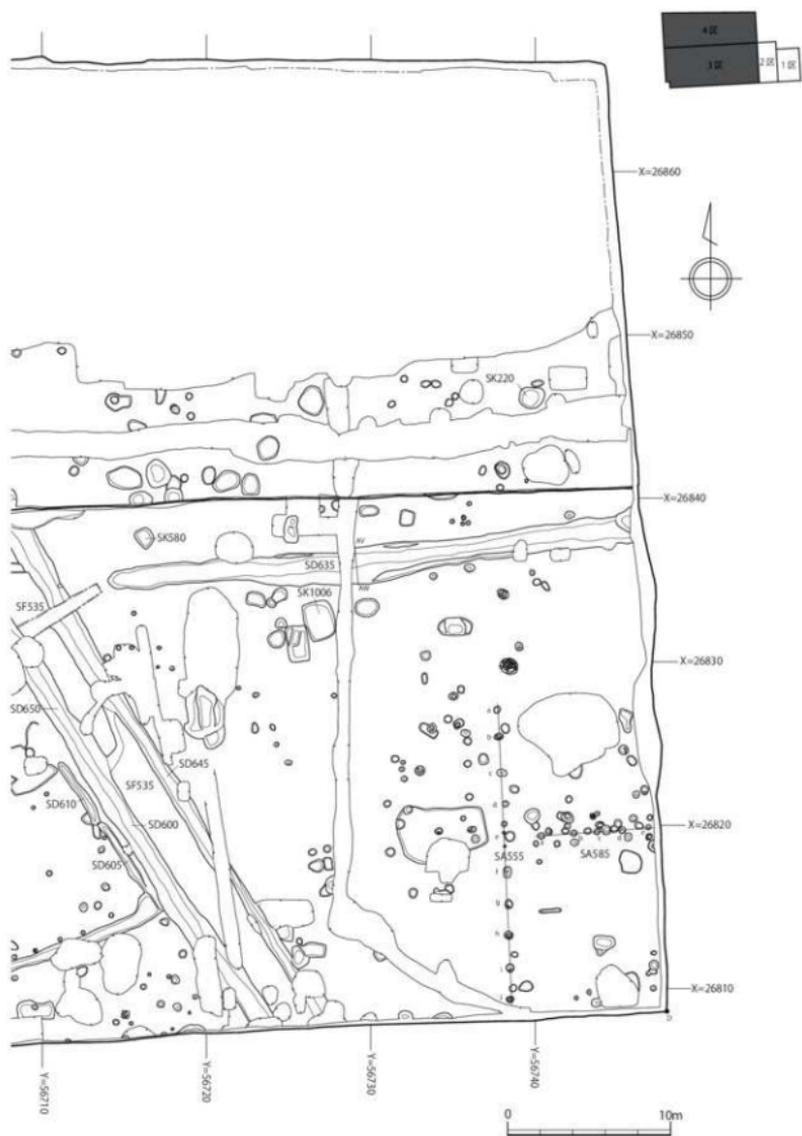
第229図 3・4区第3調査面西側遺構配置図(1/300)



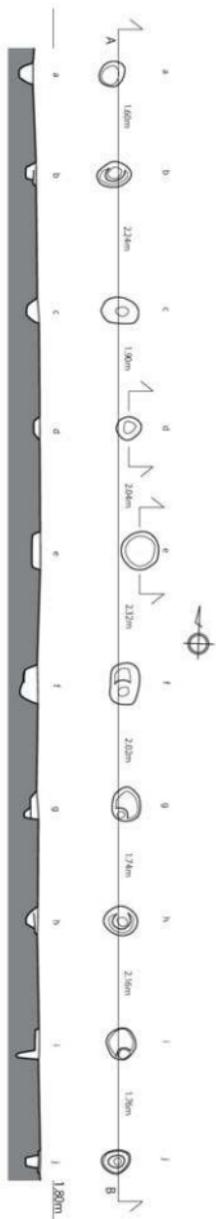
第 230 図 3・4 区第 3 調査面遺構配置図東側 (1/300)



第231図 3・4区第3調査面西側全体遺構図(1/300)



第232図 3・4区第3調査面東側全体遺構図(1/300)



- a**
1. 汎炭酸砂質土 軽砂多量含む
 2. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む
- b**
1. 汎炭酸砂質土 5m以内の薄砂含む
 2. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む
- c**
1. 汎炭酸砂質土 軽砂多く含む
 2. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む

- d**
1. 汎炭酸砂質土 軽砂多量含む
 2. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む
- e**
1. 汎炭酸砂質土 軽砂多量含む
 2. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む
- f**
1. 汎炭酸砂質土 5m以内の薄砂含む
 2. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む
 3. 汎炭酸砂質土 軽砂多く含む

- g**
1. 汎炭酸砂質土 しまり強い
 2. 汎炭酸砂質土 汎炭酸土ブロック含む
- h**
1. 汎炭酸砂質土 軽砂多量含む
 2. 汎炭酸シルト しまり強い

- i**
1. 汎炭酸シルト 軽砂多量含む
 2. 汎炭酸砂質土 軽砂多く含む
- j**
1. 汎炭酸砂質土 軽砂多量含む
 2. 汎炭酸シルト しまり強い



第 233 図 3 区 SA555 道横断面図 (1/80)

調査の概要

第3調査面は、第1調査面と同一地点での3回目の調査で、第2調査面の遺構群を検出した堆積土を機械によって除去したのちに新たに確認された遺構を対象としたものである。

主な遺構は、柵状遺構、井戸跡、火災処理土坑、廃棄土坑、溝状遺構、道路状遺構であり、その遺構の時期は、16世紀後半頃～17世紀初頭である。なお、第3調査面においても17世紀前半以降の遺構を確認しているが、これは第2調査面では認識できなかったものであり、本来は第1調査面や第2調査面から掘り込まれていたものとみられる。

柵状遺構

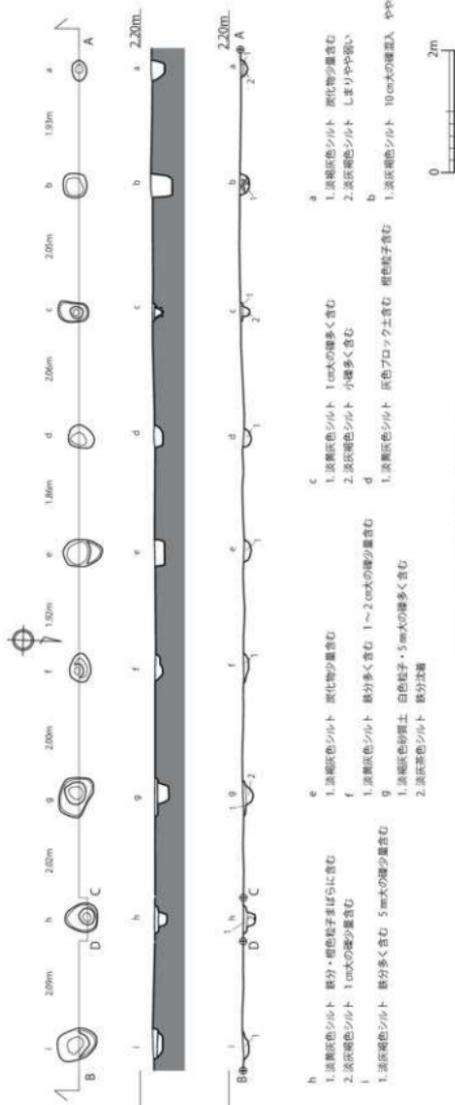
3区 SA555(第233図)

3区東側のB17グリッドで検出された柵状遺構である。柱穴10基からなり、主軸方向を概ねN-1°-Eとする南北方向の区画施設である。延長17.1mを測り、柱間は1.6～2.3mとなる。柱穴の平面形状は円形を呈し、直径0.4～0.6m、検出面からの深さは0.2～0.4mを測る。c～eを除く柱穴で柱痕を確認しており、その直径は0.1～0.15mである。出土遺物は皆無で、遺構の時期は特定できていない。

3区 SA560(第234図)

3区中央南西のD5グリッドで検出された柵状遺構である。16世紀代とみられる3区SD620を切る。柱穴9基からなり、主軸方向をN-88°-Eとする東西方向の区画施設である。延長16.0mを測り、柱間は1.86～2.09mとなる。柱穴の平面形状は円形を呈し、直径0.3～0.6m、検出面からの深さは0.1～0.2mを測る。柱穴c・hで柱痕を確認しており、その直径は0.15～0.2mである。

出土遺物は僅少で、遺構の埋没年代は特定できていないものの、3区SD620と重複することから、16世紀以降に構築されたものと考えられる。



第234図 3区 SA560 遺構東測図(1/80)

3区 SA585(第235図)

3区東端のD 18グリッドで検出された柵状遺構である。柱穴5基からなり、主軸方向をN-86°・Eとする東西方向の区画施設である。延長6.6mを測り、柱間は1.42～1.99mとややばらつきがある。柱穴の平面形状は概ね円形を呈し、直径0.3～0.4m、検出面からの深さは0.3mを測る。柱痕は柱穴dのみで確認され、その直径は0.15mである。出土遺物は僅少で、遺構の時期の特定はできていない。

3区 SA640(第236図、第481図)

3区南西のC 6グリッドで検出された柵状遺構である。16世紀代の3区SD625を切る。柱穴7基からなり、主軸方向をN-87°・Eとする東西方向の区画施設である。延長13.8mを測り、柱間は1.70～3.97mとばらつきがある。柱穴の平面形状は概ね円形を呈し、直径0.4～0.6m、検出面からの深さは0.2～0.3mを測る。柱痕は確認されていない。

遺物は僅少で、弥生式土器などが出土しているものの、遺構の時期の特定はできていない。16世紀代の3区SD625と重複することから、それ以降に構築されたものと考えられる。

井戸跡

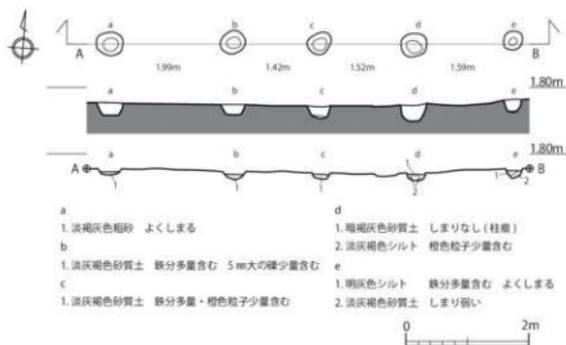
3区 SE655(第237図、第482図)

3区中央北側のG9グリッドで検出された井戸跡である。道路状遺構の側溝である3区SD660を切る。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸2.4m、短軸2.2m、検出面からの最大深度は1.3mを測る。掘方の床面中央に直径0.6mの木桶が埋置される。幅約8cm程の板材を使用しており、0.45m程が残存する。井筒内の埋土は粘質土と細砂の2層に区別され、上位の粘質土には粗砂と礫を多く含み、下位の細砂や裏込め土の第4・5層と不整合な堆積が認められることから、掘り返しが行われ、人為的に埋め戻されたものと判断される。

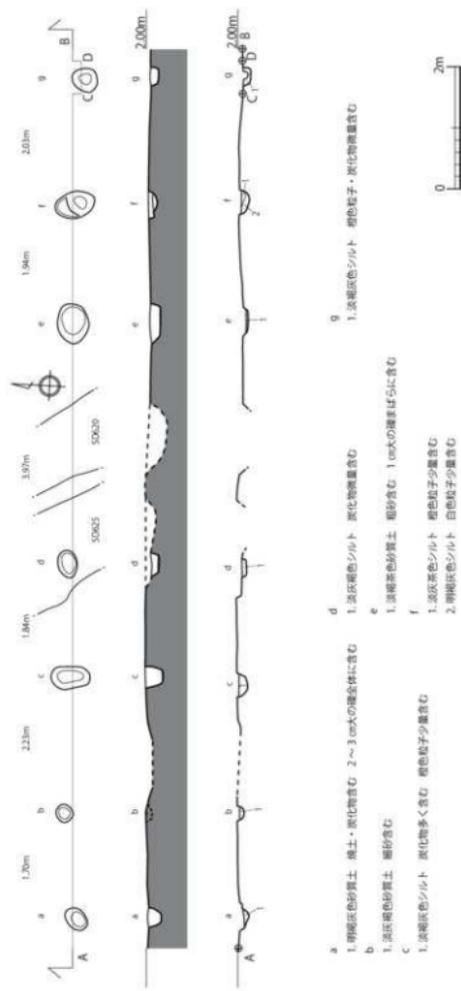
遺物は僅少で、井筒内から肥前系染付碗や中国青花碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は17世紀後半～18世紀前半頃と考えられるが、特定はできていない。

4区 SE240(第238図)

4区中央南端のJ9グリッドで検出された井戸である。南側の一部は3区S583として調査したものである。調査区の制約上、安全を確保するため一部を掘削できていない。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸2.6m、短軸1.8m、検出面からの深さは1.2mを測る。井筒等は確認できていない。

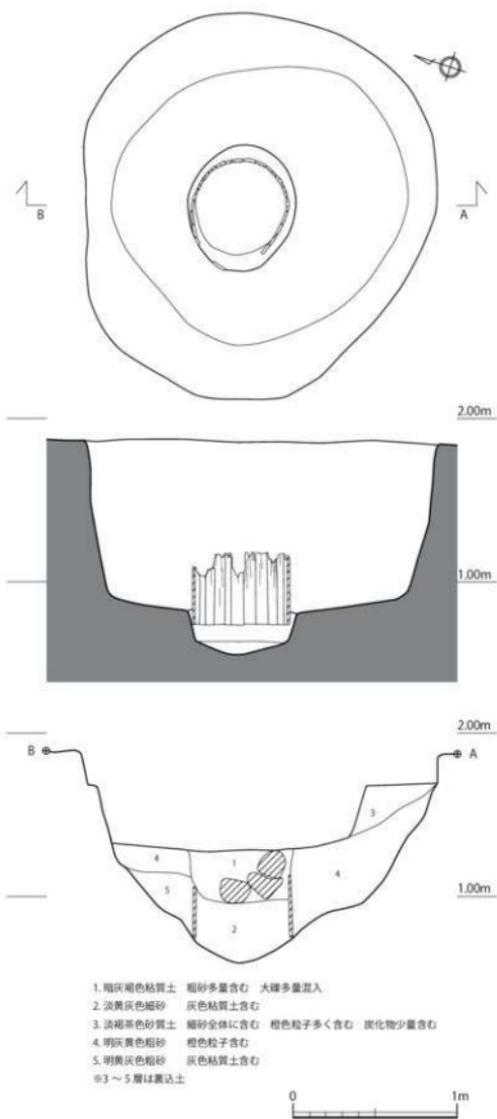


第235図 3区 SA585 遺構実測図(1/80)



- a 1.明褐色砂質土 塊土・炭化物含む 2~3 cm大の塊全体を含む
- b 1.淡茶褐色砂質土 細砂含む
- c 1.淡茶褐色シルト 炭化物多く含む 褐色粘土少量含む
- d 1.淡茶褐色シルト 炭化物豊富
- e 1.淡茶褐色砂質土 細砂含む 1 cm大の塊まばらに含む
- f 1.淡茶褐色シルト 褐色粘土少量含む
- 2.明褐色シルト 白色粘土少量含む
- g 1.淡茶褐色シルト 褐色粘土・炭化物豊富含む

第 236 図 3 区 SAG40 道構築断面(1/80)



第237図 3区 SE655 遺構実測図 (1/30)

埋土は砂質土を基調とし、5層に区分される。第1・2層は最下層の第5層と不整合な堆積が認められることから掘り返しの痕跡と判断されるものである。

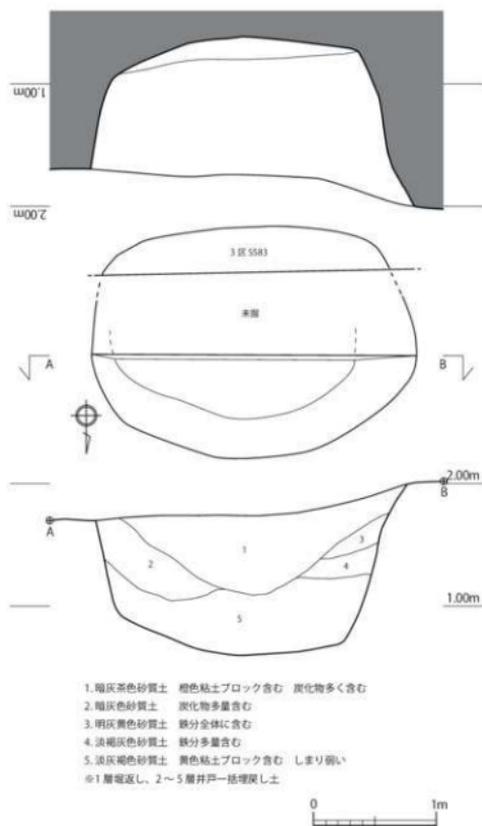
遺物は僅少で、3区での調査時に3区S583として掘削した部分から、肥前系染付広東碗が出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半～19世紀初頭頃と考えられる。

土坑（火災処理土坑）

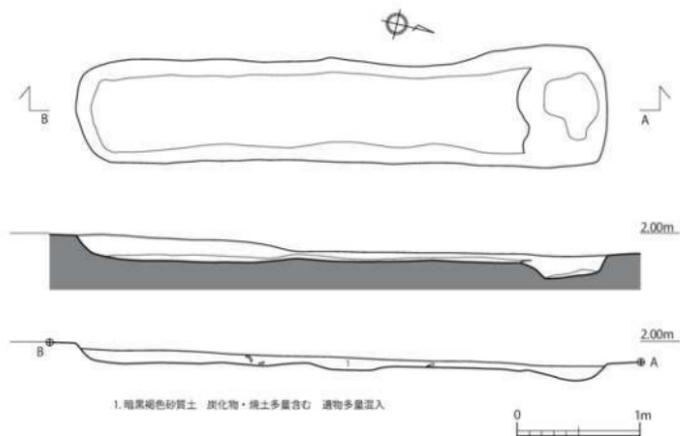
3区SK570(第239図・第483図・第484図1・2)

3区北西のH1グリットで検出された土坑である。3区SD595を切る。平面形状は長楕円形、断面形状は逆台形を呈し、北端がやや深くなる。掘方の規模は長軸4.3m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.15mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、炭化物や焼土をはじめ、遺物を多量に含むことから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

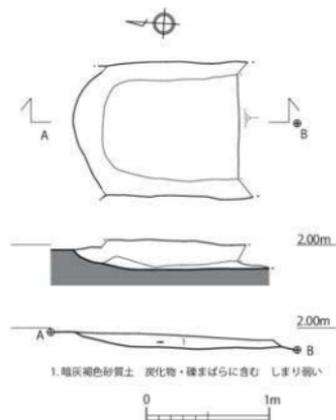
遺物は、肥前系染付碗や肥前系波佐見産染付皿、陶胎染付碗、京焼陶器碗、肥前系白刷毛手碗をはじめ、土



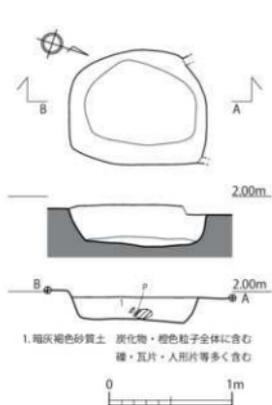
第238図 4区SE240 遺構実測図(1/40)



第 239 図 3 区 SK570 遺構実測図 (1/40)



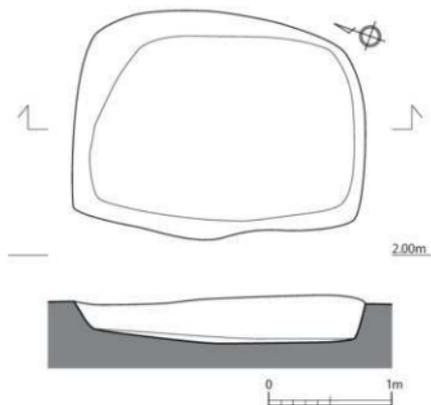
第 240 図 3 区 SK575 遺構実測図 (1/40)



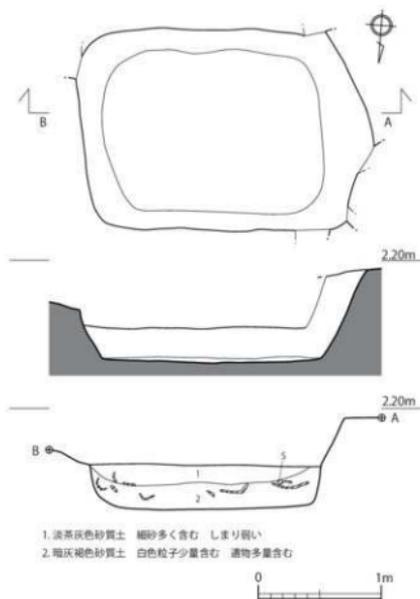
1. 褐灰褐色砂質土 炭化物・褐色粘土全体に含む
礫・瓦片・人形片等多く含む



第 241 図 3 区 SK992 遺構実測図 (1/40)



第 242 図 3 区 SK1006 遺構実測図 (1/40)



1. 淡茶灰色砂質土 細砂多く含む しまり弱い
2. 褐灰褐色砂質土 白色粘土少量含む 遺物多量含む



第 243 図 3 区 SK1009 遺構実測図 (1/40)

師質土器小皿や備前焼の近世3期の播鉢のほか、青銅製の蝶番、火箸、灰かき、鉄製の吊金具などが出土している。これらの帰属年代から、遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

3区 SK575(第240図、第484図3~5)

3区中央南のB8グリッドで検出された土坑である。3区SD615を切る。平面形状は楕円形、断面形状は緩やかなレンズ状を呈していたものとみられる。掘方の規模は長軸1.4+αm、短軸1.1m、検出面からの深さは0.1mを測る。埋土は砂質土の単一土層である。

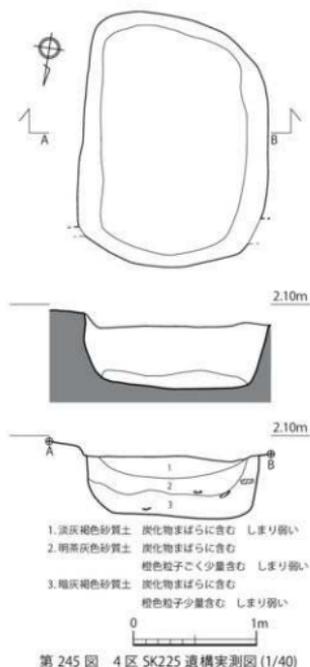
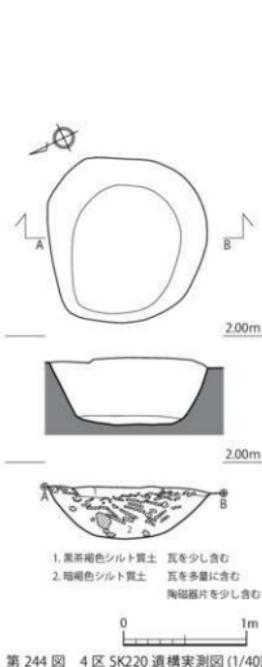
遺物は僅少で、肥前系染付の高台が低い丸碗や京焼風陶器などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。

土坑(廃棄土坑)

3区 SK992(第241図、第485図1~5)

3区南西のC7グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸1.1m、短軸1.0m、検出面からの深さは0.4mを測る。埋土は砂質土の単一土層で、炭化物、礫、瓦片、遺物片を多く含む。

遺物は、肥前系染付丸碗や陶胎染付碗をはじめ、猿形人形(第485図4)などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀前半頃と考えられる。



3 区 SK1006(第 242 図、第 485 図 6～14)

3 区北東の G14 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈する。長軸 2.4 m、短軸 1.9 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土の情報は記録できていないものの、遺物がまとまって出土しており、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、肥前系染付丸碗をはじめ、初期伊万里染付碗や漳州窯系青花皿、砂目積み唐津系陶器皿、肥前系陶器播鉢、桃山陶器の水指や在地の京都系土師器皿などが出土しており、18 世紀前半頃のものとして 17 世紀前半頃のものとの混在する。これらの所属年代から遺構の最終埋没時期は、18 世紀前半頃と判断されるが、出土遺物の大半が 17 世紀前半頃のものであることを踏まえれば、本遺構はこの頃すでに廃絶していた可能性がある。

3 区 SK1009(第 243 図、第 486・487 図)

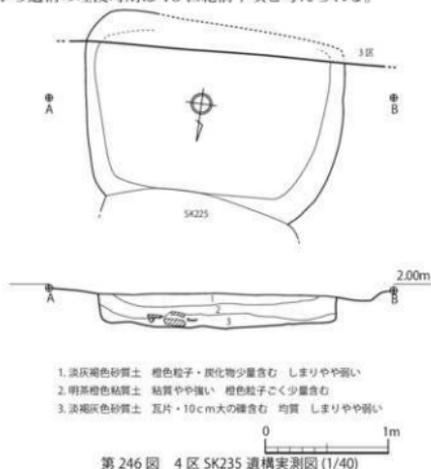
3 区南東端の A4 グリッドで検出された廃棄土坑である。平面形状は隅丸方形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸 2.4 m、短軸 1.7 m、検出面からの深さは 0.3 m を測る。埋土は砂質土を基調とし、2 分される。下位の第 2 層には遺物が大量に含まれており、人為的に埋め戻されたものとみられる。

遺物は、第 1 層から肥前系染付蓋や「泉州麻生」と思われる銘がある焼塩壺など(第 486 図 7～11)、第 2 層から肥前系染付碗・鉢、陶胎染付碗や肥前系波佐見焼染付皿、土師質土器小皿をはじめ、底部に「助右衛門」と刻印された上質な瓦質風がや焼成後に色絵で傷隠しが為された肥前系染付碗、蛇の目凹型高台の肥前系染付皿、堺産播鉢など(同図 12～21・第 487 図)が出土しており、その所属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀後半頃と考えられる。

4 区 SK220(第 244 図、第 488 図)

4 区南東の K17 グリッドで検出された廃棄土坑である。4 区 S212・S264 に切られる。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈する。掘方の規模は長軸 1.4 m、短軸 1.2 m、検出面からの深さは 0.4 m を測る。埋土はシルト質土を基調とし、2 分される。第 2 層には大量の瓦が含まれており、人為的に埋め戻されたものと判断される。

遺物は、肥前系の染付丸碗や肥前系陶器白刷毛手碗をはじめ、肥前系陶器播鉢、吉田分類 E 型の軒平瓦などが出土おり、その所属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。



4区 SK225 (第245図、第489・490図)

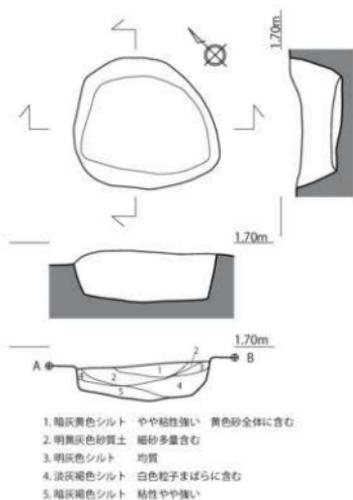
4区南西のJ6グリッドで検出された廃棄土坑である。4区SK235に切られる。平面形状は楕円形、断面形状は方形を呈す。掘方の規模は長軸2.0m、短軸1.4m、検出面からの深さは0.6mを測る。土は砂質土を基調とし、3層に区別される。

遺物は焼継痕を有する肥前系染付皿、肥前系染付端反碗、瀬戸美濃産染付小环などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は19世紀前半頃と考えられる

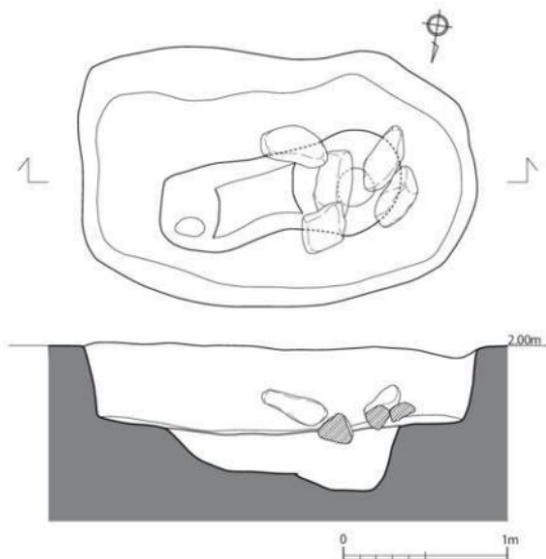
4区 SK235 (第246図、第491図)

4区南西のI6グリッドで検出された廃棄土坑である。4区SK225を切る。南側の一部は3区第2調査面で調査したものである。平面形状は隅丸長方形、断面形状は方形を呈す。掘方の規模は長軸2.0m、短軸1.1+αm、検出面からの深さは0.2mを測る。土は砂質土と粘質土からなり、3層に区別される。

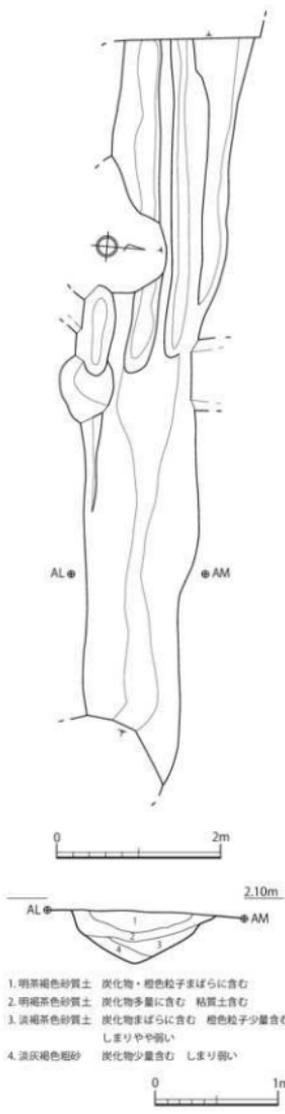
遺物は、焼継文字を有する肥前系染付碗、肥前系染付端反碗、瀬戸美濃産の植木鉢などが出土しており、その帰属年代からの遺構の埋没時期は19世前半頃と考えられる。



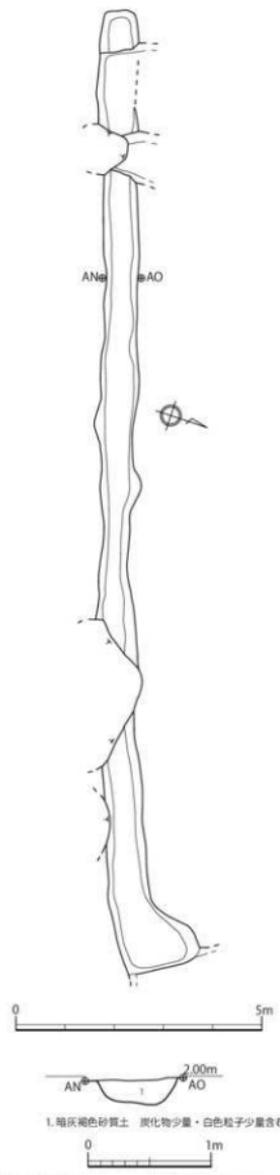
第247図 3区 SK580 遺構実測図(1/40)



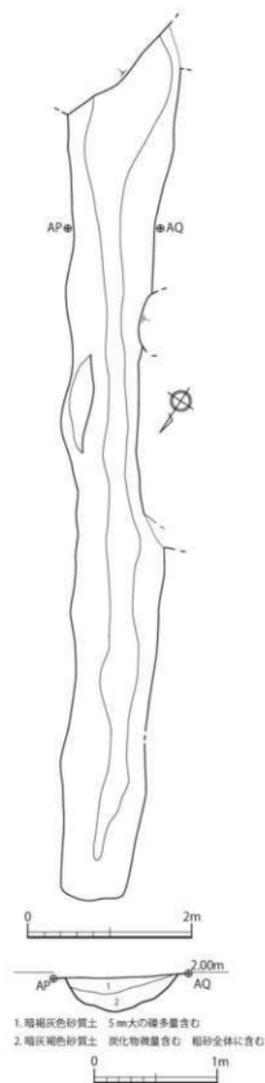
第248図 3区 SK1127 遺構実測図(1/30)



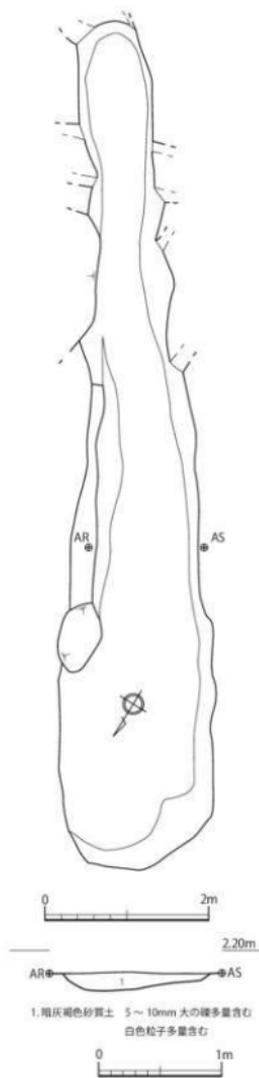
第 249 図 3 区 SD595 遺構実測図 (1/60・1/40)



第 250 図 3 区 SD615 遺構実測図 (1/100・1/40)



第251図 3区SD620 遺構実測図(1/60・1/40)



第252図 3区SD625 遺構実測図(1/60・1/40)

土坑（その他）

3区 SK580(第247図、第492図1・2)

3区中央北東のI11グリッドで検出された土坑である。平面形状は不整形、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は長軸1.2m、短軸1.1m、検出面からの深さは0.4m測る。埋土はシルト質土を基調とし、5層に区分される。第1・2層に不整な堆積が認められ、下位の第4層は土坑上面から底面にまで堆積が及ぶことから、これらは人為的に埋め戻された一連の埋土であるものと判断される。底面直上で完形の総唐津陶器皿が正位の状態で見出されていたものの、記録は作成できていない。

遺物はそのほかに、埋土中から砂目積みの唐津陶器皿も出土しており、これらの所属年代から遺構の埋没時期は17世紀前半頃と考えられる。

3区 SK1127(第248図、第492図3～6)

3区南西のB6グリッドで検出された土坑である。16世紀後半頃の3区S1126を切る。平面形状は不整形、断面形状は逆凸状を呈し2段掘りとなる。掘方の規模は長軸2.4m、短軸1.6m、検出面からの深さは0.9mを測る。埋土の情報は記録できていないものの、上段と下段の境あたりで0.4m大の礫が5点まとまって出土している。

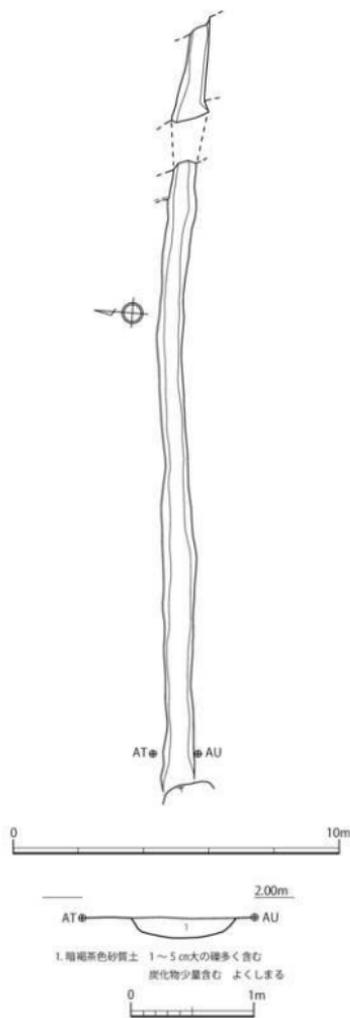
遺物は僅少で、白色研磨土器や土師器皿、土師器鍋などが出土しており、これらの所属年代から遺構の埋没時期は12世紀後半頃と考えられるものの、3区S1126と重複することから本遺構の構築時期は、16世紀後半以降となる。

溝状遺構

3区 SD595(第249図、第493図1～5)

3区北西隅のH1グリッドからH3グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3区SK570に切られる。主軸方向をN89°-Eとする東西方向の溝で、幅1.2m、検出面からの最大深度は0.5mを測り、断面形状は緩やかなV字状を呈する。埋土は砂質土を基調として大きく2分されるものとみられる。上層の第1・2層は炭化物を多く含み、下層の第3・4層と不整な堆積が認められることから、上層は掘り返しの痕跡である可能性がある。

遺物は、肥前系唐津陶器碗や同三島手の皿をはじめ、土師質土器小皿や瀬戸美濃産陶器天目碗などが出土しており、これらの所属年代から遺構の埋没時期は17世紀後半頃と考えられる。



第253図 3区SD630遺構実測図(1/150・1/40)

3 区 SD615 (第 250 図、第 493 図 6・7)

3 区中央南の B 7 グリッドから C 11 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3 区 SD625 を切り、同 SD650 に切られる。主軸方向を N-70° -E とする東西方向の溝で、3 区 SF535 や同 SD650 と直交する。幅 0.6 m、検出面からの最大深度は 0.25 m を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は砂質土の単一土層である。

出土遺物は僅少で、防長系鉢鉢、深鉢形の火鉢などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 16 世紀代と考えられるが、時期の特定はできていない。

3 区 SD620 (第 251 図、第 493 図 8～11)

3 区中央南寄りの E 7 グリッドから C 8 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3 区 SA560 に切られる。主軸方向を N-32° -W とする南北方向の溝で、3 区 SF535 と同一方向である。幅 0.9 m、検出面からの最大深度は 0.3 m を測り、断面形状はレンズ状を呈する。埋土は砂質土を基調とし、2 分される。

遺物は中国産白磁碗や同安溪系青磁碗をはじめ、黒色土器 A 類碗や底部系切り離しの土師器環などのほかに、小片のため図示できていないが景徳鎮窯系の青花片なども出土している。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 16 世紀代と考えられるが、出土遺物の大半が 12 世紀代であることを踏まえれば、本遺構はこの時期にすでに廃絶していた可能性がある。

3 区 SD625 (第 252 図、第 493 図 12～15)

3 区中央南寄りの C 7 グリッドから A 8 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3 区 SD615 に切られる。主軸方向を N-36° -W とする南北方向の溝で、3 区 SD620 と並行する。幅 1.2 m、検出面からの最大深度は 0.2 m を測り、断面形状はレンズ状を呈する。埋土は砂質土の単一土層で、3 区 SD620 とよく似る。

出土遺物は僅少で、京都系土師器皿をはじめ、中国産白磁碗や小片のため図示できていないが同安溪系青磁碗などが出土している。また、肥前系染付仏飯器や同染付瓶なども混在する。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀代と判断されるものの、3 区 SD615 に切られることから、遺構の埋没時期は 16 世紀代まで遡る可能性はある。

3 区 SD630 (第 253 図、第 494 図 1～9)

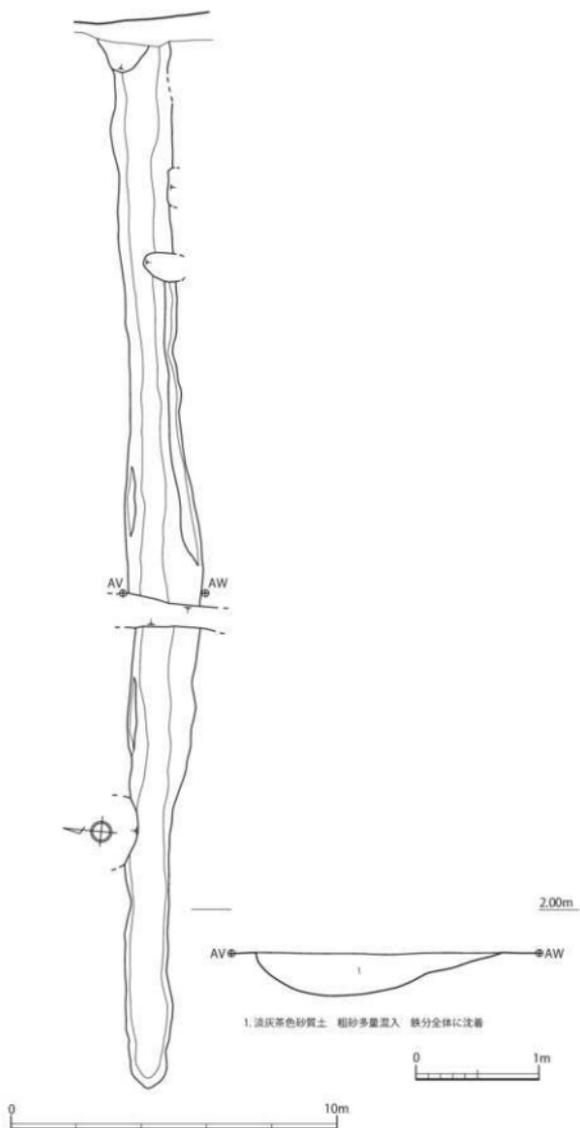
3 区北西の H 4 グリッドから H 9 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。3 区 S D 650 を切る。主軸方向を N-86° -E とする東西方向の溝で、幅 0.8 m、検出面からの最大深度は 0.4 m を測り、断面形状はレンズ状を呈する。埋土は砂質土の単一土層である。

遺物は、肥前系染付日字鳳凰文皿、肥前系染付小環をはじめ、土師質土器小皿や在地の京都系土師器皿、肥前系唐津陶器碗、中国産白磁碗、備前焼鉢鉢などが出土しており、17 世紀前半頃のものと同 18 世紀前半頃のもの混在する。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられるが、出土遺物の大半が 17 世紀前半頃であることを踏まえれば、本遺構はこの時期にすでに廃絶していた可能性がある。

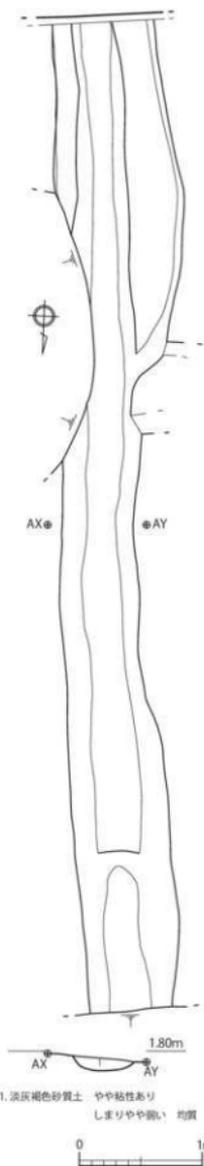
3 区 SD635 (第 254 図、第 494 図 10・11)

3 区中央北西寄りの H 11 グリッドから I 19 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。主軸方向を N-84° -E とする東西方向の溝で、幅 1.0～2.0 m、検出面からの最大深度は 0.4 m を測り、断面形状はレンズ状を呈する。埋土は砂質土の単一土層で、粗砂を多量含み、鉄分が沈着する。

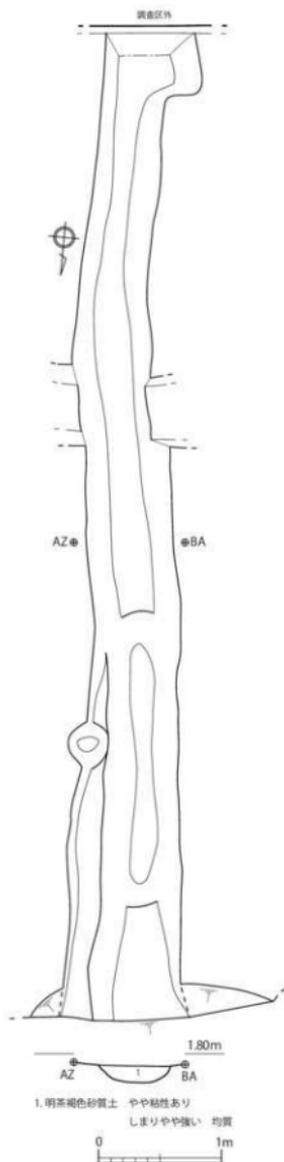
遺物は僅少で、肥前系染付碗や唐津陶器皿などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。



第 254 図 3 区 SD635 遺構実測図 (1/150・1/40)



第255図 4区SD226遺構実測図(1/40)



第256図 4区SD227遺構実測図(1/40)

4 区 SD226(第 255 図、第 495 図 1)

4 区南西の 14 グリッドから K4 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。主軸方向を N5° -W とする南北方向の溝で、幅 0.5m、検出面からの最大深度は 0.15m を測り、断面形状はレンズ状を呈す。埋土は砂質土の単一土層である。

遺物は僅少で、軒丸瓦をはじめ、肥前系唐津陶器片や土師器片が出土している程度であり、遺構の時期の特定はできていない。

4 区 SD227(第 256 図、第 495 図 2)

4 区南西の 14 グリッドから K3 グリッドにかけて直線的に延びる溝状遺構である。主軸方向を N5° -W とする南北方向の溝で、幅 0.6m、検出面からの最大深度は 0.2m を測り、断面形状はレンズ状を呈す。埋土は砂質土の単一土層である。

遺物は僅少で、肥前系陶器白刷毛手皿などが出土しており、その帰属年代から、埋没時期は 18 世紀前半頃と考えられる。

道路状遺構

3 区 SF535(第 257・258 図、第 496・497 図)

3 区中央南端の B 14 グリッドから北端の I 8 グリッドにかけて検出された道路状遺構である。側溝とみられる溝状遺構 3 区 SD600・SD605・SD610・SD645・SD650・SD660 と路面からなる。それらの主軸方向は N32° -W で、3 区調査区中央を北西～南東方向に向けて直線的に延びる。溝状遺構と路面の層位関係から 3 時期に区分される(第 258 図模式図参照)。

第 1 段階の側溝は 3 区 SD645 と SD650 で、道路路面の幅は 1.6 ～ 1.7 m を測る。路面の構築土①は小礫を含み固くしめる。盛土整地が行われたものと判断される形跡が窺える。側溝の 3 区 SD645 は幅 1.8 m 前後、深さ 0.5 m 前後を測り、同 SD650 は幅 1.8 m 前後、深さ 0.7 m 前後で、同 SD645 よりやや深い。

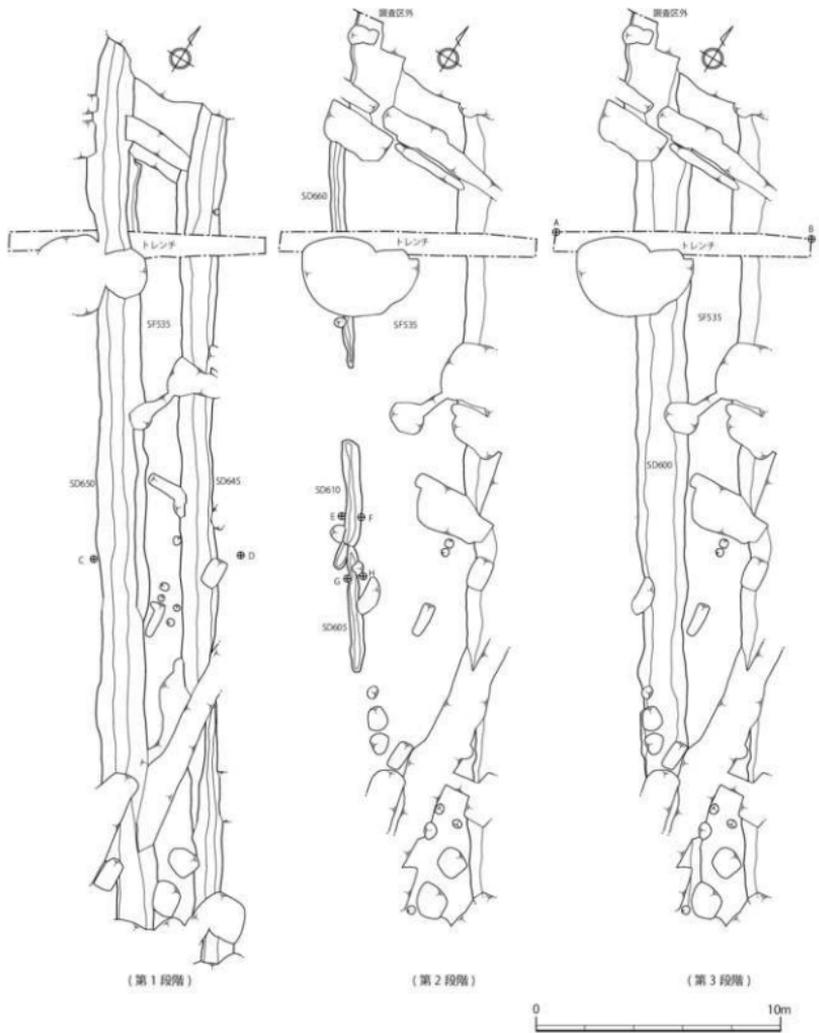
遺物は、道路構築土から京都系土師器碗や中国産白磁皿 E-4 類など、側溝である 3 区 SD645・650 からは京都系土師器皿や景徳鎮窯系青花碗、備前焼播鉢などが出土している。

第 2 段階の側溝は 3 区 SD605 と SD610・SD660 で、第 1 段階の側溝を埋めて路面が新たに構築される。このため、道路幅が 4.5 m 前後に拡張される。路面は第 1 段階と同じく小礫を多く含む砂質土で締固められており、下層に鉄分が多量沈着した層を挟む。側溝は道路の西側のみで、東側は道路が嵩上げされた分低くなった自然地形を利用し道路端と画していたものとみられる。西側の側溝は幅 0.3 ～ 0.6 m、検出面からの深さは約 0.2 m と第 1 段階より規模が縮小する。

出土遺物は僅少で、道路構築土から京都系土師器皿や漳州窯系青花皿などが出土している。

第 3 段階の側溝は 3 区 SD600 で、道路の幅は 2.0 m 前後に縮小する。新たな道路の構築土は確認できていない。側溝の幅は 1.5 m 前後、深さは 0.5 m 前後を測る。東側に側溝は確認できず、前段階同様に自然地形を利用し道路端としていたものとみられる。

遺物は僅少で、3 区 SD600 からは胎土目積み唐津陶器皿や辰砂により染付された肥前系染付瓶なども出土しており、16 世紀末頃のものとして 17 世紀代のもので混在する。これらの帰属年代から遺構の埋没時期は 17 世紀代と判断されるが、出土遺物の大半が 16 世紀末頃のものであることを踏まえれば、本遺構は 16 世紀末頃に最低 2 度の改修が行われた道路状遺構である可能性が高い。



第 257 図 3 区 SF535 遺構実測図 (1/200)

SF535 北側土層図 (1/80)



1. 暗茶褐色砂質土 黄色粒子・炭化物含む
2. 暗灰茶色砂質土 鉄分多く含む 1 cm大の礫まばらに含む
3. 淡褐色砂質土 5 mm大の礫まばらに含む 橙色粒子少量含む
4. 淡灰褐色砂質土 炭化物少量含む 5 mm大の礫少量含む
5. 淡茶褐色砂質土 粗砂多い 1 cm大の礫まばらに含む
6. 明黄灰色砂質土 5～10 mm大の礫全体に含む 固く締まる
7. 淡灰褐色砂質土 鉄分多量含む 5 mm大の礫まばらに含む
8. 淡褐色砂質土 炭化物・橙色粒子少量含む
9. 淡灰褐色砂質土 5～10 mm大の礫少量含む
10. 明茶褐色砂質土 橙色粒子多く含む (SD600 埋土)
11. 淡褐色砂質土 白色粒子多量含む 5～10 mm大の礫多く含む 固く締まる
12. 淡灰茶色砂質土 鉄分多量含む 5 mm大の礫まばらに含む
13. 明灰茶色砂質土 炭化物少量含む 鉄分やや多く含む
14. 淡茶褐色砂質土 全体に鉄分含む しまり弱い
15. 明灰黄色砂質土 橙色粒子少量含む
16. 淡灰褐色砂質土 炭化物少量含む 鉄分やや多く含む (SD650 埋土)

17. 暗褐色砂質土 2～3 cm大の礫少量含む 橙色粒子まばらに含む
18. 明灰白色砂質土 細砂含む 鉄分多量比着
19. 淡灰茶色砂質土 鉄分全体に含む 細砂含む しまり弱い
20. 暗灰褐色砂質土 鉄分多量含む しまり弱い
21. 暗灰褐色粗砂 橙色粒子含む
22. 淡灰黄色砂質土 やや粘性強い 鉄分全体に含む
23. 暗茶褐色砂質土 粗砂全体に含む 鉄分多量含む
24. 淡青灰色粗砂 細砂含む (地山)

整地層

SD600 埋土

道路構築土①

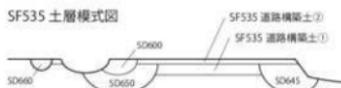
道路構築土②

SD645 埋土

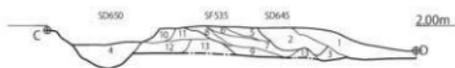
SD650 埋土



SF535 土層模式図



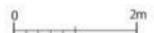
SF535 南側土層図 (1/80)



1. 明灰褐色砂質土 1～2 cm大の礫多量含む よく締まる (整地層)
2. 淡灰色砂質土 5～10 mm大の礫多く含む 橙色粒子少量含む 鉄分全体に含む
3. 淡灰褐色砂質土 橙色粒子・炭化物少量含む
4. 明灰色砂質土 鉄分多量含む 5～10 mm大の礫多く含む (SD650 埋土)
5. 淡茶褐色砂質土 5 mm大の礫・白色粒子多く含む
6. 明灰褐色砂質土 灰色結核土ブロック含む 5 mm大の礫多く含む 固く締まる
7. 暗灰褐色砂質土 鉄分多量含む 5～10 mm大の礫まばらに含む 固く締まる
8. 明黄褐色砂質土 鉄分多量含む 5 mm大の礫多く含む 固く締まる
9. 淡灰褐色砂質土 5 mm大の礫多量含む 粗砂全体に含む
10. 暗褐色砂質土 5 mm大の礫少量含む よく締まる 炭化物微量含む
11. 淡黄褐色砂質土 鉄分多量含む 5 mm大の礫多く含む 固く締まる
12. 淡灰褐色砂質土 細砂・粗砂混じる やや粘性あり
13. 淡灰茶色粗砂 5～20 mm大の礫多量含む (地山)

掘り込み整地

道路構築土①



SD605 土層図 (1/40)



1. 淡茶褐色砂質土 炭化物・橙色粒子少量含む



SD610 土層図 (1/40)



1. 淡灰褐色砂質土 橙色粒子少量含む



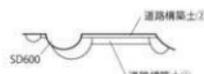
第一段階土層模式図



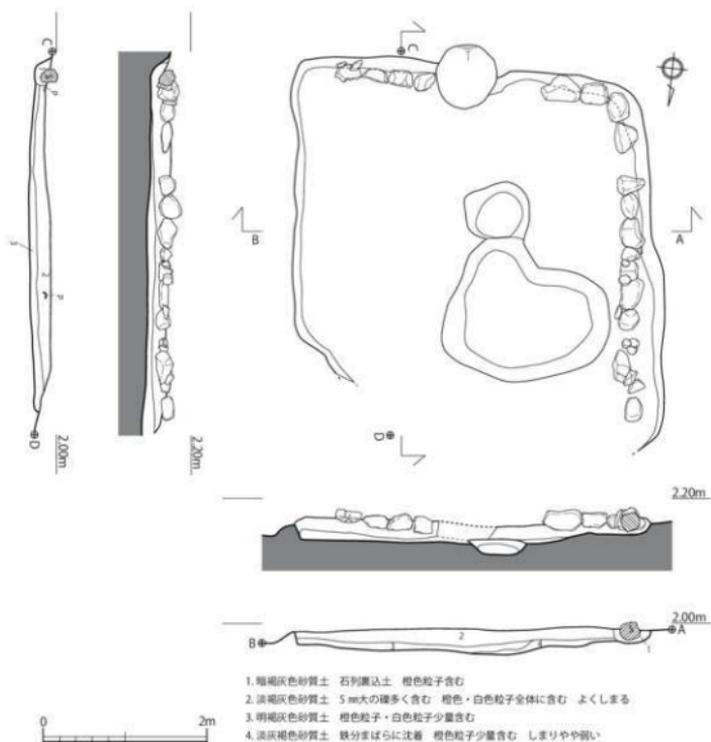
第二段階土層模式図



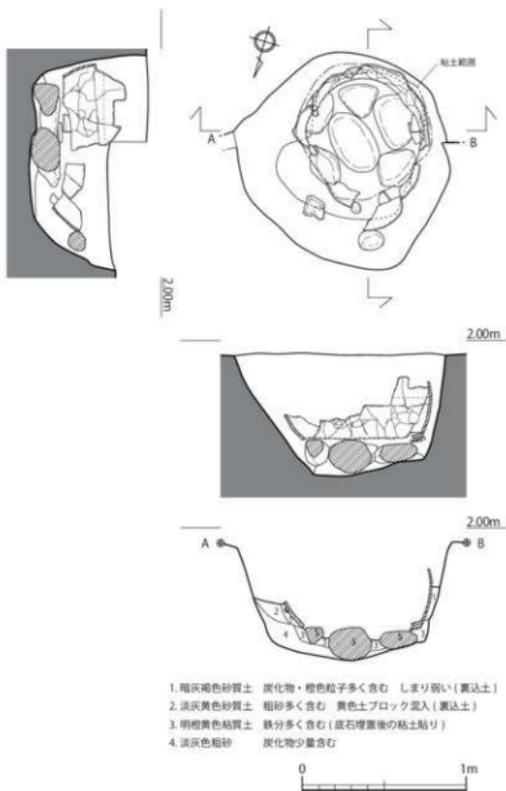
第三段階土層模式図



第258図 3区 SF535・3区 SD605・3区 SD610 土層図及び模式図 (1/80・1/40)



第259図 3区 SX565 遺構実測図(1/60)



第260図 3区SX590遺構実測図(1/30)

不明遺構 (その他)

3区 SX565(第259図、第498図)

3区北西のF3グリットで検出された配石遺構である。北辺を3区SK172に、南辺の一部を同S981に切られる。掘方全体の平面形状は方形で、断面形状は逆台形を呈す。規模は一辺4.6～4.7m、検出面からの深さは0.3mを測る。配石は土坑の南辺と西辺に分布し、その範囲に掘削された幅0.3～0.4mの溝状遺構に、0.1～0.4m大の礫が並ぶ。土坑の埋土は砂質土を基調とし、3層に区分され、最上位の第2層は固くしまる。下位の第3・4層には不整合な堆積が認められることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。また、先述のとおり配石はこれらの堆積土を掘削した溝状遺構に並べられていることを踏まえれば、土坑の埋土はまさに整地で、敷き均しを目的としたものとみられる。

遺物は、肥前系染付の望料型の碗や筒形碗、瑠璃釉瓶、関西系の端反型の碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は18世紀後半頃と考えられる。

3区 SX590(第260図、第499図)

3区北西端のG1グリットで検出された埋裏遺構である。3区SK978に切られる。掘方の平面形状は円形状、断面形状は逆台形を呈す。掘方の規模は直径1.3m、検出面からの深さは0.8mを測る。掘方の南寄りに最大径0.8mの土師質土器の裏が逆位に埋置される。掘方底面に0.1～0.4m大の礫を敷き、裏が水平になるように瓦片が裏と礫の間に差し込まれる。また、礫の隙間を明橙黄色粘土で充填しており、裏内に水が溜まる構造になっている。現地調査の段階で水琴窟の可能性が指摘されているものであるが、その特定はできていない。

遺物は、裏込め土から高台内に大明成化年製が書かれた肥前系染付猪口、土坑埋土中からは高台内に角福、外面に窓文が施された肥前系染付丸碗や陶胎染付碗などが出土しており、その帰属年代から遺構の埋没時期は、18世紀前半頃と考えられる。